安里呂能知爾毛、　此毛もそへたるのみ
安波射良米也母、」　一本安里呂能乃知毛とあり
安波牟日乎、其日等之良受、等許也未爾、　常闇なり夜
　晝もわかず戀くらすなり
伊豆禮能日麻呂、安禮古非乎良牟、」
多婢等伊倍婆、許等爾曾夜須伎、　旅といはんにはいひ
　やすきなりことは言なり
須久奈久毛、　此詞を終句へかけて心得べしすべなき事
　すくなからずおほきといふなり
伊母爾戀都々、須敵奈家奈久爾、」　なけなくはなからな
　くにて奈加約加なるを計にかよはしいふさて奈加の加
　は久波約にてなくはあらぬになり腰句にすくなくもと
　いへるはこふすべの多きをすくなくもあらぬといはん
　ためなり
和伎毛故爾、古布流爾安禮波、多麻吉波流、　冠辭
美自可伎伊能知毛、乎之家久母奈思、」　かくさまぐ〜に
　おもひつゞけていたづきおもふは妹にこふ事にしあれ
　ばみしかきいのち死ともをしからぬとなり
右十四首中臣朝臣宅守、
伊能知安良婆、安布許登母安良牟、和我由惠爾、波太奈
　於毛比曾、伊能知多爾敵波、」　此歌は前の宅守の終の歌
　に答てはたしてなおぼしそよ命だにへばあはなんもの
　をとよめるなり此だにはいひ入たるだになり
比等能宇々流、田者宇惠麻佐受、伊麻左良爾、久爾和可
　禮之呂、安禮波伊可爾勢武、」　遠き國にさすらへぬれば
　國わかれといへり此歌は實に田うゝるほどの人ならね
　ど時につけてよめるなるべし
和我屋渡能、麻都能葉見都々、　待を松にいひかけてそ
　を見つゝといふにざりける
安禮麻多無、波夜可反里麻世、古非之奈奴刀爾、」　戀ひ
　死ぬ時になり後の世にこれを守るといへり
比等久爾波、須美安之等曾伊布、須牟也氣久、　すみや
　かなりみとむとを通し氣は加に同をのべたるなり須美
　あしよりかさねいふなり
波也可反里萬世、古非之奈奴刀爾、」
比等久爾々、伎美乎伊麻勢呂、　往かせてなり
伊都麻呂可、安我故非乎良牟、等伎乃之良奈久、」
安米都知乃、曾許比能宇良爾、　天地のそこひのうらと
　云は天地の限と云が如く宇良は裏にてうちと云に同じ
集中に山のそき野のそき又祝詞に國の退立限といふも

退は限りなれば天地の涯といふに同じそこべをそこひ
　と云へどひとは同音べと濁る故にひもいの如く半濁な
　り
安我其等久、伎美爾故布良牟、比等波左禰安良自、」さ
　ねは實なりまことに我如く戀ひくるしむ人は世の中に
　あらじといふなり
之呂多倍能、　冠辭
安我之多其呂母、宇思奈波受、毛豆禮和我世故、　もち
　てあれを約通て云
多太爾安布麻低爾、」
波流乃日能、宇良我奈之伎爾、於久禮爲豆、君爾古非都
都、宇都之家米也母、」　春日のうら、かにかなしくめで
　らるゝにかくおくれゐて君をこふるなり家は久阿良の
　約加なるを計に通して云うつしくあらめやなり
安波牟日能、　あはん日までのなり
可多美爾世與等、多和也女能、於毛比美多禮豆、奴敵流
許呂母曾、」
　右九首娘子、
過所奈之爾、　ふみは義訓なり公式令過所文とある是な
　り關など守ある所を通らゝむる印は過所文なり俗の切
　手手形なり
世伎等婢古由流、保等登藝須、和我子爾毛可毛、　此本
　和を多とするは和の草を多と見し誤なり子はみとよま
　ん事もとよりなれば可毛脱る事ゑるしさまぐ〜説ども
　あれどよしなし仍て可毛を補り
夜麻受可欲波牟、」
宇流波之等、　（卷三）の別記に此言委あり
安我毛布伊毛乎、山川乎、　こは山と川となりよりて川
　をすみてよめり
奈可爾敵奈里氐、　隔りなり陀多約陀なるを通して奈と
　いふ奈は陀の半濁なり
夜須家久毛奈之、」
牟可比爲豆、一日毛於知受、見之可杼母、伊等波奴伊毛
乎、　不厭なり
都奇和多流麻豆、」　月を經渡るまで見ぬとなげくなり
安我未許曾、世伎夜麻故要氐、許己爾安良米、許己呂波
伊毛爾、與里爾之母能乎、」　意明なり
佐須太氣能、　冠辭
大宮人者、　此みや人は娘子をさす
伊麻毛可母、比等奈夫理能未、　人なぶりは直風なり人

のなほびたるをこのみてあるらんといふも今はおのれさすらへ人の直人となりにたればなほびたるをこのめるならんといふ今の俗のいふなぶりは此轉語なり一本に腰句伊麻左倍也とあり

許能美多流良武、」

多知加敝里、奈氣杼毛安禮波、之流思奈美、於毛比和夫禮豆、　夫利約備なり利と禮は音通ふ備と便も同言なり

卽わびなり

奴流流欲之曾於保伎、」　ぬる夜おほきにてしは助字なり

左奴流流欲波、於保久安禮杼毛、母能毛波受、夜須久奴流流欲波、佐禰奈伎母能乎、」　既いふ如くさねは實にてまことになきなり

與能奈可能、都年能己等和利、可久左麻爾、　かゝるありさまを略約たる言にて如是樣なり

奈里伎爾家良之、須惠之多禰可良、」　遠祖は貴しがその胤かく衰て國官となり剩さすらへ人と成をいふ

和伎毛故爾、安布左可山乎、　こゝをもて見ればはじめに關といふも逢坂なるべし前にいふ

故要豆伎豆、奈伎都々乎禮杼、安布余思毛奈之、」

多婢等伊倍婆、許登爾曾夜須伎、　言にはやすゝ聞ゆれどなり

須敝毛奈久、　すべもなくくるしき旅なれどもなり

久流思伎多婢毛、許等爾麻左米也母、」　こらは娘子を指こふる心にまさめやなりこも母はそへたるのみ

山川乎、奈可爾敝奈里豆、等保久登母、許己呂乎知可久、於毛保世和伎母、」　心に遠ざけおもふなとなり

麻蘇可我美、　冠辭

可氣豆之奴敝等、麻都里太類、　（卷二）奉御調等あるをもて此まつりたるも奉りたると云らる

可多美乃母能乎、　その物あるべし

比等爾之賣須奈、」　事にかけて玄ぬびねと奉せし物なればに見せそといふなり

宇流波之等、於毛比之於毛波婆、　今本婆波とあるは字の上下したるなりよてあらたむ

之多婢毛爾、　下紐はさきにもいひたる如く衣の袷の下の左右にかけたる紐なり

由比都氣毛知豆、夜麻受之努波世、」　まへの歌のかたみの物を下紐につけて玄ぬべといふならんこも二首にて心を通したるなり

右十三首中臣朝臣宅守、

多麻之比波、安之多山布敝爾、多麻布禮杼、　かくいひかはして宅守のせちなる心は玄れどもといふをかくはいへるなり

安我牟禰伊多之、古非能之氣吉爾、」　たましひのせちなるばかりにてあはぬ物故戀る事の繁きに胸痛しとなり

己能許呂波、君乎於毛布等、　とてのてを略なり

須敝毛奈伎、古非能未之都々、禰能未之曾奈久、」

奴婆多麻乃、　冠辭

欲流流見之君乎、安久流流安之多、安波受麻爾之豆、伊麻曾久夜思吉、」　此歌は事あらはれたる折の事を後によめるなり夜のみあひ見しをあけぬるあしたは不逢夫としたるといふを略きつゞめてよめるなり

安治麻野爾、　越前國なり

屋杼禮流流君我、可反里許武、等伎能牟可倍乎、　かへらん時を待近ん程をいつとかまたんといふなり

伊都等可麻多武、」

宮人能、夜須伊毛禰受豆、家布家布等、麻都良武毛能乎、美要奴君可聞、」　宅守もと殿上人なるべしこゝに云宮人はもとの同僚を指て娘子のいふなり卽娘子の戀るこゝろとなるなり

可敝里家流、比等伎多禮里等、伊比之可婆、保等保登之爾吉、　殆將死なりあまりてよろこばしきさまをいふ吉は家利の約なり

君香登於毛比豆、」　國の政に行し人の今歸りしと云を宅守の歸しといふかと思ふより既にたへてたましひまとひきとよめるなり

君我牟田、由可麻之毛能乎、　何なり

於奈自許等、　もとの如くしておくれぬると云なり

於久禮豆乎禮杼、與伎許等毛奈之、」　歌の意は君とゝもに行かばよからんをこゝにもとの如くおくれゐてよき事無となり

和我世故我、可反里吉麻佐武、等伎能多米、伊能知能己佐牟、和須禮多麻布奈、」　意明なり

右八首娘子、

安良多麻能、　冠辭

等之能乎奈我久、安波射禮杼、家之伎許己呂乎、　けしきは許刀奈禮の四言を約れば計なれば然云則ことなる心なり之伎は愛及ゆかしきの玄きと同く及の意なり異なる心は持ぬといふなりかく約る例は語意に委し

安我毛波奈久爾、」

家布毛可母、美也故奈里世婆、見麻久保里、爾之能御馬屋乃、刀爾多豆良麻之、」右馬寮の邊に此女の家ありしなりされば常に都にありし時は御馬屋の外のあたりにたもとほりて彼女を見たるより斯よめるなり刀は外なりたてらましの麻之約未なるを牟に通したるにてたてらんなり

右二首中臣朝臣宅守、

伎能布家布、伎美爾安波受豆、須流須敝能、　せんすべもするすべも同言にてなせる方のなきなり久しく君にあはで昨日けふすべき手著なくてねのみ泣といふなり

多度伎乎之良爾、禰能未之曾奈久、」

之路多倍乃、　冠辭

阿我許呂毛豆乎、　かたみのころもをなり

登里母知豆、伊波敝和我勢古、多太爾安布末低爾、」形見の衣手をとり持て祈祝ことわざのあるならん

右二首娘子、

和我夜度乃、波奈多知婆奈波、伊多都良爾、知利可須具良牟、見流比等奈思爾、」みやこの吾やどの橘をおもひてよめるなり

古非之奈婆、古非毛之禰等也、保等登藝須、毛能毛布等伎爾、伎奈吉等余牟流、」

多婢爾之豆、毛能毛布等吉爾、保等登藝須、毛等奈那難吉曾、安我古非麻左流、」

安麻其毛理、　雨の日にか然し冠辭の籠居の如く置る也

毛能母布等伎爾、保等登藝須、和我須武佐刀爾、伎奈伎等余母須、」

多婢爾之豆、伊毛爾古布禮婆、保登等伎須、和我須武佐刀爾、許欲奈伎和多流、」こよはこゆに同じくこゝよりなり吾は旅のやどりにて行かたかるを時鳥こゝより吾すみし里になきわたると云なり

許己呂奈伎、登里爾曾安利家流、保登等藝須、毛能毛布等伎爾、奈久倍吉毛能可、」心のまゝをおもへる如くによめるなり

保登等藝須、安比太之麻思於家、奈我奈家婆、安我毛布許己呂、伊多母須敝奈之、」いたとはいとに同じいとはいたくなりいたくせんすべなくといふなり云ましのまは婆に同じく暫なり

右七首中臣朝臣宅守、　此七首は娘子に贈たるにあらず自よみ置ぬるなり今本こゝに寄花鳥陳思作歌とあるは後人書加へし事云るかれば前の例によりてすてつ

萬葉集卷十一之考終

萬葉集卷十二之考

○此卷は今の八の卷なりこれを十二の卷とするよしは卷の一の別記にくはしく書がごとく天平十三年と注せる歌あり又久邇の京より奈良の故郷へおくれる歌もあればなり

○此度あらためて十一の卷とせし此前の卷も初に古き歌どもをあげ末には天平五年までの歌を舉たり此卷も初には古き歌もまじへあげ其末は天平四年丑年の歌あり又天平十五年の歌もありて卷終には天平十二年の歌もあるは家の集の常にてまへ云りへをくはしくあらためてえらべる物にあらずよて此度家持集の次をあらたむ既にも此事をいへれど見ん人心を入て見ば其よしあきらかなるを云らん爲に重て爰にもいふなり

○標にも歌左右にも春雜歌夏雜歌など有書體定らざるは前の卷の例又歌の左右によりて書體を同じさまにあらたむ年號の書體も不同なるは皆同しさまにあらためぬあるは古本一本により改るよし所々にも云

萬葉集卷十二之考　流布本卷八

春雜歌。

○志貴皇子ノ懽御歌一首、　志貴皇子は天智天皇第七皇子元正天皇靈龜二年八月甲寅薨光仁天皇寶龜元年追尊稱御春日宮天皇云云

石激、　冠辭

垂見ノ之上乃、　見は借字水也式に攝津國豐島郡垂水神社と見ゆ

左和良妣乃、毛要出春爾、成來鴨、」たるみてふ山に冬こもれりしわらびの春にあひもえづるに時を得給ふ御懽をそへ給ひけるなりよくかなひたる懽の御歌なり此御懽はそら壁御子天皇とならせ給へば前祥めきて聞ゆなり

○鏡女王歌、　紀(天武)十二年天皇幸鏡姫王之家訊病庚寅鏡女王薨と見ゆ今本鏡王女と有は字上下せしなり

神奈備乃、伊波瀬乃杜之、　大和の地名

喚子鳥、痛莫鳴、吾戀益、」かくれたる事なく云らべよくと、のひたり

○駿河ノ采女歌一首、

沫雪香、薄太禮爾零登、　斑にふるなり

見左右二、流倍散波、　良倍約禮にてながれちるなり

此歌は(卷七)にもありて雪花紅葉の降散をかくいふ霞をもいひなびき亂ちりふるをすべてながらふるなどいふ事すでにいひつ

何物之花其毛、物は衍字にあらず義訓なり集中例あり一本に物と花の間に之の字あるをよしとしてあらためぬ

○尾張ノ連歌二首、今本こゝに名闕とあるは後人のさかしらなる事前の卷にもいひつよりてすてつ

春山之、開乃乎烏里爾、今本乎爲黑とありてをすくろと訓るはわらふべし此言委は卷二の別記に在

春菜採、妹之白紐、此白紐てふ物は何の紐なる事考がたし玉裳などいふも裳の腰の紐に玉をつらぬくなり後にも裳の腰の紐を引事物に見えたりされば此白紐と云も裳の腰の紐の白きがうるはしきによめるかもし後の人下紐なるべしなど云說もあらんかならず下紐にはあらず

見九四與四門、

打靡、　冠辭

春來良之、山ノ際、　第二句の訓は(卷一)春過夏來良之てふ御製歌にいひ第三の句をかくよむべき事は卷七にすでにいふ

遠木末乃、開往見者、」　こも今本の訓は誤れり

○中納言阿倍廣庭卿歌一首、

去年春、伊許自而植之、　伊は發語いとりきてなど云に同じ許自は朗詠にねこじてうゑしといへり舟こぐ根こくといひひこずるを云皆動すなり

吾屋外之、若樹ノ梅者、花咲爾家里、」

○山部宿禰赤人歌四首、

春野爾、須美禮採爾等、來師吾曾、野乎奈都可之美、

なつかしむか紫の色よりいふさてなつかしむより一夜ねにけりと云は其野わたりの家にやどれりしをすみれ咲野にねたりとはいひなせるならん古への歌は實を虛の如く風流にいひなす事多く後のは虛を實の如くとりなすめり然ば後世の題詠の如くはおもふべからすすみれは花の形工人の墨斗に似たれば墨入草となもいふと荷田東麻呂いへり委は萬葉新撰に眞淵いへり花のうるはしきをめで又衣にも摺れる歟【奥人おもふに下の歌に山振之咲有野邊乃都保須美禮ともよみ又茅花拔淺茅之原乃都保須美禮などもよみたれば墨入草の說さも有なり】

一夜宿二來、」

足比奇乃、　冠辭

山櫻花、日並而、　日並は連日といふが如く日なみなり

如是開有者、甚戀目夜裳、」　歌意は常にかくききてあらばいともこひましといふなり

吾勢子爾、令見當念之、梅花、其十方不所見、雪乃零有者、」　不禮の禮は利計約にてふりければを約たるなり

從明日者、春菜將採跡、標之野爾、昨日毛今日毛、雪波布利管、」　若菜つまんと吾夫めおける野の雪をよめるなりしめは標指を同行の同意なればしめ去とし一つに約なり今本標とあるは誤なり

○草香山歌一首、　草香山は攝津國にあり

忍照、　冠辭四言

難波乎過而、打靡、　冠辭

草香乃山乎、暮晩爾、吾越來者、山毛世爾、　狹ほどにといふなり

咲有馬酔木乃、不惡、君乎何時、性早將見、」　此歌短歌なきほどの古調とも聞えず短歌ありしが落しかもとより短歌は家持のき、給はざるまゝに長歌ばかりをかゝれしか

今本こゝに右一首依作者微不顯名字とあるは家持卿のかゝるべき事かは後人の加へなる事前後を見て去るければすてつるなり

○櫻花歌一首並短歌、

嫼嬬等之、頭挿乃多米爾、遊士之、　遊士風流をたはれをともみやびとゝも訓む今本にこゝをたはれをと訓しはいまだし必みや人と訓べし

蔓之多米等、　葛の類柳の類の去なやかなる物を蔓とするは常なり櫻或さか木の類たをやかならぬ物を蔓とするには木綿などして小枝を結びつゞけ垂てうるはしく蔓とす

敷座流、　敷座流は去き去く去か皆同言にて君の國を去らしますをいふ言の意は千木高敷とも高知共いふをもてもしれ

國乃波多豆爾、　はたては旗手の如くいづくまでも長く咲つゞくをいふ豆は多計約丈なり

開爾鷄類、櫻花能、丹穗日波母安者例、」　今本安奈何と

有ていかにとよめるは安をイとよめる例もなきにかく訓事誤なり歌の意もとほらずよりて奈は者の誤何は例の誤として改あはれは何怜の字を訓もて玄れ

今本爰に反歌と有は後人の書加ならんよしは歌のするにいふなり

去年之春、相有之君爾、戀爾手師、【戀爾手師、爾はいにの略てしは過去りし事に云詞にて多里の約知を且に轉じ云にてこひいにたりしと云なり與人】

櫻花者、迎來良之母、」　此歌は右の長歌の反歌ともなし前の歌の如く反歌もとよりなかりしか反歌のなきほどの古き調にもあらず反歌はつたはらざりしなるを他歌の亂てこゝに入しなるべしさて歌の意は去年あへりし君を戀てしから櫻の花が咲むかへくらしとなり後ながら年にまれなる人もまちけりてふ意に似たる物なり

右二首若宮ノ年魚麻呂誦之、　となふとあれば年魚麻呂が歌にはあらず年魚麻呂が誦しを聞てかくかゝれし物なり

○山部宿禰赤人歌一首、

百濟野乃、　くだらの原とあるは十市郡地安のつゞきなるよし(卷二)の挽歌に見えたりこゝも同野を云ならん芽古枝爾、待春跡、居之鶯、鳴爾鷄鳴、」

○大伴坂上郎女柳歌二首、

吾背兒我、見良牟佐保道乃、　大和なる事既に見ゆ

青柳乎、手折而谷裳、　たゞ手折てもと見るなりだには輕く見るべしこゝも今だにのだにの如し

見緣欲得、」

打上、　冠辭

佐保能河原之、青柳者、今者春部登、成爾鷄類鳴、」

○大伴宿禰三林梅歌一首、

霜雪毛、未過者、　過ぬになり下へかけて見れば聞ゆ

不思爾、春日ノ里爾、梅花見都、」

○厚見ノ王歌一首、

河津鳴、　その川のさまをいひて歌のかざりともせり佐保川よしの川にも此辭を冠らしめたり

廿南備河爾、陰所見、今哉開良武、山振乃花、」　これは奈良に都うつされて後故郷の神南備のさまをなつかしみてよみ給へる成べしかく玄らべ高くすぐれたるはかたき也古今歌集に「今もかも咲香ふらん橘のこじまの崎の山ぶきの花」てふは所をかへたるのみ「あふ坂の關の清水に影見えて今や引らんもち月の駒」てふは少し巧をそへたるにて皆今の姿をうつしたるなりもとづける所を玄らん人萬葉をなどかたふとまざらんと眞淵はいへりけり

○大伴宿禰村上梅歌二首、

含有常、言之梅我枝、今旦零四、沫雪二相而、將開可聞、」

將開の二字はさかんとは誰も訓べしこゝは義もてよみたるにてさきにけんとはよみこせし物なり

霞立、春日之里、梅ノ花、山ノ下風爾、　（卷二）の例にてかく訓べし

落許須莫湯目、」

○大伴ノ宿禰駿河麻呂歌一首、

霞立、春日ノ里之、梅花、波奈爾將問常、　此花はあだにとはんやせちに見んとなりあだてふ言に花と云例前に在

吾念奈久爾、」　【春日里を訪ひて思ひうけず梅を見て里をこそ訪ひ來れ梅の花にとはんとはおもはざりしに思ひの外に見し事よとなり季吟】

○中臣朝臣武良自歌一首、

時者今者、　後なれば此者はいはず

春爾成跡、三雪零、遠山邊爾、霞多奈婢久、」　春のけしきをいふにふりおける雪の遠き山をいひ出たる巧ずして古へぶりなり

○河邊朝臣東人歌一首、

春雨乃、敷布零爾、高圓、山能櫻者、何如有良武、」

○大伴宿禰家持鶯歌一首、

打嗟之、雪者零乍、然爲我二、吾宅乃花爾、鶯鳴裳、」

○大藏少輔丹比屋主眞人歌一首、

難波邊爾、人之行禮波、　こゝに人とさせるは末の句の若菜摘める女の夫などなるべし

後居而、春菜採兒乎、見之悲也、」　此也を佐と訓も例あり

かゝる佐は既云如く志那約にてかなししなといひ入る言の約なれば佐と訓べきことわりなりさて歌の意は此女の背などの公さまの事にて他地へ行を屋主の見てあはれめる歌なり

○丹比眞人乙麻呂歌一首、　此乙麻呂は屋主眞人第二の子と見ゆ

霞立、野上乃方爾、行之可波、鶯鳴都、春爾成良思、」

○高田ノ女王歌、　今本こゝに高安之女也とあるは後人の書そへたるなりよりて捨つ且一本にもなし

山振之、咲有野邊乃、都保須美禮、此春之雨爾、盛奈里

鶏利、」

○大伴坂上郎女歌一首、

風交、　今本風まぜにと訓しはたがへり

雪者雖零、　今本ふれどもと訓はてにをはたがへり

實爾不成、吾宅之梅乎、花爾令落莫、」　こは相聞譬喩歌なり實にならぬはまことなきにたとふ後世の戀の歌を作るとは異にて是實に春部なれども風さへありて雪のふる日にまことに梅を見てさて相聞の心をおこしてよめる歌なりよりて春の部にあるもあしからず後の世こころにてまうけ作れる歌ならねばなり【奥人按にまだ實にもならぬ梅を花のうちにちらすなといふにて人言をげくいひさわぐとも未まことになり得ぬ中なればいひさわぐなと云ならむ】

○大伴宿禰家持春鶏歌一首、　今本春を養とあるは誤なり一本に目録によりてあらたむ

春野爾、安佐留鶏乃、　既云如く佐は志加約にて安志加里をつゞめたる言なり

妻戀爾、己當乎、　後には是をありかをとよめりかは在所の事なれば理りは違はねどこゝは義訓すべきにあらずおのがあたりと訓むべし常は集中あたりとよめり君があたり花のあたり皆同じ

人爾令知管、」　禮は良勢約にて云らせつゝなり扱歌の意は野なる草木のくまにかくれて人におそるゝ雉なるにつまこひにはあえず聲たてゝ住あたりを人に云らせつつ身をほろぼすをあはれむなり人のうへにもとるべき事なれば相聞のたとへにとる事前の歌のごとし

○大伴坂上郎女歌一首、

尋常、聞者苦寸、喚子鳥、音奈都欽、　暮春の頃のおもしろきをよぶに鳥をいひ入てはえあらせたる歌なりけり

時庭成奴、」

右一首天平四年三月一日佐保宅作、

春相聞。

○大伴宿禰家持贈坂上家之大嬢歌一首、　家持卿の伯父宿名麻呂の女にて家持卿の從弟女にて家持卿の妻なり

吾屋外爾、蒔之韮麥、何時毛、花爾咲奈武、名蘇經乍見武、」　こは家持卿の妻のいと稚を撫子にたとへ花に咲てひとゝならばゆ大嬢になぞらへ見んとよめるなり

○大伴田村ノ家之大嬢　此田村大嬢は宿名麻呂の長女なり

與妹坂上ノ大嬢歌一首、

茅花抜、淺茅之原乃、都保須美禮、今盛有、吾戀苦波、」　相聞の序歌なり但妹の妻のいつくしきをほめてなつかしむなり

○大伴宿禰家持　今本こゝに家持贈てふ三字を落例によりて補へり

贈坂上郎女歌一首、

情具伎、　心くゞもりなり具毛理約伎なれば約云なりさて言は心こもるてふ歌なり

物爾曾有鶏類、春霞、多奈引時爾、戀乃繁者、」　（卷十三）春日山霞棚引情具久照月夜爾獨鴨念とも見えたるを合せておもへ

○笠郎女贈大伴家持歌一首、　今本笠女郎とあるは字の上下せしなり前後の例によりてあらたむ

水鳥之、鴨乃羽色乃、　（卷二十）水鳥乃歌毛能羽伊呂乃とあり

春山乃、於保束無毛、　云げく云げりて木の暮闇なればおぼつかなしと云

所念可聞、」

○紀ノ郎女歌一首、　前のと同じければ改つ

闇夜有者、宇倍毛不來座、梅花、開月夜爾、伊而麻左自常屋、」　闇の夜にきまさぬはうべなれど梅も咲ことに月夜なるに出まさぬとうらみたるなり

○天平五年癸酉春閏三月笠朝臣金村贈入唐使歌一首并短歌、　續紀（聖武）十一天平四年八月以從四位上多治比眞人廣成爲遣唐大使從五位下中臣朝臣名代爲副使判官四人錄事四人云云同五年三月拜朝云云四月己亥遣唐四船自難波津進發云云此時の使なるべしこゝに入唐とかけるは奈良に至て貴みすぐせし事更云が如しかく書てもつかはさるゝと訓べき事なり

玉手次、　冠辭

不懸日無、氣緒爾、　生の緒の意なり命のつなぎ

吾念公者、虛蟬之、　うつゝの世に在る人は皆天皇の命令をかしこむと云なり

命恐、夕去者、鶴之妻喚、難波方、　方はかり字潟なり

三津埼從、大舶爾、二梶繁貫、白浪乃、高荒海乎、　あるみの留は良宇約あらうみなり

島傳、伊別往者、留有、吾者乞取、　今本取を引に誤て

たむけにいは井と訓しは例もなく言もとほらずよりて取の誤ならんとして字も訓もあらたむ

齋乍、公乎者將待、　今本往として將往とよみしは誤なり訓の意かなはず歌の意もとほらずつゞけがらもさは有まじくまたく待の誤ゑるければ字も訓もあらたむ

早還萬世、」

反歌

波上從、所見兒嶋之、雲隱、穴氣衝之、　今本の訓は誤なり此氣は眞心長を眞氣長くと云も同し意にて聞ゆ

【氣を伎と訓字音の如く聞ゆれどこは同行の計に通してこゝろの約なり心さしといふに同じ】

相別去者、」

玉切、　冠辭

命向、戀從者、公之三船乃、梶柄母我、」　柄は神隨國隨の

からの如くその卷の意梶そのまゝ我ならばやなり

○藤原朝臣廣嗣、　式部卿宇合第一の子なり

櫻花贈二娘子一歌一首、

此花乃、一與能內爾、百種乃、言曾隱有、於保呂可爾爲莫、」　花は櫻を指一與は借字一夜なり花の木は折れば一夜にゑぼむはいちゑるかれども其一夜の內に百くさの言をこめておくる枝ぞ必おろかにすなとなり

○娘子和歌一首、

此花乃、一與能裏波、百種乃、言持不勝而、持折家良受也、」　一夜のうちに百種の言こめたまへりとのたまへどそはあらぬかね言なればにや此枝の折られけるにあらずやとなりかくの如く女の德おとろへものとがめなすいらへ歌よむも奈良の都の末よりの事にて後の世もはら有手風なりさはあらずや猶後の考をまつめり

○厚見王贈二久米郎女一歌一首、

屋戸在、　次の歌もて見れは戸在の間に爾の落たるか

櫻花者、今毛香聞、松風疾、地爾落良武、」　落はちるとも集中に義訓すれどこゝは言のつゞけからさはあらぬ勢なり落は散を云

○久米郎女報贈歌一首、

世間毛、常爾師不有者、屋戸爾有、櫻花乃、不所比日可聞、」　不所はうつろふとも訓べしやがて其意もてちれると訓るなり

○紀郎女贈大伴宿禰家持歌二首、

戲奴之爲、　戲は加禮の約奴は辭なり卽かれぬが爲にといふなりもと實ならぬ思故戲れならんてふ意を得て字を假しか【今本戲奴の下に戲奴此云和氣とあれどこは後人けぬと云意を心得ぬより次の歌に和氣と有を見て注せるなるべければ捨つ卷十六に可流羽須波田廬乃毛等爾云云此歌の小注に田廬者多夫世也と有るに同じてふ說あれど此言こゝに叶はねばすてつ】

吾手母須麻爾、　吾手も不休にといふ歟也は略く須麻は言の如く爾は不知を云らにと云如く不に通へり此下に手母須麻爾殖之芽子爾也とよめるも同じ意なり【中良考故かくは注したれど諸成案に手も須麻てふ須は世久の約又世留約にて手もせるまゝにてふ言と覺ゆまゝをまと略にも叶故いふ此注はむづかし其世は須々米の約にてすゝめらすゝめりすゝめると働くが如し】

春野爾、拔流茅花曾、御食而肥座、」　歌意はゑばし相見るほどの遠きをうらみてかれぬる人の爲に吾手もやすめず摘る茅花なればめして肥給へてふに戲來給へと添しと聞ゆもとより食物なればめして肥といひ假字同じかれば戲を添るか

畫者咲、夜者戀宿、　戀ぬるは字の如くながらこやし臥を集中に展臥ともよめれば展宿をもそへてよめるならん

合歡木花、君耳將見哉、　合歡木のさける比男の來けるを畫は心の花さけど夜は吾は戀てのみぬると上よりつづけいふなり

和氣佐倍爾見武、」　和氣は吾なり加幾久計古共に通して吾とも吾ともいふ今本に未を見代とありて見代と訓れどさては歌の意とほらず代の假字としてはてにをは合ずよりて武の誤として字を改

今本こゝに右折舉合歡花並茅花贈也とあれど歌の意にもかなはず時節をもわかずいとつたなし後人のわざゑるければすつ猶時をわけて下に云

○大伴家持贈和歌二首、

吾君爾、戲奴者懸良思、　【男より女をさして君といへるこゝにはじめて見ゆ戀良思の布良の約波なりよりてけぬは戀はしとも云】

給有、茅花乎雖喫、彌痩爾夜須、」　戲ぬは既いふ如くなるをかりに身にうけて云さて自らのおもひかれざるをいひつのるなり

吾妹子之、形見乃合歡木者、花耳爾、　互に見る事をいひこせし合歡木は花のみにて末とけじ戀宿てふも實ならじかし終に形見とならんといひあらそふよしなり

咲而盖、質爾不成鴨、」質にならぬを質なきに譬へ恨るなり

右の贈答前の歌は茅花にて春なり合歡木の花は六月咲ければ夏なり仍て一時の歌ならねど同じ人と同じ意をよみかはせるなれば思ひ出る序にかくか、れしならん

○大伴家持贈二坂上大嬢一歌一首、

春霞、輕引山乃、隔者、妹爾不相而、月曾經爾來、」一本爾を去とするもあしからず

右從二久邇京一贈二寧楽宅一、　かくあるは自のか、れしならんさて此歌より上五首は全く相聞なりされど時の物もてよめる故春部に有と覺ゆ

夏雜歌。

○藤原夫人歌、　此夫人の事は卷二幷同じ別紀にくはし且此所に今本注あれど一本になく後人の說にてとるにたらずよりてすてつ

霍公鳥、痛莫鳴、　まだ時ならぬに繁く鳴を惜めるなり

汝音乎、五月玉爾、　五月の玉は既にいふ如金橘なりそをかつらにするまで鳴けと云

相貫左右二、」

○志貴皇子御歌一首、　此皇子歌既に出

神名火乃、磐瀨乃杜之、霍公鳥、毛無乃岳爾、　山城を

桟不開と書ける如奈良を平とかけりされば草木を毛として毛無とかきてならしとよませたるなり

何時來將鳴、」

○弓削皇子御歌一首、　前同

霍公鳥、無流國爾毛、　奈久阿流を約たる意なり

去而師香、　香は清音なれども濁音にも用ゐたる例ありてこゝは欲得と出るに同意なり

其鳴音乎、聞者辛苦母、」事ある時に聞給ひし其折の事思し出てかくよませるにや

○小治田廣瀨王　次に小治田朝臣廣耳てふ人もあれば王の姓ならん

霍公鳥歌一首、

霍公鳥、音聞小野乃、秋風、芽開禮也、　夏の末にてかくよみ給へるなりさきぬれはぬればやの婆を略けるなり

聲之乏寸、」

○沙彌　三方の沙彌を略き書けるか

霍公鳥歌一首、

足引之、　冠辭

山霍公鳥、汝鳴者、家有妹、　今本いへにあると訓しはいにしへをさらず卷一軍王歌の如く約て乎を添て訓べきなり

常所思、」

○刀理　氏なるべし

宣令歌一首、　名なり

物部乃、　冠辭

石瀨之杜乃、霍公鳥、今毛鳴香、　か、る奴は奈武の約にてなかなんといふに同じこ、には香の脫なり訓によりて字を補ふ此香は與に通ふが如くにて呼出す香なり

山之常影爾、」　こは下陰の略にて則ふもとかげなり

○山部宿禰赤人歌一首

戀之家姿、　戀しくあらばなり既(卷九)に云如く約通したるなり一本久とあるも同じ

形見爾將爲跡、　訓は字の如にて形見にせんと云なり

吾屋戸爾、殖之藤浪、　浪は借字扉の意なり

今開爾家里、」　戀おもふ人ありてよめるならん

○式部大輔石上堅魚朝臣歌一首、　加多宇乎の多宇の約都なり

霍公鳥、來鳴令響、宇乃花能、共也來之登、問麻思物乎、」死手の山より來りしと云故に亡びにし妹のなき玉も郭公と共にこしとにやといふならん初句と云の句をむかへて歌の意を得べし

右神龜五年戊辰太宰師大伴卿之妻大伴郎女遇病長逝焉于時勅使式部大輔石上朝臣堅魚遣二太宰府一卽喪幷賜物也　其事既畢驛使及、今本乃と有は誤なり

今本夜を美とす和名抄筑前國遠賀郡木夜と有

府諸卿大夫等共登二記夜城一而、

望遊之日乃作此歌、

○太宰帥大伴卿和歌一首、

橘之、花散里之、　亡し妹をいふかさならで只時節を云歟

霍公鳥、片戀爲乍、　なき妹を戀るを云

鳴日四曾多寸、」　寸は計里の約なり

○大伴坂上郎女思筑紫大城山歌一首、　筑前國三笠郡

今毛可聞、大城乃山爾、霍公鳥、鳴令響良武、　登與武の武は末須の約なり

吾無禮杼毛、」　此歌は大伴郎女の身まかりしを大城の山に葬つらん親族なればそを思なげきてよめるなりさてなければどもは吾はその大城の山にあらねどもなり

○大伴坂上郎女霍公鳥歌一首、

何歌毛、幾許戀流、　何しにほとゝぎすをこひけんとなり

霍公鳥、鳴音聞者、戀許曾益禮、」

○小治田朝臣廣耳歌一首、

獨居而、物念夕爾、霍公鳥、從此鳴渡、心四有良思、」

今本心してとよみしは誤れりこはわが如く物おもふ故こゝより霍公鳥のかしこになきわたるらしとなり

○大伴家持霍公鳥歌一首、

宇能花毛、未開者、　さかぬにと云てにをはなり

霍公鳥、佐保乃山邊、來鳴令響、」

○大伴家持橘歌一首、

吾屋前之、　今本の訓誤れるよし既いふ

花橘乃、何時毛、珠貫倍久、其實成奈武、」

○大伴家持晩蟬歌一首、

隱耳、居者鬱悒、奈具左武登、　とてのてを略けり

出立聞者、來鳴日晩、」

○大伴書持歌二首、

我屋戸爾、　こをもて今本前後の訓の誤りを云るべし

月押照有、　おしなべて照なり

霍公鳥、心有今夜、來鳴令響、」

我屋前乃、花橘爾、霍公鳥、今社鳴米、友爾相流時、」

○大伴清繩歌一、

皆人之、待師宇能花、　此花さけば鳴故に卯の花と時鳥を重て待しなり

雖落、奈久霍公鳥、吾將忘哉、」

○庵君諸立歌一首、　庵は氏君はかばねなり

吾背子之、屋戸乃橘、花乎吉美、鳴霍公鳥、見曾吾來之、」

○大伴坂上郎女歌一首、

霍公鳥、痛莫鳴、獨居而、寐乃不所宿、聞者苦毛、」

○大伴家持唐棣花歌一首、

夏儲而、開有波禰受、　既出

久方乃、　冠辭

雨打零者、將移香、」

○大伴家持恨ニ霍公鳥晩喧一歌二首、

吾屋前之、花橘乎、霍公鳥、來不喧地爾、令落當香、」

霍公鳥、不念有寸、木晩乃、　木のゑげれるを云又このくれやみ共

如此成左右爾、奈何不來喧、」

○大伴家持懽霍公鳥歌一首、

何處者、鳴毛思仁家武、霍公鳥、吾家乃里爾、今日耳曾鳴、」

○大伴家持惜橘花歌一首、

吾屋前之、花橘者、落過而、　今本過を既に誤るかゝるを見てすべての誤を知るべし

珠爾可貫、實爾成二家利、

○大伴家持霍公鳥歌一首、

霍公鳥、雖待不來喧、菖蒲草、　今本菖を脱せしならんよりて補ふ

玉爾貫日乎、　既いふ如く玉にぬく日は五月五日なり

未遠美香、」

○大伴家持雨日聞ニ霍公鳥喧一歌一首、

宇乃花能、過者惜香、霍公鳥、雨間毛不置、從此間喧渡、」

○橘歌一首　遊行女婦、

君家乃、花橘者、成爾家利、　實になりにけりなり

花乃有時爾、相益物乎、」　古今歌集に「山城のゐでの山吹ちりにけり花のさかりにあはましものを」これをとる歟此歌遊行女婦の歌なれば嫡妻ともならんと思ひまけしを男他妻をむかへたるをかくたとへたる相聞と見ば春の部の中相聞歌と同じさまならんたゞに橘の歌ならば三の句落にけりなどあるべし

○大伴村上橘歌一首、

吾屋前乃、花橘乎、霍公鳥、來鳴令動而、本爾令散都、」

木の下にちらしつといふなり

○大伴家持霍公鳥歌二首、

夏山之、木末乃繁爾、　梢のゑげきになり

霍公鳥、鳴響奈流、聲之遙左、」

足引乃、　冠辭青繁木の木の間とつゞく

許乃間立八十一、　立くゞりといふなり

霍公鳥、如此聞始而、後將戀可聞、」

○大伴家持石竹花歌一首、

吾屋前之、瞿麥乃花、盛有、手折而一目、令見兒毛我母、」

獨居の時よまれけん

○惜レ不レ登ニ筑波山一歌一首、

筑波根爾、吾行利世波、　計利約伎にて吾ゆきせばなり

霍公鳥、山妣兒令響、鳴麻志也其、」

右一首高橋連蟲麻呂之歌中出

夏相聞

○大伴坂上郎女歌一首、

無暇、不來之君爾、霍公鳥、吾如此戀常、往而告社、」

○大伴四繩宴吟歌一首、

事繁、君者不來益、霍公鳥、汝太爾來鳴、朝戸將開、」

○大伴坂上郎女歌一首、

夏野乃、繁見丹開有、姫山理乃、　姫山利は小草なればなり

夏野のさげ野の中にては見えぬに譬し序なり

不所知戀者、苦物乎、」　一本に乎を曾とあり

○小治田朝臣廣耳歌一首、

霍公鳥、鳴峯乃上能、宇乃花之、厭事有哉、君之不來益、」

今本の訓はいまだし

○大伴坂上郎女歌一首、

五月之、　四言今本これを五言にせんとてさつきのやと訓はいかに之は假字なるに其下に何の言をかくはへんや

花橘乎、爲君、珠爾社貫、　一本社と有もて補へり

零卷惜美、」

○紀朝臣豐河歌一首、

吾妹兒之、家乃垣内乃、佐由利花、　由利といはん序なり

由利登云者、　（卷十八）に佐由利花由利母將相等とよめるも由與同音にてよりもあはんてふ事なりこゝもそれに同じく由利はよりなり

不歌云二似、」　こは諷歌の意もて字を借たればよそへぬと訓べしさて歌の意は忍びて相あふ中なれば事によそへてかく來り相逢中なるからあらはにすまじかりつるを垣内の花はあらはに由利といへばより來る事をよそへさのぶには不似とむつましみのたはむれによめるなりけり

○高安歌一首、

暇無、五月乎尙爾、吾妹兒我、花橘乎、不見可將過、」

○大神郎女贈大伴家持歌一首、

霍公鳥、鳴之登時、君之家爾、往跡追者、將至鴨、」

○大伴田村大嬢與妹坂上大嬢歌一首、

古郷之、　今本古を否に誤る古本又一本によりてあらたむ

奈良思之岳能、　前の二十二の裏に毛無と書しならしの岳同所なり

霍公鳥、言告遣之、何如告寸八、」

○大伴家持攀二橘花一贈坂上大嬢歌一首幷短歌、

伊加登伊可等、　いかに〳〵とおもひてなり【與人按にいかにとて〳〵といふべきを爾と且を略いかと、云歟又登は助字にて茂多の意歟伊加の約阿なり此阿は於に通て於保なりおほしおほきの古もきも辭なれば略て多き事をお保とのみも云なり】

有吾屋前爾、百枝刺、於布流橘、玉爾貫、五月乎近美、

安弊奴我爾、　五月を待あへぬげにて不堪なり安と多は同行にて通古くは皆たへぬをあへぬと云（安衣は肖にて言別なり）ぬけの解を我に通はせり濁は言便なり今本弊を要に誤る弊の草を要と見し誤なり仍て改

花咲爾家里、朝爾食爾、　食は借字ことになり既出

出見毎、氣緒爾、吾念妹爾、銅鏡、　冠辭

清月夜爾、直一眼、令覩麻而爾波、落許須奈、由米登云

管、幾許、吾守物乎、宇禮多伎也、志許霍公鳥、　（卷七）

慨哉四去霍公と有に同じ四言に云なり

曉之、裏悲爾、雖追雖追、尙來鳴而、徒、地爾令散者、

爲便乎奈美、攀而手折都、見未世吾妹兒、」

反歌

望降、　十五日過の日をいふなり

清月夜爾、吾妹兒爾、令覩常念之、屋前之橘、」

妹之見而、後毛將鳴、霍公鳥、花橘乎、地爾落津、」

○大伴家持贈紀郎女、　一本によりて作の字は捨つ

歌一首、

罹麥者、咲而落去常、人者雖言、吾標之野乃、花爾有目

八方、」　家持の思人なりといへる女の身まかりしと聞て紀郎女よりいひおくれるに答し歌なり

秋雜歌

○岡本天皇、　後に舒明天皇と申　三十五代

御製歌一首、

暮去者、小倉乃山爾、　（卷十一）に同歌ありて小椋とあるも同地にて飛鳥に近き小倉山なり瀧上の小倉の山とよみたるは龍田の事なるべし

鳴鹿之、今夜波不鳴、寐宿家良思母、」　此御製を誤て雄略　二十二代

天皇の製歌として始の卷に載られたり雄略天皇の比のさらべならねば此天皇の御製歌なるべし

○大津皇子御歌一首、

經毛無、緯毛不定、未通女等之、織黃葉爾、霜莫零、」

○穗積皇子御歌二首、

今朝之旦開、雁之鳴聞都、　古くかりがねといふは鴈群てふ事既いふ此比に至りてはかくもいひし故こもつゞけ給へるなるべし正くいはんにはかりがねの聲き、つといふべき事なり

春日山、黄葉家良之、吾情痛之、」　痛之は惜なり

秋芽者、可咲有之、吾屋戸之、淺茅之花乃、　暮春に出て咲始秋の始ちる物なり

散去見者、」

○但馬皇子御歌一首、　今本こゝに一書云山部王作と有は書體も違ひ後人の書加へし事ゑるかれば捨つ

事繁、　事は言なりいひさわがるゝ事あるならん

里爾不住者、　さとにすまれすばなり

今朝鳴之、雁爾副而、去益物乎、」　一本に里爾不有者と有

○山部王惜二秋葉一歌一首、

秋山爾、黄反木葉乃、　下に平山令丹黄葉云々ともあるもて此訓をおもへ

移去者、更哉秋乎、欲見世武、」

○長屋王歌一首、

味酒、　冠辭

三輪乃祝之、　こは祝部か照すといふにはあらず歌のとりなしなり

山照、秋乃黄葉、散莫惜毛、」

○山上臣憶良七夕歌十二首、

天漢、相向立而、　むきのきは加比の約なり

吾戀之、君來益奈利、紐解設奈、」　織女になりてよめるなり一本向河と有

右養老七年七月七日　應　令、　今本八年と有は誤なり續紀九(元正)養老七年九月神龜出八年二月改號神龜とあれば卽八年を七年と改む

久方之、　冠辭

天漢瀨爾、　一本漢の上天ありて瀨なし又一本は天も瀨もなし一本をもて天の字を補て字のまゝにあまつかはせにと訓り

船泛而、今夜可君之、我許來益武、」　こも前に同じく織女になりてよめる

右神龜元年七月七日夜左大臣宅作之、

牽牛者、織女等、天地之、別時由、伊奈牟之呂、　冠辭今本牟を宇に誤れり誤ゑるければ改む

河向立、意空、不安久爾、嘆空、不安久爾、青浪爾、望者多要奴、白雲爾、涕者盡奴、如是耳也、伊伎都枳乎良牟、如是耳也、戀都追安良牟、佐丹塗之、小船毛賀茂、玉纒之、眞可伊毛我母、　一云小棹毛可毛

朝奈藝爾、伊可伎渡、　伊は發語なり

夕鹽爾、　一云夕倍爾毛

伊許藝渡、久方之、　冠辭

天河原爾、天飛也、　此天飛也は冠辭にあらず久方天川邊に織女のたちおはする領巾の風になびくをおもひてあめに飛領巾といふのみもとも後のわざなり

領巾可多思吉、眞玉手乃、玉手指更、餘宿毛、寐而師可聞、こゝは氏志の約言にはあらで師は助字いねてかもと願なり一云伊毛左禰而師加

秋爾安良受登母、」　此歌皆古き辭をとりたるのみにて吾物ならず聞ゆ一本に秋不待登母

反歌

風雲者、二岸爾、可欲倍杼母、吾遠嬬之、　一本波之嬬乃

事曾不通、」

多夫手二毛、　多夫の夫は倍奴の約不任手にもなり倍を衣の如く唱るは半濁なり本言によりて夫を濁る例をかなへり【仙覺云たぶてにもとはつぶてなり玄覺押紙云文選東京賦飛礫雨散與人】

投越都倍伎、天漢、敵太而禮婆可母、　可は疑の歟なり母はそへしのみ

安麻多須辨奈吉、」　是までの三首も例の牽牛となりてよめるなり

右天平元年七月七日夜憶良仰觀天河作、　一云、帥家作是を今本に師家作とあるは師の誤ゑるければあらたむ次々の歌の左に書るに同

秋風之、吹爾之日從、　吹爾之日は次去にて既立にし秋といふなり

何時可登、吾待戀之、君曾來座流、」　織女になりてよめるなり

天漢、伊刀河浪者、　甚河浪にていたく浪はたゝぬともなり

多々禰杼母、何侯難之、近此瀨呼、」　こもひこぼしとなりてよめるなり

袖振者、見毛可波之都倍久、雖近、度爲便無、秋西安良禰波、」　此秋といふは七夕を指ていふなりこも牽牛になりて云なり

玉蜻蜓、髣髴所見而、別去者、毛等奈也戀牟、相時麻而波、」

右天平二年七月八日夜、帥家集會、

牽牛之、迎嫗船、己藝出良之、　出良之の伊は略訓ぞ古なれ

漢原爾、霧之立波、」

霞立、　此比まで霞必しも春と定ていはず

天河原爾、待君登、　とての略なり

伊往還程爾、　伊は發語

裳ノ裾所沾、」

天河、彌津之浪音、　今本浮津とあり浮は彌の草を見誤りたるなり川津ともいへば眞津にも云べく定る渡を云べし

佐和久奈里、吾待君思、舟出爲良之母、」

○太宰諸卿大夫並官人等　今本宮人と有は官の誤去るければあらたむ

宴ニ筑前國ノ蘆城驛家ニ歌二首、

娘部思、秋芽子交、蘆城野、今日乎始而、　にを略たるなりはじめにてなり

萬代爾將見、」

珠匣、　冠辭

葦木乃河乎、今日見者、迄萬代、將忘八方、」

右二首作者未詳、

○笠朝臣金村伊香山作歌二首、　神名式に近江國伊香郡伊香具坂神社こゝの山歟

草枕、　冠辭

客行人毛、往觸者、爾保比奴倍久毛、　行ふるゝ人の衣も芽子が花摺に色どりぬべしとなり

開流、芽子香聞、」

伊香山、野邊爾開有、芽子見者、君之家有、　公が家は妹か友人の家を指ならん

尾花之所念、」

○石川朝臣老夫歌一首、

娘部志、秋芽子折禮、　今本こを多乎禮と訓たれど多とよまん字なし又折は持の誤といふ說もあれど字のまゝによまるれば訓を改むさてこは乎利豆安禮を約通したるなり利豆約禮又禮安約良なるを禮に通して乎禮といふ下の禮は辭なり

玉梓乃、　冠辭

道去衆跡、爲乞兒、」

○藤原宇合卿歌一首、

我背兒乎、何時曾旦今登、　旦今は伊末今旦は計不と訓ならはせり此集例なり

待苗爾、於毛也者將見、　待人の面やは見えん秋になれるといふか七夕の歌なるべし

秋風吹、」

○緣達師歌一首、　緣達は字音によみて僧の名ならん歟【緣達師今本かくよめり奥人】

暮相而、朝面羞、　今本にこを阿佐加保波豆留と訓しはいまだし義訓にかく訓べし(卷一)に朝面無美とありさて是にては序なり

隱野乃、　地名なり卷一に隱山とも有

芽子者散去寸、黃葉早續也、」　かくやうのやは訓に拘らすそへたる書體なり

○山上臣憶良詠秋野花【花下歌字脫】二首、

秋野爾、咲有花乎、指折、可伎數者、七種花、」(其一)

芽之花、乎花葛花、瞿麥之花、姫部志、又藤袴、朝貌之花、」(其二)

此朝貌は牽牛花にあらず既集中に夕顏にこそ咲まさりけれともよめれば槿花ならんといふ說もあれど槿花は草にあらず芽子も小木に入べきもあれどさあらぬも有草に並てまだき木に咲木槿花とさへ呼此花を云べからず七種は數の意なれば七草と云ならねど草の花の中に木の花を一種交べきならねば此歌もても集中朝貌てふは必牽牛花なるべき證ともすべし其よし卷七の考と別記にくはしく云かの夕顏に咲まさるといふは物かげにありて咲るか晝迄もあらぬ花をたま〳〵夕べに見たるが異めでしてよめるか又おもふに牽牛花は夕べに今もゑみさくべくつぼみかず〳〵見はやさるゝを古へ心に明旦の花の咲まさると見しならん歟

○天皇御製歌二首、　豐櫻彥天皇ならん後に聖武と申奉る末に天平十八年の歌有

秋田乃、穗田乎鴈之鳴、闇爾、夜之穗杼呂爾毛、　ほどろは雪霜などにいひてはだれまたら皆同じ言なりされば此も夜のまくらきに秋の穗田を鴈むれのまだらに鳴とのたまはせしにておぼつかなきこゝろなり

鳴渡可聞、」

今朝乃旦開、鴈之鳴寒、聞之奈倍、野邊能淺茅曾、色付丹來、」

○太宰帥大伴卿歌二首、

吾岳爾、棹牡鹿來鳴、先芽之、花嬬問爾、來鳴棹牡鹿、」

○三原王歌一首、

秋露者、移爾有家有、　鳴頭草のうつしなどいふに同じ

意にて秋の露して青葉をいろ〳〵にうつし染るてふうつしなりくはしく冠辭考に見えたり

水鳥乃、　冠辭

青羽乃山能、　此青羽の山は地名ならず古事記に青葉山をからすなど有に同じ常磐木山なり

色付見者、」

○湯原王七夕歌二首、

牽牛之、念座良武、從情、見吾辛苦、更降去者、」　次の歌ともに人間より思ひやりたるなり

織女之、袖續三更之、　袖のひとつによるを續とはいふなり

五更者、河瀨之鶴者、不鳴友吉、」

○市原王七夕歌一首、

妹許登、吾去道乃、河有者、脚絁結跡、　今本是を附目絁とある附目は脚の草を時月など書しを傳寫の誤にて二字と見ける誤ならん別卷に天在一棚橋何將行稗草ノ妻所云足莊嚴又(卷八)に湯種蒔花木之小田矣求跡足結出所沾此水之湍爾と見ゆ是によりて字も訓も改つ

夜更降家類、　牽牛の意を人の上に取たるなり【泝小筏也編竹小筏泊泝、泝自絁結跡、撮要抄云附は泝の誤目は自の誤なり云云奥人云自は濁音なり凡集中清音を濁音には用ゐる事なし】

○藤原朝臣八束歌一首、　此八束卿は後に眞楯といひて大納言に任し人なり房前卿の孫なり

棹四香能、芽二貫置有、露之白珠、相佐和仁、　此言の意は別卷開木代來背若子云云の下に委く見えて淡騷の意にてあはつけくさわき欲よと下しわらふ意なり

誰人可毛、手爾將卷知布、」　此歌は相聞の譬喩歌なりと見ゆ

○大伴坂上郎女晩芽子歌一首、

咲花毛、宇都呂波厭、　呂は留に通うつるはうきをなり

即散なり【早く咲花も早くうつろふはうきをおくてに遲く咲花の心長きには猶劣く物なしとなり拾穗】

奥手有、長意爾、尙不如家里、」　此歌も前に同

○典鑄正、　伊毛乃奈志を約轉たるなり志を濁は言便

紀朝臣鹿人至二衛門大尉大伴宿禰稻公跡見庄一作歌一首、【典鑄正紀朝臣麻人、拾穗如是有り奥人】

射目立而、　冠辭

跡見乃岳邊之、　前云如大和なり

狹麥、花總手折、　不左の不は波由の約左は曾波の約にて即波衣曾由の意榮副なり多く手折は榮合てよろし自多意にも云委は別にいふなり

吾者持將去、　今本に持の字を脫せり一本に仍て補ふ

寧良人之爲、」

○湯原王鳴鹿歌一首、

秋芽之、落乃亂爾、呼立而、鳴奈流鹿之、音遙者、」

○市原王歌一首、

待時而、落鐘禮能、零零低、　今本雨令雨收とありて阿米也美ユとよみたれどよしなし上は一字の二字となりし事明かに下は低を收と誤りし去るければ字も訓も改ぬ【奥人按に正しくは去ぐれの雨といふべきを去ぐれ降とては雨を略けるなり雨令雨收低もし今本のまゝによらば如右訓べき歟】

朝香ノ山之、將黃變、」こゝに朝香山といふは陸奥歟未詳一本に朝の上に開と有は猶よしなしとらず

○湯原王蟋蟀歌一首、

暮月夜、心毛思努爾、白露乃、置此庭爾、蟋蟀鳴毛、」

此歌の重ね歌ぞまことなるものなりかくてこそ古へなれ

○衛門大尉大伴宿禰稻公歌一首、

鐘禮能雨、無間零者、三笠山、木末靡、色附爾家里、」

○大伴家持和歌一首、

皇之、　冠辭

御笠乃山能、黃葉、　一本能と黃の間に秋と有はよしなし

今日之鐘禮爾、散香過奈牟、」

○安貴王歌一首、

秋立而、幾日毛不有者、　既いふ如あらぬになり

此宿流、朝開之風者、手本寒母、」

○忌部首黑麻呂歌一首、

秋田苅、借廬毛未、壞者、　前と同じてにをはにて後の世にはあれずあればといふべかるをつゞめたるなり

雁鳴寒、霜毛置奴柯二、」　柯は今本我とあるは誤去るければ改こゝは淸言にて二は添字疑の可なり

○故郷ノ豊浦ノ寺之尼私房宴歌三首、

明日香川、逝回岳之、　大和の地名

秋芽子者、今日零雨爾、落香過奈牟、」

右一首丹比眞人國人、

鶉鳴、古郷之、秋芽子乎、思人共、相見都流可聞、」

秋芽子者、盛過乎、徒爾、頭刺不挿、　今本挿を捶に誤るなるければ訓によりて字を改

還去牟跡哉、」

右二首沙彌ノ尼等、

○大伴坂上郎女跡見田庄作歌二首、

妹目乎、　冠辭

跡見之丘邊乃、　今本始見之崎乃とあれど玄かあるまじく草の手より誤しなるべきよしは冠辭考にくはしさて跡見はとく見むてふ意もてつゞけたり

秋芽子者、此月其呂波、　今本月を日に誤仍て改

落許須莫湯目

吉名張乃、　既いふ如く卷二により古を吉に改大和國城上郡なり

猪養山爾、伏鹿之、嬬呼音乎、聞之登聞思佐、」　跡見の庄より猪養山はすこしく隔る歟聲きく事のあかぬをうらみてよめり

○巫部麻蘇娘子鴈歌一首、

誰聞都、從此間鳴渡、雁鳴乃、嬬呼音乃、去方知左寸、」

今本去を之に誤方を脱し事次の和歌にて玄るければ補さて夫をおもふ意をそへたるか

○大伴家持和歌一首、

聞津哉登、妹之問勢流、雁鳴者、眞毛遠、雲隱奈利、」

○日置長枝娘子歌一首、

秋付者、尾花我上爾、置露乃、應消毛吾者、所念香聞、」

○大伴家持和歌一首、

吾屋戸乃、一村芽子乎、念兒爾、不見令殆、　ほと〳〵ははて〳〵と云に同じ保と波と登と互も同言なれば遠江國にては末の子をほて子といふははて子なりさて殆を平言の俗訓にほとんど、いふほどに〳〵を略通せり爾は中にあればはぬるは例なり

令散都類香聞、」　見せずしてありしはて〳〵に花はちりすぎたりといひて花散までであはぬほどの久しきを云

○大伴家持秋歌四首、

久堅之、　冠辭

雨間毛不置、雲隱、鳴曾去奈流、早田雁之哭、」

雲隱、鳴奈流雁乃、去而將居、秋田之穂立、繁之所念、」

集中所念は於毛保由と訓今本是を志曾於毛布と訓誤なり例によりてあらたむ

雨隱、情鬱悒、出見者、　今本許古呂由加志美と訓はいまだしく歌意とほらず例によりて改む

春日山者、色付二家利、」

雨晴而、清照有、此月夜、　今本都伎與とよめるは此比の例にかなはず

又更而、雲勿田棄引、」　雲なたなびきそを略て讀るなり

右四首天平八年丙子秋九月作、

○藤原朝臣八束歌二首、

此間在而、春日也何處、雨隱、出而不行者、戀乍曾乎流、」　此歌は三の句を初句の上に置て心得べし

春日野爾、鐘禮零所見、明日從者、黄葉須刺牟、高圓乃山、」

○大伴家持白露歌一首、

吾屋戸乃、草花上之、白露乎、不令消而、玉爾、貫物爾毛我、

○大伴村上歌一首、　今本利と有は村の誤なり此人既に出たり

秋之雨爾、所沾乍居者、雖賤、吾妹之屋戸志、所念香聞、」

○右大臣橘家宴歌七首、

雲ノ上爾、鳴奈流鴈之、雖遠、　是迄序なり

君將相跡、手回來津、」

雲上爾、鳴都流鴈乃、寒苗、芽子乃下葉者、黄變可毛、」

右二首、　作者の名を脱せり此作者家持なるべし故にかくておかれけん　○【奥人案に拾穂に橘右大臣諸兄公とあり】

此岳爾、小牡鹿履起、宇加涅良比、　うかゞひねらふなり是迄序なり

可聞可問爲良久、君故爾許曾、」　右大臣家へ從仕してとかくするは君故と云て狩人のうかゞひねらふにたとへたり今本可聞とあるは問の誤にて可聞可問か又宇加我比か敞の意ならん

右一首長門守巨曾倍朝臣津島、【奥人案に拾穂作巨曾倍朝臣津島】

秋野之、草花我末乎、押靡而、　備計約倍加世約米忘故に倍米美に通へばなびけてと云に同じ

來之久毛知久、相流君可聞、」

今朝鳴而、　今本今朝をあさとのみ訓は誤なり

行之雁鳴、寒可聞、此野乃淺茅、色付爾家類、」

右二首阿倍朝臣蟲麻呂、

朝扉開而、物念時爾、白露乃、置有秋芽子、　萩の露に

玄ほるゝを吾物思ひと同じさまに見しなり

所見喚鶏本名、」

棹牡鹿之、來立鳴野之、秋芽子者、露霜負而、落去之物

乎、」

右二首文忌寸馬養、

天平十年戊寅秋八月二十日、

○橘朝臣奈良麻呂結集宴歌十一首、

不手折而、落者惜常、我念之、秋ノ黄葉乎、插頭鶴鴨、」

布將見、　此玄きてみんは玄き〳〵にあひ見ん人になり

こを希かといふ説あれどかくて心得らる

人爾令見跡、黄葉乎、手折曾我來師、雨零久仁、」

右二首橘朝臣奈良麻呂

黄葉乎、令落鍾禮爾、所沾而來而、君之黄葉乎、插頭鶴

鴨、」

右一首久米女王、

布將見跡、吾念君者、秋山、始黄葉爾、似許曾有家禮、」

此歌初もみぢ葉に似たるといへれば後世意もて珍しむ

心より布を希の誤りとも疑へるならん米豆は言の意感

なればは玄き〳〵に戀思ふ人に逢は見る度にめでらるゝ

なればはつもみぢにたとへしなりよりて前の歌どもに

玄く〳〵に見まほしまるゝ意と見るぞやすけれ

右一首長忌寸娘、

平山乃、峯之黄葉、取者落、鍾禮能雨師、無間零良志、」

右一首内舍人縣犬養宿禰吉男、

黄葉乎、落卷惜見、手折來而、今夜插頭津、何物可將

念、

右一首縣犬養宿禰持男、

足引乃、　冠辭

山之黄葉、今夜毛加、　此加は疑の加なり清て唱べし

浮去良武、山河之瀬爾、」

右一首大伴宿禰家持、

平山乎、令丹黄葉、　今本是を爾保須毛美治序と訓しは

いまだし

手折來而、今夜插頭都、落者雖落、」

右一首三手代人名、　紀(聖武)に大倭三手代連麻呂て

ふ人有同時にて此族ならんさて今本三を之に誤る右に

よりて改

露霜爾、逢有黄葉乎、手折來而、妹插頭都、後者落十

方、」

右一首秦許遍麻呂、

十月、鍾禮爾相有、黄葉乃、吹者將落、風之隨、」

右一首大伴宿禰池主、

黄葉乃、過麻久惜美、　こはもみぢのちるをすぐといへ

るにて用なれば冠辭にあらぬこと冠辭に見ゆ(卷十)黄

葉の過不勝兒といふに同じ

思共、遊今夜者、不開毛有奴香、」

右一首内舍人大伴宿禰家持

以前冬十月十七日集於二右大臣橘卿之舊宅一宴飲也、

○大伴坂上郎女竹田庄作歌、

然不有、　隔句なり此句を二三句の下につけて心得べし

卽五百代に田乎苅亂なればたゞもあらぬ田廬になり

【然不有、　拾穂如是訓見安云いたさならずなり】

五百代小田乎、　【季吟云五十代田は反なり百代田は一

町なり】

苅亂　田廬爾、居者、京師所念、」　田廬は田舍なる伏廬

なればいぶせきに都玄ぬばるゝなり

隱口乃、始瀬山者、色附奴、鍾禮乃雨者、零爾家良思

母、」

右天平十一年己卯秋九月作、

○佛前唱歌一首、

思具禮能雨、無間莫零、紅爾、丹保敝流山之、　今本敝

を敞に誤一本によりて改む

落卷惜毛、」

右冬十月皇后宮之維摩講終日供二養大唐高麗等一　唐に

大を加へて尊みすぐせしは此比よりの誤にて皇朝の

おもぶせなり

種々音樂二爾乃唱一此歌詞一彈琴者市原王忍坂王、　後賜

姓大原眞人東麻呂也

歌子者田口朝臣家守河邊朝臣東人置始連長谷等十數人

也、右の歌家持卿なるべし

○大伴宿禰像見歌一首、

秋芽子乃、　枝毛十尾二、　降露乃、　消者雖消、　色出目八

方、」

○大伴宿禰家持到二娘子門一作歌一首、

妹家之、門田乎見跡、打出來之、情毛知久、　照月夜鴨、」

○大伴宿禰家持秋歌三首、

秋野爾、開流秋芽、秋風爾、靡流、上爾、秋露置有、」

まふけて秋を四つ重ねたれどうるさからで歌の風玄ら

べおもしろかるぞ古へなる

棹牡鹿之、朝立野邊乃、秋芽子爾、玉跡見左右、置有白露、」よき調なれば後に此すがたをうつせし歌似るべくもなし

狹尾牡鹿乃、胸別爾可毛、秋芽子乃、散過鶏類、盛可毛行流、」鹿のかたちもて萩をわけ行を云それにや萩のちりもやする花のさかりやいぬると云て萩ををしめる也

右天平十五年癸未秋八月見物色作、

○内舍人石川朝臣廣成歌二首、

妻戀爾、鹿鳴山邊之、秋芽子者、露霜寒、盛須疑山君、」たくまずして調べよき歌なり

目頻布、君之家有、波奈須爲寸、穗出秋乃、過良久惜母、」集中波太須爲寸とのみあるを此歌のみ波奈とあるはおぼつかなし此奈は太の誤歟筆者の後世にならひて奈と書しならん猶案に新撰萬葉花薄と書其後皆花薄とせり然らば奈良の末にはさもよみし歟

○大伴宿禰家持鹿鳴歌二首、

山妣姑乃、相響左右、妻戀爾、鹿鳴山邊爾、獨耳爲手、」こも隔句體なり山邊に獨のみして山彦の相とよむまで妻戀に鹿鳴と心得べし

頃者之、朝開爾聞者、足日木笹、冠辭山乎令響、狹尾牡鹿鳴哭、」こを喪の誤とするもあれど思ふに此比專ら唐意をこのむこゝろに哭泣の意もて喪と訓せしならん

右二首天平十五年癸未八月十六日作、

○大原眞人今城　穗積親王の子なり

傷二惜寧樂故郷一　今本郷を卿にあやまれり

歌一首、

秋去者、春日ノ山之、黄葉見流、寧樂乃京師乃、荒良久惜毛、」

こともなくやすらかに京師のあるゝを惜める歌なり

○大伴宿禰家持歌一首、

高圓之、野邊乃秋芽子、比日之、曉露爾、開兼可聞、」

今本兼を葉に誤る

秋相聞

○額田姫王思二近江ノ天皇一【天智天皇】

作歌一首、　今本額田王とあるは既卷二同別記にいへる如く誤なり男王にはあらで姫王なる事歌にても著し

君待跡、跡はとての畧

吾戀居者、我屋戸乃、簾動、秋之風吹、」天皇を待お

はする折簾のうごけるも天皇のとはすやとおぼせば秋風の吹て簾をうごかせりとなり此歌次の卷にも出たり

○鏡女王作歌、　今本鏡王女とするは誤なりこは紀（天武）に幸鏡姫王之家訊病とある女王なりともに御親しみの御中なれば右の歌になぞらへよませし御親みの相聞なり

風乎谷、　既を云

戀流者之、　流は卷十二をもて補り

風乎谷、將來常思待者、　まだに必來らば何か歎かんまだに猶ともしと歎かすなり

何如將嘆、」　こは額田女王の歌を聞給ひて擬てよみ給へるなり天皇を戀奉ります御心から風だにをとづるゝをまち得給へりわが爲には去かる風だに吹こねば風待得給ふなるを何かなげきおほさんとさとし給ふなりけり

初の御歌は秋風をよみ出給へるを此歌にて其風の吹をつかひととりなし給ふ物なりさて此歌も前に同じく次の卷にも出たるは既いふ如く家集なれば筆にまかせたるなり

○弓削皇子御歌一首、

秋芽子之、上爾置有、白露乃、消可毛思奈萬思、戀管不有者、」こも戀て其かひあらずば消も死んてふ事を露にそへしなり此言の例卷二別記に委し

○丹比眞人歌一首、　今本こゝに名闕と有は後人の書添取捨

宇陀乃野之、　大和

秋芽子師咎藝、鳴鹿毛、妻爾戀樂苦、　句なり

我者不益、」　野に鳴鹿も妻に戀るなれどそは秋芽子を妻としあれば戀得るなり吾はまだ吾に得たる妻ならずかくし妻にて戀るおもひのこゝはくなれば鹿の妻戀るは吾には增じ吾こそまされなり

○丹生女王贈二太宰帥大伴卿一歌一首、

高圓之、秋野、上乃、狹藜之花、　女王自を花に譬給へり

末壯香見、　こは上の句にて付て見るべしうらわかみなる故に人のかざせりとなりさて今本末を干とす一本丁又一本下とあれど皆誤なりよりて諸本を合考て書の消て誤る事去るければ末にあらためぬ

人之插頭師、　大伴卿を指給ふ

狹藜之花、」　事なりての上のたはむれに花を自らになぞらへてかざし見給へる此花ぞとよみ給へるなり

○笠縫女王歌一首、

足日木乃、　冠辭

山下響、鳴鹿之、　是迄は序なり扨下の言にかゝる意は多に鳴鹿の聲を言とかけたるにてまことの序なり

事乏可母、　事は借字言なり言たらまほしむは逢事のかたきなり

吾情都末、」　今本情を訓のまゝによみたるはいまだしこは義訓せでやあるべきこゝろ妻とこそあるべきか

○石川ノ賀係ノ郎女歌一首、　こは大伴坂上郎女などいふ如く石川氏の女の賀係てふ所に住をいふか其地はいまだ考ざるなり

神佐夫等、　年經りしなり

不許者不有、　今本不許をきかずとよみしはいまだしことわりに訓ばいなとこそよむべけれ

秋草乃、　むすぶといはんとておけるながら此頃よりは既秋に飽の意をこめてよみ出初しなれど後の世のごとくゆくりかにはいひ出ざるなり

結之紐乎、　古は夫の赤紐は必妻の結事なれば此言を云り

解者悲哭、」　此哭を此ま、毛と訓べき事既いへりさて歌意は君か年經ぬるとて吾はいなみおもはずさるを吾が飽るめりと思し給て捨給はば吾はかなしてふ事を秋草などにそへたるか端詞なければ必は解れねど玄かならん

○賀茂女王歌一首、　今本長屋王之女母曰阿倍朝臣也てふ事あれど後人の書加玄るし一本になきによりぬ

○秋野乎、旦往鹿乃、跡毛奈久、　是までは序なり旅などに行てさはる事ありて遠放しが跡たえてあはでのちあひしをかくいふならん

念之君爾、相有今夜香、」　香は香毛の意なり

右歌或云椋橋部女王或云笠縫女王作、　家の集なれば聞傳へさま〳〵ならん玄かなるべければ撰者の意としてすてつ

○遠江守櫻井王奉ニ天皇ニ歌一首、　既にも云如く年の號によるに此天皇は後に聖武と申す

九月之、其始鴈乃、使爾毛、　一本使を便と有今本によるべし

念心者、可聞來奴鴨、」　此王淺官ながらかくなめげにようみて奉らるゝはいたく御親みありしと見えたり九月の鴈の使にもとおぼしまけしをきこえさせ賜はぬとなり

○天皇賜ニ報和一御製歌一首、　製は例によりて補ふ

大乃浦之、其長濱爾、　大の浦ときこす譬長き濱とつゞけさせ給ひしか後には必地名とす【拾穗に京の小注に大浦者遠江國之海濱名也、古今集伊勢歌におほの浦にかたえさしおほひなる梨の云云、加茂翁云おほの浦と云所の名伊勢志摩二國の内に此歌の外によみたるも見えず又物にも見あたらず伊勢の多氣郡に麻績の鄕有もし此をみをおほに唱へ誤しか又あこの浦をあやまりしも知られず】

緣流浪、　如を入て心得べし

寛公乎、　波の如くゆたにたえず常におぼすとなり

念比日、」　大浦は地名長濱は右にいふ如か又地名の何れにも遠江なる事奉る王の任と此御製歌にて明らかなり後によこなまれる說あり

○笠郎女贈ニ大伴宿禰家持一歌一首、　今本贈を賜に誤る

每朝、吾見屋戸乃、瞿麥之、花爾毛君波、有許世奴香裳、」　瞿麥は朝每に見ればその如く見まほしてふをめづる花にたとへてありこせとねがふなり

○山口女王贈ニ大伴宿禰家持一歌一首、

秋芽子爾、置有露乃、風吹而、　是迄序なり落といはんのみ

落涙者、留不勝都毛、」　露の風にふかれて落如くてふを戀にいひくだせるなり

○湯原王贈ニ娘子一歌一首、

玉爾貫、不令消賜良牟、秋芽子乃、宇禮和和良葉爾、

宇禮は裏にて末なり和和の和は惠良の約にて惠良〳〵良波なり扨此惠は東の俗惠良伊惠良幾といふ方言は古言と見ゆ卽物多きをいふなりさて惠は元と於保約於なり又於計約惠なれば惠良哉於保幾は同言よりて强き事も惠良伊といふ下の良波は良波の約良にて都良の上畧連にて人も物も多きにそへ云詞なりさて露多ければたはめはたは、に近し【奥人按に和々良はやわらと訓て弱葉の事とすべし和をやの假字に用る例有】

置有白露、」　王の自を消易き露にたとへ娘子心玉を給らんとなり

○大伴家持至ニ姑坂上郎女竹田庄一作歌一首、

玉梓乃、　冠辭

道者雖遠、　今本にとほけれど、あれど集中の例によりて　を改

愛哉師、　既いふ如くこをよしるやしと訓しは今本の誤

なり

妹乎相見爾、　坂上郎女の娘を指

出而曾吾來之、」

○大伴坂上郎女和歌一首、　娘にかはる意にて姑のこたへよみしなり

荒玉之、　冠辭

月立左右二、　月たつは古へよりいふ朔日もそを通し云をおもへ

來不益者、夢西見乍、思曾吾勢思、」

右二首天平十一年己卯秋八月作、

○巫部麻蘇娘子歌一首、

吾屋前乃、芽子花咲有、見來益、今二日許、有者將落、」

○大伴田村大嬢與二坂上大嬢一歌二首、

吾屋戸乃、秋之芽子開、夕影爾、今毛見師香、　見てしの師は助辭にて香は欲得の意ねがふなり

妹之光儀乎、」　こはまことの妹をおもふなり

吾屋戸爾、黄變蝦手、　蝦手てふ名はこれが葉の蝦蟆か手に似たるよりの名にて加倍留泥の留を略ていふなり

今は一つの木に限てもみぢといへど然云は後なりすべて秋に至りもみづる木の葉を古はもみぢといひて一つの木の名にあらず後世もみぢと呼ものぞ蝦蟆が手に似たればかへでてふ名有なり楓の字をあて、云は唐意なり

毎見、妹乎懸管、　おもひをかけつ、なり

不戀日者無、」　こは妹のうるはしきすがたを戀思をかへる手のもみぢの色よきに譬てよめるなり

○坂上大娘秋稻蔓贈二大伴宿禰家持一歌一首、

吾之蒔有、　一本業有とありて奈禮留とよめるもさる事ながら今本の訓字のまゝにても歌の意同ければ今本によりぬ

早田之穂立、　此間ににての辭を入て心得べし

造有、蔓曾、　こゝは句中の句なり

見乍、　此句を下へ付て心得べし

師奴波世君背、」　古はさか木梅櫻何くれとなく木綿に結びたれて蔓とし又木綿柳あやめなど自ゑなへなびくはそれまゝかつらとする事おほく見えたりさればこゝもわさ田の穂だちのめづらしかれば蔓としおくりたるなめり

○大伴宿禰家持報贈歌一首、

吾妹兒之、業跡造有、　此辭は次の句の秋田にかゝりたるにてはじめの歌に蒔類早田てふ言の答さてはじめの造たるかつらとふ言葉をもこめていらへたり

秋田、早穂乃蔓、雖見不飽可聞、」

○又報脱二著レ身衣一贈上家持歌一首、　今本衣を夜とあるは誤なり一本衣とあるによりぬ

秋風之、寒比日、下爾將服、妹之形見跡、　後世は人のもてならしたる物を其人の死たる後に送るをかたみといふ此比まではすべて其人の形見るてふ言にて常にいひたるを見よ古今集に逢夜のかたみとよみしをも思へ

可都毛思努播武、」　かく云は秋風さむかればおくりたる衣を着なんかつかたち見とも見ゑぬばんてふ二つの言をわかつとてかつとはいふなり

右三首天平十一年己卯秋九月往來、

○大伴宿禰家持攀二非時藤花並芽子黄葉一物一贈二坂上大嬢一歌二首、　今本嬢を嫌に誤る

吾屋戸之、非時藤之、　かく云は春の末より夏のはじめに咲もの、秋近き六月までであれば常及の意なればなり

目頻布、今毛見牡鹿、妹之咲容乎、」　藤の花の如めづるなる妹かゑみを今も見てんがなとねがへるなり

吾屋前之、芽子乃下葉者、秋風毛、未吹者、　例のふかぬにといふてにをはなり

如此曾毛美照、」　秋風のふかぬにもみぢせし萩の下葉のにほはしきが妹がゑまひのにほひやかにあかぬに譬ふ

右二首天平十二年庚辰夏六月往來、

○大伴宿禰家持贈二坂上大嬢一歌一首幷短歌、

叩々、　これを今本に伊多美伊多美と訓るは笑ふべし是を字の誤として說もあれどもとるにたらずこは擊てふ字なれど裏々内々の意の訓に借たるなり論語に以レ杖叩二其脛一字書にも是等を引き微擊也と注せり此頃唐字を專らとする頃なれば戲書にかゝる字を借は常なり

物乎念者、將言爲便、將爲爲便毛奈之、妹與吾、手携而、

今本こゝに拂の字有一本なきによてすつ

旦者、庭爾出立、夕者、床打拂、白細乃、　冠辭

袖指代而、佐寐之夜也、　やはなり打返辭なり夜やながらぬ常にありけると下にうけつ

常爾有家類、足日木能、　冠辭

山鳥許曾婆、峯向爾、嬬問爲云、打蟬乃、　冠辭

「ひるは來て夜は別る、山鳥が影見る時ぞねはなかれ

ける」】

人有我哉、如何爲跡可、一日一夜毛、離居而、嘆戀良武、

許己念者、　そこととこゝといふに同じ言はこれをおもへばなり

胸許曾痛、其故爾、情奈具夜登、　即和なり奈久左牟に同意なり

高圓乃、山爾毛野爾母、打行而、遊往杼、花耳、　四言

丹穂日手有者、毎見、益而所思、奈何爲而、忘物曾、戀云物乎、」

反歌

高圓之、野邊乃容花、　容花の事は卷七に委くいふこゝはかほと云より面とかけしのみ

面影爾、所見乍妹者忘不勝裳、」

○大伴宿禰家持贈二安倍郎女一歌一首、　今本女郎とあるは既云誤なり例によりて改む

今造、久邇能京爾、　山城國相樂郡恭仁の京にて聖武天皇遷都の地なり甕原の京ともいひしなり

秋夜乃、長爾獨、宿之苦左、」

○大伴宿禰家持從二久邇京一贈下留二寧樂宅一坂上大娘上歌一首、　大嬢ならんといふ説もあれど此まゝにても玄か訓べし筆にまかせられたる物なればあらためず

足日木乃、　冠辭

山邊爾居而、秋風之、日爾異爾、　既いふ如なれば二つの爾を補

吹者、妹乎之曾念、」

○或者贈レ尼歌二首、

手母須麻爾、　既云如く手もやすめずなり

殖之芽子爾也、還者、雖見不飽、情將盡、」　生したてし女の尼となれるがかなしくて養ひたてし勞をいひ花咲べくもあらねど立かへりてこゝろを盡さんのみとたとへしならん

衣手爾、水潸付左右、殖之田乎、引板吾波倍、　鳴子なりはへは綱を引延なり

眞守者栗子、」　守てふ縁もてかけるのみ苦なりこも前と同じ意なりむこずみもさせてさか行末を見んとおもひまけしたのみなく世すて人となりたるをまもりをるがくるしと譬たるなり

○尼作二頭句一令下誂二大伴宿禰家持一續中末句上和歌一首、

佐保河之、　今本保佐と有は上下なり一本による

水乎塞上而、殖之田乎、尼作苅流早飯者、獨奈流倍思、」

家持續ぎて尼生育の勞を本の句によめれど上の二首にいらへつる言なければ家持卿にあとらへしに卿は其田の初飯をば人にものせんと生したてつる人のおもひまけにたがひ尼の身一つに初飯までも受得しと末をつきて尼がなげきを譬られしなり【拾穗に云水せき殖つなとして苦勞玄ながら苅ては獨の早飯ならんとよみて難苦の修行をなしても受用は獨の覺悟なるべしとなり彼筑波の詞の後上句に下句を付る連歌の始め是なりとぞ奥人】

冬雜歌。

○舍人娘子雪歌一首、

大口能、　冠辭

眞神之原爾、　大和の飛鳥郡なり

零雪者、甚莫零、家母不有國、」【八雲抄に云宿るべき所もなきにと行路の間を詠り奥人】

○太上天皇御製歌一首、　後元正天皇と申奉る

波太須珠寸、尾花逆茸、黑木用、造有室者、迄萬代、」

假の幸宮をめでさせ賀たまはし、なり

○天皇御製一首、　後に聖武天皇と申奉つる

青丹吉、　冠辭

奈良乃山有、黑木用、造有室戸者、雖居座不飽不聞、」

右聞之御在左大臣長屋王佐保宅肆宴御製

○太宰帥大伴卿冬日見レ雪憶レ京歌一首、

沫雪、保杼呂保杼呂爾、　既云如くまだらまだらと同言なり

零散者、平城京師、所念可聞、」

○太宰帥大伴卿梅歌一首、

吾岳爾、盛開有、梅花、遺有雪乎、亂鶴鴨、」　後のおきまどはせる白菊の花はこれをとれるならん

○角朝臣廣辨雪梅歌一首、

沫雪爾、所落開有、梅花、君之許遣者、　君之許は訓の意を得て書し借字なりさてかく云は在所なり君我里妹我里の我は辭なるを言の我に安はこもれば安を略き里加約良なるを里に通して我里といふ良を里に通す例は式の祝詞に御舍御在所御在家を美安良加といふは御在所なり所を加と訓む例は住所といふに同じ扱此美安良加を御安里加と云もて右を心得にかく言の調にまかせて唱はいにしへの常なり

與曾倍豆牟可聞、」　されば君がりやらば吾がめづる心に

よそへなぞらへて君もめで、あらんといふなり

○安部朝臣奥道雪歌一首、

棚霧合、雪毛零奴可、　可は願の意なり

梅花、不開之代爾、　代は壁代御戸代御衣代などの代に同じくかはりてふ意なり

曾倍而谷將見、」　曾倍もなぞへて見んと云に同

○若櫻部朝臣君足雪歌一首、

天霧之、雪毛零奴可、灼然、　大に知意なり【伊知の伊は伊加志の約智は多里約志呂は知の意呂久の約留なり下に加幾久計古の言をそへいふのみ】

此五柴爾、　櫟柴なり智比約智なればなり

零卷乎將見、」

○三野連石守梅歌一首、

引攀而、折者可落、梅花、袖爾古寸入津、染者雖染、」

末の句は只添いふのみ一つの體なり歌は四の句迄に首尾せるなり

○巨勢朝臣宿奈麻呂雪歌一首、

吾屋前之、冬木乃上爾、　今の世冬木ときはなる木を指云にはあらず葉有も葉なきも只冬の木を云此次の枚にも冬木の梅と云り

零雪乎、梅花香常、打見都流香裳、」

○小治田朝臣東麻呂雪歌一首、

夜干玉乃、　冠辭

今夜之雪爾、卒所沾名、將開朝爾、消者惜家牟、」　雪をめづる餘によめるなり

○忌部首黒麻呂雪歌一首、

梅花、枝爾可散登、見左右二、風爾亂而、雪曾落久類、」

巧める物なり後の歌是より出るならん

○紀少鹿郎女梅歌一首、

十二月爾者、沫雪零跡、不知可毛、梅花開、含不有而、」

○大伴宿禰家持雪梅歌一首、

今日零之、雪爾競而、我屋前之、冬木梅者、　こゝをもて見れば前花開二家里、」

○御二在西池邊一肆宴歌一首、

池邊乃、松之末葉爾、　今本須惠と訓たれどこはうら葉かうれ葉か二つながら古ければ暫うらばとして古きによりぬ

零雪者、五百重零敷、明日左倍母將見、」

今本こゝに右一首作者未詳但竪子阿倍朝臣蟲麻呂傳

誦之と有はいかゞ筆にまかせてかゝれたれど既にならひて作者の名有にこゝになければ後人不意に見て書添へたるさがしら言なり前の歌に家持とありてならびてあれば自の歌なる事ゑるく調も家持に紛なきを見ゑらぬ人のわざなりけり

○大伴坂上郎女歌一首、

沫雪乃、【沫は淡の草の手の誤歟今本假字アハと云沫はアワの假字なり奥人案に古事記阿和由岐】

比日續而、如此落者、梅始花、散香過南、」

○池田廣津娘子梅歌一首、

梅花、折毛不折毛、見都禮杼母、今夜能花爾、尚不如家利、　今迄に折とりても見木立に咲ま、に見たれど此夜の花にゑくはなしとなり

○縣犬養娘子依レ梅發レ思歌一首、

如今、心乎常爾、念有者、先咲花乃、地爾將落八方、」

吾心の散みだれし間にかく花はちり過ぬ今の如心はしなり

常にやすくぞもつべかりけると梅を見ておもひかへせ

○大伴坂上郎女雪歌一首、

松影乃、淺茅之上乃、白雪乎、不令消將置、言者可聞奈吉、」　言は借字事なり松影の雪をめづる餘りに消たずておひなん事はなかるまじやと思へるまゝをよめるなり

冬相聞

○三　眞人人足歌一首、

高山之、菅葉之努藝、零雪之、　是迄は消といはん序なり

消跡可曰毛、戀乃繁鷄鳴、」

○大伴坂上郎女歌一首、

酒杯爾、梅花浮、念共、飲而後者、落去登母與之、」　太宰の梅の花の歌に本は違て末同じ歌なり

○和歌一首、

官爾毛、縱賜有、今夜耳、將飲酒可毛、散許須奈由米、」

梅の花ちりぬともよしとよみかけたれば此樂しきこよひの宴にその梅にゆめ〳〵散なゝ花に合せてこたふるなり下の本注にてらし合て見よ

右酒者官禁制稱二京中閭里一不二得集宴一但親親一二飲樂聽許者緣此和人作二此發句一焉、

○藤原后奉二天皇一御歌一首、　后は光明皇后藤原史公女天皇は後に聖武と申奉

吾背兒與、二有見麻世波、幾許香、此零雪之、懼有麻思、」

○池田廣津娘子歌一首、

眞木乃於上、　此眞木はたゞ木の事ともいふべけれと例によらば專ら檜ならん

零置有雪乃、敷布毛、所念可聞、佐夜問吾背、」　此佐は發語たゞに夜問わがせなり

○大伴宿禰駿河麻呂歌一首、

梅花、令落冬風、音耳、　是まできくといはん序なり

聞之吾妹乎、見良久志吉裳、」

○紀少鹿郎女歌一首、

久方乃、　冠辭

月夜乎清美、梅花、心開而、　心とけての意にいふなり

吾念有公、」

○大伴田村大娘與二妹坂上大娘一歌一首、

沫雪乃、可消物乎、至今、流經者、妹爾相曾、」　こは親みの中の相きこえなり

○大伴宿禰家持歌一首、

沫雪乃、庭爾零敷、寒夜乎、手枕不纏、　妹となり

一香聞將宿、」

寛政といふ七年六月廿四日　穂積奥人五十三齡

萬葉集卷十二之考終

萬葉集卷十三之考〔流布本卷第四〕

相聞。

○難波天皇、【後仁德天皇と申奉る】

皇妹、　下の皇兄によるに字を脫せるゑるしよて補へり

奉下上在二山跡一皇兄上御歌、　紀應神天皇の御子皇男十八人皇女十九人見たりいづれ共不可知なり

一日社、人母待告、　告は借字繼の意なり

長氣乎、如此所待者、有不得勝、」

○岳本天皇、【後舒明天皇と申奉る】

御製歌一首幷短歌、　今本製の字を脫例によりて補へり

神代從、生繼來者、　阿は宇万約うまれつき〳〵くれば

といひ人さはにいひつゞく

人多、國爾波滿而、味村乃、　冠辭

去來者行跡、【冠辭考にもいさとはゆけど、よみしかど心ゆかずいさにはゆけと、よむべき歟】

吾戀流、君爾之不有者、　八言

畫波、　四言

日乃久流留麻呂、夜者、夜之明流寸食、念乍、寐宿難爾死呂、　今本死呂の字登とあれど死呂を登の一字と誤る事ゑるければ改む

阿可思通良久茂、長此夜乎、」

反歌

山羽爾、　羽は借字山の間なり

味村騷、去奈禮騰、吾者左夫思惠、　此惠は與に通なり

君二四不在者、」　此歌は長歌の三の句以下五六句までにあたるなり

淡海路乃、鳥籠之山有、　（卷四）に狗山鳥籠山有不知也

河不知二五寸許須余名告奈と有は不知也川といひていざとうけたり此歌は下にとこしへ戀つゝあらんといはん序にまづ鳥籠山をこゝにいへるなり

不知哉川、　いさや此ごろといはんとて地名を重ねいふのみ

氣乃己呂其侶波、　氣は許より通せていふのみ則許乃比比はといふなりけり

戀乍裳將有、」　此歌は長歌の八句め以下をのたまはすにてひるよるとなく戀おぼせどおぼすまゝならねば鳥籠山の名の如とこしへ此日比は戀あらんとなり

今本歌の左に右今案に高市岳本宮後岳本宮二代二帝

各有畧焉但稱岳本天皇未審所其指と有るは歌の樣も
さらぬ後人の書加へたる事さるかればすてつ此歌此
端詞のまゝならば男帝にて女をおぼしめすなりさて
家集なる物からさたゝかにも撰まれずうち聞たるま
まにかゝれたるが傳りたるとのみ此集の樣見ゆれば
岳本宮より御代もほどふれば さかいひ傳へたるの
みならんか長歌のさまも反歌のさまも岡本宮の比の
さらべともなしならのはじめの比の歌ならずやと思
はる

○額田女王、　既云如く卷一別記にくはし
思二近江天皇一作歌、　天皇は後に天智天皇と申奉る
此歌は既に卷十二に次の歌ともに出たりそこにくはし
く云ばこゝに不委

君待登、　登はとての畧なり
吾戀居者、我屋戸、簾令動、秋之風吹、」　今本簾動之秋
風吹とあるは字の脫上下したるなり卷十二によりて
改

○鏡女王作歌、　此女王の事も右に云如し
風乎太爾、戀流波乎之、風小谷、將來登時待者、何香將
嘆、」

大伴宗持贈
○□□□□□吹黃刀自歌、　今本こゝを吹黃刀自歌二首
とあるはまたき誤なりこは誰贈云々とありけんを亂れ
本のまゝに仙覺などが校合の時改もせで今の如くはな
りつらん此歌は歌ざまこと葉まぎるゝ事なき男歌なり
次の歌に刀自和歌とありけんをそはみだれて脫しなら
んさて歌のさらべ家持卿に似たれば此ことの贈答なら
んと見ゆよて白圈のかたはらに試にそへたり正しき本
を見ん人改めよ

眞野之浦乃、　後の物に眞野浦によどの繼橋を添よめる
は攝津國なるよし見ゆ大和近江にも同名有何れにや
與騰乃繼橋、　つぎ橋といふは橋ありて中に淵又島など
の有て又其向へ渡る便に橋をかけしをいふなり扨つぎ
ておもふてふ事をいはん序に此地名をとりいでゝよめ
るなり

情由毛、思哉妹之、　おもへやはおもへれやのれを畧云
なり

伊目爾之所見、」　たえずおもへれや夢に見ゆとめてゝお
くるなり

○吹黃刀自和歌、　こゝにかくて有を今本に脫せるなり
河上乃、　今本の訓さからず

伊都藻之花乃、何時何時、來益我背子、時自異目八方、」
此歌は卷七に既出そこに委くいふ

○田部忌寸櫟子任二太宰一時歌四首、　【此歌の右に
は田部云云妻作歌ともありて其次の二首田部云々櫟子
作歌其次には田部云々妻作歌とも歌の右かたに有べき
他の例なりされど家集の事なれば必とする事にもある
べからねば始に田部云云が任二太宰一時の四首とのみか
ゝれしは歌にて作者さらるれば畧てかくもかゝれしに
や有けんよて是のみ歌數をさるしてよしは歌ごとにこ
とわれり】

衣手爾、取等騰己保里、哭兒爾毛、益有吾乎、　まされ
る吾とは櫟子が妻の自らをさしていふなり

置而如何將爲、」　四の句の吾乎は君乎の誤なりといふも
あれど此歌は旅の別の妹背の相聞の贈答にて妹吾乎と
どめ置ていかにしけむとよめるなり

置而行者、　前の歌の置てといふをうけてよめる背の歌
なり

妹將戀可聞、敷細乃、　冠辭

黑髮布而、　冠辭よりは黑髮しきてぬるになり下へうく
る詞はさきりて長き夜と云なり

長此夜乎、」

吾妹兒矣、相令知、人乎許曾、　あひ見しはじめの中た
ちの人をさし云なり

戀之益者、恨三念、」　おもふがあまりにをさなくうらめ
るなり

朝日影、爾保敞流山爾、照月乃、　大和國は四方山なれ
ば日の出る方も山なるべしさて下弦の月の山邊をはな
れぬほどに日もにほひぬべければそを見るからに背の
山をなんどおもひてあかざる序とせり

不厭君乎、山越爾置乎、」　此歌は又妹のよめるなり

○柿本朝臣人麻呂歌、

三熊野之、浦乃濱木綿、　こは後に濱おもとてふ物にて
其莖をへぐに幾重ともなく重なるものなり色白きもの
なれば眞木綿に向へて濱木綿とは名づけたるなりこは
やごとなき御說もていふなり

百重成、心者雖念、直不相鴨、」

古爾、有兼人毛、如吾歟、妹爾戀乍、宿不勝家牟、」　妹
こひしらにいねかねて古へ人をさへおもふなり

今耳之、行事庭不有、古、人曾益而、哭左倍鳴四、」

百重二物、來及髮常、　來及を今本に伎於與倍と訓しは

字に泥るなり紀(仁德)天皇聞二其太后自二山代一上幸上而使二舍人名謂二鳥山一人送二御歌一曰夜麻斯呂邇伊斯祁登理夜麻伊斯祀伊斯祁とよませ給しによるにこゝも斯祀斯祁とよむべし

念鴨、公之使乃、雖見不飽有哉、」 今本に此疑の句を阿加邪良牟と訓しは字にもあたらず邪は受阿約なり下は有哉と訓べし

○恭梼越、 既出

往二伊勢國一時留妻作歌、

神風之、 冠辭

伊勢乃濱荻、 葦荻は交りてわれは伊勢濱荻とよめるなり濱邊に有荻なり玄かるを何人か物の名も所によりて替りけりなど云はいともひが言なり

折伏、客宿也將爲、荒濱邊爾、」

○柿本朝臣人麻呂歌、

未通女等之、 冠辭

袖振山乃、 【大和の山邊郡の振山を袖振にといひかけしは古へのつゞけの例にてかきくらし雨ふる川攝津國のつが野を古妹子を聞つがのべなどいへる類なり】

水垣之、 冠辭

久時從、憶寸吾者、」 (卷四)に此歌既出云々に柴垣てふ冠辭の事もかしこき御說もてくはしくいへれば合見べし

夏野去、小牡鹿之角乃、束間毛、 一束の間もと云にて少のほどもわすれんやなり

妹之心乎、忘而念哉、」 諸成此言を猶考るに於毛倍の倍は波米の約にてわすれて思はめやなり

珠衣乃、 冠辭

狹藍左謂沈、 此歌は(卷六)既出こゝに眞淵の考もあれど諸成猶案るに狹藍の爲は和岐の約にてさわぎさわぐを玄づめと云なり

家妹爾、物不語來而、思金津裳、」 卷六なるは國風なりこゝは此卿のきかれたるまゝにあげられたるなめりさればいさゝか言もてにをはもたがへるは宮風と見すぐすべし

○柿本朝臣人麻呂妻歌、

君家爾、吾住坂乃、 大和國宇陀郡墨坂なり契沖云(卷十四)百たらぬ八十墨坂とあり此妻身まかられたる時人麻呂のなげきて「あまとぶやかるの道をばわきもこが里にしあれば」といへり輕の里は高市郡墨坂は高市郡の東にあたりて其間すこし隔るべしといひしにてよく玄らる

家道乎毛、吾者不忘、命不死者、」

○阿倍郎女歌、 今本こゝを安倍とす下皆阿とあるによりて改ぬ

今更、何乎可將念、打靡、情者君爾、縁爾之物乎、」

吾背子波、物莫念、事之有者、火爾毛水爾毛、吾莫七國、」 此終の句意は卷一に委いひ(卷十)に奈家奈久爾と假字書もありて明らかなり歌の意は垂仁天皇の后宮火に入ましし橘姫命の水に入まして皇子尊の御身につゝがなかりしなどをおもひてよめるならん

○駿河采女歌、 今本媛女一本妹と有共に誤玄るかれば采女とあらたむ

敷細乃、 冠辭

枕從久久流、涙二曾、浮宿乎思家類、戀乃繁爾、」 古へといへどならとなりてはかく言をかざれる歌あるまゝに古今歌集に至りてはまくらながるゝなどてふもよみなせるもありて花にのみなり斯古のまことなる歌をうしなへるなるべし

○三方沙彌歌、

衣手乃、 袖は左右にわかれてあればわかれともつゞくべく又旅行にはわかれぬるなればそをおもひても云べし用に云なせば冠辭ならず

別今夜從、妹毛吾毛、甚戀名、相因乎奈美、」

○丹比眞人笠麻呂下二筑紫國一時作歌幷短歌、 紀(文武)大寶元年七月壬辰左大臣正二位多治比眞人島薨大臣宣化天皇之玄孫多治比王之御子也かゝれば皇子曾孫なり笠麻呂はみし所なしと契沖もいへり

臣女乃、 今本に末宇刀米と訓しは僻事なり字のたがへるか玄からん訓もあらんか玄ばらく字によるのみ【臣女乃ちふ言集中こゝのみや恐は臣女は姫の字なれば例の戲書歟さらばたをやめとよまむか清小納言は鴉を巫烏とかきし類にや天武紀にも巫烏と有奥人】

匣爾乘有、鏡成、 海の上きよきをいふなり

見津乃濱邊爾、狹丹頰相、 冠辭

紐解不離、吾妹兒爾、戀乍居者、明晩乃、 阿計玉長計てふ言を約通したる言にて夜明のくらきをいふ

旦霧隱、鳴多頭乃、哭耳之所哭、 今本奈伎乃美叙奈久とよみしはいまだしかり

吾戀流、千重乃一隔母、名草漏、情毛有哉跡、家堂、吾

立見者、青楊乃、　冠辭今本音弭と有は誤なるよし冠辭考に委

葛木山爾、多奈引流、白雲隱、天佐柯留、　冠辭【今本佐我流とある我は濁言なり例によて改】

夷乃國邊爾、直向、淡路乎過、粟島乎、背爾見管、　諸成案に勢牟伎阿比の勢牟の約須なるを曾に轉し伎阿の約加なれば曾加比とは云なりさて勢牟伎は曾牟伎なり

朝名寸二、水手之音喚、　今本の訓はいさゝかいまだしかり【紀(應神)日向諸縣君牛とふ者鹿皮を忌て海に浮來て帝の御船に從へり其所を鹿子の御門と云播磨國なり凡水戸曰鹿子蓋始起于是時云云拾穗の注に有奥人】

暮名寸二、梶之聲爲管、浪上乎、五十行左具久美、　具久の約久なり其久と美を約れば伎なり行左伎なり則さけ行なり式祝詞に此言あり

磐間乎、射往廻、稻日都麻、　播磨國印南郡の島なり(卷十)吾妹子が形見に見んを云云の歌有くはしく云【いなみづまの都は助字にていなみしまの略なりさつまつしまの事も島の意なり】

浦箕乎過而、　箕は備に通借は邊なり

鳥自物、魚津左比去者、家乃島、　式神名帳に播磨國揖保郡家島神社あり後世繪島と云は誤なり

荒磯之宇倍爾、打靡、四時二生有、莫告我、　紀(允恭)十一年三月朔幸於茅渟宮衣通郎姫歌之曰等虚辭陪邇枳彌母阿閉椰毛異倉儺等利宇彌能波摩毛能余留等枳弘時天皇謂衣通郎姫曰是歌不令聆他人皇后聞必大恨故時人號濱藻謂奈能利曾毛也此事紀に有をもてもはらいふ言の如くさもおもへど諸成案に莫名者告と奈波の里と言の同じかるを奈波の約奈なれば奈乃利曾とつゞめていふならん

奈騰可聞妹爾、不告來二計謀、」

反歌

白妙乃、　冠辭

紐解更而、　今本に紐を袖とあり白妙てふ言よりは袖とつゞくべき言ながら袖は袖結もあればとくともいふべけれど結とくなどこそいはめよしさいふともそは夜床のさまならず白妙の多須寸ともつゞくれば紐ともいふべくおぼゆさて長歌のはじめに紐解不離とあるをもとの句に云とおもへばかた〳〵改ぬ

還來武、月日乎數而、往而來猿尾、」　かへりこん月日をいつとよみかぞへて妹にものりて往て來ましものをと

長歌の終の句の意をうたひかへせるなり

○幸二伊勢國一時當麻麻呂大夫妻作歌、

吾背子者、何處將行、巳津物、　冠辭

隱之山乎、今日歟越良武、」　此歌は卷一に既出たり又隱の山の事冠辭にくわしく出

○草嬢歌、　此草とのみあるは草香の香を落せしかゝからばは是もいらつめと訓べし

秋田之、穗田乃苅婆加、　(卷七)に秋田吾苅婆可能過去者てふ歌にくはしくかりはかりてふ言を略て云なり【苅婆加は苅場所の意成べし卷七なるも同今考得てここにいふ】

香緣相者、　田苅とらばよりあふ物故たとへていふなり

彼所毛加人之、　より合ゐたらんにはといふなり

吾乎事將成、」　人言にいひたてさわきなんと云

○志貴皇子御歌、

大原之、　(卷三)吾里爾大雪落有大原のてふ歌に云如く大和國宇智郡にあり

此市柴乃、　(卷四)に道乃邊五柴原乃(卷十二)にも五柴と有五市共に言通はいづれにも云べし委はそこにいふなり

何時鹿跡、　今本鹿を庶に誤る一本によりて改む

吾念妹爾、今夜相有香裳、」

○阿倍郎女歌、

吾背子之、着世流衣之、　今本着を盖とせるは誤ゑるかれば改む着は計にも通へばかくいふか又案に伎世の約計なれば着せるてふ言ならん歟とも思へり

針目不落、入爾家良之奈、　心にしむを入といふやがておもひ入なり今本奈を脱せり假字によりて字を補へり

我情副、」

○中臣朝臣東人、　和銅四年叙從五位下天平五年三月從四位下

贈阿倍郎女歌、

獨宿而、絶西紐緒、　久しく獨ぬるをいふ

忌見跡、世武爲便不知、哭耳之曾泣、」　(卷五)針者有杼妹之無者將着哉跡吾乎令煩絶紐之緒とあるに似たり

○阿倍郎女答歌、

吾以在、三相二搓流、　三つ組の緒のつよきを云紀(孝德)始吾遠皇祖之世、以二百濟國一爲二內宮家一譬如二三絞之綱一中間以二任那國一屬二賜百濟一と見ゆ

絲用而、附手益物、今曾悔寸、」

○大納言兼大將軍大伴卿歌、

神樹爾毛、　神樹を佐賀伎と訓は俗なり紀(景行)阿佐志毛能彌開蝕佐烏麼志とあるもてこゝも美計とよめり

手者觸云乎、打細丹、　【打細　與人按にうちつたへとはたゞ後にといふ心なりとあれどつたへの約てなり此てはちつけの約にてうちつけにてふ言となすべきか古今にもうちつけにさびしくも有か黄葉も云々と有】既に卷七に云如くうちたへを約言なり

人妻跡云者、不觸物可聞、」　歌意は契冲いふ神の領し給ふ木にだに手はふらなくに人の妻と定りぬれば手ふる事もあたはぬものかといへり玄かいふまでなくてきこえたり

○石川郎女歌、　下の卷の尼理願の注にいふ如く安麻呂卿の妻なり

春日野、山邊道乎、與曾理無、　與利曾波利を約し云なり無てふ言のそへはこゝは他人に與曾波利そへる心なく一心に通しをいふ

通之君我、不所見許呂香裳、」

○大伴郎女、　旅人卿の室太宰府にて身まかられし大伴郎女なり今本是をさへ女郎に誤他の誤知べし

雨障、　雨をいとひて來らぬを云

常爲公者、久堅乃、　冠辭

昨夜雨爾、將慈鴨、」

○後人追和歌、

久堅乃、　冠辭

雨毛落糠、　加は賴意俗のふれかしと云に同今本糠を穅とするは誤なり

雨乍見、　雨をかしこみ愼なり包の意ならず

於君副而、　よりそひてと云なり

此日令晩、」

○藤原宇合大夫、　續紀(元正)養老三年七月始置按察使常陸國守正五位上藤原宇合管安房上總下總三國と見えたり

遷任上京時常陸娘子贈歌、

庭立、　賤家のさまなり則麻生なり(卷十一)に小垣内之麻矣引豆妹名根元と有も同じ

麻乎苅干、　麻は苅てしきならべほす物故布慕席とせり今本麻手と有は誤なり上に引卷十一の歌によりて乎に改

布慕、東女乎、忘賜名、」

○京職大夫藤原麻呂大夫、　養老五年六月從四位上藤原朝臣麻呂爲左右京大夫神龜六年詔云京職大夫爲從三位藤原朝臣麻呂云云と見ゆ今本麻呂を脫前の歌の宇合大夫によりて麻呂の字を補へり

贈大伴坂上郎女歌、　今本大伴女郎とあるは誤なり大伴郎女は前にいへりこゝは歌の左の注にて其よし明白なれば坂上の二字を補へり又賜と有は贈の誤玄るかれば改つ

嬬嫗等之、珠篋有、玉櫛乃、　玉櫛とは釵子なり古は男の五百津爪櫛などに玉を飾れり其の如く釵子にも玉を飾れり則そを玉櫛とはいひしなり

神家武毛、　諸成云かの玉櫛はよそほふ具なれば背とさたまへる男のこざらんにはうちすてゝもおくべくさればかみさびとはいへり君なくばなに身かざらんなどよめるをおもへ今本にめづらしけんとよめるは歌の意にも神と書けるにもかなはざればあらためつこゝはやごとなき御說によりてかくはいへり

妹爾阿波受有者、」

好渡、人者年母、有云乎、　(卷三)に年渡麻呂爾毛人者、有云乎、何時之間曾、吾戀爾來、とて己母理久乃、始瀨之河之、上瀨爾、てふ歌の反歌とて今本に擧しは全此歌なりかく歌主もさだかなる歌なれば撰に入べきならずそこに眞淵委いへる如く後人のわざならめさてもとの句は織女をおもひてよめるなりけん

何時間曾毛、吾戀爾來、」

蒸被、　むかしふすまは綿入たるあつぶすまをいふ事既にいつ

奈胡也我下丹、雖臥、與妹不宿者、肌之寒霜、」

○大伴坂上郎女和歌、　こも今本には大伴郎女とのみせり

狹穗河乃、小石踐渡、　【小石はさしと一に訓歟下にも石をしの假字に用ゐたり】

夜干玉之、　冠辭

黑馬之來夜者、　久呂の約古なれば小馬の義に取て冠辭よりつゞけたり

年爾母有糠、」　こゝも今本穅とせり

千鳥鳴、佐保乃河瀨之、小浪、止時毛無、吾戀爾、　此爾はそへたるのみすてゝ心得べし【戀爾與人按に此所はかへるてにをはにて切る所なりかへりて心得るなり只そへたるのみにあらず】

將來云毛、不來時有乎、不來云乎、將來常者不待、不來云物乎、」

千鳥鳴、佐保乃河門乃、瀬乎廣彌、打橋渡須、奈我來跡念者、」

右郎女者、佐保大納言卿之女也、　卿は大伴宿禰麻呂卿なり女は家持卿の叔母にて又姑なり初嫁二一品穂積皇子一被寵無儔而皇子薨之後、　紀(文武元正)知太政官事、紀に(元正)靈龜九年七月薨と見

時藤原麻呂大夫嫂二之郎女一焉郎女家二於坂上里一仍族氏號曰二坂上郎女一也

○又大伴坂上郎女歌、　こゝに又云云と有もて前大伴郎女と有は誤るとしるし契冲は先の歌の連にて又贈麻呂卿歟と云り玄か云までもなく又よしもかけるにて著し佐保河乃、涯之官能、　(卷七)に山のつかさ(卷十七)に野づかさすべて高き所をいふ

小歴木莫苅焉、　契冲はちいさきくぬぎは玄ばにこる故に心を得て玄ばとよみしか紀(景行)歴木と書てくぬぎとよめりと云り案るにすこし年經て苅て燒ばかりなる意もてかく書るならん今本焉を專に誤る

在乍毛、　專に木のありたらばなり

張之來者、立隱金、」

○天皇賜二海上女王一御製歌、　例によりて製を補女王は續紀(元正)養老從四位下同紀(聖武)神龜元年從三位と見ゆ

赤駒之、越馬棚之、　馬棚はませの事を云卽馬せきにて埒なり馬場にひをりと云も則此事にて引折の意長くこれをゆふなり今獸など入る物ををりといふに同じ

緘結師、　契冲がこゝの意を馬棚をよく〳〵結かためたれば放れやせんとの心づかひする事なきが如く同じ心に契りおきつればふた心あらんかと疑はしくもおはせぬなりといひしはよし

妹情者、疑毛奈思、」

今本こゝに右今案此歌擬古之作也但以二往當便一賜二斯歌一歟と有は後人の書加し書體天皇の御製を論ふにはゐやなきなりいとつたなく家持卿の筆ならず契冲かこを取立て云はよしなし

○海上女王奉和歌、

梓弓、爪引夜音之、　隨身夜の陣にて鳴弦するを序として右の如き御製歌を遠くも聞えさせ給ふをよろこび奉り給ひて和たまふなり

遠音爾毛、　遠音は遠きおとながらもなり

君之御事乎、　上の言の意によるに今本に御幸と有は誤なり御幸の事にしては聞えず事の書の消しを見誤れるなるべし事は借字言なり

聞之好毛、」

○大伴宿奈麻呂宿禰歌、　養老三年備後守正五位下管安藝周防二國此時其國より女を貢しむる時によめるなり

打日指、　冠辭

宮爾行兒乎、眞悲見　ふるく云んとて眞とはそへつ

留者苦、聽去者爲便無、」

難波方、鹽干之名凝、　波凝を約いふ言なり言の解は荒良言に云

飽左右二、人之見兒乎、吾四乏毛、」　旅行道の人もあくまでに見るを見たらほしみすと云

○安貴王歌並短歌、

遠嬬、此間不在者、　玉桙之、　冠辭

道乎多遠見、　多は發語なり

思空、安莫國、嘆虛、不安物乎、水空往、雲爾毛欲茂、

今本茂を成とす假字によて改

高飛、鳥爾毛欲茂、　こゝの茂も上に同

明日去而、於妹言問、爲吾、妹毛事無、　今本事事無とあは事一字衍なりおもふに此句妹毛事問爲吾妹毛事無とありしを脫せるならん

爲妹、吾毛事無久、　こゝも五言一句落しならんか此體の例も有

今裳見如、　此言卷へ既出そこにくはし

副而毛欲得、」

反歌

敷細乃、　冠辭

手枕不纏、間置而、年曾經來、不相念者、」　意明なり

右安貴王娶二因幡八上采女一係念極甚愛情尤盛於時勅斷二不敬之罪一退二却本鄕一焉于是玉意悼怛聊作此歌也、

○門部王戀歌、

飫宇之海之、　出雲國意宇郡のならんか出雲風土記に大海宮松崎てふ所有又意保美濱てふも有こは出雲郡意保美神社(式にみゆ)と同所ならんされど皆意保の假字にてこゝに云とは他し所ならんとおぼゆ

鹽干乃滷之、　片といはん序

片念爾、思哉將去、道之永手乎、」

右門部王任二出雲守一時娶二部内娘子一也未有幾時既絶二往來一累月之後更越二愛心一仍作二此歌一贈二致娘子一、

○高田女王贈二今城王一歌、

事清、　苦毛莫言、　一日太爾、　君伊去坐者、　今君伊之哭者と有之は去にて哭は一本莫とあるもともに誤ならん歌の意も不通改るよし下にいふ【君伊之哭者一本君伊之莫者奥人按にともに右の如可レ訓レ歌之は字書に往也と見え哭莫共になくと訓はなのかなに可用をよみを假字に遣ふには下を取例なれど此なくなきなどの下のかなは辭なれば下は取べからす既哭を補のかなとせしも有は理同じ】

痛寸取所物、」　今本痛寸取物と有ていたきずぞもと訓たれど所の字なくては玄かはよみがたし例によりて補へり○此歌今本の歌なみ三首めの歌に同じく吾はさのみか、さじとおもふ心よりよめるなるべしさて歌の意は人のいはん時清く玄からずとないひあらそひそそれにさへられて君が一日とこゝをかへりいにまさば苦しからんと云なるべし次に此四首めの歌ありてけさのわかれといふなるべければいよ〳〵此歌の意きこゆめれさればわたくしの集とて歌のなみもきゝしまゝに書るにて前玄りへになりぬと見ゆれば歌毎に試になみを玄るしぬ

他辭乎、　繁言痛、　不相有寸、　心在如、　莫思吾背、」（卷五）人言乎繁三毛人髮我兄子乎目者雖見相因毛無と有に似たりさて此歌は二首めなるべし

吾背子師、　遂當云者、　人事者、　繁有登毛、　出而相麻志呼、」　此歌は始の歌なり六首同じ度に贈りしにあらず末の歌にて其よし明なり前云如前後なり

吾背子爾、　復者不相香常、　思墓、　今朝別之、　爲便無有都流、　またあはじとおもへるほどの別までによし有しをせんすべなくおもひておくれり

現世爾波、　人事繁、　來生爾毛　將相吾背子、　今不有十方、」　常不正、　通之君我、　使不來、　今者不相跡、　絶多比奴良思、」　多由萬牟多由牟とも云如く未行と波の半濁にも通せていへばたゆみ及らんといふに同じ

○神龜元年十月幸二紀伊國一之時爲レ贈二從駕人一所レ誂二娘子一笠朝臣金村作歌幷短歌、

天皇之、　行幸乃隨意、　物部乃、　冠辭

八十伴雄與、　從駕のもの、ふと共になり

出去之、愛夫者、天翔哉、　冠辭

輕路從、　玉田次、　冠辭

畝火乎見管、　麻裳吉、　冠辭

木道爾入立、　眞土山、　紀の川をこゆれば眞土山なり紀の路の入口なり背山につゞけり今も眞土峠といふ

越良武公者、　黄葉乃、　散飛見管、　親、　吾者不念、　むつまじむべき吾をといふ

草枕、　冠辭

客乎便宜常、　よすがは與須留稗を略き約めたる言にて旅を云よせぐさとして吾とかくわかれて居給ふならんといふなり

思乍、　公將有跡、　安蘇蘇二破、　あさ〳〵を略きいふ久久をひさ、といふが如しこを或人うす〳〵といふはたがへるなり

且者雖知、　之加須我爾、　默然得不在者、　吾背子之、　往乃萬萬、　將追跡者、　千遍雖念、　手婦女、　吾身之有者、　道守之、　關守山守など云に同

將問答乎、　言將遣、　爲便乎不知跡、　立而爪衝、」　そば立て望さまなり

反歌

後居而、　戀乍不有者、　木國乃、　妹背乃山爾、　有益物乎、」

吾背子之、　跡履求、　追去者、　木乃關守、　伊將留鴨、」

○二年三月幸二三香ノ原ノ離宮一之時笠朝臣金村得二娘子一作歌幷短歌、

三香之原、　客之屋取爾、　珠桙乃、　冠辭

道能去相爾、　天雲之、　外耳見管、　此下に闇夜爾鳴奈鶴之外耳聞乍可將自相跡羽奈之爾と云に同じ

言將問、　緣乃無者、　情耳、　咽乍有爾、　天地、神祇辭因而、　敷細乃、　冠辭

衣手易而、　かへての倍は波勢の約にて加波せてにてかはしてと云なり

自妻跡、　憑有今夜、　秋ノ夜之、　春のみじか夜なれば一しほに秋のながき夜をほりおもふなり

百夜乃長、　有乞宿鴨、」　今本乞を與として阿留與宿鴨とよめるはいとも誤れり乞を與に誤る事は前にいふが如し宿は奴の假字に借たるのみ集中の例もて改

反歌

天雲之、　外從見、　吾妹兒爾、　心毛身副、　吾心に身さへによるといふなりさへのことばにてふかくおもへるを玄らる

緣西鬼尾、」 此ものの一言に契冲か説おなし又齊悼息王世家を引てさま〳〵いふはいまだし鬼はもの又しこと訓は常なり既にも出

今夜之、早開者、 たゞあけばの意なるを計を延ていふなり

爲便乎無三、 秋百夜乎、願鶴鴨、」 今本禰我比都留と訓たるはさもあるべけれどこはのちなり本の句の訓によりてあらためぬ【禰きにとにの詞をそへむよりは有こせのま、禰がひとよむぞあきらかなる】

○五年太宰少貳石川足人朝臣遷任餞于筑前國蘆城驛家歌、

天地之、神毛助與、草枕、 冠辭

羈行君之、至家左右、」

大船之、念憑師、君之去者、吾者將戀名、直相左右二、」 大船の如あやうからでゆたかにたのめりし君が他し國に行給ひなば吾は戀てのみあらんたゞしく君にあふまではと云なりたゞは布を裏けるなり

山跡道之、 島乃浦迴爾、 前にあまた出橋の島なるべし

緣浪、間無牟、吾戀卷者、 上の浦を裏の意にとりて戀る心によせたりか、る所に浦といふ例は三吉野の瀧のうらともゝ磯のうらともいへり又心をうらといふ事すてに出たり

右三首作者未詳、

○大伴宿禰三依歌、 續記(廢帝)御依と有

吾君者、和氣乎波死常、 和氣は吾といひ吾といふ事卷八卷十二にいへり

念可毛、相夜不相夜、二走良武、」 卷八と此卷の末に世とありてふたゆくとあるは世の中を云なれば空蟬乃代とさへいへりこゝは逢夜不逢夜といひて二行といへば他妻に通ふをうらみていへるなり

○丹生女王贈太宰帥大伴卿歌、

天雲乃、遠隔乃極、 卷十一にもいふ如く野の退山の退といふに同じ

遠鷄跡裳、 鷄は加禮の約にてとほかれどもなり

情志行者、戀物可聞、」 遠ききはみの國なれど吾心はそこに行けばにや君をまのあたり見る如くこふるものかなと云

古、人乃令食有、吉備能酒、 契冲云今稱備後宇惠酒有旨酒按に備後筑前はいと近し故にこれをいふかといへり是なるべし陶淵明か黍酒の事あれど吾國にはなしされど大伴卿の歌に晉の七賢の事もあればこゝも古人とは淵明をさしていふならんかさてはよくかなへり扨吉備はかり字黍と心得べし【或人云この比火の國の人のいへるを聞に彼國にて黍もて作酒あり然は吾國にはなしとはいひがたしといふもあれど諸成案るに後の世には唐にて作る物何物もうつしなせり奈良朝の比然はあらじかし】

痛者爲便無、 やもはゞの毛波の約末にてやまばとの給ふなり酒のみてやまひせばせんすべなしとなりさてかくのたまへるはさしもふかくちぎりなせる中なりしに此卿かれ行心になれをおくたとへよみ給へるか前の歌をおもふにさもなくてはこの歌あまりにゆくりかなるさまに見ゆ

貫賀贈牟、 貫賀は延喜主殿式に三年一請一枚伊勢物語にぬきすをうちやりて又うつぼ物語に銀の御たらひにちんをまろにけづりたるぬきすなどありたらひの中に置水のはねざる料にまうくる物なり今本贈を賜とするは誤なり歌によりて字をあらたむ

○大宰帥大伴卿贈大貳丹比縣守卿 今本縣を紐とするは誤なり此卿は續紀(元正)にくはしく見ゆ左大臣正二位烏公の子なり

遷任民部卿歌、

爲君、釀之待酒、 かみしはかびしにて麹の事そはやがてかびたちなり且酒はもとかみて作る物なれば合せてかみしとは云なり【待酒は紀(神功)に見えたり】

安野爾、 筑前國夜須郡の野なり紀(神功)之年至曆增岐野 卽擧兵擊羽白熊鷲而滅之云云我心則安故號其處曰安也とみえたり

獨哉將飲、友無二思手、」

○賀茂女王 此女王の事卷十二に云

贈大伴宿禰三依歌、

筑紫船、未毛不來者、 今本にまだもこざればとよみしはいまだしこゝはこぬにてふてにをはなればかくよむべし

豫、 今本にはあらかじめと訓は意とほらずさて隔句なれば五句上におきて心得べし

荒振公乎、 遠き筑紫の任に久しくありへてひなびあらぶりやつれし姿をなり

見之悲左、」 此歌は下に吾妹兒者常世國爾任家良思昔見

依變若益爾家利と三依の作りを打返して心得べし

○土師宿禰水通、　土師宿禰は野見宿禰ノ末也土師とは波母の爾を略き志は奈志の奈を略たるにて波丹奈志を略て云垂仁の御宇に此姓を給へり

從二筑紫一上京海路作歌、

大船乎、　榜乃進爾、　今本須々美爾と訓しは今少後なり

磐爾觸、　今本布禮とあるは言たらず歌の意もとほらず利は禮利の約にて言と、のひ意もとほれるを思へ

覆者覆、　くつがへらばかへれなり妹戀しらの餘をいふ

妹爾因而者、」　而は豆阿良を約轉じて云なり

千磐破、　冠辭

神之社爾、　我掛師、　幣者將賜、　妹爾不相國、」　前と同じ意にてよめる歟浪風あらく渡りも得じとおもへる時によめるか

○大宰大監大伴宿禰百代戀歌、

事毛無、　生來之物乎、　老奈美爾、　老並にて老行年次を云

如此戀于毛、　于は於を爾に用ゐしが如し

吾者遇流香聞、」

孤悲死牟、後者何爲牟、生日之、爲社妹乎、欲見爲禮、」

不念乎、思當云者、大野有、　筑前國三笠郡

三笠社之、神思知三、」　今本かみしゑるらみとよめるは何の事もなしこはおもふ心は神ぞしらしめさんてふ意なればかく訓べし

無暇、人之眉根乎、徒、令掻乍、　此言は諺なるよし

上にいふ

不相妹可聞、」

○大伴坂上郎女歌

黑髮二、白髮交、至者、如是有戀庭、未相爾、」

山菅乃、　冠辭

實不成事乎、吾爾所依、　なき名の吾取たちてなり意をゑらせて所依と書も例なり

言禮師君者、與孰可宿良牟、」

○賀茂ノ女王歌、

大伴乃、見津跡者不云、　此いひかけはいとも後の世ぶりかゝるをよしとうつろひぬらん

赤根指、照有月夜爾、直相在登聞、」

○太宰大監大伴宿禰百代等贈二驛使一歌、

草枕、　冠辭

羈行君乎、愛見、　今本うつくしみと訓るはかなはず聞ゆ

副而曾來四、鹿乃濱邊乎、」　筑前國の地名既出遠くおくりてよめるなり

右一首大監大伴宿禰百代、

周防在、　周防は長門安藝の間より南の海へさし出たる國なりさて信濃の諏訪も湖にさし出たる所なりともに洲濱の意歟諸國の中に周防と伯耆ばかり字の用さまのことなるはなしとかくにはうと訓は後のさたか和名抄に伯耆(波々岐)周防(須波宇)とあるもおぼつかなし

磐國山乎、將超日者、手向好爲與、荒其道、」

右一首少典山口忌寸若麻呂、

以芹天平二年庚午夏六月帥大伴ノ卿忽生瘡脚疾苦枕席因此馳驛上奏望二請庶弟稻公姪胡麻呂一欲レ語二遺言一者　勅　右兵庫助大伴ノ宿禰稻公　紀(聖武)に從五位上因幡守紀(孝謙)正五位下兵部大輔但紀には公を君とせり

治部少丞大伴宿禰胡麻呂兩人給驛發遣令レ看卿病而遲數旬幸得平復于時稻公等以病既療發府上京於是大監大伴ノ宿禰百代少典山口忌寸若麻呂及卿男家持等相送二驛使一共到二夷守驛家一聊飲悲別乃作二此歌一

○太宰帥大伴ノ卿被レ任大納言一臨入京之時府官人等餞二卿筑前國蘆城驛家一歌、

三埼廻之、磯荒爾緣、五百重浪、立毛居毛、我念流吉美、」

右一首筑前掾門部連石足、

辛人之、衣染云、紫之、　初句今本に辛人とあれば唐人の事ならめど若は齋の草か章の草の畫消しを見誤たるか紫にて衣染るは三位以上の人なればゑかいふべしされは淑人にてよき人のとよむべし

情爾染而、所念鴨、」

山跡邊、君之立日乃、近者、野立鹿毛、動而曾鳴、」

右二首大典麻田連陽春、　みはるとよまんかと有も云かなるべけれど既此人みはるとよまんかと訓しに云たがふ

月夜吉、河音清之、率此間、　今本率を卒に誤一本によりてあらたむ

行毛不去毛、遊而將歸、」

右防人佑大伴四綱、　防人佑は正八位上なり今本佑を佐に誤一本によて改

○太宰帥大伴卿上京之後沙彌滿誓贈卿歌、

眞十鏡、見不飽君爾、所贈哉、　贈は此比に下りて借字ならん

旦夕爾、在備乍將居、」　諸成案に佐備は淋に通淋の志を畧きいふにて曾叙呂和備志を約たる言なり委は荒良言に云

野干玉之、　冠辭

黑髮變、白髮手裳、　こは玄ろけと云にあらずこは玄ろくさめを約し言にて別なりこゝの玄らけは玄らかの事をいふ故に白髮とはなるなり

痛戀庭、相時有來、」

○大納言大伴卿和歌、

此間在而、筑紫也何處、白雲乃、棚引山之、萬西有良志、」

草香江之、入江二求食、蘆鶴乃、　たづ〳〵しといはん序なり卷十に委し

痛多豆多頭思、友無二指天、」　此歌の草香江を筑前にありと云は此和を筑紫にての事なりと思へるよりひが說をいふなり河內國草香江なり此卿歸京の後こたへ給へるなれば近きわたりの地名もてつゞけ給へるなり

○太宰帥大伴卿上京之後筑後守葛井連大成、　續紀（聖武）神龜五年に此人正六位上奉授外從五位下此氏の事孝德紀桓武紀等に委く見ゆ

悲嘆作歌、

從今者、城山道者、不樂牟、　城山は筑前國下座郡既にいづ

吾將通常、　帥卿のもとへなり

念之物乎、」

○大納言大伴卿　新　袍　贈一　一本には此贈新の上に在り

攝津大夫高安王二歌、

吾衣、人莫著曾、網引爲、難波壯士乃、手爾者雖觸、」

契沖も吾心させる衣なればゆめ〳〵他し人にきせ給ひそ心にかなはずばそのわたりの賤男にたびてそが手にはふれさすともといへり玄たしみて謙退せるなりといへり玄かならんか諸成案るにきするもえさするも同じことわりなるをおもふに此なには男とは王をさしてよみ給へるならん麻續王をも海人なるやともよみつ此王かく賤官にておはすべきならぬ人の官途の昇進もなく貧くおはせるをいたみて新袍をおくらるゝなれば着給へと申もなめげなれど人になきせ給ひそ御手にのみふれ給ふともとよみ給ひしにてはなきか此王は王孫ながらも國官なればいやし卿は二位の大納言なれば世々臣なれどいと貴し玄かればたゞにもをとこ共の給ふべしされども歌なればなぞらへみやびておほらかになにはをとことはよみ給ふべし

○大伴宿禰三依悲別歌、

天地與、共久、住波牟等、念而有師、家之庭羽裳、」　古今歌集に「水くきの岡のやかたに妹とわれねての朝けの霜のふりはも」はもは更にたづね向ふ心なり此歌太宰府などの家をわかるゝ時の歌にや（卷二）「天地とともにをへんと思ひつゝつかへまつりし心たがひぬ」とよめるに似たりかくあるもさる事ながら諸成案るに末の庭羽といへるにて裳は添たるのみさてこは自の家を出て國官などの任におもむく別の歌にや太宰府の官なりとも任限あるはもとよりなるに其地と共に住んとはいはじ誰も遠きに在ては古鄕をこそ戀思ふべけれ此比心におもはぬ事はよむまじかればなり

○金明軍與二大伴宿禰家持一歌、

奉見而、未時太爾、不更者、　例のかはらぬにといふなり

如年月、所念君、」

足引乃、　冠辭

山爾生有、菅根乃、懃見卷、欲君可聞、」

○大伴坂上家之大娘報二贈大伴宿禰家持一歌、

生而有者、見卷毛不知、何知毛、　生てありては逢見る事も玄らねば何しにかくてあらんとなり

將死妹常、夢所見鶴、」　古今歌集に「命やは何ぞは露のあだものをあふにしあへはさもあらばあれ」後ながら似たるなり

丈夫毛、如此戀家流乎、　前の歌の言をうけて丈夫すら死んとまで戀けるをと夢見しをいふなり

幼婦之、戀情爾、比有目八方、」　比有目をならべらめと今本によみしはいまだし

月草之、　冠辭

從安久、念可母、　既云如くへは婆米の約なり

我念人之、事毛告不來、」　事は言なり

春日山、朝立雲之、不居日無、見卷之欲寸、君毛有鴨、」

後ながら新撰萬葉に伎美爾麻流鴨と二首假字あり玄かればこゝはいよ〳〵かく訓べし【君毛有と字あるを爾を加へて訓さへ有に毛を萬に轉しよまん例いかゞある

べき君にもあるかもと字のまゝに爾を加へてよみなんかと諸成はおもへり】

○大伴坂上郎女歌、

出而將去、時之波將有乎、故、妻戀爲乍、立而可去哉、」

旅立ときなどによめるか出て行べき時こそあらめ今吾を戀おもふてふに遠く出たつべきならずと云なり

○大伴宿禰稻公贈二田村大嬢一歌、

不相見者、不戀有益乎、妹乎見而、本名如此耳、　契冲云本と由と義同じ由無なり既云如く本は故由と同じもとなきはむなしきとてよしなきなり「諸成案にかく解るにて唐字の義はいかにも明かなりされど唐字なき古へかく解れんや玄かれば是を吾國の言を解とは云べからずさて毛刀とは毛は萬穂の約刀は都古の約卽唐字に充れは眞穂に著てふ言なりされど今言をわすれたる世に解といへばかくもいふなり上の代にはまほにつくてふ言の自らにかくいはるゝが吾國ぶりなり歌の意を此言もていはゞ妹を見ずばこひもせじ見てまほにつく心のまゝなる事なし玄かるにかく戀つゝあらば末はいかがせんと云なり

戀者奈何將爲、」

今本右一首姉坂上郎女作とある首は云の誤字にて一云なるべしと云もあれど家持卿の庶叔父の歌を聞れたるをはし詞もたゞしく書て又自かゝる疑をかゝるべきいはれなし後人のさかしらなる事玄るかればすてつ

○笠郎女贈二大伴宿禰家持一歌、

吾形見、見管之努波世、荒珠、　冠辭

年之緒長、吾毛將思、」

白鳥、　冠辭

飛羽山松之、　大和の地名待といはん序

待乍曾、吾戀度、此月比乎、」

衣手乎、　冠辭

打廻乃里爾、有吾乎、不知曾人者、待跡不來家留、」

荒玉、　冠辭

年之經去者、今師波登、　師は助字今はとのみいふなり

勤與吾背子、吾名告爲莫、」　今本都解須とあるは例もなし都具ならばつぐるなどこそいはめ

吾念乎、人爾令知哉、玉匣、　冠辭

開阿氣津跡、夢西所見、」　見えぬるの留を略けり歌の意はさしもふかく契てかたみにおもふ心は人に玄らさゞりしを人にも玄らし給ふやひらきあけてのたまふと夢見しといふなり

闇夜爾、鳴奈流鶴之、　この言迄はよそといはん序ながらあはでふるなげきをひゞかせたり

外耳、聞乍可將有、相跡羽奈之爾、」

君爾戀、痛毛爲便無見、楢山之、小松下爾、　今本小松がしたとよめり玄かよむべき事もとよりながら小松といはんからにたちよるばかりのかげなるはいはじ玄かれば其松がもとべにたちてなげきしをいふなればもと訓べしさて此頃のつゞけからなればには來松は待を思ひよせしなるべし玄からでは小松をとりたてゝいふべくもなし

立嘆鶴、」　今本鳴と有一本によりぬ

吾屋戸之、暮陰草乃、　ひとつの草の名をいふにあらず山陰草共云如く夕べの陰さす草をいふなり

白露之、　如を入て心得べし

消蟹本名、　けぬかにはきえぬからにを約て云加良約加なれば加爾といふなりもとなは既委くいふ

所念鳴、」

吾命之、將全幸限、　今本またけんと訓しは字に泥ていまだしまさきからんてふ意もてかければかく訓べし

忘目八、彌日異者、　諸成案に此異は古刀の約古なるを計に通しいふなれば義もては異とはかりて書るなれば此異假字ならず玄からば爾をそへても訓べし下是にならへ

念益十方、」

八百日往、濱之沙毛、吾戀二、豈不益歟、　契冲は豈の下の不を衍字といへり又吾ともがらのいふに可の誤るとすれどかくては歟をつよく見しならん歟はかるく見て字のまゝに訓ぞ玄からん

奥島守、」　契冲は奥津島姫の事なりといふそれまでもなく野守山守と同じと中良か云るぞよし

宇都蟬之、　冠辭

人目乎繁見、石走、　冠辭

間近君爾、戀度可聞、」

戀爾毛曾、人者死爲、水瀨河、下從吾痩、　水よりは底の意にかゝりうくる辭にては人玄れず吾やすると云なり

月日異、」　古今歌集に友則「ことに出ていはぬばかりぞみなせ川下にかよひてこひしきものを」三四の句つゞ

けから似たり

朝霧之、　冠辭考にはもれたれど朝霧のおもひまどひてふも朝霧は深立ものにて物の見まどはるゝをいふなればこも深立ておほろかなるよりいふなれば冠辭と云べし

薮相見之、人故爾、命可死、戀度鴨、」

伊勢海之、磯毛動爾、因流浪、　かしこきといはん序とせるなり

恐人爾、　かしこきはたふときなり

戀渡鴨、」

從情毛、　まことにおもはぬてふいひなしなり

吾者不念寸、山河毛、隔莫國、如是戀常羽、」

暮去者、物念益、見之人之、言問爲形、今本にこと、ひしと訓しは僻事なり爲は過去のしにはなしがたかれば也

面景爲而、」

念西、死爲物爾、有麻世波、千遍曾吾者、死變益、」

劒太刀、　冠辭

身爾取副常、夢見津、何如之怪曾毛、　今本左刀志とよめるは似たる事にて左からずこゝは左我と訓べし夢の祥をいふなればなり

君爾相爲、」

天地之、神理、無者社、　いのりてことわりなくばなり後ながら源氏明石の卷に何のむくひにか云云波風におぼれたまはん天地ことわり給へとかきしことわりもこと同じ

吾念君爾、　二の句神もこゝをおもふと今本によめり神もてふ意にあらずこゝも此頃迄はおは略例さるに例にたがひて八言によむべからねば改つ

不相死爲目、」　こゝをも今本にあはずとよめるは字になづめるなり例によりてあらためつ

吾毛念、人毛莫忘、多奈和丹、　諸成案に於保奈和爾の奈は爾多の約にて於保爾多和爾てふ言を約めいふなり則凡爾橈にの意にて凡に多和多和にやまず吹うら風をいふなり

浦吹風之、　如を入て心得べし

止時無有、」

皆人乎、宿興殿金者、　宿興鐘は亥の時なり式に（延喜陰陽寮）諸時擊鼓子午各九下丑未八下寅申七下卯酉六下辰戌五下己亥四下並鐘依刻數、又紀（天武）逮二人定一大地震云云すべて紀に日沒酉時昏時戌時とよめるも宿與に同じ

打禮杼、君乎之念者、寢不勝鴨、」　今本いねがてにかもとよみたるは言たらず我君奴の君は禰に通ひていねかねぬるかもといふ言なるをおもへ

不相念、人乎思者、大寺之、餓鬼之後爾、額衝如、」　佛にむかひて禮拜するは益あり餓鬼の去かも後に物せんは詮なしおもはぬ人をおもふにたとへたるなり

從情毛、我者不念寸、　今本にわれはおもはずとあるは寸の字餘れり寸は家利の約なればかく訓べし

又更、吾故郷爾、將還來者、」　此歌は上のうちはの郷より故郷にかへりきてよめる歟

近有者、雖不見在乎、　あらるゝをの意なり

彌遠、君之伊座者、　今本いましなばとあるはいまだし

有不勝目、」　今本目を自としてありてもたへじとよめるは誤なり【我君の君は前に同し麻志の約美なり其美は牟に通ひて有我君牟と云例なり目はそへて云のみ】

右二首相別後更來贈、

○大伴宿禰家持和歌、

今更、妹爾將相八跡、念可聞、　此於毛倍の倍も波米の約におもはめかもといふなり

幾許吾胸、欝悒將有、」

中中煮、　今本煮を者に誤る

默毛有益呼、何爲跡香、相見始兼、不遂等、」　此末の句何によれるにや拾穗抄には等を爾とせり今本にはとけざらなくにと訓たれど去かよむべからねば改

○山口女王贈二大伴宿禰家持一歌、

物念跡、久爾不見常、　今本見せじとあるは後の俗言なりよて改つ

奈麻強、　今の俗のいふに同しなま〳〵に強て物するなり

常念弊利、　おもへればと云なり

在曾金津流、」

不相念、人乎也本名、白細之、　冠辭

袖漬左右二、哭耳四泣裳、」

吾背子者、不相念跡裳、敷細乃、　冠辭

君之枕者、夢爾見乞、」　此乞を見て上の卷々の與は乞の草とよの草との誤を去れ

劒太刀、　冠辭

名惜雲、吾者無、君爾不相而、年之經禮者、」

從廬邊、滿來鹽乃、彌益荷、念歟君之、　おもへばかを

罌いふ

忘金鶴、」此歌末の句を心をきみにおもひますかなとして伊勢物語の中の一條とせり

○大神郎女、　於保和と訓は大三輪の罌なり

贈二大伴宿禰家持一歌、

狹夜中爾、友喚千鳥、物念跡、和備居時二、鳴乍本名、」

○大伴坂上郎女怨恨歌一首幷短歌、

押照、　冠辭

難波乃菅之、根毛許呂爾、君之聞四乎、　ねもごろに思ふよしを吾にいひ聞えしをなり

年深、　奥深末永く不絶といひしなり（卷十四）昔見舊堤者年深池之瀲爾水草生家里といへる年深とおなじいひなしなり

長四云者、直十鏡、　冠辭

磨情乎、縱手師、　吾心を君にゆるしなびきしと云なり

其日之極、浪之共、靡珠藻乃、云云、意者不持、　くさくさに思はでひたぶるにたのみたりしになり

大船乃、　冠辭

憑有時丹、千磐破、　冠辭

神哉將離、　おもひたのめし神の守りやかれしといふ

空蟬乃、　冠辭

人歟禁良武、　神哉將離をかれなんこゝをば伊牟良牟と今本によみしはいまだしさふらんはさへるらんと云なり

通爲、　是も今本にかよひせしと訓は僻事なり

君毛不來座、玉梓之、　こをおとづれとよまんかといふもあれど卷二に委云如くなればえからず

使母不所見、成奴禮婆、痛毛爲便無三、夜干玉乃、　冠辭

夜者須我良爾、赤羅引、　冠辭

日母至闇、雖嘆、知師乎無三、　六言

雖念、田付乎白二、幼婦常、言雲知久、手小童之、むだしはかりの兒をいふ之は如を入て心得べし

哭耳泣管、徘徊、君之使乎、待八兼手六、」

反歌

從元、長謂管、不令恃者、　今本令を念とするは誤なり如是念二、相益物歟、」

○西海道節度使判官佐伯宿禰東人妻贈二夫君一歌、

續紀（聖武）天平四年八月節度使云云佐伯宿禰東人從五位下無間、戀爾可有牟、　夫の君が戀るなり

草枕、　冠辭

客有公之、夢爾之所見、」

佐伯東人和歌、

草枕、　冠辭

客爾久、成宿者、　奈利の利は禮伎の約にてなれきぬればなり

汝乎社念、莫戀吾妹、」

○池邊王宴二詠歌、　此王は紀（聖武）神龜四年正月無位池邊王授從五位下爲内匠頭大友皇子之孫葛野王之子と見えたり

松之葉爾、月者由移去、　由と宇と言を通しいふ例既に出たり

黄葉乃、　冠辭

遇哉君之、不相夜多馬、」　今本馬を鳥に誤る歌の意は松の葉に待を兼其松は木高かればうつれる月の高く遠きをおもひ黄葉の冠辭に時過行ぬといひかけて逢ふ事のたえて久しきをなげくなり

○天皇（聖武）思二酒人女王一御製歌、　此女王傳未詳

道相而、咲之柄爾、零雪乃、消者消香二、　香は疑の歟なりこはそへたるのみ

戀云吾妹、　天皇の大御自に戀といへとなり

○高安王裹鮒贈二娘子一歌、

奥幣往、邊去伊麻夜、爲妹、吾漁有、藻臥束鮒、」　束鮒とは一つかね斗なる小鮒をいふ今も藻などの中にあつまれる小鮒ありされば藻臥とはいふなり其藻臥とは源氏常夏に加茂川の石臥と云が如し石臥は今いふだもはせの類ひなり石に臥故なり和名に鰛（伊師布之）と云は別なるか

○八代女王獻二天皇一歌、　紀（孝謙）に見ゆ又矢代とも有此天皇は聖武ならんか

君爾因、言之繁乎、古郷之、明日香乃河爾、潔身爲去、」

天皇のみおぼしのおはしませしか此女王の戀奉るをか、人言えげかりしを后宮などの御ねたみありて明日香の古郷にさけ給ひしか、さけられませし時よみ給へるならん

一本に云龍田超、三津之濱邊爾、潔身四二由久とあり今本の方えらべもまさりて聞ゆれば今本によれり

○娘子贈二佐伯宿禰赤麻呂一歌、　今本贈の上に報あるは

衍字歟此前に赤麻呂の歌落たりともなし
吾手本、將卷跡念牟、丈夫者、　今本丈を大に誤る
戀水定、白髮生二有、」
○佐伯宿禰赤麻呂和歌、
白髮生流、事者不念、戀水者、鹿煮藻闕二毛、定而將行、」
今本に求而とありてさだめてゆかんとよめり拾穗には定とせり前の歌によりてあらためつ持行ゆかんと有も例なれど又の例によれり
○大伴四綱宴席歌、
奈何鹿、使之來流、　故よしをことわる使はなに、かせんとなり
君乎社、左右裳、待難爲禮、」
○佐伯宿禰赤麻呂歌、
初花之、可散物乎、人事乃、繁爾因而、止息此者、」　散初花をおもふ妹にたとへたり人言の去げきにいこひて行すあらばちりなん物をとなり
○湯原王贈二娘子一歌、
宇波能無、　仙覺は上なきを延ていふといへれど去からず遠江の人うべくもなきといふは人情なきを云よくかなへり下の歌に得羽重無妹二毛有鴨とあるも限もなきかな人はと歎きたる言なるをおもへ諸成案に重は波衣の約にて上榮なきものかなといふにて心榮なかるをなげくならんとおもはる
物可聞人者、然計、遠家路乎、　かく遠道を戀て去ぬびこしをと云
令還念者、」
目二破見而、手二破不所取、月內之、楓如、妹乎奈何責、」
今本にはこをいかにせんとよみたれど諸成案に責は世米の米と牟と言通へば去かも訓べかれど責をかりたればやすらかに字のまゝに世米とこそよむべけれ
○娘子報贈歌、　始二首はまたうべなはぬほどなりこゆ下はあひての後ならん
幾許、思異目鴨、敷細之、　冠辭
枕不去、　今本片去とあるは意とほらず(卷九)多陀爾阿波須、阿良久毛於保久、志岐多閉乃、枕佐良受提、伊米爾之美延牟とあるによりて不にあらためつ
夢所見來之、」
家二四手、雖見不飽乎、草枕、　冠辭
客毛妻與、　夫と共にあるがと云
有之乏左、」　注に維率有とあればともに行ながら旅屋を隔てあるを見たらまほしむなり
○湯原王亦贈歌、
草枕、　冠辭
客者孀者、雖率有、　今本率とするは僻事なり
匣內之、珠社所念、」　こも隔てあるを匣の內に譬ふ
余衣、形見爾奉、布細之、　冠辭
枕不離、卷而左宿座、」
○娘子復報贈歌、
吾背子之、形見之衣、孀問爾、余身者不離、事不問友、」
歌の意は吾背の形見とておくれる衣はやがて背子がつまどひ來ぬるにひとしかれば身ははなたじものをと云
○湯原王亦贈歌、
直一板、隔之可良爾、荒玉乃、　冠辭
月歟經去跡、心遮、」【遮蔽なり閉なり蓋なり遮遣は思のふさかるをやりすつるにてなぐさむとも訓】今本心遮をおもほゆるかもと訓めりそは義訓なり去かれども遮の字去かよみがたし遮は障切なれば月歟經去ると吾からさゝへ切て隔ておもはるゝを云なれば意通れり
○娘子復報贈歌、
吾背子我、如是戀禮許曾、　戀ふればのばを畧けり
夜干玉能、　冠辭
夢所見管、寐不所宿家禮、」
○湯原王亦贈歌、
波之家也思、不遠里乎、雲居爾也、戀管將居、月毛不經國、」
○娘子復報贈歌、　今本贈の下に和あるは衍字なり
絕當云者、和備染責跡、燒太刀乃、　冠辭
隔付經事者、　【冠辭考に云なるは太刀は鞘を隔て身につけてはく物なるを思ふ人の住里の近けれど隔てあはぬに譬たり隔を畧てへとのみ云事は既に出奥人按につかふの約つなり此つは多津の約故たつなり太刀鞘とは纔ばかりの隔なれはすこしの隔に譬歟】
幸也吾君、」
○湯原王歌、
吾妹兒爾、戀而亂在、　美陀禮々は美陀禮多禮の畧なり在は者の誤歟とする說はあたらず
久流部寸二、　糸をよる具なり和名抄に繰車(久留倍伎)と有

懸而縁與、　今本かけてしよしとよめるはあたらず糸をよるといひかけたるなればなり

余戀始、」

○紀郎女怨恨歌、

世間之、女爾思有者、吾渡、痛背乃河乎、　今本痛背乃河乎と訓り穴師はあれどこをあなせとよまん事よりどころもなく妹背のこと葉ならでは歌に用なしさらば痛は疣の誤ならんか伊凡と伊毛と云通へば疣の字をかりしを痛に誤れるか猶考ふべければ假字のみあらたむ

渡金目八、」

今者吾羽、和備曾四二結類、氣乃緒爾、念師君乎、縦左思者、」　今本縦左をゆるさじとよみしは何のこと、もなし左をさじと訓も例なしこはいのちのをつなと引はりておもひをりし心をゆるめゆるすとおもへばわれはわびぬるといへるなればかくよまであらんや

白妙乃、　冠辭

袖可別、日乎近見、心爾咽飲、哭耳四所泣、」　今本所流とありてながると訓しはわらふべし音のながるゝてふ言あらんや一本によりて改つ

○大伴宿禰駿河麻呂歌、

丈夫之、思和備乍、遍多、嘆久嘆乎、不負物可聞、」　妹が身におもひをおはぬかなり

○大伴坂上郎女歌、

心者、忘日無久、雖念、人之事社、繁君爾阿禮、　今本末の句を字のまゝに訓しはいまだし

○大伴宿禰駿河麻呂歌

不相見而、氣長久成奴、比日者、奈何好去哉、　【好去契沖は去は在の誤として紀に好在と有てさきくはべりとよみしによれりこゝにてはよかるやとよまむ歟】

計久の約久にてよしやと問なりたひらかにあるやと問ことよするなり

言借吾妹、」

○大伴坂上郎女歌、

夏葛之、　夏は葛かつらの這ひろごりて絶ず延つるなればは不絶の序とす

不絶使乃、不通有者、言下有如、　言は事の借字なり

念鶴鴨、」

右坂上郎女者佐保大納言卿女也駿河麻呂者

今本此と有は誤なり

高市大卿之孫也、　高市麻呂の孫道足宿禰の子なり

兩卿兄弟之家女孫、姑姪之族、是以題歌贈答

今本送と有は誤なり

相問起居、

○大伴宿禰三依離後相歡歌、　今本後を復とし歡を歎とするはともに誤なり

吾妹兒者、常世國爾、住家良思、昔見從、變若益爾家利、」

和加衣の衣は也解約解は妓に通ひて和加也妓と云なり

○大伴坂上郎女歌、　已下十一首は此郎女と駿河麻呂贈答の歌と見ゆれば自圈を去るさず

久堅乃、　冠辭

天露霜、　今本の訓はつたなくきこゆ

置二家里、　駿河麻呂國任にありて年經て歸を云ならん

宅有人毛、　此郎女と駿河麻呂の相聞の歌四首前にもあり

丈夫之思和滿とよみ贈り郎女の答に人言の繁き君なれどもとよめればこゝも其意にて駿河麻呂の任より歸りて先とひける折に本妻も待わびなんとよめるなるべし宅有人は本妻をいふなるべし

待戀奴濫、」

玉主爾、　今本玉もりとよめれど主はさはよみがたしやすらかに字のまゝに訓て聞ゆ

珠者授而、　珠とはとる意もていひしなり玉も珠も駿河麻呂を指ていふ主とは本妻をさしていふなり

勝且毛、　此勝且を倦乍の誤といふ説もあれどかゝこきの御説に記(神武)天皇云云御心に知ぬ伊須氣余理比賣命於最前以歌答曰賀都賀都母伊夜佐伎陀豆流延袁斯麻加牟とありて加都賀都は古言なりとのたまはすが如いと古くよりいひしなり諸成案るに此言は加和加都とふ言を約いふなり加和加の約加なり都は一ッ二ッの都に同じくかず又物わかちわかつにいひ入るゝ言なりさて加は既いふごとく唐言に氣と云に同じ花の香人の香の香故人にまれ事にまれ文にまれ其物の香をいふ言なりさればもの〳〵をわかちいふ時其間に且とはあぐなりこも授而とわかちて枕と吾はといふなりけり【奥人按に且ちふ言は伎波和加の約加にて際分なるべし其いひ下す意の際を分て又別ていひ出す時置言なればなりこにては此うへはなどいふ心とせむ歟】

枕與吾者、率二將宿、」　今本率を卒に誤る

○大伴宿禰駿河麻呂歌、

情者、不忘物乎、　儻、　とほま〳〵てふ言を約いふなり多分波の約波は保に同しく保なり則遠の意萬は米和

加の約にて物けの目のわかちあるを萬といふは目の言なりよてとほまを約そを重ねいひてたま〳〵とはいふなり

不見日數多、　今本の訓は俗言なり

月曾經去來、」

相見者、月毛不經爾、戀云者、　今本伊倍婆とよみしは てにをはたがへりよて改

乎曾呂登吾乎、　（卷六）可良須等布、於保乎曾杼里能、麻左低爾毛、伎麻左奴伎美乎、許呂久等曾奈久、といへるも乎と字は同言にて宇曾なりこゝも相見て月へぬに戀といはゞ宇曾といはんとなり呂は良と同言なり

於毛保寒毛、」

不念乎、思常云者、天地之、神祇毛知寒、　今本こゝを志留加爾とよみしはゐやなし志良左牟はゑろしめさんを畧きいふなればたふとむ意かなへり

□□□□、」　かくありしを草の手より見誤しか今本には歌伺名齋

邑禮左變とありてさとれさかはりと訓しを管見抄てふものに神通して僞をもよく悟給ふなりさは助字變は神も人の心に入かはりたるやうにさとれとなり此說を契沖もひきたりかゝる事歌にあるべきかはゆめ〳〵とるべからずよてこゝろみに左の字をそへていふのみ正しき本を得たらん人たゞしてよ

○大伴坂上郎女歌、

吾耳曾、君爾者戀流、吾背子之、戀云事波、言乃名具左曾、」　戀といひて吾をなぐさむのみなりと云なり

不念常、曰手師物乎、翼酢色之、　既出

變安寸、吾意可聞、」

雖念、知倍裳無跡、　今本倍を僧とするは誤なりよて改

知物乎、奈何幾許、　今本などかくばかりとよみたるはかなはず又こゝばくと訓なりとあるも玄からず諸成案に前に湯原王に娘子が報歌に幾許をいくそばくとよめるによれりたゞし波久の波は半濁和の如く唱ふる例による

吾戀渡、」

豫、人事繁、如是有者、四惠也吾背子、奥裳何如荒海藻、」

奥は末をいふ荒海藻を今本にあらもとよみしは海の字あまれり海藻は米の假字によれり

汝乎與吾乎、人曾離奈流、乞吾君、人之中言、聞起名湯目、」　今本末の句をきゝたつなゆめとよめるは何の事ともなし起は辭左行に働てこさんこしこすこせこそと働

けば乞の假字によりたるなり

戀戀而、相有時谷、愛寸、事盡手四、長常念者、」

○市原王歌、

網兒之山、　志摩國安虞郡の山なり安虞の浦同所なり

五百重隱有、佐提乃埼、　左手といはん序なり（卷十五）河口頓宮にて大御製に妹爾戀吾松原とのたまはせしは上に云同所安虞之松原なり其頃に丹比屋主眞人、後爾之人乎思久、四手能崎、此四手崎相似たる事右歌にもいへりさらばこゝの左手の崎も同所にて言の通ふまゝにいふなるべし

左手蠅師子之、　左は發語なり手はへしは袖ふりはへと云が如し道行ぶりに見し人のわすれぬさまを云【或人朝戸出の妹がすがたと云如く出榮をいふにやと云は假字をおもはぬなり延と榮とはたがへり】

夢二四所見、」

○安部宿禰年足歌、

佐穗度、　大和なる事既に云度はあたりなり

吾家之上二、鳴鳥之、　こは序なり如を入て心得べし

音夏可思吉、愛妻之兒、」

○大伴宿禰像見歌、　紀（廢帝）正六位上形見と見ゆ

石上、　冠辭

零十方雨二、將關哉、　諸成案に左波良米の波は倍良の約良は禮に通ひて左倍良禮米也と云なり則さへられしとかよへるてにをはなり

妹似相武登、　あはんと妹にと上下していへり

言篆之鬼尾、」　今本篆を義と書誤なる事別記に云

○安倍朝臣蟲麻呂歌、

向座而、雖見不飽、吾妹子二、立離往六、田付不知毛、」

○大伴坂上郎女歌、

不相見者、幾久毛、不有國、幾許吾者、　今本こゝばくわれはとよめり上に幾久とあれば字のまゝに訓べし

戀乍、裳荒鹿、」

戀戀而、相有物乎、月四有者、夜波隱良武、　十五夜の前の月にてまだ明日にはほどある故夜こもるといふ

須臾羽蟻待、」

右大伴坂上郎女之母石川内命婦與安倍朝臣蟲麻呂之母安曇外命婦同居、姉妹同氣　氣は家を誤る氣にてかく訓べし

之親焉、緣此郎女蟲滿相見之疎相談既密、聊作戲歌以爲問答也、

○厚見王歌、

朝爾日爾、色付山乃、　秋山を云

白雲之、　如を入て心得べし

可思過、君爾不有國、」

○春日王歌、

足引之、　冠辭

山橘乃、　既出

色丹出而、語言繼而、相事毛將有、」　媒などもいひつぎ

やりて相逢事もあらんといふなり

○湯原王歌、

月讀之、光二來益、足疾乃、　冠辭

山手隔而、　隔てとほからぬなり山はへだてといはん句

中の序なり

不遠國、」

○和歌、

月讀之、光者清、雖照有、惑情、不堪念、」　今本不

堪念をたへずおもほゆと訓しはあたらず念のみにてお

もほゆとはよみがたし

○安倍朝臣蟲麻呂歌、

倭文手纏、　冠辭今本文を父に誤るなり

數二毛不有、身持、　今本身を壽に誤れるよしは冠辭倭

文手纏の條にあり

奈何幾許、吾戀流、

○大伴坂上郎女歌、

眞十鏡、　冠辭

磨師心乎、縱者、後爾雖云、驗將在八方、」

眞玉付、　冠辭

彼此兼手、　をちは末をいひこちは今をいふ

言齒五十戸常、相而後社、悔二破有跡五十戸、」

○中臣郎女贈大伴宿禰家持歌、

娘子部四、咲澤二生流、　咲澤は大和國女郎花さきと

ひかけたるなれば今本にさく澤と訓は誤なり春日に咲

山咲野有同所なるべし

花勝見、　花がつみは別に考有別記にいふべし

都毛不知、戀裳摺可聞、」

海底、奥乎深目手、吾念有、君二波將相、年者經十方、」

春日山、朝居雲乃、　おほゝしくといはん序なり

鬱、不知人爾毛、戀物香聞、」

直相而、見而者耳社、　既いふ如く見たらばと云なり

靈剋、　冠辭

命向、吾戀止眼、」

不欲常云者、　始よりいなといはゞ我方より去ひんやと

なり

將強哉、吾背、菅根之、　冠辭

念亂而、戀管將有、」

○大伴宿禰家持與交遊久別歌、　標は久の字あり今

本にはなし標はとらざる事既に云如し歌の意によて加

へつ

蓋毛、人之中言、聞可毛、幾許雖待、君之不來益、」　君

は友をさし云なり

中々爾、絶年云者、　今本の訓は歌意違へればあらためつ

如此許、氣緒爾四而、吾將戀八方」

將念、　吾をおもひなん人にあらぬなり

人爾有莫國、懃、情盡而、戀流吾毛、」

○大伴坂上郎女歌、

謂言之、恐國曾、　ものいひさがなき人言をかしこむ

なり

紅之、色莫出曾、念死友、」

今者吾波、將死與吾背、生十方、吾二可縁跡、言跡云莫

苦荷、」

人事、繁哉君乎、二鞘之、　今も一家の一重の園をさや

と云ゑかれば吾住方の家にも一重夫の住家にも一重園

あればもろさやといふならん古事記(仁德)諸鞘眞幸兒

吾妹云云とあるは二重をいふならん是によりてもろさ

やと訓て上の如云よしは別記にいふ

家乎隔而、戀乍將座、」

比者、千歲八往裳、過與、吾哉然念、欲見鳴、」　見まほ

しむまゝにしばしがほどに逢や過ぬるなど吾おもはる

るとなり

愛常、吾念情、遠河之、雖塞塞友、　せくといへども水

の勢つよき故其塞を崩如思ひあまる涙のひまなきをた

とふなり

猶哉將崩、」

靑山乎、横殺雲之、　横殺雲の如と心得べし今本殺を敬

とするは誤なり

灼然、吾共咲爲而、人二所知名、」　此歌前後の歌の意に

かなはず駿河麻呂の心なごみ郎女のまめ心に愛るよし

など有をかくよめる歟

海山毛、隔莫國、奈何鳴、目言乎谷裳、幾許乏寸、」

○大伴宿禰三依悲別歌、

照日乎、闇爾見成而、哭涙、衣沾津、干人無二、」

○大伴宿禰家持贈娘子歌、

百磯城之、　冠辭

大宮人者、　雖多有、情爾乘而、所念妹、」

得羽重無、　此云既に上にいへり

妹二毛有鴨、如是許、人情乎、令盡念者、」

○大伴宿禰千室歌、

如此耳、戀哉將度、秋津野爾、　吉野の中に有て高き野

ゆゑ雲をよめるなり

多奈引雲能、過跡者無二、」

○廣河女王歌、

戀草呼、力車二、　人の力もてやる車なり今の大八車と

云如し

七車、積而戀良苦、吾心柄、」

戀者今葉、不有常吾羽、念乎、何處戀其、附見繫有、」　つ

かみの美は萬比約つかまひといふなり

○石川朝臣廣成歌

家人爾、　廣成の家の此里にありて其家人を戀るよし有

て云か又他し人の家なる人を戀るか端詞なければ其よ

しおもひはかりがたし

戀過目八方、　すぐしやりがたきと云なり

川津鴨、泉之里爾、　川津鳴とさへ冠せたれば泉川のあ

たりなるべし

年之歷去者、」

○大伴宿禰像見歌、

吾聞爾、　今は吾おもひ亂たるもなり吾聞んさまにおも

へる人のうへはかけていひそとなり

繫莫言、刈蔦之、　冠辭

亂而念、君之直香曾、」　たゞかは正香と云に同じ則たゞ

はたゞ敷の敷をはぶきたる言なり

春日野爾、朝居雲之、　如をこめていふ

敷布二、吾者戀益、月二日二異二、」

一瀨二波、千遍障良比、　良比は利の延言

逝水之、後毛將相、今爾不有十方、」

○大伴宿禰家持到二娘子之門一作歌、

如是而哉、猶八將退、不近、道之間乎、煩參來而、」

○河内百枝娘子贈大伴宿禰家持歌、

波都波都爾、　波は比萬の約都は智留の約物の間と物の

ちるいさ、かなるほどをたとへていふ言にしてはつか

といふ歌に同じ

人乎相見而、何將有、何日二箇、又外二將見、」

夜干玉之、　冠辭

其夜乃月夜、至于今日、吾者不忘、無間苦思念者、」

○巫部麻蘇娘子歌、

吾背子乎、相見之其日、　その日よりしてと云なり

至于今日、吾衣手者、乾時毛奈志、」　のちにはこを「わ

が袖は鹽干に見えぬ沖心人こそ知らねかわくまもなし

と巧を添たり

栲縄之、　冠辭

永命乎、欲苦波、不絶而人乎、欲見社、」

○大伴宿禰家持贈童女歌、

葉根蔓、　はねかづらは放髮なる事卷二に既いふ【見安

云はねかづら花かづら同事なり奥人】

今爲妹乎、夢見而、情内二、戀渡鴨、」

○童女來報歌、

葉根蔓、今爲妹者、無四乎、何妹曾、　吾にはあらじを

とことわれるなり

幾許戀多類、」

○粟田娘子贈二大伴宿禰家持一歌、

思遣、爲便乃不知者、片椀之、　和名抄盌和名(末里)俗

云毛比云云盛椀を毛比といふ式に土片椀廿口水椀廿口

とあり片と云は合子に對へ云にて蓋なきなり又水瓶を

も毛比といふ又水をもいふか主水も毛比刀利と云前張

にみもひもさむしみまくさもよしとうたへり水入椀を

みもひといふなり

底曾吾者、戀成爾家類、」　諸成案に歌意は思をやりすぐ

しぬべきすへの知られねば打おもひよるてふ言を片椀

にいひかけ其底にそこりこびつくてふこびとこひと言

の同じかれば吾戀の片おもひのこりたるを戀なりにけ

ると云なり【諸成案に片椀の事眞淵の考あたれり毛利

の利は辭にて毛良牟毛留毛禮と働けば詞略て毛といふ

は盛の言なり比は萬利の約美より通ふ言にて盛椀又催

馬樂にいふ美毛比の美は水の略毛比の比は半濁伊の如

唱ふ此半濁は本濁の備より通はせいふにて水盛備にて

其備は倍より通ふ水盛瓶にて釣瓶をもいふべし水椀を

美毛比といふは美は水の略なる事右の如毛比は前に云

萬利より約いふなり猶委荒良言てふものにいふ】

復毛將相、因毛有奴可、白細之、　冠辭

我衣手二、齋留目六、」　魂むすびとて人魂を見て紐を結

びて袖がへしとて夢を見て衣の袖をかへすなど古への

ことわざあるによりていはひとゞめんとはよめるなり

○豐前國娘子大宅女歌、

夕闇者、路多豆多頭四、待月而、行吾背子、　今本ゆかんと訓はたがへり

其間爾母將見、」　月待給ふほども相見なんといふなり

○安都扉娘子歌、　安積氏なるを假字にて書るか扉を美の假字にかりしならん【安都扉娘子(安都)は氏扉は名拾穗抄にかく有後の考のたすけにこゝに擧ぐ奥人】

三空去、月之光二、直一目、相三師人之、夢西所見、」

○丹波大娘子歌、　今本標に大女姫子とあるもてこゝに大の字脱せしと云もあれど丹波國となければ此丹波は姓ならんさらば娘子もいらつめとよむべき事なり

鴨鳥之、遊此池爾、木葉落而、　うかむと云序なり

浮心、吾不念國、

味酒、　冠辭

三輪之祝我、忌杉、手觸之罪歟、君二遇難、」　神前は去め繩はへていはひ物するに吾手ふれし歟君にあひかたみといふは本妻などのねたみおもひてあひがたかるにたとへてかくよめるなるべし

垣穗成、人辭聞而、吾背子之、情多由多比、不合頃者、」

（卷十一）「かきほなす人のよこ言去げきかもあはぬ日あまた月のへぬらん」てふも隔を云にて垣穗なすは人の隔さくるをいふ多由多比はたえたゆむを云なりされば前の歌人言を去けくうくべき事をなせし歟本妻のねたみをたとへしなるをしれ

○大伴宿禰家持贈娘子歌、

情爾者、思渡跡、緣乎無三、外耳爲而、嘆曾吾爲、」

千鳥鳴、　かく冠らする事既出

佐保河門之、清瀨乎、　地につけたる序なり

馬打和多思、何時將通、」

夜晝、云別不知、吾戀、情、蓋、夢所見寸八、」

都禮毛無、將有人乎、獨念爾、　今本獨を狩に誤るは狩と獨の草の手を見誤れるなり片戀片思に獨と云集中例あればあらたむ

吾念者、感毛安流香、」　今本感を感とす卷十一にも感を誤りて惑人とせる感にあらためしによてこも改

不念爾、妹之咲儀乎、夢見而、心中二、燎管曾呼留、」

いやます思ひのもゆると云なり

丈夫跡、念流吾乎、如此許、三禮二見津禮、　紀に羸身を三都禮と訓るを身勞なりと思ふは字になづめるなり

也美也都禮の也を畧たるなり此畧考は諸成荒良言に云

片思男責、」

村肝之、　冠辭

情摧而、如此許、余戀良苦乎、不知香安類良武、」　二の句の情を今本に猶と有は誤去るかれば改正しき本を得たらん人正せ

○獻二天皇一歌、　誰奉るともなし家集にかくかけるからは家持の歌ならん拾穗抄に大伴坂上郎女とせり何によれるにや女歌ならず見ゆ佐保山の莊より物奉る時の歌なるべし

足引乃、　冠辭

山二四居者、風流無、　今本興志乎奈美と訓は去からず

吾爲類和射乎、害目賜名、」

○大伴宿禰家持歌、

如是許、戀乍不有者、石木二毛、成益物乎、物不思四手、」

○大伴坂上郎女從跡見庄贈留宅女子大嬢歌並短歌、

常與二跡、　【今本常呼二跡と有は全誤去るかれば改つ】

常闇行世にてこゝの常世は黃泉をいふなり紀(神武)又(雄畧)常世又大瀨と有もともにかみさり給ふをいふと同じさて常世にとてはゆかぬといふなり

吾行莫國、小金門爾、　國なり小金門の事既いふ

物悲良爾、念有之、　以上は坂上の家より跡見の庄へ移れりし時姫の刀自と別るゝ時のさまなり

吾兒乃刀自緒、野干玉之、　冠辭

夜晝跡不言、念二思、吾身者痩奴、嘆丹師、袖左倍沾奴、

上のぬもこゝも二つのぬはぬるの畧なり

如是許、本名四戀者、古郷爾、此月期呂毛、有勝益士、」

吾だにかくもとなく戀て有ば古郷の女は其所にはありがてましといひて初句より物かなしらに思へりしてふ上一段の意を結ぶなり

反歌

朝髮之、　言を隔て髮の亂と冠らす

念亂而、如是許、名姉之戀曾、夢爾所見家留、」　四の句なにのこひぞもとよみたるは意とほらず終の句のてにをはにもいさゝかそむければ改つ

今本右歌の左に右歌報大嬢と有は端詞に不叶一本にもなければかた〳〵とられず後人の書添なり

○獻　天皇歌、

二寶鳥乃、　かづくといはん序におけり

潛池水、　ふかきを去らせていふなり

情有者、　ふかき心あらば吾深く戀奉る心を玄めし奉と水に令するなり

君爾吾戀、　今本にわがといひて訓るはいさゝかたがへり

情示左禰、」

外居而、戀乍不有者、　君之家乃、池爾住云、鴨二有益雄、」　今本二有を爾安良とよめるはいまだし約てよむは集中の例なり

○大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌、　今本こゝに雖絶二數年一復會ヲ相聞往來、とあるは後人の書加云にたらず

萱草、吾下紐爾、著有跡、　萱草の事卷二既いふ

鬼乃志許草、　鬼は四言に云言なるよし既いふ

事二思安利家理、」　事は借字言なり忘草は實無と云

人毛無、國母有粳、　粳(和名字流志禰)と和名抄に見ゆるをもて疑ふ説もあれど字彙に粳同粇俗糠字とあれば粳も奴加と訓べし

吾妹兒與、携行而、副而將座、」

○大伴坂上大嬢贈大伴宿禰家持歌、

玉有者、手二母將卷乎、　玉釧を云ならん

薦膳乃、　冠辭

世人有者、手二卷難石、」

將相夜者、何時將有乎、何如爲常香、彼夕相而、　今本にかのよひあひてとよみしは意通らねば改ぬ

事之繁裳、」　今本玄げきもとよめるも玄からず

吾名者毛、千名之五百名爾、　千五百に名の多たつともなり

雖立、君之名立者、　次の多は言都加良を約ていふからはの波は半濁なるを今言便に濁る

惜社泣、　我名はたつともをしまじ我名たてば君が名たつからなげかるゝといふなり

○又大伴宿禰家持和歌、

今時者四、　今本者を有とせしは全誤なりふたつの志は助字今はなり例は既出【奥人按に今時者四の者は和のごとく唱べし婆と濁りては暫しの言となりてこゝとは別言なり】

名之惜雲、吾者無、妹丹因者、千遍立十方、」　今本千遍とよみたれどてにをはの假字なければ契冲が説による

上の終の歌にいふ

空蟬乃、　冠辭

代也毛二行、　代やふたゝび生行れんや行れぬとかへるてにをはなり(卷八)信二代者不經之に同じ

何爲跡鹿、妹爾不相而、吾獨將宿、」　上の六首め將相夜者てふ歌に和へしなり

吾念、如此而不有者、　吾念といへどこは吾身かくてあらずばの意なり

玉二毛我、眞毛妹之、　此眞を毎の誤として常にもの意なりといふ説もあれどまことも玉釧にもがなとねぎて妹が手にまかれなんとなり妄には改むべからず

手二所纏牟、」　上の始の歌に和しなり

○同坂上大嬢贈家持歌、

春日山、霞多奈引、　心ぐゝといはん序なり

情具久、　霞より心くもりといひかけたるなり下の久は久毛留の約心ぐし目ぐしと卷十七に在はこゝろぐるしなりそはそこにいふなり【奥人按に具久の約具なり此具は具留志久の約なり】

照月夜爾、　春のおぼろ月を云なり

獨鴨念、」

○又家持和坂上大嬢歌、

月夜爾波、門爾出立、夕占問、足卜乎曾爲之、　足をあとのみいふは足結足掻など云に同じ足のはこびを數てうらなふなり古くより此事なせ玄よしありしならん今も玄かする國も有と疊算など云に同しき占なり

行乎欲焉、」

○同大嬢贈家持歌、

云云、人者雖云、若狹道乃、後瀨山之、後毛將會君、」　今本會を念にあやまれり

世間之、苦物爾、有家良久、戀二不勝而、可死念者、」　今本念者をおもへばと訓るは同言ながらいさゝかてにをはまたからずこは玄ぬべくおもふはくるしきものにありけるとまはりてにをはなり

○又家持和坂上大嬢歌、

後湍山、後毛將相常、念社、可死物乎、至今毛生有、」　今本の訓もあしからねど六帖に布留と有ぞまされる事耳乎、後毛將相跡、　【今本二句の毛を手に誤一本によれり】

懃、吾乎令憑而、　多乃米の米は末世の約なり

不相可聞、」

○更大伴宿禰家持贈坂上大嬢歌、

夢之相者、苦有家里、覺而、搔探友、手二毛不所觸者、」　契冲云此歌第二第四の歌は皆遊仙窟によれりとさも有

べし少貶坐睡則夢見十娘驚覺攪之忽然空乎云々またく此意なり既いふ如くまねぶべからず

一重耳、妹之將結、帶乎尙、三重可結、吾身者成、」 契冲云遊仙窟に日月衣寬朝々帶緩云云文選古詩衣帶日緩是によれりてふはさもあるべし

吾戀者、千引乃石乎、七許、頸二將繫母、 句なり諸成案にかゝるおもきくるしきわざするに猶其七つの心に神の力をそへてともに押ふせ給ふらしと吾戀のなるまじきくるしさを云

神之諸伏、」 さてまことはまだ大娘の實にゆるせるやもはかり知らねば前の歌にも吾乎令戀而不相可母などおもふがうへに母坂上郎女のゆるさでともぶしして守りめつよかればいよ〳〵逢がてなるにたとへたるなり

暮去者、屋戸開設而、吾將待、夢爾相見二、將來云比登乎、」 契冲云遊仙窟に今霧閉戸夢裡向渠邊此二句にてよまれたるなりとこれによるべし

朝夕二、將見時左倍也、吾妹之、雖見如不見、申戀四家武、」 今本申を由に誤書の消しなるべし申を增に借たり

生有代爾、吾者未見、事絶而、 ほむる言にたえてなり

如是許、面影耳、 こゝにしてを入て心得べし

所念者、何如將爲、人目繁而、」 四の句よりつゞくにあらず此句初句の上に置て可心得

相見者、須臾戀者、奈木六香登、雖念彌、戀益來、」

夜之穗杼呂、 呂は良に同し

吾出而來者、吾妹子之、念有四九四、 思及也下のしは助字なり諸成案るに此考よし志久の志は曾比の約及は加行に働辭なり思の添を志伎志久といふなり

面影二三 、」

夜之穗杼呂、出都追來良久、遍多數、成者吾胸、截燒如、」 契冲か遊仙窟に未曾飲炭暖熱如燒不憶呑及穿似割といふをもてよめりといふはさもあるべし此比はもはら唐をおもへり

○大伴田村家之大嬢贈妹坂上大嬢歌、

外居而、戀者苦、吾妹子乎、次相見六、事計爲與、」 つゞきてあはん事をはかれとなり

遠有者、和備而毛有乎、里近、有常聞乍、不見之爲便奈沙、」

白雲之、多奈引山之、 高々といはん序

如是何怜、縫流嚢者、」 此袋は衣服令袋從服色云々見えて位階をわかつ朝服の上に佩る袋の類なるべし其袋は何いるゝてふ事は見えねど印の類をいるゝにや奈良に殘りたる古き賢聖障子の繪に朝服の上に袋さげたる有さればこゝの袋も此類をいふべし魚袋は縫て製る物ならねば魚袋など云說は不當

吾妹兒之、形見乃服、下着而、直相左右者、吾將脫八方、」

戀死六、其毛同曾、奈何爲二、 戀死んも人目に名の立も同じそもいとはぬとなり

人目他言、辭痛吾將爲、」 わびぬれば今はた同じと後によめるが如し

夢二谷、所見者社有、如是許、不所見有者、戀而死跡香、」

念絶、和備西物尾、中中爾、奈何辛苦、相見始兼、」 たえて念たりしにより有て相見たるなり

相見而者、幾日毛不經乎、幾許久毛、久流比爾久流必、來日〳〵なり狂ひに〳〵と見たる說は笑べし【幾日こは伊久比毛とよまんかと我友昌保のいひしによるべし下にくる日に〳〵とあればなり】

高々二、 卷五に此言委くいへりこゝはたま〳〵の意なり

吾念妹乎、將見因毛我母、」

何、時爾加妹乎、牟具良布能、 葎生なり粟生豆生の例により濁べし

穢屋戸爾、 神代記に紀太奈枳と訓による今本にはけがしきとよめり

入將座、」

右田村大嬢坂上大嬢幷是右大辨大伴ノ宿奈麻呂卿之女也卿居田村里號ニ曰田村ノ大嬢一但妹坂上大嬢者母居ニ坂上里一仍曰ニ坂上大嬢一于時姉妹諮問以歌贈答、

○大伴坂上郎女從ニ竹田ノ庄一贈ニ賜女子大嬢一歌、【こゝの端詞に大伴坂上郎女從竹田庄云々と有に注に母にも離れて竹田に在て夫もなくて有をあはれむなりといへるは聞えず母郎女は竹田に在て女子は坂上の跡見田庄などに居れるによみてやりし成べし】

打渡、 冠辭

竹田之原爾、鳴鶴之、間無時無、吾戀良久波、」 住里に鳴鶴もて序とせし歌なり

早河之、湍居鳥之、縁乎奈彌、 早川の瀨には木草など

のより所もなきなり

念而有師、吾兒羽裳恃怜、」　母にもはなれて竹田にありて夫もなくて有をあはれむなり

○紀郎女贈大伴宿禰家持歌、　こゝの小注もとらざる事にいふ

神左夫跡、不欲者不有、　郎女我年やゝ〳〵たけたるもていなとにはあらぬなり

八也多八、　やゝ〳〵おほくはといふにて大かたの意也

如是爲而後二、佐天之家牟可聞、」　年たけて戀せしならんには後は必さびしきおもひせんと末をはかりておぼつかなむなり

玉緒乎、沫緒二搓、結有者、　搓て沫緒に結たらばといふなり

在手後二毛、不相在目八方、」　かくてあはでありての後もあはざらんやといふなり此歌を上は其まゝにて末を絶ての後もあはんとぞおもふと伊勢物語によみかへつ諸成猶案るに今本沫緒とあるは淡の誤にてはなきか沫と淡の草の手似たれば仙覺など按合の時字を誤りしならん何ぞといはゞ上に淡緒といひて末にあはざらめやもとうけたればかた〳〵沫にては本の句よりのいひかけ假字たがへり此緒は中をすかしあはしく結故の名ならんか扨後にもあはぢむすびあはび結といふもあはの假字なり後とてもかなのたがへる事はいはじ後といふも今の世にいひなしたるにもあらずや、古く聞えたればいと後のいひなしにあらじ

○大伴宿禰家持和歌、

百年爾、老舌出而、與余牟友、　齒おちしひまより舌のもれいで、よゝとなくなる口つきをいふ源氏夕貌に舌を出してよゝとなきぬとあるも是なり

吾者不厭、戀者益友、」　よゝむとも戀はましぬ吾はおいぬるはいとはじと云なり

○在二久邇京一思ト留二寧樂宅一坂上大嬢ニ大伴宿禰家持作歌、

一隔山、重成物乎、月夜好見、門爾出立、妹可將待、」

（卷十五　故郷者遠毛不有一隔山越我可良爾念吾世思とあるに合見れば山城大和さかひにある山なり歌の意も聞ゆ

○藤原郎女聞之卽和歌、

路遠、不來常波知有、物可良爾、然曾將待、君之目乎保利、」　家持久邇都にありて古郷の妹こひしらに右の歌をよまれしを此郎女のかたへよりこたへしなり同じみやこの宮女ならん

○大伴宿禰家持更贈大嬢歌、

都路乎、遠哉妹之、　こは隔句なり誓てぬれど都路乎遠しや妹が夢に見えこぬといふなり

比來者、得飼飯而雖宿、　得飼飯は假字誓ひなりあはんとちかひてぬるなり宇計比は知加比と同言にて宇知古里阿比を約しなり宇知は心なり知を略き宇古良阿倍の約計なり此は辭なり

夢爾不所見來、」

今所知、　皇の今去らしますの略なり今本の訓はわらふべきなり

久遐乃京爾、妹二不相、久成、行而早見奈、」　見なんの略なり

○大伴宿禰家持報贈紀郎女歌、

久堅之、　冠辭かくさまにつゞけたるは奈良に至りての轉なり

雨之落日乎、直獨、山邊爾居者、欝有來、」　伊伎夫世の伊伎の約伊なれば伎を略て伊夫世と云なりあやなきかたちなどいふは唐文の意こゝに不レ言

○大伴宿禰家持從二久邇京一贈二坂上大嬢一歌、

人眼多見、不相耳曾、情左倍、妹乎忘而、吾念莫國、」

僞毛、似付而曾爲流、　まことに似つきたる事をするとなり

打布裳、　現の意なりといふ説も有ど現はあり多都てふ事を約し意にて則うつしみうつそみともいひ顯現などの字をあつる言なり諸成案にこは美及てふ字を充る言にて宇は惠武の約都は多留の約にて人の面も物のよきもたりたるをもほむる言なり女のかほよきを美といふは其かほの惠美たりたるなり物のうつくしは吾惠美のたりなりさればこゝの言は僞をもまことに似たるさまに事美しくしてまことなきをうらめるなり

眞吾妹兒、吾爾戀目八、」

夢爾谷、將所見常吾者、保杼毛友、　紐解のひを略たる言なりひもひぼといふも同言にてひもといふは半濁なり其濁を下へめぐらして保杼久といふなりさて吾紐解てぬればおもへる人の夢に見ゆてふ其比の諺ありてそれによりてよめる例既出相おもはねばこそ見えざれとよめるなり

不相志思、諾不所見武、」

事不問、　ことのいはぬなり木といはん料なり
木尙味狹藍、　木すらは既いふ如木そのまゝなり木はかれで芽出る物故に木の類とするならし諸成案に阿治左爲の治左の約陀なれば阿陀阿爲といふなるべしさて治左の左にも約し陀にも阿はこもれゝば略て阿治左爲と云べしさて去か名づけしよしは藍の色有花ながら其色の物にうつしもとられぬは然いふを言うつくしくして實なき戀をたとへし序なりさてこゝをば句となすべし
諸茅等之、　こは大嬢の乳母などによりたる人の名にて媒せし人を指て云なり諸茅等は山上臣の憶良等はとよみしと同じいひなしなり
練乃村戸二、　練はたねらひて言をたくむをいふ村戸は借字群言にてたゝみかざりてよきさまにいひなすをいふなり【村戸は牟禮古刀の禮古の約呂なるを良に通して牟良刀といふなり】
所詐來、」　大嬢の戀思へる歌前にもおほかれど實なきをうらみてよめるなり
百千遍、戀跡云友、諸茅等之、練乃言羽志、　こゝをもて前の村戸の借字なるを可思

吾波不信、」　此歌は前の言を解るが如くよめりたのまじを不信と書しをもても前の歌をおもへ此歌ども古人委く解ざりしをひさゝに考て思ひ得たられば云ふ
○大伴宿禰家持贈紀郎女歌、
鶉鳴、　冠辭
故郷從、　奈良の古郷より思ひそめしをいふ
念友、何如裳妹爾、相緣毛無寸、」
○紀郎女報贈家持歌、
事出之者、誰言爾有鹿、　はじめいひ出たるは君ならずやととがむ
小山田之、苗代水乃、中與杼爾四手、」　なはしろ水は所所にせく物ゆゑに中よどみの譬へとす
○大伴宿禰家持更贈紀郎女歌、
吾妹子之、屋戸乃笹乎、見爾往者、蓋從門、將返却可聞、」
諸成云こはたゞに笹を見んといふにはあらず次の歌にまがきのすがた見まくほりと云にて心得べしと吾友藤原中良がいへるによるべし
打妙爾、　此言卷七に既出そこにいふなり
前垣乃酢堅、　借字姿なり
欲見、將行常云哉、　伊倍の倍は波米の約いはめやなり

君乎見爾許曾、」　こは初の歌を解るさまによめりと猶中良がいへるによるべしさて前にもかゝるを眞淵のいへる如く後の世にはこれを一首によみ得てんとすめれどさてはすがたむづかしきなり
板蓋之、黑木乃屋根者、　黑木は皮付の木をいふ事式に見ゆ契沖が山ちかければなほあすもふき板を取てまゐらんなり郎女此時やねを葺あらためられしなるべしといへるはよし但しくはしきにすぎたり家をつくれるとのみいふべくおぼゆ【遷都の頃なれば家造る事あるべしいよ〳〵屋根ふきかふといふはすぎたり】
山近之、明日取而、持將參來、」
黑樹取、草毛刈乍、仕目利、勤和氣登、　功又勤紀に伊曾志と訓はこれによれり今本の訓は誤れり且和を知に誤れり和氣は上に出わかといふに同じ一本に仕登母と あるは今本仕目利とあるによるべし
將舉十方不在、」
右の二首は別に端辭のありしが脫しなるべしこをもても始に歌數有はとらず
野干玉能、　冠辭
昨夜者令還、今夜左倍、吾乎還莫、路之長手呼、」　こも右に分ていふ如別に端詞の有しが脫ならん
○紀郎女裹物贈友歌、
風高、邊者雖吹、爲妹、　友にと端詞にいへば女の友とするは女なるべしかたみに女は妹と云例既に出
袖左倍所沾而、刈流玉藻焉、」
○大伴家禰家持贈娘子歌、
前年之、　（卷十五）前日毛昨日毛今日毛と有に同じ乎は阿刀の約あと、たつ日あと、立年を約通し云
先年從、至今年、戀跡奈何毛、妹爾相難、」
打乍二波、更毛不得言、夢谷、妹之手本乎、纏宿常思見者、」
吾屋戸之、草上白久、置露乃、壽母不有惜、　今本惜を情に誤る一本によれり
妹爾不相有者、」
○大伴宿禰家持報贈藤原朝臣久須麻呂歌、　淡海公男武智麻呂孫仲滿子也（後勅改押勝）久須麻呂は第二子也
春之雨者、彌布落爾、梅花、未咲久、伊等若夫可聞、」
家持の思へるをとめのまだいとわかゝるをたとへてこたへしなり

如夢、所念鴨、愛八師、　今本の訓は誤れるよしは卷二の別記にいふ

君之使乃、麻禰久通者、」　禰は奈に通てまなくと云

浦若見、花咲難寸、梅乎殖而、人之事重三、念曾吾爲類、」

久須麻呂の家なるをとめを家持の戀おもふなる故殊更に人言のしげきをわぶるなり

○又家持贈二藤原朝臣久須麻呂一歌、

情八十一、所念可聞、春霞、輕引時二、事之通者、」　霞覆へる時に通ふ言なれば心ぐるしくおぼつかなみおもふとなりこゝろぐゝは上にいふ

春風之、聲爾四出名者、　風よりおとゝはいへどかく言にいづるなればといふなり

有去而、　此事あり經行くなり

不有今友、君之隨意、」　つひにこゝろをとげんは君が心にあるべしとなり

○藤原朝臣久須麻呂來報歌、

奥山之、磐影爾生流、菅根乃、　冠辭上は序なり

懃吾毛、不相念有哉、」　君がねもころ思ふなれば吾も玄かおもはざらんやなり

春雨乎、待常二師有四、　春雨のめぐみを久須麻呂の自のなさけにたとへまつとにあるらしと云

吾屋戸之、若木乃梅毛、未含有、」　梅の含を我なるをとめに譬梅もまてばこそふくみてあるといふなり

萬葉集卷十三之考終

萬葉集卷十四之考〔流布本卷三〕

此卷より下おほくは家々に集たる歌どもにてそが中に此卷らは大伴家持主の家の歌集なりさて初めは雜歌譬喩歌挽歌とついで、時代の次を心して三の卷の拾遺めきてせられたるをその體もはたさず人のいへるを聞がまに〳〵おひ〳〵に書載しかばみたりになりぬ後に正すべかりしをおこたりしまゝに傳れるなるべし其みだりなる事は大伴旅人卿の事を上に大納言大伴卿とありて下に中納言なる時の歌をのせ上に春日藏首老と有て下に此人まだ僧にて辨基といひし時の歌ものり藤原の宮人を下に奈良の宮人を上に擧る類又旅相聞悲歌など所さためず入る此外みだりにて撰める卷にあらずされど此卷に古へのよき歌多くのせつ心をやりて見よ

雜歌。　卷一にいへるが如し

〇天皇、　此よみ人は大寶の比石見へ下りしと見ゆ然は是は其いと前にて持統天皇におはすべし次の歌どもの樣も玄かなり【奥人案に此天皇を今本に元正天皇なりと云は誤なり人麻呂は和銅二年の比齡五十二不滿して死せるなれば時代違へり此或本に王とかき卷十九に此體なる二首並て一つは大君老と有を思に皇とのみに書るはおほきみと訓玄るしなりけりすめらみことをおほきみとも申す事歌に多し是中々古へぶりなり諸王をおほきみといふは後なり】

御二遊雷岳一之時、　こは飛鳥の神奈備山なり是を雷岳と名をよばれし事は紀（雄略）を引て卷二の別記にいふさてこゝの歌にいかづちのうへとよみたるは歌の文なり卷二に神岳乃山之黃葉乎此卷の下に登神岳と詞有飛鳥の川をよめるもて雷岳と書しをもかみをかとよむ事を知ぬなる神をかみとのみいふ事古に多し

柿本朝臣人麻呂作歌一首、　此卷より下に玄るせし歌の數の事は別記に云

皇者、神二四座者、天雲之、雷之上爾、　右にいふ如くかみをかといふは本雷の事なるをもて雲ゐの雷にとりなしつ

廬爲流鴨、」　行宮をいほりとも云事卷一の歌にあり此さまにいひなすは人麻呂のはじめたるならん

注に右或本云獻忍壁皇子也【忍壁皇子は天武天皇の九の皇子にて志貴皇子の同母兄なり】其歌曰

王神座者雲隱伊加土山爾宮敷座是はた人麻呂のよめるすがたなりされど皇子にまうさん事にあらず端詞誤しものなり

○天皇賜二志斐嫗一御製歌一首、　志斐連は和銅元年の紀新撰姓氏錄などに見ゆ○嫗の言は卷三にいへり今本是に御歌とのみ有は此集の例に違へりよりて製の字を補へり

不聽跡雖云、強流志斐那我、　志斐女之なり今本那を能に誤る【志斐能の能も奈より通せしにて誤ならず今本のまゝにたすけ置べし卷六に勢奈能我袖母などいへる能にひとしきなり○強語登　今本には此登字なし古本には登字有】

強語、此者不聞而、朕戀爾家里、」　此老女にをこ物語などせさせ給て常におほみ和さめと玄ませし故に此戯ごとは有つらん

○志斐嫗奉和歌一首、【此樣のたゞ言歌此卷に六首有り】

不聽雖謂、話禮話禮常、詔許曾、志斐那波奏、　今本那を伊に誤る

強話登言、」　古本に強語と有り話は語か言は告の字にや共に平言の戯歌なり【志斐伊の伊は上にも下にも添ていへる集中に多し繼體紀に倭俱吾伊縗紀に藤原仲麻呂伊百濟王福信伊の類記にも多し今本もふ誤なり扨伊の言の考は前にいふ、奥人○紀伊の熊野の方言に人の名の下に伊の言を添て呼といへり○本居云伊は余と云に同】

○長忌寸意吉麻呂詞詔歌一首、　右と同天皇の幸の度なるべし【卷六に難波宮作歌とて長き短き歌によめるに似たり】

大宮之、内二手所聞、網引爲跡、網子調流、海人之呼聲、」　こは本孝德天皇のおはしまし、難波豐崎の宮にて海邊の興有事をいひたり○網引せんとては聲を高く長く何とかやいひて呼に浦人ども足をそらにて行つどひてことなすめり是をあご調ふといふなり

○長皇子、　既出

遊二獵路池一之時、　かりぢの池はゑらずされど皇子の出で遊給ふからは大和の國の中ならん

柿本朝臣人麻呂作歌一首並短歌、

八隅知之、　冠辭

吾大王、高光、吾日乃皇子乃、　此四句は卷一にいひし如く五言六言五言四言にいへる例なるを人麻呂始て末を七言によみしならん且此言を只の皇子にもいふ事卷一にもあり

馬並而、三獵立流、　三は萬志の約の美にてほむる語なり

弱薦乎、　冠辭

獵路小野爾、十六社者、　鹿こそはなり數の訓を借事此集に多し

伊波比拜目、　上に鹿自物伊波比伏管下に十六自物膝折伏と有に仍てよめり拜も卽伏事なればなり【拜推古記に烏呂餓瀰呂と有】

鶉己曾、伊波比回禮、四時自物、伊波比拜、　六言

鶉成、　冠辭

伊波比毛等保理、恐等、仕奉而、久堅乃、　冠辭

天見如久、眞十鏡、　冠辭

仰而雖見、春草之、　冠辭

益目頻四寸、　既出

吾於富吉美可聞、」

反歌一首

久堅乃、　冠辭

天歸月乎、網爾刺、　網にて月を刺取て蓋となし給へり

と云なり此網を今本には細と有によりて說くといへどかなはず網つけてひかへるものなればかく譬しなり伊勢大神宮式の蓋の下に絋網四條とある是なり後撰歌集に「照月にまさきのつなをよりかけて」ともよみつ

我大王者、蓋爾爲有、」　きぬかさてふ訓は卷十五にほゝかしはをあをき蓋とよみ和名抄に伎奴加散といへりさて是に月をたとへしはまろ形なるを知べしから文にも圓なるよしにいひたり【周禮爲蓋象天、晉書天圓如綺蓋地方如棊局、器物綴論てふ物にも蓋爲言覆也形圓象天槱于八以象纏星蓋之上爲レ部非レ部無二以納二槱於其旁一】

儀制令蓋皇太子紫表蘇方裏頂及四角覆レ錦無レ總親王紫大纈式大神宮蓋にも頂及四角云云とあるは惣ては圓なるに錦と總は四方につくる故に四角と云なるべし是によりて方形ならんと云說あれどもとらざるなり

○或本反歌一首、　これもよみ人は人麻呂とするにたがはじ

皇者、神爾之坐者、眞水之立、荒山中爾、海成可聞、」

大池を海と云事卷一に見ゆ○此歌の意も詞も皇子にいふにあらず仍て或人此池を作らせ給て幸ある時の歌ならんと云に從べし然れば右の反歌にはあらず別に端詞の有けんを或本には落今本は歌ともに落たるものなり

○弓削皇子、　既出

遊吉野時御歌一首、

瀧上之、　うへのうを略てへをえの如く唱るは例なり

三船乃山爾、居雲乃、　如を略なり○或本に立雲之と有

常將有等、和我不念久爾、」　げに高山の雲は常にあらぬを見る〳〵人の世の常なきをおもひ給ふなり

○春日王奉和歌一首、　志貴皇子の御子なり紀に（文武）三年六月卒と見たり

王者、　こは弓削皇子をさし給ふなり

千歲爾麻佐武、白雲毛、三船乃山爾、絶日安良米也、」

ことぶきにとりなされつ

今本こゝに或本の歌云云三吉野之云云右一首云云とあるは本文なるべからぬ事なれば右の歌上下に小書すよりて一二の卷なとの例によりて皆すてつ

○長田王、　此王を和銅四年に伊勢へ遣されしは是より前の事ならん【長皇子の孫粟田王の子】

被レ遣二筑紫一渡二水島一之時歌二首、　紀（景行）に海路より幸て肥後國蘆北の小島に泊まして大御食奉る時島に水なかりけるを山部阿弭古が祖に左てふ人天地の神に祈しかば岸邊水涌出たり故にこれを水島といふ肥後風土記曰球磨乾七里海中有島名曰水島出寒水水逐潮高下云云和名抄に肥後國菊池郡に水島郷有

如聞、眞貴久、奇母、神左備居賀、許禮能水島、」　これのは此なり神さびは幸ふりたるをいふ

葦北乃、野坂乃浦從、船出爲而、水島爾將去、浪立莫勤、」

○石川大夫和歌一首、　此大夫は卷四に神龜五年太宰少貳石川足人朝臣遷任云云と有ぞあたれる何ぞといはゝ此集の例四位をは姓名の下にかばねを書五位を大夫と書り右の足人朝臣と云しは此遷任の時四位に叙たれはにて今少貳の時は五位なり古注は違へり

奥浪、邊波雖立、　邊は假字にて方の意なり【奥人按に邊は假字にあらず保刀禮の約其方と其意ひとし委は別に云】

和我世故我、　男どもも互に玄たしみあがめて吾せこと云事集中に多し

三船乃登麻里、瀾立目八方、」　此二首を思ふにこれらは右の如聞云云の一首の下に有べきなり

今本こゝの注に石川宮麻呂朝臣と石川朝臣君子二人を擧たれど是等は四位に叙て大貳とせられし事慶雲二年と養老五年の紀に見ゆれば筑紫に在て大夫と書しにかなはすよりて後人のさかしら玄るかればすてつ

○又長田王作歌一首、　右と同し度なれば又と云

隼人乃、冠辭

薩摩乃迫門乎、　和名抄に薩摩國出水郡に勢度郷ありこの海門ならん卷十五に隼人乃、湍門乃磐母年魚走、芳野之瀧爾、尙不及家里、

雲居奈須、遠毛吾者、今日見鶴鴨、」　此王肥後國の班田使などにて下り給ひけん仍てさつまゝでは渡らで此迫門を遙に見放給ふなるべし遠くも我はけふ來て見つるの意なり【班田使、奥人按に加は阿加の畧なり此加は加爾波の約加なりよりて阿加知田の阿を畧加を延てかにはたと云ならむあかちの知は辭なれば畧きてあかとのみ云】

○柿本朝臣人麻呂羈旅歌八首、　此中に上六首は西へ行旅二首は都へかへる時の歌なり【下に同人の筑紫へ下る時とて二首又卷二に出しさぬきの國の歌も有いづれの度にや同し道なるが傳へもらして別に出しもあるべし】

三津埼、　難波の三津より船出せし日の歌なり次の歌どものつい〳〵をおもふべし

浪矢恐、隱江乃、　卷十五に風吹者浪可將立跡伺候爾都多乃細江爾浦隱往とよめるに同じこゝろの歌なり

舟令寄、敏馬崎爾、」　かくや有けん今本にこゝの二句を

舟公宣奴島爾と有てふねこぐきみがゆくかぬじまにと訓たるは字も誤訓もあるわさなり此歌にふねこぐ君てふ言有べきにや宣をゆくと訓べきや此ぬしの玄らべをも玄らぬ人の强ごとなりこは手をつくべきよしもなけれど後の考の爲にもとて右のことく字も訓もなし試るのみ猶よく心得たらん人正せかし扨三津より船びらきしつれども沖の浪高き時は牟古の浦間につきて敏馬の崎をさして行て風をまもりて淡路阿波明石などへこぐなり且みぬめは名高き崎なればはやく漕行て見ばやてふ心にてもよみしなるべしこの所みぬめと有つらん事次の歌をもてもおもへ卷十に三津能波麻備爾於保夫禰

爾、眞可治之自奴伎、可良久爾爾、和多理由加武等、多太牟可布、美奴面乎左指天、之保麻知豆、美乎妣伎由氣姿、於伎敝爾波、之良奈美多加美、宇良末欲理、許藝豆和多禮婆、和伎毛故爾、安波治乃之麻波、由布左禮婆、久毛爲可久里奴、云云敏馬浦の事は下にいと多く出たり【今本敏は奴となり馬と崎は崎のかたへの消たるを島の一字とせしなり】

珠藻刈、敏馬乎過、夏草之、野島之埼爾、舟近著奴、」

かく敏馬を過てと云てこそ淡路の野島をかけて漕事はいはめ上の歌に難波の三津をいひ且その沖の浪を恐み隱江の舟といひて野島にわたるてふ理あらんや此歌もてかの歌をもゑれ

今本こゝの左の注に一本處女乎過而夏草乃野島我崎爾伊保里爲吾等者と云は卷十に新羅への使人の誦へ誤しをこゝに引しなり總てそら唱にせしには違事多し妄に引て人まどはすめりよりて此次々なるも皆同しければすてつ

粟路之、　四言是を今本にあはみちのと訓しは古へよりこゝをば阿波治とのみいへるをもわすれ又古歌には四言の句有をもゑらでせしものなり六百年ばかり前の人も訓誤りたり

野島之前乃、濱風爾、妹之結、紐吹返、」　此紐は旅衣の肩につけたる赤紐なりと見ゆ其よしは別記に委しさて妹が結してふ一言に根なきあはれは有實をいへればなり

荒栲、　冠辭

藤江之浦爾、　和名抄に播磨國明石郡葛江(布知衣)

鈴寸釣、　古事記に栲繩之千尋繩打延爲釣海人之口太之尾翼鱸訓鱸云次受岐

白水郎跡香將見、　見るらんのるを畧例あり

旅去吾乎、」　一本に白栲之藤江能浦爾伊射利爲流

稻日野毛、　播磨なり

去過勝爾、思省者、　後世おもへるにといふ所を古はおもへればといへり

心戀敷、可古能湖所見、」　可古は播磨國の郡の名にて鄕にも可古川有紀應神に日向の諸縣の君が鹿の皮を着てこゝに船泊しより鹿子ノ水門といふと見ゆさて此歌は此國に名細く面白き所多きを船にて見放つゝ通るさまなり○今本此末の言を島所見と有て一本潮と有と注せりこゝに潮みゆとてはわろし潮は湖を誤しものとす此下の枚の湖てふを卷七に明旦石之潮にと誤て入し類なり今の島も湖を誤し事鹿子島といふは物に見えぬにてもゑれ

留火之、　冠辭

明大門爾、　明石浦の海門にて淡路との間をいふ今本是をなだと訓しは入といへるにもかなはず次の歌に自明門てふをも思ひ合よ

入日哉、　船こぎ入なん日にやなり然は野島の崎などに船泊て居る間に此歌はよみしならん

搖將別、家當不見、」　此大門に指入ては島がくれて大和方の山も見えず成なんを悲みたるなり又卷十に新羅への使人の歸さに「わきもこを行てはや見ん淡路島雲ゐに見えぬ家つくらしも」てふを打返し意得べし

天離、　冠辭

夷之長道從、　比奈は日の下てふ言なり都を天といふより其の餘の國は皆比奈なりくはしくは別記にいふ

戀來者、自明門、　右の大門なり

倭島所見、」　一云家門當見由これはいさゝか思はしからず○古事記に大倭秋津洲てふは今の大和國なるからに畧倭島といふさてこは歸るさに大和の山の見ゆるを悅べるなり【播磨の海に家島てふ島有につけて上の家のあたり見ててふを其島を云といひ且此倭島をも其海にあるや抔いふはいふにも足らぬ誤なりかの大門に入に家のあたり見でとこそいへ家島は大門を入てより見ゆるなり又歸るさにかの大門より東には島はなしさて卷十に豐前國に下りてしが中のいさゝ間にやまと島見んとよみしをおもへ次に武庫云云と有一本の歌は亂本にある歌の交入しと見ゆればすてつ】

武庫海、　今本こゝに飼飯海とあるはよしも無き誤なり卷十に此歌を誦たるに武庫能宇美能と有こそよろづかなへれば依ぬさてけふは都に近つけるに見る毎によろこばしく海の面さへなぎて武庫のあたりに到たるこゝちゑらる

庭好有之、　卷四庭淨奥方搖出云云海の上ののどかなるを今も庭よしといふなり

苅薦乃、亂出所見、海人釣船、」

○鳴君足人香具山歌一首幷短歌、

天降付、　冠辭

天之芳來山、打靡、　冠辭

春去來者、　或本によりぬ今本霞立春爾至者と有はいさ

さか後の言めきたり

櫻花、木晩茂爾、　今本こゝに松風爾池浪立而と有は言の前後になりしものゝなるけれは或本を用し訓は卷十八に多胡乃佐伎許能久禮之氣爾保登等藝須と有に依ぬさて此歌の次に二句落たるなるべし卷十五の寧樂の故郷をよめるに上に春爾之成者云云櫻花木晩窄貌鳥者間無放なきてふ如くかほ鳥はまなくゝばなきなど云事有べくおほゆ

松風爾、池浪立而、　埴安の池なり

邊津方爾、　四言今本にはこゝの四句も上下に在今は或本による

味村左和寸、　あぢ鴨の群てさわぐなり

奥邊波、　四言

鴨妻喚、　妻は借字にて米は牟禮約なり卷一にも此他にかまめをよみつ

百磯城之、　冠辭

大宮人乃、　こゝに高市皇子尊の宮の在しを薨まして後にさびしく成たるを見てよめるなり

退出而、遊船爾波、　或本榜來舟者

梶棹毛、無而不樂毛、己具人奈四二、」　或本榜與雖思とあるはいさゝか心ゆかず今本も遊しと云べくおぼゆれど玄か訓ては調かなはず遊ひたるを畧ける物とすべし

反歌二首、

人不榜、有雲知之、　あるを延て阿良久といふ

潜爲、鵜與高部共、　和名抄に鵜(多加閉)一名沈烏貌似鴨背上に有文

船上住、」　一本住人なきさまをうつし出せり

何時間毛、　間の下に爾を畧く

神左備祁留鹿、香山之、鉾椙之末爾、　續紀に杜谷樹八尋杵神名式に伊豆國杉杵別神社大嘗祭式に將レ柴爲レ垣押レ杵と有も皆若木の細く長きをほこといへり○今本には本とあれど末の字を誤りたる歟卷二に妹が名は千代になかれん姫嶋の千松か末に蘿生までにてふ蘿もひかげの事にて老木の末に生るこけなりさて木の末にひかげかつらのかゝるまで年經ぬるをいへるいまとおなじ

蘿生左右二、」　持統天皇十年高市尊薨まして後年を經てこゝに來て見るにもとは若木の椙の杵立なりしも木末に蘿蘿の生るまで古びしはいつの間にかく年を經去たるにかといふなり【杵椙を今本にむすぎと訓しはひが言なりむは字音の轉せし物としらずや○木の本に苔の生るは只一年の間にも有事なれば本とては叶ず且此こけは苔にあらず木末に生るこけなり○續紀の杜谷樹は比良の良は呂波の約にて比呂波良木の八尋と云ならん森或は谷など廣原の木の最よくのびし杉を稱て廣原木彌廣とたとへ冠せしと覺ゆ】

今本こゝに注あれど誤りたるなり別記にことわりぬ

○柿本朝臣人麻呂獻二新田部皇子一歌一首幷短歌、

八隅知之、吾大王、　六言

高輝、　五言

日之皇子、　四言此書既にいへり

茂座、　敷の誤ならんかといふ説もさる事なれど言の同しかれば敷の言に借て書なり

大殿於、　於をうへと訓は集中に多し

久方、　冠辭

天傳來、　そらより流れ來るを云

白雪仕物、　じものは上に出今本白を自に誤る一本により改

往來乍益、　益は借字にて在なり

及萬世、」　今本萬を常に誤りてとこよなるまでとよみしは理なく言も古へならず往來とは此皇子の家は八釣に在て藤原の宮へ通ひ給ふを云下の石田王卒時の長歌にも似たる言ありさて今日は此八釣におはせるに人麻呂ふる雪を玄のぎて參てよめり

反歌一首、

矢釣山、　紀(顯宗)召二公卿百寮於近飛鳥八釣宮一卽二天皇位一と見えたりさて此宮所の跡は十市郡飛鳥の社五町ばかり東北に今もいひ傳て有

木立不見、落亂、雪躍、　【雪躍撮要抄】今本驪とあるは黒馬の事なればかなはず一本鸛と有もよしなし仍て躍ならんかこはから文に(漢書)躍レ履起迎注履不レ著レ跟曳之而行也言甚遽也といへれば雪のふるにいそぎほひて參たる意を玄らせて躍の字を書しならん歟

朝樂毛、」　朝は公にいふ言を借て參來るてふ意なり樂も良久の言に借たり來留の留を延て良久といふも樂を良久の言に借し例多し下に夜渡月競あへんかも卷十九に落雪を腰爾奈都美氐參來之云云○雪もはだらにと訓も或本に雪とはだれのあしたたのしもと訓も共に强言故に言のをさまらぬなり

○刑部垂麻呂從二近江國一上來時作歌一首、　今本の字は上下に成ぬ例又標によりて改

馬莫疾、打莫行、氣並而、見氐和我歸、　氣並而は齡の坂を經て此浦を又見に來ん我身ともたのまれねばなごり思はるゝなり和我歸は京へかへり來んといふなり【氣並而、久老はけならべてとよめり此けは岐閉の約にて日數をならべ重るを云記にあら玉の年が來ふればあら玉の月は岐閉由久と有】

志賀爾安良七國、」　吾命之、眞幸有者、亦毛將見、志賀乃大津爾緣流白浪と此下によみしよりも垂麻呂は老て又見ざらんとなげくならん

○柿本朝臣人麻呂從近江國上來時至、　此字はからさまに置しにてこゝのこと葉に用なしよりてよまず河邊に

の爾にあたると心得てよし

宇治河邊作歌一首、

○物乃部能、　冠辭

八十氏河乃、阿白木爾、　あじろは水上の方を廣く下を狹く百千の杭を左右に打並て網を引く形なれば網代といふ【杭を狹く打たる下のはてに床を構ふ其左右の杭にせかれてさわぎ入波に隨て氷魚が波床の簀の上へ寄を取なり此かた古き繪に見ゆ】

不知代經浪乃、【いざよふは下に言ゐなす心いざよひとよめるも山の雲の立もさらずやすらひつゝあるにたとへたり】

去邊白不母、」　其あじろ木のうちへいかめしく打入てさわぎ滯りてある白波の網代木をもり行下は忽にさりげもなきを行方へ去らずといへりけふはことゞゝしきもあす去らぬ人の世にとれるならんかの忽にあらされし近江の宮所を見悲て歸る時なればことにはかなき世の中をおもふべし卷八に卷向之、山邊響而往水之、三名沫如、世人吾等者ともよみつさてゆたかにして雄々敷直くしてあはれふかきはこの人の歌なり

○長忌寸奥麻呂歌一首、

苦毛、零來雨可、神之埼、狹野乃渡爾、家裳不有國、」

卷八神前荒石毛不所見浪立奴從何處將行與奇道者無荷てふ同じ所ならん同卷に志長鳥爲奈野をくればありま山夕霧たちぬ宿はなくしてとよめるに慨は同じかれど今はとに高しく聞ゆるも地のさまおもひはからるゝなりさて狹野てふ所は紀(神武)に遂越二狹野一到二熊野神邑一とあるによるに下に秋風の寒きあさけを佐農の岡こゆらん君に衣かさましをと有も同く記伊國牟漏郡なるべし熊野あたりの形書たる物を得たるにみわが崎てふ所有又或人そこの近き所に佐野てふ所も有といへり

○古へは農濃の字はぬの假字にのみ用ゐつ野も古へはぬといへり故にこゝは共にぬとよみつされど奈良朝に至ては野は乃といひしと見ゆれば從て訓る所もあり【後世大和の三輪をのみ聞居たる人そこの事とするよしこゝに崎といひし事もなく佐野てふ名も聞えずそれよりも藤原の都の時に三輪の里は家居も立つゞくべきを此都人の奥麻呂のいと近き所にて此歌をよむべきかは○神之崎加美の佐岐とて訓美和のさきとよむはひが事なり神とは其所を恐みて云なりと羽根の眞淸いへり】

○柿本朝臣人麻呂歌一首、

淡海乃海、夕浪千鳥、　うるはしきことばなり

汝鳴者、情毛思努爾、古所念、」　こゝに來てむかし去ぬばるゝをりに千鳥の鳴音聞ばいよゝ心も去なえうらぶれて悲しきなり○心も去ぬにとは心の愁へ去なゆるをいふ後人去のと去〻とを同じこと、思つるは誤れり小竹を去ぬといひすゝきの去のなどの類は去なえるなり木草に去〻に生たる又眞梶繁ぬきなど都去み、に去みさびてふもおなじく茂きなり集中をよく見て知べし【去なえの奈延の約禰なるを轉じてぬとも又のともいへり】

○志貴皇子御歌一首、

牟佐佐婢波、　卷十五に高圓山によみつ此獸の事別記にいふ【第七卷に三國山木末爾住歷武佐々婢乃待鳥如吾俟將瘦此歌によれば今本のまゝにて可然○鼯鼠、和名抄曰、狀如レ猿而肉翼似二蝙蝠一、能從レ高下不レ能二從レ下上一、常食火烟、或云犬の子に少大しと云り】

木米、求跡、　こは木にすむ物なれば更に梢もとむといふべからず今本の末は米の誤去るかれば改むされども古今六帖にもこずゑと有はやく誤りしならん

足日木乃、山能佐都雄爾、相爾來鴨、」　人の强たる物ほしみして身をほろぼすを譬なふなり有馬大津の皇子たちなどの事見給て去かおもほすか

○長屋王故郷歌一首、　高市皇子命の御子佐保大臣と申すは是なり

吾背子我、　こは誰ぞ皇子たちなどをさし給ふべし

古家乃里之、明日香庭、乳鳥鳴成、君待不得而、」　今本

君を島に誤此王故郷明日香に有て行給へる時他皇子などの故郷もそこに在故にかくよみて今の藤原の都へ贈られしならんあすかは後の岡本宮まで六代の都なりしかば彼志貴の皇子の袖ふきかへせとのたまひし類多し

今本左に注あれどいふにたらず

○阿部郎女屋部坂歌一首、【姓氏錄の河内國の諸蕃に八戸史あり其次に高安造を八戸と同祖といへり是に依に屋部坂は河内國ならん】

人不見者、　今本左のびにはと訓しはかなはず【人不見者一說に人爾有者の誤かと云り】

我袖用手、將隱乎、所燒乍可將有、　也加禮の加禮の約氣なればやけつゝといふ故に所燒と云つ

不服而坐來、」　今本こゝを來來とあるは上の來は坐の誤玄るかれば改さてこは草木なくて赤はだか山なるを見て衣はやかれてかあらん著ずしてをりけりそを玄のびかくさんともおもはゞ我袖をだにおほひなんものをはち隱すさまともなきと戲よみしならん

○高市連黑人羇旅歌八首、

客爲而、物戀敷爾、山下、赤乃曾保船、　卷六に麻可禰布久、爾布能麻曾保乃、伊呂爾低氐とよめる是にて赭土の名を曾保爾といふなりさて其曾保爾もて赤くぬりたる船をかくいへり卷三に左丹漆の小船毛鴨卷十六に奥去哉赤羅小船また卷三に忍照難波乃埼爾引登赤曾朋船など皆おなじ

奥榜所見、」　丹漆の船は官船なり然れば國司などの都へ上るとて今山下を出て奥へ榜行を見ていとゞ都戀しくうらやましきなるべし奥へこぐてふ言下に例多し

櫻田部、　尾張國年魚市郡作良の郷の田なり何ぞなれば卷八に年魚市方鹽干にけらし知多乃浦爾とよみ和名抄に同國愛市郡に厚田、作良、成海の郷あり且其年魚市と知多はつゞきたる海邊なれば此さくら田の所も明らけしさいばらに「さくら人その船ちゞめ島つ田を千町つくれる見てかへりこん」とあるも地のさまなど同じ所なる事玄るし【或人此櫻田を紀伊國といへるは此八首の並をも思はざるものなりさくら人てふをも誤れる說有】

鶴鳴渡、年魚市方、　此所は紀に多く見ゆ市は音便にて濁り方は潟なり

鹽干二家良進、鶴鳴渡、」　上の言を再いふ例既書四極山、打越見者、　【和名抄に三河國幡豆郡磯泊（之波止）と云も有】四極山は卷十五に難波へ幸の時從千沼田、雨曾零來、四八津之白水郎、網手綱乾有、沾將堪香聞とよめり千沼は和泉國也（紀にも集にも多出）四極は攝津國なり紀（雄略）吳機織等之住吉津着在ときに此月爲二吳客一道通二磯菌津路一名二吳坂一とあれば此國の西成郡に在山なる事玄るし猶委くは古き難波の圖をもて別記にいへり○笠縫の島も其見ゆる海邊を埋て畑としたれば今は分ちなし齋宮式に御輿の料の菅骨など攝津笠縫氏が參來て作といひ其外にも同笠縫氏をめす事の見ゆるは彼島より出る故に氏の名とも成にけん

笠縫之、島榜隱、棚無小舟、」　勝れたるけしきの上に小舟の島榜かくるゝほどのさま今見るが如し同し人かゝるさまをよみし歌下にも出古今集の「浦こぐ舟の綱手かなしも」てふも思はる

磯前、　【いそのさき〳〵とよみしもあれはいそのさきと訓へし

榜手回行者、近江海、八十之湊爾、　卷三に近江海湊八十在ともよめりさて八十は彌十にて數の多を云

鶴佐波二鳴、」　鶴はくゞひの事ともすれど此歌にはこともなく鶴に用ゐたり唐文にも二かたに用ゐし有○佐波は多きなり既にも書たれと猶いふ

吾船者、枚乃湖爾、　今本枚を牧に誤る

榜將泊、　志賀郡比良の湊

奥部莫避、　【卷九に奈佐何里と假字有】とほざかる事なかれてふをかくいへり

左夜深去來、」

何處、吾將宿、高島乃、勝野原爾、　卷八に大御舟、竟而佐守布、高島之、三尾ノ勝野之、奈伎左思所念ともよみ和名抄に高島郡に三尾郷有り勝野もそこなる事玄らる

此日暮去者、」

妹母我母、一有加母、三河有、二見自道、　三河國にも二見ちふ所あるならん

別不勝鶴、」　漆に膠をまじへて分ちがたき譬に似たり○黑人は三河の任などはて、大和へのぼる時よしありて尾張近江山背攝津をめぐりて歸るへければ妻は直に大和へ歸る時の別れををしめるならん次に妻のこたへに獨可將去といへるもて思へ

一本に三河乃（四言）二見之自道別者吾勢毛吾毛獨可將去、是は妻の和たる歌なり然れば端に黑人歌八首

と云るせし中に載べきにあらず思ふに此八首の次に高市黑人妻和歌とて此歌有つらんを今本には脫一本には亂てこゝに入つらん

速來而母、見手益物乎、山背、　此國は本かく書ぞ理りも聞ゆるを延曆十三年より山城とかゝせらる

高槻村、　こゝに國を擧ぐ又姓氏錄に高槻氏あれば里の名なる事云るし

散去奚留鴨、」　こは花か赤葉か花といはで咲といへる類ひ古への常なれはなりされど卷三長歌に百不足、五十槻枝丹、水枝指、秋の赤葉とのみしてはやがて槻のもみち葉の事なりとせん

○石川郎女歌一首、　【古本には水郎と有かく字の重々誤なるは心せずはあるべからず】今本少郎と書てたの注に石川の字ぞといへるは甚しきひがことなり別記に云こは必女の類なるを男女の歌の分ちをだに見云らずや

然之海人者、　紀仲哀に磯鹿海人筑前風土記に糟屋郡資珂島てふ皆同し

軍布苅鹽燒、　和名抄軍布は荒海布をいふか又昆布の字を誤りしか昆布は西の海に無けれど借て出べし

無暇、髮梳乃小櫛、　髮梳はことわりもて書つ實は櫛笥なり

取毛不見久爾、」　此郎女父が使などの任に云たかひ來て云かの浦のあるを見て使によせて我うへをよめるならん只海人がさまのみ云にはなし

○高市連黑人歌二首、

吾妹兒二、猪名野者令見都、　和名抄に攝津國河邊郡赤奈鄕あり

名次山、　神名式に武庫郡名次神社有

角松原、　和名抄に右同郡に津門鄕有是歟杼と能と奴は清濁も言も相通例なり卷十七に海原通女伊射里多久火能於煩保之久都努乃松原於母保由流可聞てふ上に武庫のわたりとよめるも有【今武庫郡の西宮ちふ里の北東の方に名次山有角の松原の路も其北方に在古は其邊迄入海にてありしを今は埋れたりと彼西宮に千足眞事とて古事好む人の指さして敎たり】

何時將示、」　海邊のいと面白き所なりけん黑人こゝに來てまた妹に見せぬを思ふは旅の情なり

去來兒等、　此言卷一に憶良のよみし是によりしにや

倭部早、白菅乃、　卷八にも白菅眞野乃榛原とよめりさて白菅も地の名なるべし何ぞなれは遠江の濱名の橋本の里より西に白須賀ちふ驛有そこを後の人の歌に白すげの湊とよめるはこゝの言によりて强言せるなるべし土人は濱のすけを濱すが白砂を云らすなといへり是をおもふに此白菅も云らすがにて地の名なり又或人白菅は眞菅なればその眞を下へめぐらして云らすげの眞といひかけたり冠辭かといへどおほつかなしと眞淵いへり猶淸良諸成案に菅には姫菅野菅山菅など數多の中に此白菅のみさらしかわかして笠にも縫なれば白菅まことの菅なれば眞菅とはかさねけんさてこゝの歌並も攝津國猪名野をいひて其次なれば他し國なるべからず大和に近き攝津國の眞野萩原に疑なく殊に笠縫の邊も有て笠縫氏もあなるに合見れば白すけの眞とかけ榛原まてはかゝらぬ歌のいひ下しなる事うたかひなからんものなり

眞野乃榛原、　卷四に眞野浦眞野池などよみし皆同じ所にて攝津國八部郡に在といへり猶考べしさて卷八に旅歌とて古爾有監人之兎乍衣丹摺拳眞野榛原てふをおもふにいと古へより名有所のはきなれば黑人も家づと、思ひつらん榛は借字なる事既にいへり

手折而將歸、」

○黑人妻答歌一首、

白菅乃、眞野之、榛原往左來左、　諸成案に左は次良の約にて其次良は其まゝちふ言にて往まゝも來まゝもといへるなり

君社見良目、眞野之榛原、」　黑人の手折てゆかんとはよみたれど贈るに堪ず歌のみおこせつらん仍てかくこたへしけんかし

○春日藏首老歌一首、　此人の事既出

角障經、　冠辭

石村毛不過、　【石の群たるを石村とかきしはいはむらと訓此地の名をはいはれといふなり後世共にいはむらと云誤なり】石村は十市郡なり是をいはれと訓は用明紀に館於磐余曰池邊雙槻宮と有同宮を續紀には石村池邊と書又紀に磐余彥と出たる同事を古事記に伊波禮比古と有など合て知さて飛鳥より東北に今もいはれ山と云あり

泊瀨山、何時毛將超、夜者深去通都、」　ふけにはふけいつゝの畧なり老は本僧なりしを大寶元年に官人となし給へばこは藤原都より出て行か又奈良の都となりて

の事かさても暮過るほどの道にあらずまして藤原よりは近しよし有ておそく出て暮ぬるにや又藤原よりも奈良よりも初瀬山越て宇多野の方へ行んには石村を經ん事まはり遠くや兎角におぼつかなしもしいまだ僧の時の事なりしを後に聞て姓名を玄るしたる歟さる例多きなり

○高市連黑人歌一首、

墨吉乃、得名津爾立而、　和名抄に住吉郡攝津(以奈津)とあるは其比の俗なり【和名抄墨江郡榎津、以奈津、と有は書寫の誤にて其頃の俗と云べからず武藏國男倉郡の榎津は衣奈津と有りて其誤しを知】

見渡者、六兒乃泊從、出流船人、」こは上の爲奈野なとの歌と同じ度にても有ぬべきを異度に聞てこゝに書しか

○春日藏首老歌一首、　こは官人となりて後駿河の國の任などに下りし時歟

燒津邊、吾去鹿齒、　紀(景行)に日本武尊駿河國に到て獵し給ふに夷ども其野に火をはなちたるを尊劔をもて草をなぎ向へ燒つけて却て夷を燒亡し給ひしより其所を燒津と名つけしといふなり【和名抄に駿河國益津郡も益津鄕も萬之津と唱てあれど神名式に此郡に燒津神社あると下に引景行紀の文とを合ておもふに益津はもと也伊豆てふ言に植しなり和名の比既誤しなり益はやの假字に用ゐし事佐益郡と續紀にあるをや】

駿河奈流、阿倍乃市道爾、　和名抄に此國の阿倍郡に國府有又今の府中の西のはてに阿倍川といふ川あり然れは阿倍の市は卽今の府中なりけり○燒津は府より南の海邊にあるなり

相之兒等羽裳、」　卷五に紫者灰指物曾海石榴市之八十衢爾相之兒哉誰といへるたくひ多し

○丹比眞人笠麻呂往二紀伊國一超二勢能山一之時作歌一首、

栲領巾乃、　冠辭

懸卷欲寸、妹名乎、此勢能山爾、懸者、　懸負せばなり

一本可倍波伊香爾安良牟と有は直に聞ゆされど懸者も理有て古きいひなしにこそあれ

奈何將有、」　これも紀伊へ幸の度ならん笠麻呂も老も從駕にて此山こゆる時故鄕の妹がことはさらでも戀しきに若此背ちふ名をかへて妹ちふ名を此上にかけて呼ばいかなる心ちせんずらんとはかなくゆくりかにおもへる事をかく問なり

○春日藏首老卽和歌一首、

宜奈倍、　既出

吾背乃君之、　笠麻呂をさす

負來爾之、此勢能山乎、妹者不喚、」　妹戀しらはゑかながらよろしき吾背子が負こし背ちふ山の名こそうつくしまるれ更に妹とかへん事はおもはずととりなしたり

○幸二志賀一時石上鄕作歌一首、　紀(元正)養老元年九月美濃當耆郡へ幸の御かへさに近江の海を見ませしことあり其度にやと思ふを石上麻呂公は既に今年三月に薨せし事同紀に見ゆればその度ならで文武天皇の御時などにもこゝの幸有しにやおぼつかなき事なり【此集に卿と書は大臣大納言などなりさて文武より元正の御始迄に石上氏にて卿と云べきは麻呂公の外はなしよて今本名下に名闕と有はいふにもたらぬ事なり】

此間爲而、家八方何處、　大和の京をいふなり

白雲乃、棚引山乎、超而來二家里、」　大和より近江の湖までには他國を隔て高山ども數ゑらず重れり

○穗積朝臣老歌一首、　此人奈良宮の始の紀にあまた見ゆ是も右と同し度なるべし

吾命之、眞幸有者、亦毛將見、志賀乃大津爾、緣流白浪、」

よきけしきに向て命を思へる歌ども集中に多し上の垂麻呂の歌の類なり

歌の左の注はいふにもたらず

○間人宿禰大浦初月歌二首、　此人の事ゑらずくらはし山を出る月を待なれば藤原都人なるべし

天原、振離見者、白眞弓、　檀の木は白ければいふ白檀といふが如し

張而懸有、夜路者將吉、」　一本對去と有は言おだやかならず

椋橋乃、山乎高可、　くらはし山は十市郡の東のはてにて惣て宇多郡を隔つる山並の中に此嶺ぞいと高くて玄ら雲のゐぬ時もなきなり【今の土人此嶺をおとは山といふは麓に音羽村てふ村有故なり又そこに倉橋村てふも今ありて卽崇神天皇の倉橋の宮の跡も同じ御陵もそこに在】

夜隱爾、　卷十一に夜窄爾と書しも同じくて夜の内にてふ言なりさて卷十三に月しあれば夜波隱良武とよめるは明日時にいひこゝは初夜にて云なり此夜隱をも池の名といふは誤ぬ

出來月乃、光乏寸、」　夕月の比なればいとまだきよりゆべきに夜をこめて出來る月の光のかすけきとなりく

らはし山の高くて隱ればにやといふなり卷十一に此歌を沙彌女王の歌とて末を片待難とありこは夕月とは聞えず夜に入て月のおそきを待に堪ずして倉橋の山の障るにやおそきといふにて是は心明らかなりこをおもひ合すれば右に夕月乃歌とせしはことわり鮮ならぬところあるめり卷十一の方を正しとす

○小田事勢能山歌一首、【六帖に事主と有】小田臣は續紀に出づ事は考がたし是を標につかふと訓しは推はかりなるべけれど異考もあらねば暫玄たがふなり

眞木葉乃、　檜の葉なり

之奈布勢能山、　檜の枝葉は玄なえたはめるものなり

之奴波受而、　こは故郷の事を思ふに得玄のぶに堪ずと云なり卷四に吾妹兒乎聞都賀野邊能靡合歡木吾者隱不得間無念者これ上に玄なひといひて下に玄のばすといひ且隱不得と書しなどもてもこゝと同し意なるを玄るべし

吾超去者、木葉知家武、」　わか玄のぶに堪かねて身も心も愁玄なたゆひ越ゆくを此眞木の葉も知けんかれも玄なえつゝあるはと云なり○玄のぶと慕は本同言にてあれば檜の枝のさまと吾心とをいひむかへたり卷八にて雲のたな引山の隱たるわが心をば木の葉玄るらんちふをおもへ歌は解誤れる人多けれはくり言云なり○志奈布は志奈延多由布を略

○角口麻呂歌四首、　紀(元正)角兄麻呂てふ人二所出たりこゝは兄の字脫しならんされどいさゝか思ふ事有て直にはあらためず

久方乃、　冠辭

天之探女之、　神代紀に阿麻能左愚謎

石船乃、　一本鳥船とあり船は凡鳥に譬て名付るなり石船は石くす船とて楠木もて作てかたきをほむるなり

泊師高津者、淺爾家留香裳、」　或人攝津風土記を引て難波高津は天稚彦の天くだりし時つきて下れる神天探女磐船に乘て此に至る天の磐船の泊し故に高津と號く云云といへり此事を古へよりいひ傳ふる所なればこの歌にもよみしならん○古き難波わたりの圖を見るに高津は西の入江によりてあり今高津といふは後のわざなり

鹽干乃、　四言今本玄ほかれのと訓しは古ならず

三津之海女乃、　難波のみつなり【記、仁德大后大恨怒、載二具御船一之御綱柏者、悉投二棄於海一、故號二其地一謂二御津前一也、】

久具都持、　藁して袋の樣なる物作りたるに藻草などとり入るぞと或人もいへり田舍にてさる形のものをくゞつと云めり【うつぼ物語に、中納言はきぬあやを糸のくゞつに入て供養のやうにて三所ばかり奉り給ふ】

玉藻將苅、　幸行見、」

風乎疾、　奥津白浪、高有之、海人釣船、濱眷奴、」　眷は借字

清江乃、木笑松原、　木笑は借字岸之なり

遠神、　既出

我王之、幸行處、」　みゆきし所とよみしはわろし

○田口益人大夫任二上野國司一時至駿河淨見埼作歌二首、　紀(元明)に和銅元年三月從五位下田口朝臣益人爲二上野守一と有

庵原乃、　神名式に庵原郡に御穗神社といひ此歌にも見穗とあるをもて見れは郡もいほばらなりけんをかの二字に約められし時庵とはせしなるべし和名抄の比には其字につきていへる上にもあり

清見之埼乃、見穗乃浦乃、寛見乍、　【卷二十海原乃由多氣伎見都々】

物念毛奈信、」　向に見ゆる三ほの松原より此方實にゆらかなる入江のさまを見て旅の愁をなぐさめたるなり畫見騰、不飽田兒浦、　右の清見か埼を浦傳ひに東へ行て山下の礒通を通行あたりの入海をすべて田兒浦といふなり下の赤人の歌にくはしくすまことにすぐれたるけしきなり

大王、命恐、夜見鶴鴨、」　官人の驛馬を給て行に日程定あり且古へ驛次は遠ければ夜をかけて行ことあり【公式令に毎三十里置一驛といへり其三十里は今の五里ばかりなり】故にかくよみたりさて清見か崎は夕くれに通田兒の浦をは夜に入て行つらん

○辨基歌一首、　此僧は既いへる如く大寶元年に勅して官人とし且春日藏首老てふ姓名を給ひしかば此卷の上に既に其姓名の歌三所に出たるにこゝにしも却て僧名にて有は前に僧の時の歌を今聞得てこゝに載たるものなり然れは右の益人の東へ下りしよりはいと前の歌なり是私の集所さだめず書加へし事を玄るべきなり

亦打山、暮越行而、庵前乃、角太河原爾、獨可毛將宿、」　仙覺は是をも紀伊國とせり思ふに角田川ちふ所はかたがたに在は紀伊にも在しならん眞土山はそこにこそ名高ければ專らよるへき事なりそれが上に此下に有三保

の石室は紀伊なるをおもふに此庵前を三保崎とよみて夕みほと同し所ともすべきか或人此角田川を駿河に在といへるは清見か埼の歌に並ひ載て庵原庵前の名の近きに泥みて辨基の僧俗の時代を思はで誤りしなり【角田川てふ名は古今歌集に武藏と下總のあはひといひ古今六帖には出羽なるあをとの關のすみた川ともよみつ然ればこは紀伊の角田川とすべし】

○大納言大伴卿歌一首、　旅人卿なり天平二年十月に大宰帥より大納言に轉

奥山之、菅葉凌、　山菅の繁き中を凌をかして雪の降入をいふ卷七に木葉凌而霞霏霏ともよめり

零雪乃、消者將惜、雨莫零行年、」　行年は借訓にて來曾と云なり

○長屋王駐馬寧樂山作歌二首、

佐保過而、寧樂乃手祭爾、　佐保過てといへばこは奈良坂の上にて旅の手向し給ひしなりかく都出てはしめて誰も手向する故にそこを手向山といふなりけり古今集に手向山もみぢの錦とよめるもこゝなる事玄るし卷十五に近江の相坂にて手向山とよみ卷十に三越路の多武氣爾たちて卷十七にとなみ山手向の神にぬさ奉りとあるも同じ意なりけり【後世山上をたうげと云もさる所にては手向して行より轉せるものと契冲がいひしはさる事なりこゝに引卷十の歌は卽山上の事を云とも聞ゆさらばはやくよりさもいひしならん】

置幣者、　幣は絹布なりさて枝にも著又案の上にも置なり卷四にもあはなくに夕けを問と幣に切我衣手はともよみたるなとをもおもへ

妹乎目不離、相見染跡衣、」　道の神に手向するは旅路につゝかなからん爲なりさてつゝがなく行歸りて妹を常に見せしめ給へといふなり卷十七長歌に戸並山へ手向の神樂幣奉吾乞祈ばはしけやし君が直香をま幸も畧相見しめとそ、このこゝろなり【今京となりては旅には絹布をこまかに切て袋に入てもたるをさるべき所々にて打散し手向て通る事とせり物の實は今京の始より失はれしなり】

磐金之、　磐の根なり

凝敷山乎、　今こり玄くと訓て玄くは敷を正字と思へるは後人の意なり卷八に磐根凝敷三吉野之又石金之凝木敷山爾この卷に極此疑伊與能高嶺乃卷十七に許其志可毛伊波能可牟左備なとこそよみたれたゞ敷は借字にて

ことはのみなり

超不勝而、哭者泣友、色爾將出八方、」　旅路の有さまより轉して忍びに思ふ妹が事にいひうつせしにやあざやかならぬいひなしなり

○中納言安倍廣庭卿歌一首、　紀神龜四年十月中納言に任天平四年二月薨右大臣卿主人の子と見ゆ

兒等之家道、差間遠鳥、　【古本に差母遠鳥】

野干玉乃、　冠辭

夜渡月爾、競敢六鴨、」　月の入むまでに吾も行らんかと云なりあへんかは堪むかなり

○柿本朝臣人麻呂下二筑紫國一時海路作歌二首、　此人上の八首にも播磨あたりの歌も有西の國にめくらかに行て玄かも古事多き所々の歌のなきは傳らざるにやあらむ

名細寸、稻見乃海之、奥津浪、千重爾隱奴、山跡島根者、」

稻見の沖に漕出て今は大和の山々も見えずなりて浪のみ遙に立わたるを浪に隱るといひなせるがあはれなり上に明石の門より倭島みゆとよみしと同じ旅なるか

大王之、遠乃朝庭跡、　御食國をは惣てみかどゝいへり卷十に新羅への御使人すめらぎの遠のみかどゝから國に渡る吾背はとしもよめりさて此度は筑紫をさしていふと見ゆ

蟻通、　蟻は借字むかし今つくしなどへ通ふとて船よする島門といふなり

島門乎見者、　卷上に同人讃岐國歌に天地乃月日共爾滿將行神乃面跡次而來留中之水門由船浮而とよみし所をいふなるべし往反の船今もこゝによると云へり

神代之所念、」　二御神の生ませし此島のいはれを思ふなり委は卷二にいへり

○高市連黑人近江舊都歌一首、

如是故爾、不見跡云物乎、樂浪乃、舊都乎、令見乍本名、」

見なば悲しかるべし否といひつる物を吾をゐて來てよしなく愁しむるといふなり黑人は仕ふる所見ゆれば此國へ事につきて來し時の事なるべし且上にあるとは異度か同じきにや

○幸二伊勢國一之時安貴王作歌一首、　紀(聖武)に天平十二年伊勢の幸有り此王は同元年三月從五位より立後あまた紀に見ゆるなり

伊勢海之、奥津白浪、花爾欲得裹而妹之、家裹爲、」　つととは藻裹薦裹などいひて物を包たる事なり海山の物

はさる物につゝみて人にも贈り家へ取もて來る故につと、いへりそれを轉じてつゝまぬ花などをもさる度なるをばいふ事に成ぬ集中には山つと濱つと道行つと、もよみつ

○博通法師、　傳玄らず

往二紀伊國一見二三穂石室一作歌三首、　或ものに紀伊の日高郡に此石室有といへりよく知る人に問ばや

皮爲酢寸、　冠辭

久米能若子我、伊座家牟、　今本家留と有よりも一本をよしとす終の言も今は雖見不飽鴨と有は此歌の言に似ず

三穂乃石室者、雖見不飽鴨、」　これも弘計の命の御事かと冠辭考には書しかどさらば住ける人昔の人などなめげにはよまじかし久米仙人こゝに住けんよし物には見えねど土人のいひ傳ふるまゝよみしにやとおもひなしぬ【久米若子は袁祁の王の更名にもあるもてそれぞと本居のいへるはわろし】○皮は借字にて旗の事ならんかと冠辭考にいひしを猶思へば穂をはたに含ゆゑに波太と濁りさて籠といふ心にて久米にいひかけしならんと覺ゆかくてはなすゝきといふも花の心ならで太の濁りと奈の清と通ふ例なれば同じく皮の意にて波奈といふべき事なり然らば紀にも集にも幡旗など書しは借字とすべし集にはあだに戀をはなに戀ふといひしも多く隔つをへなつなど通しいへる例あればなり此事猶いかがあらんこは眞淵の考なり此事は卷八の前記に委くいふなり

常磐成、　【成は爾有ちふ言に借しなり】

石室者今毛、安里家禮騰、住家類人曾、常無里家留、」

石室戸爾、　戸は門なり【戸は外の意歟】

立在松樹、汝乎見者、昔人乎、相見如之、」

○門部王、　和銅六年正月從五位下より立てくさ〳〵の官位を歷て天平三年從四位上そのゝち姓かばねを賜しと見えて右原眞人門部卒とあり猶集中にも其よしに見ゆ

眺二東市之樹一作歌一首、　今は東の上に詠とあれど下に作の字有からは誤玄るし眺なるべし試に改む紀(雄畧)に餌香市邊橘といひ卷二に橘の本に道ふみ八街爾とよめるがごとく都の大路に草樹を植られしかば是も子なる木なりけり

東市之、殖木乃木足左右、　卷六に鎌倉山乃許太流木乎

といへるも老木の枝の下たるをいふなり

不相久美、宇倍吾戀爾家利、」　九言卷三などに九言の句多し古人は物に泥ぬ故三言より十言までの句あまた有也今本にあはぬ君うべと訓しは誤なり君を久美と書しこともなくうへを玄か樣に書ける例もなきなり○上に「いつのまに神さびけるか香山の梓杉がうれに蘚生までに」其外かゝる歌多しさて此歌は相聞なり聞得しまにこゝにかき載たるなり

○鞍作村主益人從二豐前國一上京時作歌一首、　紀(推古)に鞍作ノ鳥てふ人秀たる工といひ其父は多須那祖父は司馬達といへり本歸化の人なりけり益人も此末にやあらん【村主のかばねをすくりといふ事、和名抄に伊勢國安濃の村主卿を須久利と有からは古へよりの言なり、さて姓氏錄に、諸蕃の氏にのみ此かばね有、鞍作も本異國人故玄かる歟】

梓弓、　冠辭

引豐國之、　ひきとよむかといひつゞけたるなり今本ひくと訓しは理なし

鏡山、　下の挽歌にも豐前國鏡山と有

不見久有者、戀敷牟鴨、」　戀しかるらんかなり加良の約加なるを氣に轉じて氣牟といふ例下にもあるなり

○式部卿藤原宇合卿被レ使レ改二造難波堵一之時作歌一首、　今より後天平九年八月の紀に參議式部卿兼太宰帥正三位藤原朝臣宇合薨太政大臣不比等第三子也と見ゆ

○宇合はうまかひてふ言なるを字をかりて宇合と書たり【宇合を後世人のうあひと訓は徐りに古へ玄らぬわざなり惣て古人の名は古への言をよく玄らで訓はひが言なり】か、る例古へ多しとのよしは天平十二年の紀に太宰少貳藤原朝臣廣嗣が僧正玄昉と下道朝臣眞備を除んといふ表を奉りて却て罪せられし時の詔に許二新其父故式部卿一と見え又廣嗣式部卿馬養之第一子也とありて此式部卿馬養は宇合と同しき事紀を見る人知べし紀を考るに神龜三年十月此卿知造難波宮事に任て天平四年三月此事なりたり其時よみし歌なりけり

昔者社、難波居中跡、　【ゐなかてふ言に田舍の字を用るも同意ぞ】居中は田居之所てふ言なり田を畧く奈は之に遣ひ加はところをいふ在所の加に同しさて田居とは里人常に住る里作る田所は遠ければ秋は其田所に假庵を作り居て稻を苅干とりをさめ給ひ後本の里へは歸りぬ此居る所を田居といふなり是ぞ國人の業の專らな

る故に惣て都の外の國々を田居之所とはいふなり

所言奚米、今者京□□□備仁鶏里、」 今本に今者京引都□備仁鶏里と有ていまはみやびとそなはりにけりと訓たるはわろし何ぞなれば都を古へ登の假字にせし事なく又其都の下に字を闕て有は落字有し故なるを捨てよみしも強たり備を此歌にてそなはりと訓も此歌にては古ならず聞ゆ又惣ては宮人そなはりにけりてふ意に訓と見ゆれど此時はやく〳〵造成しのみにて幸などのあらぬ前に宮人のそなはらんよしもなしかゝれば今考に引は師の書の消しなり都は跡の誤彼闕には柔の字を補ていまはみやことにぎはひにけりと訓つ【契冲今者京引、都備仁雞利、右の如訓なれば今本のまゝに助け置なむ】卷十五に難波へ幸の時の反歌に荒野良爾、里波雖在、大王乃、敷座時波、京師誌成奴、卷一に藤原より奈良へ都をうつさるゝ時の長歌に柔備爾之家乎はなれてそが外にも言ともよしと有て改たりにきびともにぎはびともいふに備の假字を共に書しをも思へ且にぎはひとは物のよく調ひたるをいひてこゝは宮造りの成ととのへる事なり○宇合卿神龜三年十月に此勅を奉て天平四年三月に終ぬ其間六年ばかりに功なりし自のよろこびに堪ずてよまれけん意おもふべし

○土理宣令歌一首、 此人は紀に養老五年正月詔ニ刀利宣令等一令ノ侍東宮と見え懐風藻にも此人の詩のりたり【此姓は姓氏錄にもれたり】さて宣令てふ名はいかにとなへけん此比は字音のまゝいひし名も多く其中に陽侯史令珍同令住などは必音に喚と見ゆればえばらく從へり猶考べし

見吉野之、瀧乃白浪、雖不知、語之告者、 告とは書しかど心は繼者なりと或人のいへるによるべし

古所念、」 吉野は上つ代より古事多き中に常に幸ありし蜻蛉津の宮の事か又卷一卷八などに見ゆる古への賢人の住し事にもやあらん

○波多朝臣少足歌一首、 紀(文武)に波多氏は出しかど少足は見えず

小浪、磯越道有、 大和國高市郡の巨勢路に波の磯こせるとかけたり卷八に吾せこをこち許世山といへる類なり冠辭考に出

能登湍河、 是も此道に在事知べし卷五に高瀨爾有能登瀨之河とある、もこせなると訓べきなり是を越の國といふ説は論にもたらぬ事なり

音之清左、多藝通瀨毎爾、」

○暮春之月幸ニ芳野離宮一 紀養老二年三月幸ありし事見ゆ

時中納言大伴卿 旅人卿なり養老二年三月中納言に任と見ゆさて此卷家持卿の家集なる故中納言の時も父の名を去るさゝるなり

奉レ勅作歌一首并短歌、 未經奏上、この事は自記しおかれしならん

見吉野之、芳野離宮者、山可良志、 可良はながらの略卷二に委く出左はしもといひ入る辭なるを毛を略けり此類の志は過にしの左にあらず又たゝの助字にもあらず上に曾許之うらめし獨しぬればなど是なり

貴有師、永可良志、 永は水の誤ならんと村田春海がいへる左からん【永は水の誤とせしは契冲いへり、さて水可良志として水を加波と訓べきなり、雄略紀久米水、卷二石水、卷十二此水之湍爾云云、又三代實錄にも鴨水之東也と有なり、と久老いへり】

清有師、天地與、長久、萬代爾、不改將有、行幸之宮、」 離宮と書たるもとつみやともいでましのみやともと訓て共に同事なり下に行幸之宮と所々書しもとつみやとごろと訓べし同心ながら調べに從てよむのみ

反歌、

昔見之、象乃小河乎、今見者、彌清、成爾來鴨、」 奈良へうつりましては吉野の幸の稀にて從駕も久しくし給はざりしなりけり下の帥の時に「吾命も常にあらぬか昔見し象の小河を行て見ん爲」とよまれしは是が後なり

○山部宿禰赤人望ニ不盡山一作歌一首并短歌、 富士山記に山名富士取ニ郡名一也と云へり【赤人の氏をも時代をも後世は誤ぬれば猶別記にことわりぬ】さて不盡不二富士など書は共に假字のみ且ふじの言のよしをいろいろいふ人あれど皆かなはず郡郷の名はいかなる事にていひそめつらん知がたき多し強ていふはわろし【不盡山十名(秘藏鈔)藤嶽鳴澤高根常磐山塵山二十山三重山新山見出山三上山神路山】○山部氏は古事記(仁德)に山部大楯連(清寧)山部小楯連とありかくて小楯は來目部氏なりしを播磨國司なりし時億計弘計の王たち難をのがれて其國赤石の縮見のみやけの首が家のやつことなりておはせしを顯し申て終に此王たち天皇となりましし、功によりて山の官として卽山部連の氏を賜ひしな

り是山部氏の遠祖なりと紀に見えたり扨後清見原天皇の御時連のかばねを宿禰に改させたまひしなり○赤人は人麻呂に次で歌に名高かりしは萬葉卷十七に天平二十年三月越中國にて大伴家持と同地主の贈答歌の端詞に幼年未經山柿之門裁歌之趣詞失于聚林矣又池主の詞に山柿歌泉云云といへるを思へ○人麻呂の長歌は雄々敷して廣し赤人の短歌は清くして高しおの〳〵おもむきことなれども奈良の都となりては赤人ばかりの歌よみなければかくも名だかゝりけん

天地之、分時從、神左備手、高貴寸、駿河有、布士能高嶺乎、天原、振放見者、　振は發言放は遠く見放るなり

度日之、陰毛隱比、　加久里を延て加久呂比といふのみ後人別に有が如く思ふはわろし

照月乃、光毛不見、白雲毛、伊去波代加利、　伊は發語なり此去を或人左利と訓はわろしはゞかりは紀(天智)に阿箇悟馬能以喩企波婆箇屢麻矩儒播羅とよめるによるに只とゞこほれることなりそれを恐れてとゞまる樣にいふめり此次にも布士の嶺を高み恐み天雲もいゆきはゞかりたな引物を卷二十にあらし男と多志也波婆可流不破乃世伎といへり【波代加利、狛大人云、波は比良の約、良は呂に同、比呂の義、代は閑賀多の約、加は久阿の約、よりてひろくへがたくありちふ言にて、其物に障られておもひのまゝに廣く經かたきを云】

時自久曾、雪者落家留、語告、言繼將往、　集中に古よりいひつゞくをも今より末にかたり告むをもかくいひたれどこゝは吾行道のさき〳〵にかたりつぎいひつぎなんと云なり

不盡能高嶺者、」

反歌、

田兒之浦從、　こはまづ打出て田兒の浦より見ればと心得べしかく言を上下にして云事集にも古今歌集にも多しさて駿河の清見の崎より東へ行ば今さつた坂といふ山の崖の下なるなきさづたひに道有これ古の大道なりその邊より向ひの伊豆の山もとまでの入海を惣て田兒の浦といへりかくて右の岸堤を行はつれば東北へ入たる海のわたの所より富士の嶺はじめて見ゆ故に打出て田兒の浦より見ればてふ心にてかくつゞけたるを知るなり東路のいづこはあれどこゝにあふぎ見るにしくはあらず

打出而見者、眞白衣、不盡能高嶺爾、雪波零家留、」大

かたの人一節を思ひ得て本末をつゞくるぞ常なるを古へ人は直にいひつらねしぞ多きそが中に赤人はことにふしあるはいまだしく心ひくき事と思ひけんかくうち見るさまをそのまゝにいひつゞけたるなりさてめでたく妙に聞ゆるが故にむかしより名高きなり後にも此意をゑたふ人無としも見えねど聞ゑる人の無にうみてやめる成べし歌などはたゞ人のほむるによきはなし古へ人を友としてこそあらめ【從を今本爾と訓たるは集の例にもそむき此歌の意にも違ひつ○後世は此歌の三の句をゑろたへの五の句をふりつゝとかへてそれにつき意を解はいかにぞやさては心高き此人の歌にあらずなりぬ眞白にぞとて末を何の事もなくふりけるといひとちめたるにこそ此嶺をふと見さけたる時の樣ゑられて侍るなれ】

○詠二不盡山一歌一首幷短歌、【奥人按に拾穗抄此標の下に笠朝臣金村と有】

奈麻余美乃、　冠辭

甲斐乃國、　六言

打縁流、　冠辭

駿河能國與、己知其知乃、　彼此のなり

國之三中從、　二つの國の眞中よりなり

出立有、　紀(雄略)に泊瀨乃山波、伊泥掩智能、與廬斯企野磨、この卷の卷三にも初瀧の山云々出立の妙山敘てふに同じ今本に出之有と有ていでしあると訓しは誤れり

不盡能高嶺者、天雲毛、伊由吉波代加利、飛鳥母、翔毛不上、燎火乎、雪以滅、　六言

落雪乎、火用消通都、言不得、名口不知、　付の字落しか

靈母、座神香聞、　山を卽神といふ上つ代の例ながらこはことも絶え心も心ばぬ此山の事を神といへるぞ妙なる言なれ【山を神といへる卷十六にも伊夜彦の神の布本爾云々とも見ゆ】

石花海跡、　和名抄に尨蹄子は勢云々兼名苑云石花三月皆紫舒レ花附石而生故以名レ之といひ集中に石花二字を勢の一言に借たる多しさて勢の海といふは卷六にふじの高根の奈流佐波とよめるこれなり【富士の麓に八の大池有てその中にせの海といふあるべしといふ人あれど古嶺の上に湖ありしこと云るければ專らそれをいふべし度々燒て水をたくはへねば今は只其湖の樣のみ

見ゆと云】

名付而有毛、彼山之、堤有海曾、　嶺の上に又峯あまた廻り立たる中にめぐり今の道一里ばかりの湖あり故に其山のつゝめる海と云なり且池をも海といふ事既にも出たり

不盡河跡、人乃渡毛、其山之、水乃當烏、　當は借字にて沸なり其里と知と通ふ故に集中にたぎちと云多し烏は助字にのみせし歌もあれど曾とも乎とも云辭に用ゐしもあるによりたり【此當は大和の當麻を古事記に多伎麻とあるをもて沸に借しを知べし今本あたりぞと訓しはわろし】

日本之、山跡國乃、【日の本とは日の神の生みましゝもとつ國と云意なり此數語はこゝの外見えず】

鎮十方、座祇可聞、寶十方、成有山可聞、　紀(顯宗)室賀に築立る柱者此家長御心之鎮也てふも物の大小の異なるのみにて事はひとし又寶とは皇朝のほまれ此上に玄く物なければいへり二つの可は疑のかなり定めつべきを假に疑ふは心廣くしてよし

駿河有、不盡能高峯者、雖見不飽香聞、」　まことに此嶺の歌といふべく言いかめしく事弘くありさまをつくしたるは誰ぞその歌にかあらんされど將人麻呂などの頃よりはいさゝか後の歌と聞ゆ此下に海若者靈寸物香淡路島中爾立置而云々てふ長歌の玄らべに似たり藤原の末奈良の始つかたにかゝる歌よみの有つらん名のもれたるそをしき

反歌、

不盡嶺爾、零置雪者、六月、　六月專ら雷の鳴故に加美奈留月といふを加と留を略て美奈月といふぞと荷田うしのいひしこそまことなれ十月は雷のならねば雷無月と云にむかへたる名なりおのれも此月の名を考に相對へていへるぞ多きなりけり

十五日消者、　ひるとよるとの程同じければもちといへり他と我と勝負なきをもちといふに同じ然ればこゝはもちの日と云べき事なるを日をば略たり

其夜布里家利、」　此ひたぶるにいひなせるこそめでたけれ上の赤人の短歌と是とは實に此嶺をよみ得たりけり後世ふじの歌とてよめるは一つだにかなへるなきはすべてこまかなる女歌なればなり古へのますらを歌をここにして思ひ明らめよ

布士能嶺乎、高見恐見　天雲毛、伊去羽計、田菜引物絡、」

此物絡の乎は上へかゝるにあらずなとも曾とも通はして意得るなり卷十二大君の命かしこみさし並し國にいますや吾せの公を卷八に初瀬川白木綿花爾落たぎつ瀬をさやけしと見にこし吾をなど猶有

注に右一首高橋連蟲麻呂之歌中出焉以類載此○注に右一首といふは直に一首なり然ればこの田菜引物絡てふは始のは無かりしをかの集に有もて後に加へたるなりさて此歌中に出といふは卽蟲萬呂の歌と聞ゆれど右の長歌ともに必其人の歌ならぬ事玄るし歌集中と書べきを略にすぎたるものなり下もおなじ

○山部宿禰赤人至二伊豫溫泉一作歌幷短歌、　此出湯の事次にいへり且赤人はいかなる序にこゝに來りけん玄らず

皇神祖之、神乃御言乃、敷座、國之盡、　皇神祖てふ事先祝詞に神漏伎と云は其御魂大御神より天照大御神までの神祖の御事なり神賀詞に高天能神祖高御魂命と有を合て知べしさて人の世となりても磐余彦天皇此かたの前つ御代その天皇をば同じく申す事卷十九に皇祖神之遠御代三世波とよめる是なり皇神の御嗣となれば理りなり故にこゝの歌も前つ御代々を申すなればかみろぎと訓なり今本にたゞすめらぎとよみしは祖の字をいかにせんとすらん○加美呂伎は神皇君てふ言にて神の御代の嗣々を申なれば卽天皇の皇祖神におはせるなり

湯者霜、　四言

左波爾雖在、島山之、宜國跡、極此疑、　集中に岩根凝敷又與凝敷などいろ〳〵に書つれど皆岩根のこゞり重れる事なりそれを略きてこゝにはこゞしといひ且加毛とはめ歎く辭を添たり卷十七に(立山の歌)いにしへゆ有來にければ許其志加毛伊波能可牟左備てふをもて知べしさて極は言轉して借此は假字疑はうたがふ加毛に義もて常に書をこゝはうたがひの加毛ならねどかゝはらで借用ゐしなり今本疑をきの假字としてこゞしきと四言に訓しは誤れり疑は濁言なれば清音に用ゐず且言例を思はぬなり

伊豫能高嶺乃、射狹庭乃、　いさにはは同國風土記に聖德皇子こゝへ幸て湯岡の側に碑文を立給ふ其所を伊社爾波といひ式にも伊佐爾波神社有○次の言に立之而てふ云々は同風土記に景行天皇より後岡本天皇迄五度の幸有しと云り(聖德皇子も此うちなり)然れば何れを

も申べけれと其次の句を思ふに聖德皇子また岡本天皇をこゝに申すにや

岡爾立之而、歌思、辭思爲師、　卷一の軍王の歌の左注に岡本天皇此幸の事記を引て次に一書是時宮の前在二樹木此之二樹斑鳩此米二鳥大集時勅多掛稻穗而養之作歌云々といへり其歌に古への幸の事のことを慕はるゝ意有けんを歌玄ぬびとはいひつらん辭玄ぬびとは同じ時ことばにいにしへ慕はれし事有て云か又はかの聖德皇子の碑文にも古へを戀給ふ辭のあるをいふにもやあらん【今本此思をおもひと訓しは理りなし思を玄ぬぶと訓べき例集中に多し玄ぬぶは玄たふ事なり○伊豫國風土記に云湯郡天皇等幸行降坐五度也景行天皇以下大帶上日子與二八坂入姬命一二軀上爲一度也仲哀天皇以下大帶中日子天皇與大后息長足姬命二軀上爲一度也以二上宮聖德皇子一爲一度及高麗慧慈僧葛城王等也立二湯岡側碑文處謂伊社爾波者當土諸人等其碑文欲見而伊社那比來因謂伊社爾波也以岡本天皇并皇后二軀爲一度于時於大殿戸有樹云於木其上集鳩此米天皇爲此鳥繫稻穗養賜也以後岡本天皇近江大津宮御宇天皇淸御原宮御宇天皇三軀爲一度此謂行幸五度也】

三湯之上乃、　三は御なり

樹村乎見者、　村は群にて木の群りて立るをいふさて風土記に岡本天皇云々於大殿戸有レ木云二臣木一又右に引一書に官前在二二樹木一てふなどはむかしの事なり今赤人の見る時は古の宮もこの木もなくて後に生たる木の茂りあひてあるを見たるなりけり

臣木毛、生繼爾家里、　彼岡本天皇より五御代の後淸見原天皇十三年十月に大に地震ふりて此湯の所うづもれ失て涌出ずと紀に見ゆ其後六代を經て赤人の見たる時はむかし聞えし臣の木は失て後に生繼てそれもよろしきほどにて立るなるべし扨紀(神武)に母木を今飫弭廼奇と云は誤りと玄るされたり然れば臣と書は借字にて後世樅てふ木にあたれり此事別記にいふ

鳴鳥之、音毛不更、　かのむかし有けん斑鳩此米などの事をうけていふなるべし

遐代爾、神左備將往、行幸處、」　上つ代より名くはしく在傳はりし幸處のほろびしを惜み思ひたるに今はむかし有けん木など生つぎたるを見ればかく萬代の末かけて古び傳りぬべきをよろこべる意なり此歌上にはいにしへをいひ中には今をいひ下には末をいひつ、

反歌、

百式紀乃、　冠辭

大宮人之、飽田津爾、【久老云、西村重波は毎年に彼國に下りて其地をよく知れるに饒田津と云にも飽田津と云所も今猶かしこに在てともに津なるべき所なりといへり】

船乘將爲、年不知久、」　いと上つ代の幸の時にもこゝに船のりして遊びけんこと多かるべければ惣てをさしてよめりともいふべし又後岡本宮の御時の度額田姬王のよみし言を用ゐたるに依てはかの幸より多くの年經たるをいふか赤人は專ら聖武天皇の御時に見ゆれば後の岡本の御代より八嗣の御代になりぬ

○登二神岳一山部宿禰赤人作歌一首并短歌、

三諸乃、　四言

神名備山爾、五百枝刺、繁生有、都賀乃樹乃、　冠辭又別記に委

彌繼嗣爾、玉葛、　冠辭

絶事無、在管裳、不止將通、明日香能、　四言

舊京師者、　あすかは小治田宮より淨見原の宮まで六の御代の古郷なり

山高三、河登保志呂之、　卷十七にもかくよめり神代紀に大小魚の三字をとほ玄ろくさきいをと訓し卽古言にてとほじろきは何にても大きなる事さきはちいさき事をいふ

春日者、山四見容之、　容は借字こゝろは集中に見之欲と書る是なり常にはみまほしといひならへり

秋夜者、河四淸之、旦雲二、多頭羽亂、　六言羽は者なり鶴はつるなり飛事なければ亂と云ならん下にもあり

夕霧丹、河津者驟、　鳴さわぐなり其玄ぬばる、所のけしきのよきに中〳〵に悲しみを增ものなり

毎見、哭耳所泣、古思者、」　大よそ人すらかゝる所は玄のばしきに赤人のおや〳〵に此都に代々つかへ奉りけん故にことになげくなるべし紀にそれとは見へねど淸見原の御時山部連に宿禰を賜ひしは此父にやありつらん

反歌、

明日香河、川余藤不去、立霧乃、　如を入て心得べし

念應過、孤悲爾不有國、」　此川霧のよどみて常に晴る時無がごとくわがこゝを玄ぬぶ思ひも常にして思ひ過しやりがたしとなり

○門部王在二難波一見二漁父燭光一作歌一首、【和名抄漁父一曰漁翁和名無良伎美と有ればこゝの訓も不叶】

見渡者、明石之浦爾、燒火乃、保爾曾出流、妹爾戀久、」

すべて物の顯れ出るをほといふさてこゝは妹てふ事の人に知られてうき事有時の歌ならんさてこは相聞なれど旅に在てよまれつればこゝに入しなるべし

○或娘子等、贈二裹乾鰒一戲二請通觀僧之咒願一時通觀作歌一首、

海若之、奥爾持行而、雖放、宇禮牟曾此之、　何れにぞてふ言を常にはうれんぞといひしにや以豆の約字なり爾をはねて訓は常なり常の言は何となく打いふに延約のあふものなるぞ

將死還生、」　よみかへるは黄泉より歸るにて生かへるを云或人莊子が言を引て斗升の水もて急をすくはずしてかく乾魚となりて後はたとひかれが本の大海の澳に放つともいきかへるべからず咒の術もなしと云といへりさる事なり

○太宰少貳小野老朝臣歌一首、　此人養老三年正六位下より從五位下に叙し天平九年に大貳從四位下にて卒せし事紀に見ゆ

青丹吉、　冠辭

寧樂乃京師者、咲花乃、薫如、今盛有、」　よく譬て此都の盛を今も見るが如しさて薫は先香氣に用ゐれど日かげ花の色の方にとるべし下に蘭花香君之とも又卷十五に丹管士能將薫時能などあるなり

○防人司祐、【司佑、撮要抄、祐は誤なり】防人は遠江より陸奥までの軍團の兵士をたゞして筑紫の國に遣て海の崎々を守らしむる故に崎守といふ其司は太宰府の下に在り委くは軍防令に見ゆ

大伴宿禰四繩歌二首、　今本かばねをかゝぬは落し物なればくはへつ

安見知之、吾王乃、敷座在、　敷坐の座はますてふに同じ

國中者、京師所念、」

藤浪之、花者盛爾、成來、平城京乎、御念八君、」　意あはれなる歌なり君とは旅人卿を指ならん

○帥大伴卿歌五首、　旅人卿なり帥は九つの國この島をすべつかさどりて且外蕃の敵に備ふれば世に大なる官なり職員令に委し

吾盛、復將變八方、　見る事無を云卷十五に石綱乃、又變若反、青丹吉、奈良乃都乎、又將見鴨てふも遂に同意におつるなり

殆、　此ことばを殆の字を用ゐたるからは危近き意と誰もいへり卷八卷十の歌はさもやとも聞ゆ卷十一の歌はあたらずさて字もて解くは字になづめるなりこはは

はてにての意なり右さかりかへる事なければはてには都を見ずかなりなんとなげくなり保と波と通ふ登と豆と通故にはて〳〵をほど〳〵といふ且爾は中下にあればはぬるなればほどに〳〵をつゞめはねてほとんど、も云なり又字は同字を用ゐたれど程〳〵てふ意に用ゐたるもあり【遠江人は果終る事をはてるといへり又庭もはだれをほどろとも卷七によめり】

寧樂京師乎、不見歟將成、」

吾命毛　常有奴可、　奴可約奈にて常にあらなといへる辭なり常にもいふなり

昔見之、象小河乎、行見爲、」　此卿中納言の時從駕にて此川をよまれし上に在りむかへて見よ

淺茅原、　冠辭

曲曲二、　つまびらかてふをはぶけり

物念者、故郷之、所念可聞、」　次の香山のふりにし里てふに同じくて紀天武元年に大伴氏の家百濟に在と見え又神武天皇の御時に大伴氏の遠祖に賜はりし築坂邑てふも共に同じ所なるべし皆香山の下に在りと見ゆればなり【築坂は諸陵式に高市郡身狹桃鳥坂と見え其身狹を訛て今は見瀬村といひて香具山近き所なり又卷二の挽歌に百海原は香具山の下と見ゆかくて天武紀に大伴馬來田と弟吹負のぬしたちの家百濟の地に在なりと見えしを合て知なり】かくて此歌たゞ故郷を思ふといはずくさ〴〵に物思ふによりて故郷のおもほゆてふ意なれば考るに神武天皇大伴氏の遠祖道臣命は類なき大功の人故に橿原の大宮近き築坂邑を賜りて住せられ常に寵ましきと紀に見え然るがうへ此氏の末武をもて代代に忠に仕奉且官高くよせ殊にあり經しを今旅人卿太宰に任て六十の齡迄おかるゝ事をなげくまゝに遠祖だちの事を思ひて故郷の去のばるゝとよまれしものなり此事をあらはにいふは時にいめばかくかすかにいひなされけん

萱草、吾紐二付、香具山乃、故去之里乎、將忘之爲、」

前の歌にいふごとく遠祖たちの事を去ぬばるゝにこと

さらに大和國の故郷のおもひつゞけらるればそをわすれなんために萱草を吾紐につくとよまれしならん結句の不忘は爲と別との草の手の誤歟將忘之爲とあるべくおぼゆ　よりて改【奥人案に今本に結句不忘之爲と有】

吾行者、久者不有、夢乃和太、　卷一に芳野作として夢乃和多とよみしかば吉野川の川わだの名なり此卿右にも卷十五にもこゝをいと云たはれたるなり

淵者不成而、淵有毛、」　上には殆不見か成なんと思ひ又さりとも今は歸んも久にはあらじもと見し淵瀬もまたかはらずあらんかなど年經て遠き境にあればさま〴〵とおもはる、事をあはれにいひつゞけられつ卷十五に同卿云ばらくも行て見てしが神なびの淵は淺びて瀬にかなるらんともよめり【有毛の毛はかもの略にていまだにもと見しごとく淵にてあるにかもとうたがへるなり、奥人、又こゝを有毛とよみて願る意に久老はよめれどあるかもとうたがひていへるは心ふかし】

○沙彌滿誓詠綿歌一首、　今本前とあるは首の誤云るかれば改○養老五年五月右大辨從四位上笠朝臣麻呂が太上天皇の御爲に出家せんと請て許されて滿誓と名を改つさて同七年二月に此僧に勅して筑紫の觀世音寺を造らせらるゝと紀に見ゆ然ども此歌はなか〴〵に京師にてよめるならんとおぼゆ

白縫、　冠辭四言によむ例なり白縫は借字にて不知火てふ事なり

筑紫乃綿者、自著、未者伎禰杼、暖所見、」　つくしの綿は紀に神護景雲三年三月より始て毎年太宰綿二十萬屯輸京庫と有は京庫に運納るをいふのみむかしより貢せしなりされど殊に筑紫の綿をよしとせしにや○或人此歌は綿の德をいひて人の心のよしあしきが面にあらはる、譬なりとせしといへどさまでの意は有べからず打見たるまゝに心得べし

○山上臣憶良罷宴歌一首、

憶良等者、今者將罷、子將哭、其彼母毛、吾乎將待曾、」

かく戯れいひて其序を立けん樣思ひやるかたくて且おもしろき人と見ゆ

○太宰帥大伴卿讃酒歌十三首、　天平廿一年二月の詔にのらせ給へる如く大伴佐伯の氏は遠つ神祖より傳へて山往ば草むす屍海往ば水漬屍大君の方にこそ云なめ乃杼にはあらじと言たて、今も其言だて、此卿の心より藤原奈良の御時に及て他の國風を上も下も好む故にやまと魂はうせてよしなき賢ぶりし又死ての後の事などいふをにくみてもとより好める酒によせてことわられしなり右の詔のごとく惣て此氏人の有さま又家持の旅に喩す長歌短歌などをもて此卿のこゝろを云る時は此歌をもこゝめてたけれ

驗無、物乎不念者、　かひもなきもの思ひをせざらんとならばなり

一坏乃、濁酒乎、　濁り酒をなりともなり

可飲有良師、」　定めずらしといはれしは廣くしてよし下も同じ

酒名乎、聖跡負師、古者、大聖之、言乃宜左、」　酒の清たるを聖濁れるを賢といひしから人の名をかりて酒をめづる辭として下にはかの唐にいふ賢めくを笑ふなりけり【或人儒佛の言を擧て此歌をそしれるはいまだ天下の心を得ざるなり皇朝の人古より酒と色につき代を亂せし事なしかゝる小事と人情をいましむれば人の心に表裏の出來めり皇朝の事他國の文もていふ事なかれ○老子は聖人といへる天地に合へる人なり然れども唐の古に天地に合へる人に見えず一方を得し人をいふのみこゝにかりて云は戯なれば論なし】

古之、七賢、人等毛、　此卿のやまと魂もて此晉人などを實にとるにあらず時にから學びに泥める人の爲に哲あげていふのみ

欲爲物者、酒西有良師、」

賢跡、　やがてから人のいふ賢人なり

物言從者、酒飲而、醉哭爲師、益有良之、」　かの賢人の教などいふは心を作るにて生れながら大道をかくすは皇朝の害なり

將言爲便、將爲便不知、極、貴物者、酒西有良之、」　酒てふ物の宜敷事擧盡すべからず

中々二、　かへりてと云にひとし

人跡不有者、　人と生れあらさらばなり卷五に中々二人跡不有者桑子爾毛成益物乎玉之緒計此外にわくらはに人跡者有乎又人となる事は難きをなどよめる皆同じ

酒壺二、成而師鬼、　今本鬼を鴨とありて願の辭とすれどさて二の句の意に違へり仍て鬼の字の樣かくも誤るべし【こゝは今本鴨と有ぞ聞えやすし】

酒二染嘗、」　嘗は借字此歌は人は萬物長又佛體などいふ勸化の言を笑へり

痛醜、　紀神武に大醜乎（鞅奈瀰儞句）といへりあなは

歎く言葉なり

賢良乎爲跡、酒不飲、人乎熟見者、猿二鴨似、」　猿かしらてふ言古よりいひつらん

價無、寶跡言十方、　儒佛のふみにいへる言葉なり

一坏乃、濁酒爾、豊益目八、」【古本八方と方の字有】

夜光、玉跡言十方、　から人の十五城にかへんといひし

明月の玉なり

酒飲而、情乎遣爾、豊若目八目、」　皆からの事を舉てかしこをこのむさかしら人をわらふなり

世間之、遊道爾、冷者、　世は遊び樂みて過すべしもし其遊にも心ゆかぬ時は醉なきして心をやるべしといふなりさてさぶしとは不樂不怜なと書てすさまじを云

【古本怜者今本冷と有誤にや不樂不怜はさぶしとよめば怜はたぬしと可レ訓なり】

醉哭爲爾、可有良師、」　此歌は次の歌共をもて去るべし

今代爾之、樂有者、來生者、蟲爾鳥爾毛、吾羽成奈武、」　世の間に生れと生る、物人も獸も皆虫の類なるを人にのみ今世來世てふ事あるべきや天地の父母の心にあらずされど人はかしこきによりて他の國人は惡ければ教の言を設ていふなり皇朝の人は惣て直ければさる教をいふは病なき人に藥をあたへて病をおこすが如し只上を貴み吾業をなす外は思ふまゝに遊び樂むべし是ぞ治れる道なる

生者、遂毛死物爾有者、今生在間者、樂乎有名、」　二世なきをいふ

默然居而、賢良爲者、飲酒而、醉泣爲爾、尙不如來、」　から學の中に周公の道は表裡有老子の道は表裡なし皇朝の古へ天地の自なる神代の道に叶て上下表裏なければ上榮え下安し是をもてかの表裏の人をにくめりける

○沙彌滿誓歌一首、

世間乎、何物爾將譬、　物もて譬とする故に物の字を添つ此集の例なり

旦開、　冠辭朝明けの事と思ひてあさぼらけと訓はひが事なり朝びらきは船出の事のみさてあさあけをあさぼらけといふ事古へはなし今京の初めよりいへり此分をも去らで此歌を朝ぼらけと訓は誤なり

榜去師船之、　いにしを略てにしと云は常なり後世是をこきゆくと唱ふるはひが事なり

跡無如、」　こゝろ明らかなり後世こをあとの白波と唱へたるは跡無如と書しを見ず古歌のこゝろ詞をも去らぬもの、わざなり

○若湯座王歌一首、　此王の傳は考へず此氏の人は紀に多し訓は誤れる人有

葦邊波、鶴之哭鳴而、湖風、　一本潮とあり此歌にては風の下に乃と云べきをなければとらず

寒吹良武、津乎能埼羽毛、」　或人近江國淺井郡に都宇郷和名抄に見ゆこゝかといへり是ならばいよゝ潮風はかなはす又伊與の國に在といふ人有いかゞあるらん

○釋通觀歌一首、

見吉野之、高城乃山爾、白雲者、行憚而、棚引所見、」

○日置少老歌一首、

繩乃浦爾、鹽燒火氣、夕去者、行過不得而、山爾棚引、」　こは卷八に旅の歌の中に之加乃白水郎之、燒鹽煙風乎疾、立者不上、山爾輕引、てふを誤し歌なり今なる八三四の句言末にうけてことわりたらはす又和句も然を繩に誤りし事知べし此下に繩浦てふあれどそれも疑あれば類となしがたし【繩浦、今本攝津國と云、奥人○加茂翁云今本繩と書るも奈波とよめるも共に誤なり上に黑人の歌に角の松原とよめるに同所にて攝津國武庫郡なり赤人歌にも綱浦の歌と武庫浦の歌と相並べり】○風俗歌に奈末不利有て奈波乃門不良衣乃波留奈禮波可須見天見由留奈波乃門不良衣

○生石村主眞人歌一首、　紀(孝德)に正六位上大石村主眞人授外從五位下とあり古へは氏も名もさま〳〵に字を書例なれば同人なりおほいしの保伊の約比なれば大石をおひしと唱ふるを去らせて生とは書ならん且伊勢國壹師郡に大石と書ておひすと唱ふる里あり

大汝、　此御名は古事記に大名持神とあるを正しとすさてその毛と牟とを通して大名牟知とも又おほなんちとも唱へし故に汝の字をも借たるなり

小彦名乃、　古事記に神魂御祖神の告たまひし汝蘆原色許男命爲二兄弟一而作二堅其國一故自爾大穴牟遲與二少名毗古那二柱神並作二堅此國一と有か、れば此二神は一つ石室におはせしてふつたへもあるなるべし

將座、志都乃石室者、幾代將經、」　此石室は出雲にやあらんと思へど風土記に去づのいはやてふは見えず【靜窟、石見國邑知郡に在り祭神大汝命少彦名命也窟は口も廣奥へ至て深と眞風云り】景行天皇御幸ありし時周防國の神夏磯姫磯津山の賢木に劒鏡をつけて參りし事

紀に在り且御國に是師ともの石窟の多かりし事も同紀に見ゆれば磯津山に此二神のませし石室もあるをよめるにやかの賢木をとりしも殊に貴き荒山なるべけれよし在て聞ゆ

○上古麻呂歌一首、　紀にも姓氏錄にも上村主とありこ

ここには村主のかばね脱しなり

今日可聞、明日香河乃、　或本歌發句云明日香川今毛可

毛等奈か【こゝも卷十の卷なるも例の本無てふ歌ともいふべけれどさては上の可の辭下へかけて見るに用無く意むつかし】有をよしとする說もあれど今本のまゝにて心得らるればとらず

夕不離、　下に夕不去、朝不離など多し是を卷十七に安左左良受きりたちわたりとあるもて訓なりさて夕へ毎にかれず朝ことにかれずてふ心のみなり

川津鳴瀨之、清有良武、」　或本の意は是も上の赤人と同く飛鳥の故鄕を慕ふべき人なりけん○上の今もかもと云は今も歟なり毛はもとより助辭奈はいひおさへて歎く辭さて等は添ていふのみ卷十に「おもひつゝぬれば か毛等奈奴婆玉乃一夜毛落受伊米にし見ゆる」又「うるはしとわがもふ妹を思ひつゝゆけばか母等奈ゆきあしかるらん」などよめるもみなおなじなり

○山部宿禰赤人歌四首□□、　今本六首と有は後人のわざなるべし末の二首は赤人の歌ならず其よし下にいふ

綱浦從、　上の繩浦は誤れる事既にそこにいへりこゝなるは攝津國に在やと思へど古き據を得ず一本により綱とす今本繩は誤にて上に出し角松原と同所ならんとおぼゆ武庫に近しと見ればなり【繩と書しとは異なるを見るべし】

背向爾所見、奥島、　背向はうしろの方をいふ奥島は次にいふ粟島とは異にて淡路島ならん何ぞなれば武庫あたり小舟こぎ廻るか見ゆるといへばなり

搒回舟者、釣爲良下、」

武庫浦乎、搒轉小舟、粟島矣、　卷十三に丹比眞人下三筑紫一時云云長歌に夷乃國邊爾直向、淡路乎過、粟島乎、背向爾見管、卷八に「粟島に搒わたらん とおもへども赤石の門波いまださわげり」などあれば阿波國をあはしまと書しならん

背爾見乍、　武庫の浦をこぎ回り行舟は粟の方をあとゝすればゑかいへり見つゝと云に心なし

乏小舟、」　寬なる海に一つ小舟の搒行さまこゝに見るが

如し

阿倍乃島、　或人これをも攝津國に有とすれどよしをゑらず上に粟島をよみしかば阿波の海部に有島にや冠辭考にもおぼつかなみいへり

宇乃住石爾、　いそと云て卽石の事なり

依浪、間無比來、日本師、　大和の京なり

所念、」　こは班田使などの攝津阿波などに月日經て在時よめるにや

鹽干去者、玉藻苅藏、　佐米の約世なり【藏は借字加禮と云言を再延たる言なり例卷一に出○奥人按にからさめの良佐の約良にてからめなりさてめはむと同かればか良牟といへるなり】

家妹之、濱裏乞者、何矣示、」　右の四首は赤人の歌なり

次の一裏は妻の歌ならん

秋風乃、寒朝開乎、　開とは書たれど既いへる如く是も朝景の意なり

佐農能岡、　此岡は上のみわが崎てふ歌に紀伊に有よしを云つ

將超公爾、衣借益矣、」　右にいふ如く妻の都にゐておもへるなれば別に端詞のあるべきを落しか又赤人の歌集に右の歌の末に書添て有しを其まゝこゝに書載しにてあるべし上の黑人の八首と有中に妻の歌一首書入たる類ならん

此左に今本に載たる歌は相聞にて必此次に載べき歌ならねば小字にゑるせり或說にこは赤人のたびにて逢し人につかはしけるにやといへるは歌をよく解得ずしてそらに思へる說ぞ

美沙居、　知名抄に雎鳩(美佐古)

石轉爾生、　一本荒磯生

名乘藻乃、　紀(允恭)に濱藻のよる時々にてふ言を人爾莫告そと天皇のおほせられしより其濱藻を莫告藻と名附といへり三の句まてはたゝ序のみなり

名者告志豆余、　今本豆を五に誤るなり

親者知友、」　一本に父母者と有も同じ

質の妻の名を喚ごとく吾名をいひ給へかし父母の聞て嘖ふともと云なりいまた忍び男に名はゑらすまじきをゑらせ又妻ならぬ女の名を呼こともせぬならはしなれど相思ふが餘りに既に女の名のりたる上にてはかくはよめるなり【名乘藻は今のほんだはらとよぶ物なりと久老がいひき○或本に四の句を告名者告

世とあるは理りなし上の告は吾を誤つ扱わか名はのらせと訓ときは右の歌と同じ意なり古への言とならはしを去らぬ故に字をも訓をも誤りし物ぞ此歌は本の歌とせしさへ小書去ぬれば或本の歌とて擧しはすてつ】

○笠朝臣金村鹽津山作歌二首、　和名抄に近江國淺井郡鹽津(志保津)神名式に同所に鹽津神社有り

大夫乃、弓上振起、　神代紀の語なり

射都流矢乎、後將見人者、【古本には得將見人者と有】語繼金、」　金村は勝れたる弓男なりけん故に其山路の木巖などに大矢をたてゝこれを見ん人後の世に語つきてがなといふなり古へさる類有てせしならんいと後にもかた國の巖などに恠けなる形あるをむかし建男の物せし跡ぞといふ多なり語繼金は借字にて此上下の卷に我禰と濁り假字を書しを思ふに語つげと云を再ひ延たるなり卷十九に「大夫は名をし立べし後の世に聞繼人もかたり都具我禰」てふに同し意同し言もて知べし此外卷九によろづ世に伊比都久可禰等卷十三にたち隱る金卷七にさてもある金など皆同し【此再の延言は先語都解てふ解を一度延れば都我禰となるを其我を延て都具我禰となるなりさて金と書しも多けれど借字は清濁にかゝはらぬなり、奥人按に此再約ちふ言はいともむつかしかたりつぐがねのつぐの約津なり我禰の約解なりよりてかたりつげと云と有なんされどこゝのかねの禰は爾に通してかたりつく我爾と見るぞ安からむ】

鹽津山、打越去者、我乘有、馬曾爪突、家戀良莫、」　卷八に馬爪突家思良志毛、又吾馬なづむ家戀らしもともよめりこは馬も故郷戀る事と一わたりにてはおもはるるを後世のことわざに家人のいと戀れば旅にて馬のつまづくてふをもおもふに家に戀ふらしといふべきを所を畧たるならん此下に家待眞國てふは家爾待むになるを爾を畧く類なるべし此例猶下に在

○角鹿津、　紀(垂仁)に額有ㇾ角人乘ㇾ一船ㇾ泊ㇾ于ㇾ越國笥飯浦ㇾ故號ㇾ其處ㇾ曰ㇾ角鹿ㇾ也と云り今敦賀と書つるがと云は訛なり

乘船時笠朝臣金村作歌一首幷短歌、

勇魚取、　冠辭

海路爾、出而、阿倍寸管、　あへぐは梶をおすものゝうめくを云なり然れば次に我といふは總てをいふなり

我搒行者、丈夫乃、　冠辭

手結我浦爾、海末通、鹽燒炎、　炎を專らはかぎろひと訓たれどけぶりはた火の氣なればさもよむべきなり

草枕、　冠辭

客之有者、獨爲而、見知無美、　此浦はいと面白き故此なげきあり

綿津海乃、　海の神をいふ

手二卷四面有、珠手次、　冠辭此三句は其所の事にて序とす

懸而之努横、日本島根乎、」　大和の國をいふよし上にも見ゆ

反歌、

越海乃、手結之浦矣、客爲而、見者乏見、　此浦にめづるが餘りにも故郷に遠く離れぬるをたらまほしみ去ぬばるゝをいふなり

日本思横、」　偲はもとよりにて思を去ぬぶと訓こと下に多し凡の意は長歌に同し

○石上大夫歌一首、　石上朝臣乙麻呂の土佐へ流さるゝ船路にての歌と見ゆ

大船二、眞梶繁貫、大王之、御命恐、磯廻爲鴨、」　凡いさりは海人がわざにのみいひなれしに依て其意とせんには此歌上の大船てふ言の筋違へりさらば此字のまゝにいそめぐりする事として卷六におほきみのみことかしこみ磯に觸りうな原渡る父母をおもふてふ意とせんになほおぼつかなし只上の言にもかゝはらでいひしにやあらん諸成案に伊曾麻波里の曾萬波の約言なれば大船二眞梶繁貫て遠つ國へ渡るに國々の磯廻するをもいさりといふにや土佐日記にかくいざるほどにといふも國の守の大船にていへりこは風待して釣なとする事のあれは海人のいさりをもかりて云へど沖漕ずして磯廻すれば同じ意におつるをおもへ

注にいふ石上云云任越前守此時歟といへどこは何に據しにや此朝臣土佐へ流さるゝ前に丹波守に任ず土佐より歸て常陸守と成しは紀に見えたれど共に船路にあらず

○和歌一首、　乙麻呂の土佐へ行船路の歌を贈りつらん故に都にある友だち此答をなしけん

物部乃、　こは健き丈夫をいひて氏にあらずゆゑにものゝふとはよみつ【物部、奥人按に、麻須良乎の約毛なり許呂の約能なり夫は邊に同く邊の濁は米の清音に通

ふ例にて武禮の約米なり仍て眞荒男之比群てふ言とす

古呂は毛許呂のころにひとし】

臣之壯士者、大王・言乃隨意、　一に任を言とす然らば

みこのまにまと訓べし

聞跡云物曾、」　死も生も大王の命のまにま聞得てなすを

臣の建男とすれば流され人となりぬとも恨まざれとい

ひはげませるなり是ぞ皇朝の人のならはしにて天の下

にまたなくうまし國なるを代々に上を犯せるから人の

ことばゝいとふともいとふべからずや吾國風の歌な

り

注に右作者未詳但笠朝臣金村歌中出也といへり

○安倍廣庭卿歌一首、　既出

雨不零、殿雲流夜之、　棚曇りてふに同

蟾蜍跡、立乍居寸、君待香光、」【潤濕跡戀乍居寸如此

訓て今本のまゝに玄たかふべし】今本三の句を潤濕跡

と有てぬれひでゝと訓しは末の言にかなはず言もぬれ

ひづとてふをぬれひでゝとつゞけし例もなし又次に戀

つゝも下の待に重りて聞ゆ是は立を戀に誤りしこと明

らかなり仍て考るに蟾を潤蜍を濕に誤らんよし此二字

ならでもこゝは必月待と有べき所なりさて君待香光は

君待が爲てふ言をくゝめたるにて今一つ待ものあらで

はかなはず故に三の句は月待跡といふべしとす卷一に

山のべの御井を見我豆利（此利は良爾の約にて見がて

らにと云なり）いせのをとめらあひ見つるかも卷七に

梅の花咲ちるそのに吾ゆかん君が夫を行待香光此外に

も類多し且此すべての意は卷五に足日木乃從山出流月

待登人爾波言而妹待吾乎てふに似たり此次にも相聞歌

交り入しかばこも相聞とす

○出雲守門部王思京歌一首、　既書

飫宇海乃、河原之乳鳥、汝鳴者、吾佐保河乃、所念國、」

良久約留なりにはいひ入て歎く辭なり【奥人考に海に

河原といへるは心ゆかずこは海は河の誤にやまた大池

にも海と取なしいへるもあればこも飫宇の池河を海と

取なして河原といへる歟おぼつかなし今本飫の下に宇

の無は落しなり疑なければ加へつ卷十三に同出雲にて

飫宇能海なり鹽干乃滷之とよみ給ひ出雲風土記にも意

宇郡はあれど飫海てふはなければなり】

○山部宿禰赤人、　歌は相聞なり端詞の如くては理りた

らず登春日野山は衍字歟歌言によりて後人書加たるな

らんよりて右四字はすてつ

作歌二首幷短歌、

春日乎、　冠辭四言【春日乃といはす春日乎といへるは

春日を霞こむると云心につゞけたり小苑】

春日山乃、高座之、　冠辭

御笠山爾、朝不離、雲居多奈引、　此言心得がたければ

雲居は久毛利てふ事ならんと荷田の大人いはるげに然

有べし古事記に倭建命の御歌に和伎幣能迦多由久毛葦

多知久母とよみませし又卷四にも香山爾雲位桁曳此外

にもくもゐ棚引と言有然ればくもりと意得んものなり

【集中に庵に居てふ事をいほゐしてともいほりしてと

もよめるを思ふにゐとりとを通しいへればくもりくも

ゐ此類とすべしこゝの次に雲ゐ奈須といへるもくもり

なすと心得てかなへり】

容鳥能、　下に果鳥と書は音をかり今は訓を借たるにて

喚子鳥なり彼はかほう〳〵と鳴故にかほ鳥ともいふな

り【容鳥の鳴を吾片戀にたとへたるのみなり此鳥こと

に片戀するにはあらず卷一に奴要鳥にもいへり】別記

にくはし

間無數鳴、　間もなく頻に鳴くなりこゝを句とす

雲居奈須、心射左欲比、　是より其雲居を轉して吾思を

いふ○いざよひは雲のたゞよひて有をわが心の行事な

きに譬ふなり

其鳥乃、片戀耳爾、　其鳥の如くてふを乃にこめて云な

り上の雲ゐなすにむかへて見よ片戀とは雄の雌を戀る

なり

畫者毛、日之盡、夜者毛、夜之盡、　此四句の訓の事卷

一にいひつ

立而居而、　此言集にも記にもおほし

念曾吾爲流、不相兒故荷、」

反歌

高按之、　冠辭

三笠乃山爾、鳴鳥之、　即容鳥なり之に如を入て心得べ

し

止者繼流、　上の間なく數鳴におなじ

戀喪爲鳴、」　喪は一本による今本は哭に誤る卷四に君著

流三笠乃山爾居雲乃立者繼流戀毛爲加毛と有はいづれ

か本ならん

○石上乙麻呂朝臣歌一首、　名の下にかばねを書は四位

の例なれば此歌は土左より相歸されて天平十四年の比

よみしか

雨零者、將蓋跡念有、笠乃山、人爾莫令蓋、霑者漬跡裳、」三の句笠乃山は奈良人の歌なれば是も三笠山か本笠山なるに御とほめいふにやみよしの三くまの、如し【神樂歌に笠の淺茅原と謠もあれど別ならん笠の朝臣の氏も本吉備國の加左米山より起れり此笠山にかなはず】五の句は他人のいかになげき戀ともといふなるべし譬喩歌の意重れるなり

○湯原王芳野作歌一首、　此王紀に見えぬはもれしならん歌は次々の卷に多見えたり

吉野爾有、夏實之河乃、川余杼爾、鴨曾鳴成、山影爾之氏、」夏實川は大瀧と秋津の間にて山の際を落れば淀瀨多しその山陰の淀に鳴鴨をいふのみさてあるがまゝにいひ下されたるにおのづから妙に聞ゆるこそ歌てふものゝうへがうへなれ

○湯原王宴席歌二首、

秋津羽之、袖振妹乎、　蜻蛉か羽の如く薄うつくしき衣の袖なり卷三に蛉蜻領巾ともよめり後世蟬の羽といふ類なり

珠匣、　冠辭

奥爾念乎、　【集中奥と云に深き事と又末の事をいふと二つ有】深く愛しむをいふなり

見賜吾君、」あるじまうけの余めで、つかひ給ふをよめる舞せるなるべし○君はまらうどをさすなり

青山之、嶺乃白雲、朝爾食爾、　【食は借字古刀約古なるを計に通して計と云なり】集中に委くいへるは朝爾日爾異と有を略てかくいへり其の朝は卽日といふに同じくて日々に特にといふなり

恒見杼毛、目頻四吾君、」本の二句は譬なり○めづらしは記(神功)に希見を梅豆邪志といひ卷四に希將見君乎見常衣とある是なり目豆は保米伊豆流てふ事を約通していふなり

○山部宿禰赤人詠二故大政大臣藤原家之山池一歌一首、

故云云大公なりこは養老四年八月薨十月に贈官の事紀に見ゆこゝは贈の字落たるか○山池は山薗池を略るなればその、いけと訓つ下の山齋をその、と訓しに同じこゝろなり別記あり

昔者之、舊堤者、　かくいひて又池のなぎさと云は重れる如くなれど上は大むね下は小別なり

年深、　年ふりし事を年深きと云言下に有

池之潴爾、水草生家里、」名ある薗の古び荒たるさまを

有のまゝにいひ歎きのおのづからそなはるは古へ人の歌の妙なるものなり【卷二に御立志々島之荒磯乎今見者不生艸生來鴨唐文にも池塘生春草】

○大伴坂上郎女、　佐保大納言大伴麻呂卿の女にて旅人卿の妹なり始穗積皇子にあひてめでられしを皇子薨て後大伴宿奈麻呂の妻となり坂上大嬢子と田村大嬢子をうめり此事下の注に在別記あり

祭神歌一首幷短歌、　此祭の意下にいふ

久堅之、　冠辭

天原從、生來、神之命、　何れはあれど大伴氏の神祖天忍日命をいふ事左の古注にいふが如しさてこゝより言を隔て祈奈牟てふにかゝるなり○此命は姑天に生れて後天孫の御先に立て天降給ひしを生來と云べし

奥山乃、賢木之枝爾、　【眞淵は是を榲ぞといひて其據をも悉く冠辭考に書たれど榲は香をたづねてとめ得ん薫ある木にあらず今俗みやま檀といふものにて今いふ檀專ら深山に有】さか木は榮木にて今俗の檀なり木の子繁くみのる物故繁子と云なりさて神樂歌に「さか木葉の香をかぐはしみとめくれば八十氏人ぞまとゐせりける」とうたへり皇朝の木に香細物此木の外なしされば佛の前にも奉りたるより墓の前に必しもたつるものの樣になりけるよりいまはしかる物とだにおぼえたる後の俗のいにしへ神の御前の榮木てふ物とも云らずなりぬめり猶委かしこき御考言を引て別記にいふなり

白香付、　冠辭白香付は借字にて後紬著なり訓も字も卷十九孝謙天皇の御製歌を正しとすへし志呂は宇志呂の略加は久々里の約支なるを加に通じ云事加利衣は紬衣なるをおもへ【冠辭考に白髮つくてふ言といひしはたがへり】委はかしこき御考言もて別記にいふ

木綿取付而、齋戸乎、　戸は瓮乃借字紀神武に嚴瓮を造給ひて云云拔二取丹生川上之五百箇眞坂樹一以祭二諸神一自レ此始二有嚴瓮之置一也時勅二道臣命一今以二高皇靈草一朕親作二顯齋一用レ汝爲二齋主一授二以嚴媛之號一而名二其所レ置埴瓮一爲二嚴瓮一云云又紀(崇神)忌瓮和珥の坂にいはひするゑ云云是等古の神祭のありさまなり

忌穿居、　酒を釀には瓮を清き所に忌穿居其酒なれば其瓮ながら神の御前に奉りぬ或の祝詞に瓶上高知瓶腹滿並又上の卷に哭澤の神社に三輪須惠などあり

竹玉乎、　神代紀に使下山雷者採二五百箇眞坂樹八十玉籤一野槌者採中五百箇野篤八十玉籤上てふ共に玉を着る

串にて卽玉祖命の作る玉を此貫木と篤てふ竹に着たるなり此乖につけたる玉をこゝに竹玉といひ絹もて著る故貫乖ともいへり繁には玄げく玉に貫たるをいふ竹を輪に切て着るなどいふは推はかりの事にていふにもたらず

繁爾貫乖、　里は良之約にてぬきたらしなり

十六自物、　膝折伏手、弱女之、　膝折伏は既出

押日取懸、　古事記に八千矛神沼河比賣のがりおはして淤須比袁母、伊麻陀登加泥婆とよみ給ひしは男のおすひなり同記景行に美夜愛比賣の意須比之禰爾月經著ぬるとて歌にもよみたるは女のおすひなり伊勢大神宮式に押日は領巾の次に舉て條と玄るして領といはず然れば此禮の類にて古へは必かけたる物なりけり【外宮儀式帳に天乃押比蒙氏云云さればかゝふるものと見えたり八千矛神の淤須比は襲にて袍の歌にや】猶別記に委く見ゆ

如此谷裳、　だには上に事を盡して祈るにあて、いふなり

吾祈奈牟、　【此奈牟は能武にてこひは乞の意のむは祈の意ならんと思へど更に假字書しかば暫奈武を辭とす】

君爾不相可聞、」　斯くばかりふかく祈乞りなんには君にあはざらめやといふなり

反歌、

木綿疊、　木綿もて織たる布をたゝみて手にさゝげて神に奉るを云木綿の事は冠辭考にくはし

手取持而、如此谷母、吾波乞嘗、　嘗は借字

君爾不相鳴、」

注に右歌者天平五年冬十一月借祭大伴氏神之時聊作此歌故曰祭神歌と云りこは右にいふ大伴宿奈麻呂のかれ〳〵に成て後神龜元年二月の間に兄旅人卿に從て太宰へ下り天平二年の冬京へ歸つ其比は生し二女漸生成て人々もつまどふ斗なるに夫の猶うときをわびて此祈もせしなるべし此節女の齡今は三十餘と見ゆれば世の常の戀にはあらじとおぼゆ卷三に載たる同郎女の怨恨の長歌は始宿奈麻呂のかれ行比の事なるべし家の集はうるまゝに載れば前後は云にたらず

○筑紫娘子　【今本娘子字兒島とあり與人】

贈二行旅一歌一首、　筑紫國のをみななり

思家登、　とての畧なり

情進莫、　【情進は疾行疾歸らんとて強て凌事なかれと云なり】

風俟、　一本候ともにまつ意なればかくも有べし

好爲而伊麻世、　往座なり

荒其路、」　こは海路を云卷十三には山路にも此言有

○登二筑波岳一、　常陸國筑波郡

丹比眞人國人作歌一首幷短歌、　名を上に書例なるを此卷は定らず

雞之鳴、　冠辭

東國爾、高山者、左波爾雖有、朋神之、　此山には上に二峯並立て男の神女の神むかひておはせば二神といへり卷十一の此山の歌に二並筑波乃山又男神毛女神毛とよみつ今本にこゝを明神とかきしは誤なり【古書に明神とも顯神とも有は共にあきつかみと訓て今おはします天皇を申なり仍て上つ代の神を明神と書事古へはなし後世惣ての神を明神と云はよしもなき事なり】

貴山乃、　儕立乃、　右にいへる二並に同し

見果石山跡、　見之欲てふ意なり

神代從、人之言嗣、國見爲、　既出

筑羽乃山矣、冬木盛、　こは冠辭考にいへるが如しされどこゝは冠辭にはあらず冬木盛節にて高山に登るべきにあらずといふなり冬木成の事は既に云後冬木成とよめるはいと誤なり

時敷時跡、　卽冬こもりの常敷時なりとてといふなり

不見而往者、益而戀石見、　本見まくほりせしを今冬盛時とて見ずいなばいよ、ます〳〵戀しからんと云を略きたるなり仍て今本の訓はあしとす

雪消爲、　冬ながら且消る雪をいふ今も雪とけして山路行れずと云めり○雪消と雪氣は別なれば消を淸みて唱ふと云はわろし共に言便にて濁るは唱への例なり理は心にて分ち知るぞ古へなるめり

山道尙矣、　山道ながらをと心得べしされどながらは後世の意得とは異にて隨の字を用ゐてまゝてふ辭なり此すらてふ言のことわり甚いふ事多ければ卷二の別記に委くす

名積敍吾來並二、」　なづみはとゞこほるなりこゝはとりわづらふ事と成ぬ下に此言煩の字を書つ【並二は玄の言也下に重二とも二二共書る類なり今本は前に誤りつ】

反歌、

筑羽根矣、四十耳見乍、　今本よそに見ながらと訓たれど乍の字をながらと訓は後にて古へ無事なり乍の字をながらとよみし事此集になしと契冲がいひしはよしさてよそにの爾を略くは例なり

有金手、　ありがたくしてなり

雪消乃道矣、名積來有鴨、」

○山部宿禰赤人歌一首、

吾屋戸爾、韓藍種生之、雖干、　紅花の種子を蒔生せしが花を得るも及ばすて枯うせしといへどもと言なりさてまだいとをさなきほどより得んと思ひし女のかひなくてかれにしに今にこりずて得んとおもふとたとへたる歌なり

不懲而亦毛、將蒔登曾念、」　【今本幹とあるは借字にもあらずまたく韓の誤なり卷八にも韓藍とありよりて改めつこは譬喩歌なれど得たるまゝをこゝに書しものなり或人此卷にしも次第をいへるは誤なり】韓藍と吳藍は同しかれど出る地によりてからともくれとも云別記有

肥前國人登杵島嶺宴歌一首

○□□□□□□□□□□□□□、　【杵島和名抄岐志萬】

今本こゝに仙柘枝歌三首とあれど下二首こそは詠柘枝仙の歌なれ始の歌は必他歌にて別に端詞のありつらんがおちうせしをこも柘枝仙をよめる歌ぞと心得て後人みだりに玄るせしものぞよりて試に白圈の傍に端詞の字を添てよしは歌の後へにくはしく記つ

霰零、　冠辭

吉志美我高嶺乎、　たかねの加禰の約計なれば多計といふ後世たけのたを濁るはわろし初言を濁る事此國にはなし

險跡、草取可奈、　上の金村の語纒金とよめる所の考に引たる歌にも紀の顯宗室賀の詞にも皆加禰とあり中にもかの御詞島野羅市屢何禰也と有事今と同言なればこの奈は禰を誤る歟又音を通して奈といふにもあるべしさて彼金村の歌にいへるごとくこは二度延たる言にてまつ草と禮と令する言なるを其禮を延れば刀良禰となる(良禰約は卽禮なり)又其良を延れば草とる加禰と成ぬ(留加約卽良なり)然れば此歌の意はさばかり嶮き山に登るには草をとらね草にはあらで妹が手をとるよと他よりねたむさまなり

和妹手乎取、」　こはいさゝかも柘枝の仙にあづかれる事

なしいかなる人かこゝにはかきけん或人いふ肥前風土記に里人ども春秋の比其國の杵島の嶺に登て宴する時此歌をうたへるをこゝに誤て入つらんとげにさもあるべしかくておもふに記に隼別王女鳥女王をゐて倉橋山を登り給ふ時の歌に「はしだてのくらはし山をさかしみと妹は來かねて我手とらすも」と有を所をかへ言をもかへて彼杵島嶺の遊にうたひけんを誤て柘枝仙にあたふる歌とせしか又始に云如くならんか【或人云肥前風土記には草取可豆々妹手乎取と有奥人案に拾穗抄には何によれるにや草取可奈和妹手乎取と有狛大人六卷三長歌に卒和出豆見武又卷十一に秋柏潤和川邊之云云和の字を也の假字に用ゐたりされば草取可禰豆和妹手乎取なりといへり玄かれば大人は此注むづかしく歌もかく唱ばやすらかなり奥人案に肥前國風土記曰杵島郡縣南二里有一孤山從坤指艮三峯相連號名曰杵島坤者曰比古神中者毘賣神艮者曰御子神(一名耳子神)閑士女提壺酒抱琴每歲春秋携手登望樂飲歌舞曲盡而卽歌曰「あられふるきじまがたけをさがしみと草とりかてて妹が手をとる」是杵島曲也】

注に或云吉野人味稻與柘枝仙媛歌也但見柘枝傳無有此歌(傳には必有まじきなり)

○□仙柘枝歌二首、　仙の上に詠と有しを今は落たるか又略に過たるかかくては此仙が歌と聞えてわろしよりて試に白圈を記して傍に字を添ふよしは歌の下にいふ卷十に「常之倍に夏冬ゆくやかは衣扇はなたず山に住人」とよめる左の注に詠仙人形とあり左の注は捨る物ながら歌辭によるに仙をやまびとゝ訓も後のわざにあらず○こは古へ吉野に女仙の有しが同し所に妹稻てふ男の川に作梁て魚とるを其女仙柘の枝となりて流來て梁にとゞまりぬ男そをとりて急にうるはしき女と成しを見めでゝ相住つる事なりさて柘枝が傳てふ物ありしといへり今は次の二首歌と憶風藻の詩もて知るのみさて柘枝と記しゝ故に卽名によべり右に言如くなれば今本の端詞をこゝに玄るし歌の數を二首とするなり此暮、柘之左枝乃、流來者、梁者不打而、　紀(神武)に有作梁取魚者梁此云柳奈)と有【和名抄桑柘淡語抄之(豆美)蠶所食○懷風藻に此男を在昔釣漁子といへり然は浦島子又蹈靜の子などの類歟】

不取香聞將有、」　此よみ人吉野川邊に來てかの古事を思ふに今も柘の枝の流來る事あらんに梁打てとゞめんや

又とゞめとらでであらんやとゆくりなくおもふまゝをいひつゞけしなりかくやうに云意こそ古への歌なれ是を解がたしといひし人はいかにぞや

右一首、　こゝに注あれどいふにもたらず【此右云云はむかしの事をおもひて後の人の作し歌なるを去らせし注なりこゝも然なり】

古爾、梁打人乃、無有世代、此間毛有益、　此頃までも其女仙はありなんと云なり今本の訓はいさゝかたらず

柘之枝羽裳、」　彼味稲が梁打し故に柘枝のとゞまりて遂に仙も世間の人と成て命ながらへざりけるをあはれと思ふなり

右一首若宮年魚麻呂作、　こは家持卿のあらため歟

○羇旅歌一首并短歌、　此歌はじめは人麻呂のよみつる勢ありて末いさゝかよはみたり誰人の歌にや

海若者、　こは本海を知給ふ神をいふをこゝはたゞ海の事になしてよめり

靈寸物、淡路島、中爾立置而、白浪乎、　滿汐の波なり

伊與爾回之、　紀伊と土左の間よりさし入潮は淡路島の南と北より西へさすなり扨其南なるは西の方伊豫を廻りてやみ北なるは備中にてとゞまりぬ夫より西は西の海のしほの向ひ來て相せくなりかくて此伊與をめぐるしほは卷十五に白浪の五十開回有住吉乃濱てふおもむきあるなり

座待月、　冠辭

開乃門從者、　右にいふ北へ廻てさす汐なり

暮去者、鹽乎令滿、明去者、鹽乎令干、鹽左爲能、　既云ごとく潮のさわぎなり

浪乎恐美、淡路島、磯隱居而、　此島の入汐に泊てゐるなり

何時鴨、此夜乃明跡、待從爾、　【一本此夜乃將明跡】

從は隨に同じ

寢乃不勝宿者、　ねられぬになり

瀧上乃、　上に瀧の上の御船の山てふは只所のさまなりこゝも淺野てふ所は瀧川の落る上にあれば然いふならん

淺野之雉、開去歳、　歳は借字志は助辭なり

立動良之、　寢られぬまゝに聞ば野邊の雉のたつ羽音して鳴とよむ曉になりぬなるべし【雉は曉すらめをよび食をあさるものなり】いざや夜はこもりとも遮て榜出よといふなり

率兒等、安倍而榜出牟、　船人のあへぎてこぐをもあへてこぐといへどこゝは去からずさへぎりてこぎいでんといふなり

爾波母之頭氣師、」　既出

反歌、

島傳、　淡路より敏馬崎へ來るには島なければこは淡路島を傳ひてみぬめの方へ榜を云

敏馬乃埼乎、　既云

許藝廻者、日本戀久、鶴左波爾鳴、」　左波の左は曾波の約にて曾波奈留てふ言にて物の多きを云鶴のなく音聞て旅の思ひを增る下にもよめり

右歌若宮年魚麻呂誦也但未審作者、　是も家持卿の注なるべし

譬喩歌。　此集に譬喩と有は皆相聞なり

○紀皇女御歌一首、　天武天皇の皇女にて穗積皇子の御同母妹と紀に見ゆ

輕池之、　大和國高市郡に在應神天皇此池を作らせ給へり

汭回往轉留、　今本汭回と書ていりえと訓しは字も訓も誤れり池に入江てふ事あるべきかはうらわと訓べし卷二に勾池を水傳磯乃うらとよみて裏のこゝろなればなり

鴨尙爾、　上にいへる如く鴨隱爾と意得べしすらをだになほも同じといへる人は是に爾とあるを見ずやだに、なほにてふ言あるべきかは

玉藻乃於丹、獨宿名久二、」

○造筑紫觀世音寺別當、　かく唱は奈良朝よりなり

沙彌滿誓歌一首、　此寺は天智天皇の御願なりしかばいまだ造終らざる事紀(元明)に見えさて養老七年に僧滿誓に勅して造らせらるゝとあり且既にもいふ如く滿誓は本筞朝臣麻呂といひて慶雲元年從五位下養老元年美濃守にて多度山の瀧の幸の時從四位上となり同四年天皇不豫の事有に請て僧と成ぬ○此歌と次の月の歌は僧ならぬ前によみけんを後に聞て載せし故に端詞はあるなり集中に例あり然るを端詞に泥て相聞ならぬ譬喩歌ぞとてあらぬ事を添いふ人侍り次の月の歌をば誰も相聞とするからは右のごとく心得る外なし凡此集に譬喩歌てふに相聞ならぬはなくこゝも前後皆相聞なるを思へ

烏總立、　冠辭

足柄山爾、船木伐、　卷六に足加利小船とも足加利乃安伎奈乃也萬爾引船ともよみ又伊豆手船といひむかし枯野てふ大船も伊豆國より奉れり伊豆と相模の足柄は地相交れば何れにいふもひとしきなりさて此山に大なる杉多かりし事右の船木に用ゐ又今も埋杉ありて筥に作るなどおもひ合すべし卷七に登夫佐多底船木伎流等伊布能登乃島山ともよみつ

樹爾伐歸都、　なみ〳〵の材とするなり

安多良船材乎、」　あたら船木と重ねいへるを思ふに三の句は船木伐と先いひ舉てさて其船木とすべきよき木をすゞろなる材に伐集め置ぬるよと惜むなり此三の句のいひなし後世はたゞなる心もてはえよみあへじかくて譬たる意は我うつくしとおもひ慕ひし女を大内或はよき家などへよびて多くの中になめげにておかるゝををしむこゝろなり

○太宰大監、　職員令に委し

大伴宿禰百代梅歌一首、　こは天平の初の歌なり此人同十年兵部少輔十三年美作守十五年筑紫鎮西府を置る時爲二副將軍一也【卷十三天平二年此大監の歌も詞も有】

烏珠之、　冠辭

其夜乃梅乎、手忘面、　手は折より出たる言

不折來家里、思之物乎、」　妹に逢べかりし夜に思ひながらまぎれ過して今遠きさかひに來てくいことするならん

○滿誓沙彌月歌一首、　蔭子の出身は二十一歳を例とすさて十年ばかりの勞にて慶雲元年に五位には叙つらんそれより十八年過ぎ僧となりしは五十年の齡なれば然も僧にして女を戀べからず仍て何れにも笠朝臣てふ間の事と云るべし右をもこれにより

不所見十方、孰不戀有米、山之末爾、　末の假字にて際の意ともすべけれど此歌の書樣の類に依てはとはよみつ

射狹夜歷月乎、外爾見而思香、」　音に聞ても思ひ慕ふべき妹なるをましてほのかに見たりしかもとそへたり見てしのては多利の約知なるを互に轉じていふ次の定てしに同じ香は歎の辭なればあれといさよひ出る月に譬しに絶なるさま有

○金明軍歌一首、　こは大伴旅人卿の資人なる事下の挽歌に見ゆ外蕃より來住る人の氏名を賜らぬは子孫迄もかしこの氏名を用ふ聖武天皇元年に金宅良金元吉などに氏を給ひし事あり此類の氏給らぬなるか又同御代に武藏國に在新羅人五十三人依請金氏と爲と紀に見ゆ是等の中か又延暦二年の紀にも金氏見ゆるなり【活本には金を作ゝ余續日本紀に余氏も見たり奥人按に袋草紙にも余明軍と見えたり又文德實錄云散位從五位下百濟朝臣河成本姓余後改百濟むかしかく多異國人こゝに住しも歌はえよまざりしと見ゆればこは子孫なるべしかの王仁か歌てふは空言なり】

印結而、我定家之、　今本これを義之と書てきしと訓たれど字も訓も誤とすよしは集中例を舉て卷三別記に云【卷五に繼而之聞者心慰焉てふを卷七の七夕の歌に擇月日逢家之有者てふにむかへ見て繼而之逢家之とよむを知べし義之本居云王羲之はいみじき手書なれば手師の意にて書る假字なり】

住吉之、濱乃小松者、後毛吾松、」　心のゑめをかく譬る歌多し

○笠郎女贈二大伴宿禰家持一歌三首、

託馬野爾、　遠江國坂田郡

生流紫、衣染、　古へ染といへるに摺たるもあれどこれはたゞそめたるをいふべし

未服而、色爾出來、」　下の歌によるに既契りて深く思へどまだあはぬ間に顯れたるなり

陸奥之、眞野乃草原、　和名抄陸奥行方郡に眞野郷有

雖遠、面影爲而、所見云物乎、」　中ははるかに隔つともわすられぬ面かげを君としてあらんといとせめて思へるよしをいふ

奥山之、磐本菅乎、根深目手、結之情、忘不得裳、」　結ぶは夜によしなし然ば一二句は根深きたとへのことにて末までかゝるにあらず

○藤原朝臣八束梅歌一首、　【寶字四年に名を眞楯と改たれど此集には惣て八束とのみ有】此ぬし紀に天平十二年從五位下と見えてより多の官を經て天平勝寶元年三月に大納言正三位藤原眞楯薨贈正一位太政大臣房前之弟三子也度量弘淳有公輔之才といへり

妹家爾、開有梅之、　卽其妹を云

何時毛何時毛、　【久老云梅の花は五瓣に咲もの故咲たる梅の五とかけていつもといへり】いつにてもなり將成時爾、事者將定、」　をさなき女を心に標置て末にはきほどに至て左も右もせんといふなり卷十三に春雨乎

待登二志阿良自吾宿乃若木梅毛未含有てふも似たる譬なり○成はうめの子にたとふるなり

或本歌、妹家爾、開有花之梅花、實之成名者、左右將爲、」　こは同歌の聊異なる故に後にせしなり然るを今本の端に二首と書たるは後人のわざなり

○大伴宿禰駿河麻呂梅歌一首、紀(聖武)に天平十五年正六位上より從五位下となり橘奈良麻呂が事に連坐て流されしか後にゆりて光仁天皇の御時用ゐられて寶龜七年に卒其時の紀に參儀正四位下陸奥按察使兼鎮守將軍勳三等云云贈從三位と見えて終に氏の手風を立し人なり

梅花、開而落去登、　【梅の花咲とは戀の盛なるにたとへ散は心の外にうつれるに譬ふ】心の外へ移れるにたとふなり

人者雖云、吾標結之、枝將有八方、」　是も次の歌どもと相はなれぬ意なり然れば此人坂上の家の孃子を戀しに今はた他し花に著て坂上の梅を思はずと人はいへど吾心し異なる事なければそは吾思ふ妹の上にはあらじ誰人の上をいひ違へつらんといふなり卷十二に家持の紀郎女に贈歌になでしこは咲而落去登人者雖言吾標之野乃花爾有米八方てふ同じ意なり同時の人なればおのづからに相似たるにもあるべし

○大伴坂上郎女宴二親族一之日吟歌一首、

山守之、有家留不知爾、其山爾、標結立而、結之辱爲都、」　坂上の郎女の女二人有其次の女を駿河麻呂のこふまゝに母もゆるさんとせしを男更に他し女を定めつと聞てかくはよみたるなり

○大伴宿禰駿河麻呂卽和歌一首、

山主者、蓋雖有、　かりに上の言をうけていふのみ

吾妹子之、　【此吾妹子は郎女の女をいふと思ふ人有ど卷十三に駿河麻呂同じ郎女を吾妹とよみたるに合せてこゝをも云れ古へのいひなしとこゝの理を思ふべし】

坂上の郎女をさす

將結標乎、人將解八方、」　よし始より主はありともそこに結し云めは解事を得まじき故にゆひのはぢは云なじと男のうけがへる意をいへりさて遂に家持は姉女駿河麻呂は弟女を得し事末に見ゆ

○大伴宿禰家持贈二同坂上家之大孃子一歌一首、　今本に大孃とのみあり子は例によりて加ふ○坂上郎女の二の女を家持駿麻呂ともに戀なり一の女の事ははやくより父宿奈麻呂につきて田村の里にありて妹坂上孃子と歌は贈和せしかど他の事は此集には見えず

朝爾食爾、　既出

欲見、其玉乎、　大孃子を譬

如何爲鴨、從手不離有牟、」　手從は手よりかれずあらんなり此從を後世は手にといへり古事記に從手とも阿斯用由久ともありて手の隨足のまゝといふに同じき事なり

こゝに佐伯宿禰赤麻呂贈娘子と書歌有けんを今は落し物なり左に報といひ又更贈ともあればなり

○娘子報贈佐伯宿禰赤麻呂歌三首、　【卷十三にも同人娘子と贈和ありそれにも上に報贈といひて次に和歌とあるは其上に一首脫して見ゆるはいかなる事か歌意は上に一首おなじ事云るし】

千磐破、　冠辭

神之社四、無有世伐、　赤麻呂に妻など有を云

春日之野邊、粟種益乎、」　君に主なくば吾心をよせん物をと云

○佐伯宿禰赤麻呂更贈歌一首、

春日野爾、粟種有世伐、待鹿爾、　【集中に爾といひ廼と云に如の意を略く多し是を意得ずて此歌を解たがへし人有】待鹿の如くにてふを略けり

繼而行益乎、社師、留鳥、」　粟まかばそを待はひ鹿のごとく重繼ても通はんをそこには依禁神の社ありて人の通ふ事かなはずといふなり○留鳥を古本には怨焉に作ると久老いへり

○娘子復報歌一首、

吾祭、神者不有、　右の歌に社し留るをと强ていへるをとゞめてそは事違ひぞといふなり【こは社しうらめしとの給へどその社は吾祭るべき神にあらずそなたに本とりつなきつきて有なればたゝりなき樣によく祭るべきされば神の怒もなくて君も繼て來まさむといふ心なり久老云】

大夫爾、　赤麻呂の方になり

認有神曾、　つなぎとゞめて離れぬ神有といへり認はとめたるともよめど紀(齊明)にいゆゑゝを都那遇伺搔抔能てふ大御歌を卷十六に所射鹿乎認河邊之と書てのせたるによれり

好應祀、」　其所にこそかけつながれる神あればそれをあがみまつりてあれよと戯るゝなり

○大伴宿禰駿河麻呂妻　同坂上家之二嬢歌一首、　坂上嬢子と云是なり【田村の大嬢子は姉なり坂上大嬢子妹なり今坂上二嬢とあるは此妹なり是は家持も娉して終に得たり駿河麻呂もかくはやくより戀しかどゆるさざりしなりよりて此後も戀し歌は多かれど得たるよしよめるは見えず家持によりし故駿河麻呂はいひやみし物なり諸成案に前の歌の注には家持駿河麻呂二女を得し事末に見ゆと書しにこゝの冠注とゝのはず此本にかぎらず末を見て前の枚か此枚を改むべし】

春霞、　冠辭

春日里之、　今本爾と有は後人の心にて誤れり一本によるなり

殖子水葱、　殖は生立て有を云古事記に意富迦波良能宇惑具佐又集中に植竹と有も皆同じ

苗有跡云師、　三師古本　柄者指爾家牟、」　里古本　柄は借字枝なりまたけ成なりといひしが今はよく生成つらん我得て住なんとて親へいふなり○水葱は今水あふひてふ草なり別記に委くいへり

○大伴宿禰家持贈同坂上家之大嬢歌一首、　上に出

石竹之、　其花爾毛我、　朝日、　下に阿を略て唱る例上下在

手取持而、　不戀日將無、」　此戀といふはまのあたりに見つゝめづるなり集中に花の盛にむかひ愛しといひ秋の戀の盛など云が如し

○大伴宿禰駿河麻呂歌一首、

一日爾波、　千里浪敷爾、　敷は例の重及なり

雖念、　奈何其玉之、　手二卷難寸、」　海にかづきて取玉によせたり是も坂上二嬢を云べし

○大伴坂上郎女橘歌一首、

橘乎、　屋前爾殖生、　むことる事をいふ

立而居而、　後雖悔、　驗將有八方、」　相住せて後ながゝらずばいかにといひて男の心をおしたゞせりさてこの男は家持か駿河麻呂か次に和歌とのみあるは家持の集なれば名を略きしこともあるか【久老云橘を小女にたとへて扨早そなたの庭にうゑおふせてよよそに見給ふ間に他人の取もてゆかば立て居て後にくゆとも云るしあらじとなりこは駿河麻呂に二女を配せんと催せる歌にや】

○和歌一首、　此卷の上に和歌とのみあるは本よりよみ人云られぬなるべし卷十二におなじ郎女の梅の歌の次にもかくあるはおそらくは家持卿ならん

吾妹兒之、　屋前之橘、　右に男をよせていひしを卽うけていふ

其近、　殖而師故二、　不成者不止、」　植たる橘の子なるが如く末はたさずばあらじといへり今本三の句をいとちかしと訓るによつて近親のことといへる說はわろしちかく植てしとつゞけて一度近づき住てからはと心得べし

○市原王歌一首、　紀に天平十五年五月此上無位より從五位下に叙

伊奈太吉爾、　頂をいふ今も田舍人はいなだきといふ

伎須賣流玉者、　伎は久々里の約にて絞なり須賣流は統るなりかくて神代紀に御統の玉と云に同じく頭を飾る數々の玉の緒をくゝり統る所に一つ大玉有それを無二と云り

無二、　此方彼方毛、　君之隨意、」　只君獨りをおもふからは左有事も右有ん時も君が心のまゝに云たがはんといふなり卷十五に此王の獨子を怨む歌あるにつきて子を愛み給ふ事といふ人あれどそは傍の據に付て本を失へり只此譬喩歌最後の例によりて相聞とすべし譬喩歌は此集皆同【或人法華經に以雞信之珠久在髻中不志與人てふを引つれどこゝにかなふ事なし】

○大網公人主宴吟歌一首、　此氏續紀にみゆ又同紀大神大網造てふもあれば網はもし綱か姓氏錄になし

須麻乃海人之、　鹽燒衣乃、　藤服、　集中には山田守翁か藤衣ともよめり今も山賤は藤の糸もて織たる衣のいとあらきを着るなり

間遠之有者、　織目の間遠なるをわれと住所の程遠きにとるなり

未著穢、」　所遠ければ來馴ずけふめづらしき席につらなりぬと悅ぶなり是を譬喩の中に入しは本相聞の歌にて住所の隔りて妹がりくる事のまれなるよしなればなりさて今はかりて吟へるなり是を相聞ならぬたとへ歌の類にとりしはよくも考へざりしものなりけり【古今歌集に三の句ををさをあらみ四五の句をまとほにあれや君がきさぬとあるはいと唱へ誤りなりされど戀の部に入しは此歌の本に付し物なり】

○大伴宿禰家持歌一首、

足日木能、　冠辭

石根許其思美、　凝々敷の略既出
菅根乎、　かく様にいふは山菅にてそれが根は極て曳取がたき物なり
引者難三等、標耳曾結焉、」　たやすく得がたき女をわが心の内にのみ領つゝ過るをたとふ○焉又也などの字は徒に添たる例も多し今本焉を烏に誤

挽歌

○上宮聖德皇子、　橘豐日天皇(用明)の皇子なり此皇子の御母后大宮の中を巡り給ふ時馬官の厩戸に當りて忽生れ給ひ御壯になりて大政とりふさねますに十人の訴を一度に聞しわきまへ給ひきと且はじめ天皇いと愛みまして上殿に坐給へり故に上つ宮の豐聰耳厩戸皇子命【豐聰耳とは申せど御叔父天皇(崇峻)をころし奉る馬子を見知たまはず後にも友とし給ふは勇なき皇子なりけん】と稱へ奉りぬる事古事記日本紀に見ゆ聖德と申は古事記日本紀にも本はなし紀の注に聖德皇子法大王法主王などあり【紀の注の法大王法主王とかく訓來るに依に聖德のみ字音に唱べからずひ玄りのみこと申べき事なり】且紀に此皇子命薨給へる事を高麗の僧惠照が聞て齋をなせる時の願文に於日本國有聖人云云以玄聖之德生日本之國云云などもいへる佛道の方人の後にた、へ申せしを奈良朝にてはかくも書しなり

出遊竹原井之時、　河内に在後に養老元年二月難波幸の時御かへさに竹原井の頓宮に至まして翌日卽奈良宮へ還ませし事紀に見ゆれば班鳩宮よりもいと遠からぬなり是紀と違へるよしは下に舉つ

見龍田山死人悲傷御作歌一首、　龍田道を越て竹原の井へおはし、なり【後に彼飢人を釋達摩といへるは餘りなるをこ人のわざぞこ、に有歌も實の御歌とは見えねど奈良朝よりはいと前の歌なるに其比さる僧なる說あらば家にあらば妹が手まかんとよまんや凡此命はそしらぬ人は天下になし僧のみ方人としてそら言を添てほめ申せど本の實ならねば皆理り通らぬ事なり紀もこの推古天皇の比よりなるは後に加し物にて殊に此命の御事は空言多きなりまして此御傳ちふ物は惣て假なり】元正紀養老元年二月壬午幸難波宮丙戌自難波至和泉宮庚寅車駕至竹原頓宮聖武紀天平六年十月庚子太上天皇行幸珍努及竹原離宮光仁紀寶龜一年二月庚子幸交野辛丑進到難波宮戊申車駕取龍田道還到竹原頓宮云云

家有者、妹之手將纏、草枕、　冠辭
客爾臥有、　臥をこやせるともくやるとも云は古言なり
此皇子命こ、と同事をよみませる御歌紀には卽下に引如く許夜勢留と有集中に槻弓のくやり〳〵も古今集神樂歌にもあり

此旅人何怜、」　紀には片岡に遊給ふ時と有何れが實ならん片岡は大和に在扨紀の歌は斯那授流箇多烏箇夜摩爾伊比爾惠豆許夜勢屢諸能多比等阿波禮於夜那斯爾那禮奈理雞迷夜佐須陀氣能枳彌波夜那祇伊比爾惠豆許夜勢留諸能多比等阿波禮とありて古しこ、の歌は飛鳥藤原などの比の人の古への事になぞらへよみしものにて必此命の比の調にあらずされどかく傳れるもあるまゝに此家集には書載し物ならん

○大伴皇子被死之時、　紀に朱鳥元年十月此皇子皇太子にそむき給ふ事顯れてうしなはれ給ひぬる時の事なり卷二には大津皇子薨後云云とあり謀反し給といへどこ、に死と書しは例ならず

磐余池陂、　既出【今本端詞に陂と御との間に流涕の言有此集のくせなり此時の御悲いへば中々淺くあるべくしあらねばすてつ】

御作歌一首、

百傳、　冠辭
磐余池爾、鳴鴨乎、今日耳見哉、雲隱去牟、」　萬のなごりを鴨一つにのたまひつげたり○過給ふを雲がくれにするは天に歸るよしなり下にもよめり此皇子此時の詩懷風藻に金烏臨西舍、鼓聲催短命、泉路無賓主、此夕誰家向、とあり皇朝にて始て作り給ふ詩のかゝるによりづの事思ひはかるべし此左に在注は後人のわざ玄るかればすてつ

○河内王、　朱烏八年四月紀に以淨大肆贈筑紫太宰卒河内王并賜賻物葬豐前國國鏡山之時手持女王作歌三首、

王之、親魄相哉、　太宰府にて卒給へばそこに葬べきを豐前國へ葬送りつけば王の此所を玄たしみおほす御心ありてにやとの給ふなり此事卷五に靈合者相宿物乎てふも心均し

豐國乃、鏡山乎、宮登定流、」　上に陵をも墓をも常宮とよめりこ、は常を略なり

豐國乃、鏡山之、石戸立、　閉をいふなり【立とは戸をよせたて、門をふさぐをいふ今も戸をたつるといへ

り】

隱爾計良思、雖待不來座、」 卷二の挽歌に天宮門に入ま
すよしいへるも同じ

石戸破、手力毛欲得、手弱寸、 四言今本手乎とよみしい
まだし

女有者、爲便乃不知苦、」 神代の天岩戸の狀になぞら
へてよみ給へり且此女王は河内王の妻にて太宰府に在
て作給へる事歌にて知らる

○石田王卒之時丹生□王作歌一首、 今本には丹生云
云と有を標には土とあり猶思ふに女の字も落しならん
歌さま女のよめると聞ゆさて丹生女王は天平十二年の
紀に見えたり

并短歌、

名湯竹乃、 冠辭

十緣皇子、 六言こゝの句ども古言を其まゝ用られしか
ば王ながら皇子とはあるならん

狹丹頬相、 冠辭○石田王は若くかたち人なりつらん

吾大王者、隱久乃、 冠辭

始瀨乃山爾、神左備爾、伊都伎坐等、 神ふりせんとて
齋隱おはせりといひなせり

玉梓乃、人曾言鶴、 文のあや人のいひしを云

於余頭禮可、吾聞都流、 六言紀にも集にも多婆許登と
いへるに同じ言なり紀には誣妄をおよづれと訓つ

枉言加、 直ならぬ言にて上の言にひとし

我聞都流母、 加毛てふ言を上に可といひこゝに母と
云

天地爾、悔事乃、世間乃、悔言者、 言は借字事なりさ
て二つの事は卽終の句の事をいふ

天雲乃、曾久敝能極、 久敝の約氣にて遠退たる限と云
なり紀(仁德)に雲はなれ曾伎をりとも祝詞に天乃壁立
極美國乃退立限といひ集中にも此言多し

天地乃、至流左右爾、杖衾毛、不衝毛去而、 卷三にも
かくよみつ

夕卦占問、 夕につぢに立てする占なり下に後行占と
いへるも同じ事か卷四にあはなくに夕卜乎問與幣爾置吾
衣手波又曾繼倍久といへば是にも幣は置しなり後世つ
げの櫛を手してひきて歌を唱ふとのみいふはたらずな
ん

石占以而、 此言次の言にてよくもかなはず然ればこゝ
は何ぞの罪いかなる祟もてふ事を卜へ去りてといふ言

ども落しなるべし○石卜とは景行天皇筑紫の土蜘蛛を
うち給ふ時祈て大石を蹶給へば石空に上りし事有是を
はじめにて後にもさるさまの事する歟

吾屋戸爾、御諸乎立而、 檜の葉にて作る假の屋代をい
ふ

牀邊爾、 今本牀を誤て枕とす卷十七に伊波比倍須惠都
安我登許能弊爾、卷二十にも伊波倍乎、等許敝爾須惠
豆、この外も皆とこといへり此床はいもひして居る齋
床なり

齋戸乎居、竹玉乎、無間貫垂、木綿手次、 【古事記手二
次繫天香山之天之日影二而云云、天武紀次此云須岐、忌
部氏の襁の如く仕奉るわざある故に是をかくるなり後
世只神を敬ふ爲の物と心得はよしなし且木綿もて作る
襁なり】

可比奈爾懸而、天有、 四言

左佐羅能小野之、 冠辭考に出且上に天地の至までとい
ひ下に天川をいへばさゝらの小野も天に有よしなり

七相管、 八とも七とも數の多きにいへるは古への常な
り相は相具る意にて眞の言に用し祓に菅を用る據は多
し【祓に曾を用る事大祓詞に天津菅曾云云卷十五に菅
根取而之奴布草解除益乎行水舟潔而益乎云云○神樂歌
に奈加止見乃、古須氣遠佐幾波比、伊乃利志古止波云
云、かくて祓つ物にはやくより麻は出て菅の無はいか
が猶在の證こそあれ○紀に倒語てふは軍中の謀にてこ
ことは別なり七相菅 相はあふの布を假字に假しにて
七節の意其文の長を云なり久老】

手取持而、久堅乃、 冠辭

天川原爾、出立而、潔身而麻之乎、 犯せる罪によらば
天の上地の限にも行て卜をも問祓をしなん物をと悔の
あまりにいへるなり思ひわびては及なき事をもおもふ
を其まゝによぶぞ古へ人のまことなる○祓と身潔とは
別ながら一度にするわざ故に歌には相かねてもいへる
なり

高山乃、石穗乃上爾、伊座都流香物、」 墓を云なり

反歌

逆言之、 かの誣妄の宜からぬを言枉言は上にいひつ
枉言等可聞、高山之、石穗乃上爾、君之臥有、」 山の巖
の上におはせると云はもし空はうつけ言のまが言と云
なり

石上、 冠辭

振乃山有、　山邊郡布留の神宮の山なり
杉村乃、思過倍吉、　思ひ過しやりがたきを云なり
君爾有名國、」
○同石田王卒之時山前王哀傷作歌、　山前王は忍壁皇子の御子なり養老七年十二月散位從四位下にて卒給ふと紀に見ゆ然は石田王の卒たまひしははやき時なり
一首并短歌、　此短歌の事八下にいふ
角障經、　冠辭
石村之道乎、朝不離、　朝といふやがて日かれずなり
將歸人乃、　歸をゆくと訓る事上にも有○石村あたりに此王の家ありて藤原の宮人通ひ給ひし事をいふなるべし若奈良遷りて卒給ふとも事は前なり
念乍、通計萬四波、　通けんを延てけましといふは末四約美なり美をはぬるは例なり【活本四を作ノ口】
霍公鳥、鳴五月者、菖蒲、花橘乎、玉爾貫、　一云貫交
○紀天智に十年正月童謠に「たちばなはおのがえたえだなれれども玉にぬくときおやしをにぬく」とあれば橘を結にぬくはいと久しき事なりこゝは五月五日の續命縷の事にて時の花菖蒲橘などを五色の糸もて貫てお へは惡氣を除て命ながしと唐事を用ゐたり
葛爾將爲登、　天平十九年五月五日の紀に太上天皇詔者五月之節常用菖蒲爲葛比來已停此事從今而後非菖蒲葛者勿入宮中云云
九月能、四具亂能時者、黃葉乎、折挿頭跡、　常にこゝの興多を此二つもて云らす
延葛乃、彌遠永、　一本云田葛根乃遠長爾
萬世爾、不絕等念而、　一云大船之念憑而
將通、君乎婆明日從、　一云君乎從明日香
外爾可聞見牟、」　末に一言悲むことをいふも一つの體なり
右一首或云柿本朝臣人麻呂作、【此長歌の左に或云柿本朝臣人麻呂作てふ注有には人麻呂の歌云らぬものの注なり次の或本の反歌は人麻呂の歌に似たり此長歌は調もいまだしきをや】
△或本反歌二首、　今本是も反歌の無は落たるなりさて此或本の二首は右の長歌の意ともなく體も調もいと異にて必右と同人の歌ならず然れば右の反歌は落失又右の二首は別に端詞のありけんにそれも落しをみだりに引つけて右の反歌とせしものなり
隱口乃、泊瀨越女我、【越は借字のみにて少女の事なり

唐國の越女燕姬などの樣にいふにはあらず神代紀少女此云烏等咩】
手二纏在、玉者亂而、有不言八方、」　結の絕て亂たるに死を譬たり卷二に具に交りて有といはずやといへるに辭はひとし
河風、寒長谷乎、歎乍、公之阿流久爾、似人母逢耶、」
或は此歎乍ありくを宮づかへの道の往來の事といへどさらばなげきつゝありくといはんよしなしこは葬し後にのこれる妻の墓へ幾度も詣るをいへり仍てありくにまでは詣る公をいひ似人もは死たる人に夫か似る人もあへかしと云なり卷二に飛鳥皇女の薨時天皇の悲つゝ通ひ給ひしさまと人麻呂の思ふ女の葬たる時道行人もひとりだに似てしゆかねばとよみしに似たる事なり
注に右二首者或云紀皇子薨後山前王代石田王作之也此注もいと拙し先上の長歌を山前王とする時は此二首は前人のよめるさまなればかならず又長歌を人麻呂の歌とせばさもいはるべきを必人麻呂ならず却て此二首こそはいさゝか人麻呂に似たる事はあれ又この次の歌は憂にあへる人のうへを他よりいへる意にてこそあれ其人に代りてよめる意はなし總て古歌を能も知らぬ人の注のみ
○柿本朝臣人麻呂見二香具山一屍悲慟作歌一首、　後にもかゝる事多かれど歌よみ得る人の無のみならず常多かればなり古へはさる事まれなるに見れば悲に堪すてよめるなり集中に此類の歌どもあれど御代々經て稀なりけり
草枕、　冠辭
羇宿爾、誰嬬可、　こは女にはあるべからず嬬は例の借字なり
國忘有、【國とは本郷を云なり古今集已來は本郷をふるさと、いへり集にはふるさと、いふは皇居の跡をいへり】國も何も打忘れたるさまにてふしたるなり
家待眞國、」　家にの爾を略てよむは例あり眞を今本に莫とあるは誤なり一本によるさて待むのむを延てまくにといふなり或人莫とあるによるさて云はひが事なり
○田口廣麻呂死之時形部垂麻呂作歌一首、
百不足、八十隈路爾、手向爲者、過去人爾、蓋相奈鳴、」
こは伊祁奈伎命の黃泉まで御妹の命をゝたひおはしまして逢給ひし事を大名持命の隱去給ふ時の言を用ゐてさて廣麻呂がまかり路の跡を追尋て道の八十隈ごとに

手向し祈つゝ遠くとめ行ばあふ事あらんやと云なり上に天地の限天つ川にみそぎてましをとよみし如く切に思ふ心なり○二の句を今本隅坂と有は誤りなれば改たりなぞといはゞ隅坂に八十と云例も理りもなく又隅坂とては意もわかぬなりこは隠路と草にて見まどひて且宇多郡の隅坂は紀にも集にも有に耳なれしまゝに事の意までは思はぬ後の人のさかしらなりけり隈路は古事記に於百不足八十隈一隱去矣集にも又も有言にて疑なく是なり

○土形娘子、　紀(應神)に大山守皇子は土形榛原二氏の祖と見ゆ和名抄に遠江國城飼郡土形(比知加多)また榛原郡もつゞきて有此娘子は采女なる歟

火葬泊瀬山之時柿本朝臣人麻呂作歌一首、　火葬の事既出たり

隱口能、泊瀬山之、山際爾、　山際を山のはと訓て上の事とするは誤なり

伊佐夜歴雲者、妹鴨有牟、」　谷に火葬する烟の其山のかひに立もさらず居も定めぬ雲の如く見ゆるをかく云なり

○溺死出雲娘子火葬吉野一　出雲は氏と見ゆ

時柿本朝臣人麻呂作歌二首、

山際從、　是も山の間より出る雲とつゞけたり

出雲子等者、　一人にも等と云例多し

霧有哉、吉野山、嶺霏霧、」　是よりも谷より立烟の嶺にたな引たるなり

八雲刺、　冠辭

出雲子等之、黑髮者、吉野川、奥名豆颯、」　なづさふは既出○川藻こそあれ娘子が髮の波にゆられとゞこほりてあるを見て悲むなり奥は借字沖なり但此歌前後なるか

○過勝鹿眞間娘子墓一時、　下總國葛飾郡に眞間てふ郷今もあり集中に眞間浦眞間繼橋とよめるもこゝなり

山部宿禰赤人作歌、　此娘子が事をよめる歌卷十にも有それには勝れたるかたちなる故に多くの男の慕爭ふにわびて自眞間の江に沈み死たる事を委しくよみ赤人より少し古きさまなり然れば今はそれらにいひし事をはぶきてうはべの事をいひしと見ゆさて古の事とよみしかばいかに遠き世の事にかもありけん

一首幷短歌、

古昔、有家武人之、　娘子を戀ふる男をいふ【卷七に(七夕)狛錦紐解易之天人乃妻問夕叙吾裳將偲是もひとしき言なりさてこれらに依に男女相かたらふを專らつまどひといひけん○卷六に禰をそ鳴つる手兒にあらなくにとよめるは只小兒をいへりされども末の子は專ら小兒なるを見ならひて凡のをさな子をも云べきなり手兒の字に泥て掌上の兒の謂と思ふはからざまの心得にてかなはず】

倭文幡乃、　古へ皇朝に文有物は今の縞てふ物をあやといへり諸成按に志は須知の約豆は太都の約すぢのたつものを文といへるよしなりよりて倭文の字を充つ此男女も上つ代なれば上つ代の織物もて云にや縞も轉語か

帶解替而、　男女帶をときかはして寢るをいふさて卷十に上總のするの珠名をよめる歌にあまたの人にあひし事をいへり上總國ぶりは男女の相たはくる事を禁ぬを思ふにこゝも隣なる國なれば此娘女もさる類なるべし

それが中にも後まで傳へいふは歌によれるのみなり

廬屋立、　冠辭

妻問爲家武、　是迄は男の方をいふなり

勝鹿乃、眞間之手兒名之、　今も上總下總などに最弟子をてごといへり遠江國にてはそれをはてのこと云果の子てふ事なり是を思ふにはての子のはてを略きて、てごとは云なり總て上總は略言の多き國なり名はをみなを略いふ常の言ぞ【或人云手兒は妙兒の意にやといへり奥人おもふにいにしへにありけむ人といへば果の子なるや初の子なるや知べからねばたへの兒と見むもよからむ】

奥槨、　墓なり

此間登波問杆、　今は墓の形も見えず木のみ茂きなりけり

眞木葉哉、茂有良武、　眞木は檜なり諸木とせば次の松の言をいかに○こゝは卷一に近江荒都の事を大殿者此間雖云霞立春日可霧流夏艸香繁成奴留てふにひとしきなり

松之根也、遠久寸、　遠くはひわたりて世を經るまゝに墓は見えぬならんとおぼめくなり

言耳毛、名耳母吾者、不所忘、」　墓は見えずともあれ古へより語こし言のみにても聞わたる名のみにも怨しさふかくして忘がたしと云なり言を多く略きつゞけたれ

どよく見れば理り聞るは赤人のわざなり

反歌、

吾毛見都、人爾毛將告、勝牡鹿之、間間能手兒名之、奧津城處」墓所なり城は訓を借なり

勝牡鹿乃、眞々乃入江爾、眞間の浦の入江なり

打靡、玉藻苅兼、手兒名志所念、」卷十に水を汲しといふはさも有べし藻を苅までの海人ともおもはれずもし身を沈たるを然いひなすのみか

○和銅四年辛亥河邊宮人見姫島松原美人屍」卷十二にこゝを嬢子と書しも意同じ

哀慟作歌□□、今本こゝに四首とありて左の四首を載たり【上よりして所々にかく後人の書し歌の數の事ありもし此卷にも始歌の數はなかりしにや】然るに左の四首は此端詞の歌にあらず思ふに既卷二に全く此詞にて歌二首あるをこゝにはもし異なる歌ありて載しにやあらんさるを今その歌は落失て端詞のみ殘れるは仙覺か校合すとて或本の歌なとをこゝに引つけしなるべしなぞといはゞ此姫島は卷二に例を引し如く定かに攝津國なり左の三保てふ所は攝津によしなく上に博通法師が紀伊國三穗石室をよめるに久米若子かいましけんといひしをもて必紀伊なる事知るべし且久米若子とは男をいふこゝの端詞に美人とあり古事記に女の事にのみ美人と書り卷二には嬢子とも有又無人とは今は世に無き人なり屍を見ててふ詞にいふ事にあらず又下の二首は相聞にて必この怨歌にあらずか、れば右の詞の歌はうせぬ次の二首の端詞も失し物なり仍て考にこの二首は彼博通が歌に和たる歌と見ゆ其よし左の如し

○□□□□□□□□□□□□□□某姓名往紀伊國見三穗石室而和博通法師之歌作歌二首□、かく端詞ありつらんか次の歌は下にいふ

加麻皤夜能、麻はあさのさを用ひしか訓の假字は下の言を用る例なり又座を誤しにも有べしこは所の名なるべく思ひ成ぬ

美保乃浦廻之、三穗の浦てふ名はかた〳〵に在と既云そか中にこゝは紀伊なり

白管仕、時に咲て有を見てよめるなり卷十にもよみつ

見十方不怜、無人念者、」或本云見者悲霜無人念者

見津見津四、冠辭【滿々之也つは滿て云へし久老云】

久米能若子我、既出

伊觸家武、伊は發語なり

磯之草根乃、干卷惜裳、」

左の歌はたゞ相聞にて挽歌に交るべきにあらず何により亂散てこゝに入つらんされど捨べきにあらねば小字にて添るのみ

人言之、繁比日、玉有者、手爾卷以而、不戀有益雄、」

妹毛吾毛、淸之河乃、淸みはかたみに相思ふ心の疑なきを云さて卷二に飛鳥の淨之宮とよみし如く飛鳥川をかくもいへるなり【是をきよめし川と訓てみそぎしてちかひし事とすれど心ゆかぬ事有】

河岸之、妹我可悔、岸の崩を悔るにそへたり

心者不持、」事有時男のよめるなり卷十の相聞歌に鎌倉のみこしがさきの伊波久叡乃君我久由倍寸こゝろはもたずとよみたり【此左に後人の注あれどいふにもたらねばすてつ】

○神龜五年戊辰太宰帥大伴卿思戀故人歌三首、

愛、卷十に宇流波之等安我毛布伊毛乎と有もてよめり宇良具波志の良具の約流なればうらぐはしといふ二の別記にいふ

人飡而、敷細之、冠辭

吾手枕乎、飡人將有哉、」此故人のごときは又もあらしと思ふ心より出たる歌なるべし今年春の比身まかられしとみゆ【卷十二に式部大輔石上堅魚朝臣の霍公鳥來鳴響云云てふ歌の左に右神龜五年戊辰太宰帥大伴卿之妻大伴郎女遇病而長逝焉云云】

應還、時者成來、天平二年に歸られたりさて任の限はかねて定あるなり

京師爾而、誰手本乎可、吾將枕、」卷九和我麻久良可牟又卷十九

在京師、荒有家爾、一宿者、益旅而、可辛苦、」下に京の家にかへりて此意の歌有【右二首その左に後人の注あれど云にもたらねば捨つ】

○神龜六年己巳左大臣長屋王賜死之後、此王聖武天皇を傾ん謀するよし宮處の連東人等が告によりて身まからせ給る事續紀同年二月の紀に見ゆ【神龜六年八月に天平元と改らる此後天平十年に大伴宿禰子虫其宮處東人を殺しぬ子虫は初長屋王に任し人にてあればなりそこの紀に東人は誣告長屋王事之人也と有然ば王は無實の罪にあひ給ひし】

倉橋部女王作歌一首、

天皇之、命恐、大荒城乃、正葬の前に假にをさむるを

あらぎといふは麁羅の意なり城は借字のみ唐文の殯を假喪羅と訓も理なれど今少し後の言なり此あらぎを殯の訓ともすべし且大とは天子に申事なるを王にもいへるは歌なればなり

時爾波不有跡、　次の龍麻呂が自死たるをも時爾不在之天といへり

雲隱座、」

○悲二傷膳部王一作歌一首、　是は長屋王の一の子にて同く死らせ給へりさてよみ人右と同じければ去るさぬにや

世間者、空物跡、將有登曾、　とて云のてを略なり

此照月者、滿闕爲家流、」　いたみ〳〵て後に理りをとりていさゝか和さめんとするなり

○天平元年己巳攝津國班田史生、　紀に天平元年十一月任二京乃畿内班田司一とある是なり令の定め六年毎に諸國の田を改割戸口班給ふ奉行に班田司を任せらるゝなり【奥人按に續紀十曰　聖武天皇天平元年十一月任二京官畿内班田司一云云田を班ち給ふ故にゐなかをあかたともいふなり】○史生は主典の下に在て事を記すを專らとす

丈部龍麻呂、　和名抄に安房國長狹郡丈部（波世豆加倍）とありかくて安房上總の防人の氏に丈部の多きを思ふに龍麻呂も其國より出て仕るならんと或人いへり

自經、【わなきはわなくゞりなり】

死人時判官大伴宿禰三中作歌一首并短歌、　此人天平十二年に正六位上より外從五位下に敍其後多の官につかへつ

天雲之、向伏國、　祝詞に四方國者天能壁立極美白雲乃墮坐向伏限てふ如く其地のはてをいふなり

武士登、所云人者、　衛府は武藝に名有人を用らる龍麻呂遠祖よりあひ繼て武名ありけん

皇祖之、神之御門爾、　皇祖は前つ御代々の天皇を申事既云が如し然ば龍麻呂が先祖より傳へて衛府に仕奉しをいへり次に名文繼往物與いふをあはせておもふべし

外重爾、　宮城の門なり龍麻呂は門部か物部なりけん四言なり立候【大内に内中外の三門有て衛門府は宮城の外を守是を外重といふ左右兵衛府は中重を守是を中重といふを衛府は内の重を守る是をちかき守といふかかれば今うちはにと訓るはわろし候の字をまちと訓し

もこゝには誤なり】

内重爾、　中重なり内と書しは兵衛府は中重の内閤門の外まで守ればなり此人兵衛にも轉せしなり

仕奉、玉葛、彌遠長、祖名文、繼往物與、　右に云が如し

母父爾、　下に意毛知々共あればさも訓べし【母を先にいふは皇國の古へ母をたふとむならはしなり】

妻爾子等爾、語而、立西日從、　遠祖より公に仕奉て名をひろく顯し、を其末としていたづらに在べからずと聞せて立出し日よりといふなり

帶乳根乃、　冠辭

母命者、　母父をたふとみて命といふ事上下にも有私の家にては何の限りかあらん

齋戸乎、　既出

前坐置而、一手者、本綿取持、　六言

一手者、和細布奉、　にぎたへと木綿の事は冠辭考にいひつ奉を略てまつるといふは卷一にいへり

平、　今本に乎とするは字も訓も誤れり

間幸座與、　間は借字眞なり

天地乃、神祇乞禱、何在、歳月日香、茵花、　冠辭

香、君、　母父の愛思ふ意を押はかりていへり

牽留鳥、　冠辭今本字も訓も誤なる事冠辭考に委し

名津匠來與、　遠き都道を漸歸來ん事を網を漸に引よするに譬たり

立居而、待監人者、王之、命恐、押光、　冠辭四言

難波國爾、荒玉之、　冠辭

年經左右二、　班田の時は其國の司前六年の間戸口の增減田地の興廢の事を例のまゝに按を作るを班田司は臨て正すのみなるべし然るを此歌攝津國に年經たる如くよめるはおぼつかなし思ふに内つ五つの内多くは事成て今こゝに到て死たるをかく云ならん【京畿を兼て一つの班田司を置れしにてさらる】

白栲、　冠辭

衣手不干、　只衣をほしほさぬ事をこゝにいふべきにあらず手の落しなり仍て補へりさて思もひたけびては別れ來りつれどさすがに故郷戀るなみだはたえざりしなり【此下にも白細之衣袖不干歎乍吾泣涕とよめり】

朝夕、在鶴公者、　同し司にてひるよる相見しなり反歌にも有

何方爾、念座可、蜻蟬乃、　冠辭

惜此世乎、露霜、置而往監、時爾不在之天、」

反歌、

昨日社、公者在然、不思爾、濱松之上、於雲棚引、」　雲に成てを略且濱邊の葬所に火葬せるなり

何時然跡、待牟妹爾、玉梓乃、事太爾不告、　事は借字言なり

往公鴨、」　家人へふみだにのこさでみまかれるはいかなる故にか有つらんとなり

○天平二年庚午冬十二月太宰帥大伴卿向京上道之時作歌五首、

吾妹子之、見師鞆浦之、天木香樹者、【牟呂の木今の柏子に類して香氣有といへり又或云葉は針のごとくなれば俗鼠さしと云鼠の穴を塞によしと】和名抄に樫一名河柳(無呂)卷十に新羅へつかはさる、人の歌の中にはなれ磯の室の木をよめる二首有それも備中の神島の歌につゞきてあればこゝと同所の木なりけり

常世有跡、見之人曾奈吉、」【奥人按に祇注云此已下五首帥大伴卿妻におくれて上京の時の歌なり季吟云任に趣し時もろともに見し人のなくて歸んに此木の常葉なるを見て感哀極る歌なり】

鞆浦之、磯之室木、將見毎、相見之妹者、將所忘八方、」

此相見しは其木を共に見しをいふ

磯上丹、根蔓室木、見之人乎、何在登問者、　いづらは何に在てふ言を再つめたるなりそは伊豆禮爾あるのにあの約奈にていづれなると云を又其禮奈を略ればいづらと成ぬさて其留と良と同言なれば留を略て伊豆良といふ】

語將告可、」　卷二に岩代の結松を憶良の人こそ去らぬ松は知らんとよめる類ひにていとこそかなしかりけり

今本こゝに在る注は取にたらずよりてすてつ

與妹來之、敏馬能埼乎、　既云

還左爾、獨而見者、淤具末之毛、」【此末を今本に情悲喪と有るは情をつくさず仍一本を用かくてこそ悲しともかなしけれ】

去左爾波、二吾見之、此埼乎、獨過者、見毛左可受伎濃、」

共に見しものと思ふに泪のすゝめば見も放られずて過來ぬるといふなり左氣良禮受の氣良の約可なり且禮を略て左可受といへりさて遠く見やる事を古へは見さぐると云つ

○還ニ入故郷家一卽作歌三首、

人毛奈吉、空家者、草枕、　冠辭

旅爾益而、辛苦有家里、」

與妹爲而、二作之、吾山齋者、　佐保の家は本より山邊なるを苑を心して作りおもしろき屋をも建しならん然るに此歌木立の事のみにて屋をいはず卷二十に中臣清麻呂之屋集而屬二目山齋一てふも皆池島などをのみよめり吾山吾門などよめる事多く事の意を去らせんとて字を添るは此集の例なれば今本齋を捨てやまとのみよめるもよし無にあらねば去たかひてもあるべきを彼卷共の詞はやまとのみ訓てはたらはねば彼も是もおしこめてそのと訓ならんと覺ゆ苑は事弘ければなり【此上に藤原家山地と有は山蘭を略しなれば曾乃能池と訓たりそれにうらかへしてこゝは曾能と訓り】

木高繁、成家留鴨、」

吾妹子之、殖之梅樹、　同山齋なり

毎見、情咽都々、涕之流、」

○天平三年辛未秋七月大納言大伴卿薨之時歌六首、

紀に此年月に薨ぬる事有て難波朝右大臣大紫長徳之孫大納言贈從二位安麻呂第一子也と見ゆ此卿の雄々しくて雅たる眞の臣なる事既にもいへるが如し然るを時にあはで大臣ともならで終りしこそ惜けれ【こゝの薨をすぎぬるときと訓しはいかゝ須玖の約死なり士庶を死といひ五位已上卒三位已上逝中納言已上を薨といふは唐の事なり崩も薨も逝も卒も死なれば此朝の言の例に任てすぎといはんにも崩を加美佐里と訓すれば薨は世を左里など訓むか家持卿此聊の諱をからすまして資人の歌なれば少はあがめて世をさらすとも又は世をさらしゝとも訓んかよてこゝの訓を略置ぬ】

愛八師、　こゝはなつかしむ言なり卷二の別記に委し今本の訓はひが事ぞ

榮之君乃、　卷二にゆふ苑の榮時卷七にあしひなす榮之君之皆同

伊坐勢波、　在の意にて今まさばなり

昨日毛今日毛、吾乎召麻之乎、」

如是耳、有家類物乎、芽子花、咲而有哉跡、問之君波母、」

はぎの咲たるを見て咲を待問し主のおはさぬをなげくなり

君爾戀、痛毛爲便奈美、蘆鶴之、　之の下に如くを略く

蘆をいふはあし鴨蘆鹿よしきりなど皆住所の物もて云

哭耳所泣、朝夕四天、」　朝夕とは晝夜を云

遠長、將仕物常、念有之、君師不座者、心神壬奈思、」

此下に家さかりいますわぎもをとゞめかね山隱つれ精神ともなしてふも吾魂さへ失ふと云なり

若子乃、　如を略なり

御匂多毛登保里、朝夕、哭耳曾吾泣、君無二四天、」

右五首資人、　資は古本による【軍防令に資人親王及大臣には數いと多大納言には百人なり又養老三年の記に始以六位内外初位及勳人等子年二十以上爲位方資人は年に一替と見えたり】

金明軍、　既出

不勝犬馬之慕、　唐文に不勝犬馬戀主之情てふを借たり他國の文の言をもてこゝの言に云はなま〳〵なる程の言ぞ

述心中感緒作歌、　述の字今本に無は落しなり今加へつこは家持主の書し注ならん

見禮杼不飽、伊座之君我、黄葉乃、移伊去者、　うつり過ちるは共に通しいふ例なり

悲喪有香、」

右一首勅内禮正縣犬養宿禰人上使檢二護卿病一醫藥無驗近水不留因斯悲慟卽作此歌、　職員令に内禮正一人掌宮内禮義云云事は義解に見ゆ

○七年乙亥大伴坂上郎女悲二嘆尼理願死去一作歌一首並短歌、

栲角乃、　冠辭

新羅國從、人事乎、　事は言なり

吉跡所聞而、　伎々を延て伎古志といへり日本の天皇は惠み深くて他國の人をもよく養ひ給へば我もやすく行ん國ぞと聞てなり

問放流、　卷十九に語放、見放人目、紀(光仁)に誰　留加毛　我語比佐氣牟孰　留加毛　我問佐氣牟止云云後には問やる見やるといへり

親族兄弟、無國爾、渡來座而、天皇之、敷坐國爾、内日指、　冠辭

京思美彌爾、　繁々を略さて兄弟無國爾よりこゝにつゞく隔句なり

里家者、左波爾雖在、何方爾、念鶏目鴨、都禮毛奈吉、　隔句こゝより死云事爾へつゞく○つれもなきは所由も無といふにひとし別記にくはしつらめなきを約云

佐保乃山邊爾、哭兒成、慕來座而、布細乃、　冠辭

宅乎毛造、荒玉乃、　冠辭

年緒長久、住乍、　須萬比は萬比約美にて須美を延たる言なり萬爲と書は誤なり

座之物乎、生者、死云事爾、不免、物爾之有者、憑有之、人乃盡、草枕、　冠辭

客有間爾、　上よりの隔句慕來往而よりこゝにつゞく旅なるまゝは左の注に見ゆ

佐保川乎、朝川渡、春日野乎、背向爾見乍、足氷木乃、　冠辭

山邊乎指而、晩闇跡、隱益去禮、　益は借字のみ○佐保川ゆ下は葬の道を云

將言爲便、將爲須便不知爾、徘徊、　とやせんかくやあらんと思ひめぐらすをいふなり【徘徊を今本にたちとまりと訓はいづこにても叶はず】

直獨而、　郎女一人

白細之、衣手不干、嘆乍、吾泣涙、有間山、　左に見ゆ

雲居輕引、雨爾零寸八、」　かくいふ類下にも有

反歌、

留不得、壽爾之在者、敷細乃、家從者出而、雲隱去寸、」

右新羅國尼名、　名は古本によりてくはへぬ今本無

曰二理願一也、遠感二王德一歸二化聖朝一、　多くは奸事有て住わびたる僧尼共の來れるをみだりに信せしは時なるかな

於時寄二住大納言大將軍大伴卿家一既經數紀焉、　始大納言安麻呂卿の時に來て和銅七年五月此卿薨て後こゝに住て今天平七年に死たるなり

惟以天平七年乙亥忽沈運病既趣泉界於是大家石川命婦、　【大家女之尊稱なり石川命婦は旅人卿の後妻なりと契冲いへり】卷三の注に大伴坂上郎女之母石川内命婦といひ惣てを考るにも然なり

依二御藥事一往二有間溫泉一而、　攝津國有馬郡

不レ會二此哀一但郎女獨留葬二送屍柩一既記仍作二此歌一贈二入溫泉一、　母の本故に入といふ

○十一年己卯夏六月大伴宿禰家持悲二傷亡妾一作歌一首、

從今者、秋風寒、將吹烏、　【天平十一年己卯夏六月云云拾穗】六月の末なり

如何獨、長夜乎將宿、」

○弟大伴宿禰書持卽和歌一首、

長夜乎、獨哉將宿跡、君之云者、過去人之、所念久爾、」

よみにます人も獨いねがてにすらんといふなり爾は奈に通ひていひおさへてなげく辭なり

○又家持見二砌上瞿麥花一作歌一首、

秋去者、　秋にならばなり

見乍思跡、　こは後の形見にといふにあらず只見なく愛

妹之殖之、　屋前之石竹、　開家流香聞、」

○移　朔、　七月一日なり

而後悲二嘆秋風一家持作歌一首、

虛蟬之、　こは冠辭とせずてあるべし

代者無常跡、　知物乎、　秋風寒、　思弩妣都流可聞、」　秋風

の肌寒きには常よりも故人の去たはしきなり

○又家持作歌一首並短歌、

吾屋前爾、　花曾咲有、　其乎見杼、　情毛不行、　愛八師、

卷二の別記云

妹之有世婆、　水鴨成、　二人雙居、　手折而毛、　令見麻思物

乎、　打蟬乃、　借有身在者、　こ、の打蟬も冠辭にあらず

顯の身のかりなる身と云なり今本情有と有は誤なり一

本借と有ぞよけれ

露霜乃、　今本霜露とありてとけ玄もと訓たるは歌こと

葉ともなしこれも古本によりぬ

消去之如、　足日木乃、　冠辭

山道乎指而、　入日成、　隱去可婆、　曾許念爾、　それを思

事なり

胸己所痛、　言毛不得、　名付毛不知、　跡無、　世間爾有者、

將爲須辨毛奈思、」

反歌、

時者霜、　何時毛將有乎、　情　哀、　なさけなくといへる

に同じ

伊去吾妹可、　哉なり

若子乎置而、」

出行、　道知末世波、　豫、　【卷十五言卷毛、湯々敷有跡

豫　兼而知者】

妹乎將留、　塞毛置末思乎、」　卷二に大御舟はてしとまり

に玄めゆはましをとよめる意に同じ

妹之見師、　屋前爾花咲、　時者經去、　時過しなり

吾泣涙、　未干　爾、」

○悲緒未レ息更作歌五首、

如是耳、　有家留物乎、　妹毛吾毛、　如千歳、　憑有來、」　千

とせ經ん如く長く思ひたのめしなり

離家、　伊麻次吾妹乎、　【こ、の伊末須は坐在の意にあ

らず】

停不得、　山隱都禮、　都禮の禮は良米の約なり禮は禮婆

の省

精神毛奈思、」　此歌上にも在り

世間之、　常如此耳跡、　可都知跡、　【且奥人按に伎波和

加の約加にて際分の意なり上にいひし言を一きは分ち

て更に又いひ下す時に云言なり】可都は物二つを一度

に云時其間にいふ言なりこ、は世のならひぞと知ると

おもひ明らめ得ざるとの間なりされど證難き時は上に

も下にもおくなり

痛情者、　不得忍都毛、」　今本得の字無は落しなり例に

よりて加へつ

佐保山爾、　多奈引雲、　毎見、　火葬の烟よりしてかすみ

を悲しめりさて古へかすみはいつもいづれど是もいつ

とはさしがたし

妹乎思出、不泣日者無、」

昔許曾、　外爾毛見之加、　吾妹子之、　奥榁常念者、　波之吉

佐保山、」　波之吉は上に出

○天平十六年甲申春二月安積皇子薨之時、　此年月難波

宮へ幸ある時此皇子御病により櫻井行宮より歸て其三

日に薨給ひぬ聖武天皇の皇子年十七と紀に見ゆ

内舍人、　卷十五に天平十二年にも此人内舍人と見ゆ○

職員令に内舍人九十人掌ト帶レ刀宿衛供二奉雜使一若駕行

分衛前後上と見えたり

大伴宿禰家持作歌□□、　こ、はいかに有けん今本に六

首とあれど次の歌は三月よめれば別に詞ありけん

掛卷母、綾爾恐之、言卷毛、齋忌志伎可物、　此四句既云

吾王、御子乃命、萬代爾、食賜麻思、大日本、久邇乃京

者、　山背國相樂郡久邇鄕の郡の時なり

打靡、　冠辭

春去奴禮婆、　春になりぬればてふ言なればかくもある

べけれど他皆春去來禮婆と有に依ば奴は玖の誤りにや

山邊爾波、花咲乎烏里、　今本に爲と書は誤りなる事既云

河湍爾波、年魚子狹走、　卷九に阿由故佐婆斯留とあり

若あゆをあゆこと云は常に鯉など云類なり

彌日異爾、　既云こ、は日爾異爾を略て云爾は既に云如

なれば補

榮時爾、　春の榮を皇子の榮にいひよせたり

道言之、狂言登加毛、白細爾、　白布を轉らして只白き

事に用ゐたり此言の事冠辭考にいへり且細布の布をは

ぶきつ

舍人裝束而、知豆香山、　相樂郡に在なり
御輿立之而、【御輿は葬車也】
久堅乃、　冠辭
天所知奴禮、　卷二にも出
展轉、　こはこやすともいひて臥事なり
雖打羅涙、　雖打既出
將爲須便毛奈志、

反歌、

吾王、天所知牟登、不思者、於保爾曾見鶯流、和豆香蘇
麻山、」　卷二に人麻呂の天去らしぬるといひては末も天
の事にていへりこは然いひて下に御墓の地をいひぬれ
ば言の筋通らず聞ゆるはいかに天しらさん云云を具蕘
まさんてふ事に用ゐしなりさらばは今少し事行過て聞ゆ
既此比にはさもくたれる歟
足檜木乃、　冠辭
山左倍光、　卷二にさ、の葉はみ山もさやにとよめる毛
と此佐倍は意同じくいふ事あるはさへは着副る意毛は
彼も此もと云時ひとしきなり
咲花乃、散去如寸、吾王香聞、」
右三首二月三日作歌、

掛卷毛、文爾恐之、吾王、皇子之命、　同じ安積皇子
物乃負能、八十伴男乎、　男は借字にてその部をいふ神
代紀に五部神を伊都刀毛乃乎乃神多知とよみてその中
には女神もあればなり祝詞に伴緒と有を正しき字とす
べし
召集聚、率比賜比、　此言卷二に云
朝獵爾、鹿猪踐越、暮獵爾、鶉雉履立、大御馬之、口抑
駐、御心乎、見爲明米之、　御心を見晴し給ひと云に同
じ古は見る事を目といひし事上にもいひつ
活道山、　こは此反歌又卷十五に天平十六年正月十一日
登活道岡云云とて家持ぬしの歌あれば久邇の京近き所
とはあるしされど卷を後にいくめぢとも訓は何れまこ
とにや知がたし仍今強て考るに神代紀に多くは活津彦
と書し同命を末の一書に活目津彦とあり是を思ふに上
は皆目を略けるものと見ゆれば何れも訓には又伊を略
て久米津比古と唱ふべきなり是によてこゝをも伊を略
き米を添てくめぢと訓む猶此地は知人に問べし【紀の
文上に活津彦とあるにて下に活目とある目をばよまぬ
ごとくするは僻事なり有を捨て無によるは事にこそよ
れ】

木立之繁爾、咲花毛、移爾家里、　皇子の薨給ふをよ
すこゝは一段なり
世間者、如是耳奈良之、丈夫之、　今本例の丈を大に誤
るなり
心振起、劔刀、　古事記の倭建命の御歌に都流岐能多知
曾能多知波とよみましたりこゝなどつるぎだちとある
は能を略けるなり劔と刀は別と思ふは後のひが心得な
り委冠辭考にいゝ
腰爾取佩、梓弓、靫取負而、天地與、彌遠長爾、萬代爾、
如此毛欲得跡、願有之、　二段なり
皇子乃御門乃、五月蠅成、　神代紀に如の字を此なすて
ふ言に書ゝ諸成案に奈は爾奈の約にて似な須てふ言な
り
騷騷舍人者、　こは内舍人にあらず大舍人帳内などの人
人をいふべし
白栲爾、服取著而、　卷二にもあり
常有之、咲比振麻比、彌日異爾、　前にいふ
更經見者、　御葬の後を云
悲　呂可聞、」　呂の助字を添ふるは下に例多し今本に誤
てかなしめすと訓しはいかにぞや諸戒案に此呂は助字
にあらず集中に良を呂に通す例あり兒等吾等を兒呂吾
呂といふに同じ此等の考は荒良言に委く云なり【卷六
かなしき兒呂がえのほさるかにと有かく云は眞淵をあ
しとにはあらず志をつきて誤を補はもとよりの翁が心
なり】

反歌、

皇子之命乃、袁里我欲比、見之活道乃、　上の如く見爲
ことばなり
なりとあるべきを爲を略き書し事去るければめし、と
は訓り今本には見之とあるからは次をいくめぢと訓に
他なしとおもひてみしと訓つらめど心を用ゐざる物な
り見し、とはあがめ言なる事既に云つ
路波荒爾鷄里、　すぎまし、後五十日餘りになるをかく
よめる類なり
大伴之、名負靫帶而、」　大伴氏の名におふと心得べし神
代紀一書に大伴連遠祖天忍日命帥來目部遠祖天穗津大
來目負大磐靫云云立天孫之前云云孝德天皇天つ日嗣に
立ませる時までも大伴長德連帶金靫立壇石と紀に見え
姓氏錄の大伴氏の條其外にもあまた見ゆ

萬代爾、憑之心、何所可將寄、」 上の長歌に御子命の萬代にめし給はまし大日本久邇の京と云に此歌を合せ思へば此皇子は皇太子の位におはしけん

右三首三月二十四日作歌、

○悲二鶴死妻一高橋朝臣名は本より去れざりしか作歌一首幷短歌、

白細之、　冠辭

袖指可倍氐、靡髮、吾黑髮乃、眞白髮爾、成極、新世爾、將山代乃、相樂山乃、　古事記(垂仁)に圓野比賣を丹波へ歸さる、時比賣漸して山代の相樂に至て取二懸樹枝一而欲死故に其地云二懸木一今云相樂と有後の和名抄にすら此相樂郡を佐加良加と去るしたり然は奈良の頃の訓知べし今本さからのと訓しは誤なり

山際、往過奴禮婆、　葬り送る道なり

將云爲便、　便一字を須倍と訓し下に多し卽此言のこゝろにかるべしなり

將爲便不知、吾妹子跡、左宿之妻屋爾、朝庭、　庭は借字

出立偲、夕爾波、入居嘆合、　奈解伎の伎を延て加比といへり今本舍と書てをりと訓しは云にたらず

腋狹、　【卷六にわきばさみ持てふは上の言ともにて聞えたるをこゝは不意に書たり】

兒乃泣毎、　今本泣母とありて訓も穩ならずこゝは卷六の人麻呂の妻の死し時の長歌をいひうつしたると見ゆるにそれに若兒乃乞泣毎取與物之無者烏徳自物脇挿將云云と有は母は毎の誤とす言も調べり

雄自毛能、負見抱見、　俗におひても見いだきても見と云に同じ試にすかす意なり

朝鳥之、啼耳哭管、雖戀、効矣無跡、辭不問、　ものいはぬなり

物爾波在跡、吾妹子之、入爾之山乎、　葬道し山をいふ

因鹿跡叙念、」 よすがは由緣阿留所てふ言なり其志阿留の三言を約れば須となる故に與須と云加は所なり在所住所などいへる例なり且此心によめる上にも下にもあるなり

反歌、

打背見乃、世之事爾在者、　世間の常の事にしあればなり

外爾見之、山矣耶今者、因香跡思波牟、」 【因香は寄處なり久老】卷十六に去がの山いたくな伐そ荒雄等が余須可の山と見乍去ぬばん○跡は古本による今本爾と有はよろしからず

朝鳥之、啼耳可鳴六、吾妹子爾、今亦更、逢因矣無、」

右三首七月廿日高橋朝臣作歌也、此十四字は本よりこの歌の左に書て有けんよみ人の名も去られぬに他より知べからねばなり扨此下に名字未審云奉膳之男子焉てふ十二字は後人の書加へしものなりと見ゆ其名去られざるに官のみ知べきよしなし且官を去りてこゝに何かせん○長歌は卷二のはての歌に云し如く古歌をよみうつしたるのみにてみづから得たる樣にもあらず反歌またいとよはし

萬葉集卷十四之考終

萬葉集卷十五之考

○此卷は今の六の卷なり是を十五の卷とする事は卷一の前記にいへりさて此卷は養老七年をはじめとして神龜に至り天平十六年迄の歌をあげたり末に久邇の京の荒たるを悲む歌有こは天平十八年九月より後の事なり且旅人卿を帥大伴卿とたとふとみ擧て名を去るさず此前の卷既いふ如く十一卷以下同集ざまなればなり

○既云如く歌の數を歌毎にあげたれどすべてみだりなりよしは卷十一の卷にくはしくいへりことさらに此卷はみだりなり其一つ二つをいはゞ石上の乙麻呂卿同妻のよめる歌のはじめに三首と擧しは長歌の數なり他の長歌もかく書て反歌とありて其數を何首とかけるに此三首は反歌とかくべき所に其事なく終に反歌一首とあるは其前の長歌の反歌にはあらず又田邊福麻呂歌集中とて二十二首とある歌の數は廿五首有て中に一首他歌紛入たるあり又反歌三首と有て歌は二首あるも有よしはそこにも委しくいへりかくみだりなるをおもふに歌數は後人のさかしらに書加へしと見ゆれば歌の左に在歌數をすて、標に歌の數有は委く記し一首なるは數を去るさず

○標は本より後にかきしものならめど見たる事既いへりされど見るにたよりあれば卷一二の考の眞淵ざまにならひて書つらねたり夫が中にも其さまみだりなるは改て標を增減して書りよしは其條の下にいへり

○歌の右に在る注のよしもなきは捨よし有は其よしをいひてことゞくあぐる事前の卷の如し

○年號を擧て支干をすて春正月冬十二月などある春冬の字は唐ざまによりてかけるなれば捨つ此卷などはもはら唐ざまによりてかければ去ひて吾國ぶりによみなんとするは去ひ事なれどもとより端詞なれば試に吾朝廷ぶりによめり見ん人よろしきにつきてとりもすてもせよ

萬葉集卷十五之考〔流布本卷六〕

雜歌

○養老七年五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌、　續紀元正に養老七年五月行幸芳野宮と見えたり

瀧上之、御船乃山爾、　吉野のうちなり

水枝指、　水は借字枝なり

四時爾有生、　四時は借字繁なり

刀我乃樹能、　冠辭刀を今本に刀と訓るは誤るよし冠辭にくはし

彌繼繼爾、萬代、如是二二知三、　こは去ろしめさむといふなり

三芳野之、蜻蛉乃宮者、神柄香、貴將有、國柄鹿、見欲將有、山川乎、峻清、　山と川の事をいふなれば既にも云如く川を清てとなふべし峻清も山と川の事を云なれば今本の訓は誤れるなり

諾之神代從、定家良思母、」　峻清山句の下に一句たらざる古歌に例有されど奈良の朝の歌なれば落しなるべし今本清々とあり必一字は誤なるべく覺ゆれば改ぬ此所亂しにやとおもはる能本を見ん人改べし

反歌、

毎年、如是裳見牡鹿、　得欲といふに同じくねがふ意なり

三吉野乃、清河内之、　加波宇知の波宇の約布なれば加布知と書て加宇知の如く唱るは言便なりそをやがて訓にも加宇知と書はひが事なり

多藝津白波、」

山高三、白木綿花、　去ろき木綿もてつくれる花の如くなりにを如くと心得べきなり

落多藝追、瀧之河内者、雖見不飽香聞、」

○或本反歌

神柄加、見欲賀藍、三吉野乃、瀧乃河内者、雖見不飽鴨、」　二の句を落句と重る

三芳野之、秋津乃川之、萬世爾、斷事無、又還將見、」

泊瀬女、造木綿花、三吉野、瀧乃水沫、開來受屋、」

大瀧といひて大石の間をなゝめに落るあり實に此瀧は綿もてつゝむが如し眞淵一とせ大和にあそべり見たるありさま此歌のごとくおもほゆるよしものかたらひしなり

○車持朝臣千年作歌、

味凍、　冠辭

綾丹之敷、鳴神乃、音耳聞師、三芳野之、眞木立山湯、見降者、川之瀬毎、開來者、　夜の明をいふ

朝霧立、　六言

夕去者、川津鳴奈理、　川津鳴奈の下に今本辨詳と有は誤字なり一本に詳はなくて辨を拜とするも共に誤なり理の草を拜と見し誤として見れば理の字なるべし【夕去者川津鳴辨詳と今本にある方ならん歟こはあしたに見たるさまをよみたるなれば夕べになりては川津鳴べしとおもひはかるなればなくべしといふならんと藤原昌保のいへるはよしあり今本鳴なべと訓たるは仝誤りなり】

紐不解、客爾之有者、吾耳爲而、清川原乎、見良久之惜裳、」　今本惜を情とあるは誤なるければ改むさて此歌の反歌を三舟の山をかしこけど、いへるは言にかけんもかしこかれど、いふにて高き人を思心に高山をなぞらへよめるなりと眞淵はいひたりげにも長歌はおとにのみき、し三吉野と見てめづるありさまをいひ下せるなるに川津鳴てふより下は紐とかずといひ吾のみして見るがをしと、めたるは言にもいひ出かね深く心にしみてやる方なき思ひのあまりか此終の句に言に出たるにて吾のみ見る事のあたらしさにかしこかれど時も日もなくわすられぬ人と共に見ばやてふ意ありと見ゆさなくては此終の句解べきよしなし此雜歌の並にあげしは此歌只に見ては相聞のたとへ歌とも見えぬつゞけがらなればうち見たるまゝにて書れしならん

反歌、

瀧上乃、三船之山者、雖畏、思忘、時毛日毛無、」　此歌上のほ歌の下に云

○或本反歌　かく書るも後人のひがわざならん歌は相聞の歌の他より亂て入しをさかしらにかく書し事玄るし

千鳥鳴、吉野川之、　今本に三吉野川とあるは誤て書けん三吉野川てふ例もなくよみ人もかくは作べからねば誤玄るしよりてすてつ

川音成、　今本音の上に川を落せり一本によりておき給へり

止時梨二、所思公、」

茜刺、　冠辭

日不並二、吾戀者、吉野之河之、霧丹立乍、」　名の立

てふを霧にそへたり

今本こゝに注あるはいふにたらずよりてすてつ

○神龜元年十月五日幸于紀伊國時山部宿禰赤人作歌、

【續紀神龜元年十月幸紀伊國云云行至紀伊國那賀郡玉垣頓宮甲午至海部郡玉津島頓宮留十有餘日造離宮於岡東云云又曰改弱浦名爲明光浦宜置守戶勿令荒穢春秋一時差遣官人奠祭玉津島之神明光之靈云云】

安見知之、　冠辭

和期大王之、常宮等、仕奉流、左日鹿野山、　山は從なり六言紀伊國那賀郡福門卿又同郡雜賀と言有是歟なともいへれど皆假字たがへり

背上爾所見　奥島、清波激爾、風吹者、白波左和伎、潮干者、玉藻苅管、神代從、然曾尊吉、玉津島夜麻、」

反歌、

奥島、荒磯之、玉藻、潮干滿、伊隱去者、【菅根本に滿潮耳とありといへり然本有歟今本には潮干滿とあり種本を考て書加ふべし】伊は發語

所念武香聞、」　道のみるめを海になし過行ばかくれ行をありそのみち潮に玉藻のかゝるゝにたとへてよめるなり

若浦爾、鹽滿來者、滄乎無美、　滄滿潟なければ磯邊の蘆有方をさして鳴渡るなり【或人若浦をつばらに見ていへらく妹背山より向の入江際に蘆部村云村有て玉津島につゞけり殺生禁斷の地なりと其蘆部村をさして鶴の行をよめるにて生たる蘆にはあらず此邊には蘆も不生と云り猶其地にてひさぐ繪圖有て所の樣詳なり

蘆邊乎指天、　今本蘆を蒋に誤るは草の手を見違へるなり

多頭鳴渡、」

今本こゝに注あるは前の如くよしもなければすてつ

○神龜二年五月幸于芳野離宮時笠朝臣金村作歌、【續紀神龜二年不載行幸于芳野なり】

足引之、　冠辭

御山毛清、落多藝都、芳野河之、河瀨乃、淨乎見者、上邊者、　此邊一本に滄とし下邊とす滄は瀨の誤ならんかともいへど邊はもとより借字なり上方にて聞ゆるなり

千鳥數鳴、下邊者、　上に河瀨とあれば上方上つ瀨下方は下つ瀨と見て聞ゆるなり

河津都麻喚、百磯城乃、　冠辭

大宮人毛、越乞爾、　こゝをもこえがてにかともいへど鴨、　かゝる他ぬ所を見て吾命の當ならぬをおもふは常遠近の意にて聞ゆ上方下方は遠なり河瀬の清きはまのあたりにて近し今本の訓に去たがふべし

なれば上の卷々にもかくよめる例多し

○山部宿禰赤人作歌二首、　始めの歌どもは今本歌數を書れど本より一首なるにはあるべくもなし次の歌に端辭のなければこゝは必歌數を去るすべき事なれどおもへば今本のまゝに二首とすさて別の金村の歌にならべ舉たれば同じ度ならんかとふと見ては思はるべけれど前の歌ははし辭に五月と有又行宮行幸の事も此歌にはなくて次の歌の終に春の茂野爾とさへあれば同度ならぬ事去るしよりて白圈を添ぬ

思仁思有者、毎見、文丹之、　今本思自仁思有者と有然れ共或考には自なし其よしもいはず此本のまゝによまば昌保のいへる如く去ゞにもへればとよまる猶他本見合考べし此考のまゝ置んには自字除さるよしもなしよりて考書べし】今本丹を舟に誤る上のみるめをせちにいひ入丹なりよてあらたむ

玉葛、　冠辭

絶事無、萬代爾、如是耐願跡、天地之、神乎曾禱、　天八隅知之、　冠辭

神地祇をいのるといふなり

恐有等毛、】今本かしこけれどもと訓しは字の置ざまにいさゝかたがへればあらたむさて本より神にいのるはかしこかれど宮所の久しからんを祈るもかしこくあれど、いふなり

和期大王乃、高知爲、芳野宮者、立名附、青墻隱、河次乃、清河内曾、春部者、　四言

花咲乎遠里、　花咲たはむなり卷二の考幷別紀に委し

反歌、

萬代、見友將飽八、三芳野乃、多藝都河内之、大宮所、】

離宮所をことほげるなり

秋去者、霧立渡、其山之、彌益々爾、此河之、絶事無、百石木能、　冠辭

人皆乃、壽毛吾母、三吉野乃、多吉能床磐乃、常有沼和口　拾穗抄】

大宮人者、常將通、

反歌、

三吉野乃、象山乃際乃、木末爾波、幾許毛散和久、【散

鳥之聲可聞、】

鳥玉之、　冠辭

夜乃深去者、久木生留、　楸なり今本木少角豆といふ

清河原爾、千鳥數鳴、】たくますあるがまゝをかくつゞくるぞ此人なれ

安見知之、　冠辭かく有ぞ此歌の正字ならん事既も云つ

和期大王波、見吉野乃、　見は借字三と書も同じさて三は萬志の約にてほむる辭なり

飽津之小野炎、野上者、跡見居置而、　鹿の跡を置てそを去るべになり

御山者、射目立渡、【古葉略要には固を目とせり奥人考に拾穗抄には御山者射固立渡とせり冠辭考に云今本射目を射固と書てせこと訓たれど射をせの假字に用る例もなくせこととては古意にもあらねば古本に依て射目とす射目は射部なり目と部と語の通て且其目は牟例の約なれば群ある事を目とも部とも云り】今本目を固に誤る跡見郡射目郡の事は冠辭考射目たてゝの條に委くいへり

朝獵爾、十六履起之、夕狩爾、十里蹋立、　六言

馬並而、御獵曾立爲、春之茂野爾、】

反歌、

足引之、　冠辭

山毛野毛、御猟人、得物矢手挾、　今本挾を狹に誤る

散動而有所見、】吉野の行幸には御狩もありし故かくもあるべし散動こゝは美陀流と訓べし次に海人船散動も其次舟曾動流もともに左和具と訓むべし

今本こゝに注あるは前と同くいふにたらざればすてつ

○十月幸于難波宮時笠朝臣金村作歌、【紀神龜二年冬十月庚申天皇幸難波宮辛未詔近江宮三郡司授位賜錄各有差】

忍照、　冠辭

難波乃國者、葦垣乃、　冠辭

古郷跡、　都なりし時はみやびかなりしに今はあし垣となりてあらびふりたるを云

人皆之、念息而、　都にあらずとおもひやみおもひのやすめるが如くさびしといふなり

都禮母無、　今本無を爲に誤る一本によりて改む卷十四に都禮毛奈吉佐保乃山邊爾哭兒成と有に同じ禮は良禰の約にて都良禰無てふ言なり此事は既にもいひつ

有之間爾、續麻成、　冠辭
長柄之宮爾、眞木柱、太高敷而、食國乎、收賜者、奥島、
　冠辭
味經乃原爾、物部乃、八十伴雄者、廬爲而、都成有、旅
者安禮十方、」
　反歌、
荒野等丹、里者雖有、大王之、敷座時者、京師跡成宿、」　住吉能濱、
　類多きすがた詞ながらかく玄らべのとゝのへるは此人
　の歌なればなり
海未通女、棚無小船、榜出良之、客乃屋取爾、梶音所聞、」
　思ふがまゝにてたくまずして調べとゝのひたるもの也
○車持朝臣千年作歌、
鯨魚取、　冠辭
濱邊乎清三、打靡、生玉藻爾、朝名寸二、千重浪緣、夕
菜寸二、五百重浪因、　今本百五とあるは字の上下せる
　なり
邊津浪之、益敷布爾、月二異二、日日雖見、　こゝの雖は
　若欲見の字にて見てしが歟ともいへり諸成案に月二異
　二日日といひて見るともあきたらめやと隔句にかゝる
　と思へりさて今のみに云云住吉の濱と右の句へかへる
　と見て意明らに聞ゆる歟同は本のまゝをたすけてよむ
　べくさて句の例はあればなり
今耳二、秋足目八方、　秋は借字飽那利
四良名美乃、五十開回有、　五十は發語開は浪の岩にあ
　たりてさとさけるをいふなり卷六に阿遲可麻乃可多爾
　左久奈美又神代紀に秀起此云佐岐佗豆屢と見えたり
住吉能濱、
　反歌、
白浪之、千重來緣流、住吉能、岸乃黄土粉、　卷八に岸乃
　黄土と有今いふへなつちなり粉は借字生なり
海未通女、棚無小船、榜出良之、客乃屋取爾、梶音所聞、」
　思ふがまゝにてたくまずして調べとゝのひたるもの也
○車持朝臣千年作歌、
濱邊乎清三、打靡、生玉藻爾、朝名寸二、千重浪緣、夕
菜寸二、五百重浪因、　今本百五とあるは字の上下せる
　なり
邊津浪之、益敷布爾、月二異二、日日雖見、　こゝの雖は
　若欲見の字にて見てしが歟ともいへり諸成案に月二異
　二日日といひて見るともあきたらめやと隔句にかゝる
　と思へりさて今のみに云云住吉の濱と右の句へかへる
　と見て意明らに聞ゆる歟同は本のまゝをたすけてよむ
　べくさて句の例はあればなり
今耳二、秋足目八方、　秋は借字飽那利
四良名美乃、五十開回有、　五十は發語開は浪の岩にあ
　たりてさとさけるをいふなり卷六に阿遲可麻乃可多爾
　左久奈美又神代紀に秀起此云佐岐佗豆屢と見えたり
住吉能濱、
　反歌、
白浪之、千重來緣流、住吉能、岸乃黄土粉、　卷八に岸乃
　黄土と有今いふへなつちなり粉は借字生なり
海未通女、棚無小船、榜出良之、客乃屋取爾、梶音所聞、」
　思ふがまゝにてたくまずして調べとゝのひたるもの也
○車持朝臣千年作歌、
鯨魚取、　冠辭
濱邊乎清三、打靡、生玉藻爾、朝名寸二、千重浪緣、夕
菜寸二、五百重浪因、　今本百五とあるは字の上下せる
　なり
邊津浪之、益敷布爾、月二異二、日日雖見、　こゝの雖は
　若欲見の字にて見てしが歟ともいへり諸成案に月二異
　二日日といひて見るともあきたらめやと隔句にかゝる
　と思へりさて今のみに云云住吉の濱と右の句へかへる

日之御調等、淡路乃、　四言
野島之海子乃、海底、　冠辭
奥津伊久利二、　伊久利の伊は伊志の略なり久利は烏な
　り烏革履と云烏に同く利呂は同言なり海底の黑石を云
　なり是に鰒などのつきて有なりこは水底の深きにいた
　り奉る勞をいふなり
鰒珠、左盤爾潛出、船並面、仕奉之、　良志の約利にて
　つかへまつりなり
貴見禮者、」　海子までがかく勞いとはで天皇をかしこ
　みたふとみつかへ奉るを見れば天地日月の遠く長きが
　如く御食國玄らすらしとなり
　反歌、
朝名寸二、梶音所聞、三食津國、野島乃海子乃、船二四
有良信、」　梶のと聞ゆるは御食物奉る野島の海人が船こ
　ぎ出るならんとのみやすくいひ出て長歌の意をうたひ
　かへせり
○三年九月十五日幸二播磨國印南野一、【續紀神龜三年九月
　云々等十八人爲造宮司將幸播磨國印南野也云云】
時笠朝臣金村作歌、
名寸隅乃、　阿波國の地の名
船瀬從所見、淡路島、松帆乃浦爾、　【松帆浦は淡路の
　地名と後の物に見ゆ定家卿のこぬ人を云云の歌はま
　たくこの歌の詞をとりて緣語おほくつゞけられしと
　見ゆ】
朝名藝爾、玉藻苅管、暮菜寸二、藻鹽燒乍、海未通女、
有跡者雖聞、見爾將去、　一本者と有は去の誤なり
餘四能無者、丈夫之、情者梨荷、手弱女乃、念多和美手、
徘徊、　おもひとまりおもひまどひなり此言止萬利萬杼
　比をつゞめし言なり
吾者衣戀流、船梶雄名三、」　あしたに玉藻苅夕に鹽燒さ
　まなど見まほしむまではあるべけれど丈夫の心を失ふ
　迄はあるまじと卷三處女等麻笥垂有云云てふ歌に眞淵
　のいひしはさも有べし
　反歌、
玉藻苅、海未通女等、見爾將去、船梶毛欲得、浪高友、」
往回、雖見將飽八、名寸隅乃、船瀬之濱爾、四寸流思良
名美、」　四寸流の流はたゞに辭ならず理久の約にて文字
　に充ていはゞ頻來白浪をいふなりさてその志は須志の
　約にて須々志來浪をいふこと葉なり
○山部宿禰赤人作歌、　此歌の所は云播磨の地なれば

前の端詞と同度なる從駕にて前の歌は阿波の地を見るよしなり

八隅知之、　冠辭

吾大王乃、神隨、高所知流、　一本高知酢流と有も有六言なり

稲見野能、大海乃原笑、荒妙、　冠辭

藤江乃浦爾、今本藤井とあるは誤なり既反歌に藤江とあり他歌にも藤江浦爾鯔釣とよみ此歌の中に鹽燒ともいひ又反歌に明方ともあれば明石の藤江の浦なる事明らけし

鮪釣等、海人船散動、　前に云如くこゝは散動を左和伎と訓べし

鹽燒等、　二つの等はとての略なり

人曾左波爾有、浦乎吉美、宇倍毛釣者爲、濱乎吉美、諸毛鹽燒、蟻往來、　蟻は借字在なり存在て通たまはさんことをことほぎ奉りてかくはいへるなりけり

御覽母知師、清白濱、」

反歌、

奥浪、邊波安美、射去爲登、藤江乃浦爾、　播磨明石の藤江浦なり既云如く長歌藤井は誤なり

船曾動流、」　既いふ如こゝもかく訓べし

不欲見野乃、淺茅押靡、左宿夜之、氣長在者、家之小篠生、」　之は助字小篠生は借字志乃婆由なり卽思を延たる言なり婆由の約夫なり本言夫なれば延て婆由と云卷三人麻呂長歌を引て波由は生なりといふはかなはず

明方、潮干乃道乎、從明日者、下咲異六、　こは下咲なり保々惠牟などいふに同し萬志の約美なりよりて下惠美なり家近くを從駕なれば上に悅ふをはゞかりて下惠むなり【下咲しけむはゑみなりとのみ云ては聞がたし此計は久阿良の約加なるを計もていひしにて明日よりは下ゑましくあらむといへるなり】

家近附者、」

○過二辛荷島一　仙覺抄に播磨風土記云韓荷島韓人破船所漂之物就於此島故云云とある

時山部宿禰赤人作歌、

味澤相、　冠辭

妹目不見而、　一本不數見とあり

敷細乃、　冠辭今本敷を數に誤れり

枕毛不卷、櫻皮纏、　櫻皮は船底腋を總て纏着今唐船樗木の薄板にて底をはる虫を不生且行事いと疾といへり

又今の船前を麻繩して卷たるをすさら卷と云其如く船の船などを櫻の皮して卷たるを云か

作流舟二、眞楫貫、吾搖來者、淡路乃、　四言

野島毛過、伊奈美嬬、　既云如く印南島なり

辛荷乃島之、島際從、吾宅乎見者、青山乃、　只山をいふなり淡路を西へ過れば古郷の山も見えぬなり

曾許十方不見、白雲毛、千重爾成來沼、許伎多武流、浦乃盡、往隱、島乃埼々、隈毛不置、憶曾吾來、客乃氣長弖、」　既いふ如く氣は時の刀を略て計に通して氣長といふ春氣又秋氣など云が如しさて是は唐にて氣と云に同じ意なり此氣は香にも通ひ物の香も同

反歌、

玉藻苅、辛荷乃島爾、嶋回爲流、水鳥二四毛有哉、　此あれやは阿利は阿禮也を約し言なり

家不念有六、」

島隱、吾榜來者、之ら、倭邊上、」之はこゝにては淡む心なり倭にこゝ行舟を見て都戀しらにうらやめるなり注はわろし】邊は半濁

眞熊野之船、」　都へ便せんと思ふ熊野舟のすくなきを乏といふ既云如くあらまほしきを約めし言なり

風吹者、浪可將立跡、伺候爾、　風守りなり呂布約流にてまもるを延たるなり

都多乃細江爾、浦隱往、」　往は借字居ぬるの略浪風たたんとすればかくれ居たるなり【奥人按に拾穗抄に浦隱居とありて注に風波をうかゝひて此郷に隱れ居るとなりと云○菅根本に浦隱往とあり往の字井久とは訓がたかるべく覺ゆ細江を拵隱行意ならん】

○過二敏馬浦一時山部宿禰赤人作歌、　是迄同度の從駕又造宮司十八人の中の歌と見ゆ地の名も同じよりて白圍を添えず

御食向、　冠辭

淡路乃島二、直向、三犬女乃浦能、奥部庭、深海松採、深海松は採といふべし去かるを都美と訓りこゝを六言によまば下も名告藻苅と六言に訓べし

浦回庭、名告藻苅、　六言

深見流乃、見卷欲跡、莫告藻之、己名惜三、聞使裳、不遣而吾者、生友奈重二、」　二を重ぬれば四なりみぬめの名によせて妹をみぬ戀しさをよめるなり去ぬび妻にても有歟

反歌、

爲間乃海人之、鹽燒衣乃、奈禮名者香、　鹽燒衣の如く
こゝになれてもあらばかといひて下に一日もわすらる
日あらんかわすれんやといへり
一日母君乎、　此君は妹を誤ならん歟【奥人按に男より
女をさして君といへる集中多あれば誤あらず】
忘而將念、」　はんの約ふなり第三の句になれなばかと
疑へりよて五の句になればわすれおもはんと云なり
今本こゝに注有るは前に云如く論にもたらずよりて
すてつ
○四年正月勅二諸王諸臣子等一散二禁於授刀寮一時
作歌、【續紀廢帝天平寶字三年十二月授刀衛其官員督
一人從四位上一人正五位上大尉大志○高野天皇天平神
護元年二月改授刀衛爲近衛府其大將一人爲正三位官中
將一人爲從四位下將監四人】答罪に當る程の罪なり
眞葛廼、　其地の物もて冠らするのみ
春日之山者、打靡、　冠辭
春去往跡、山上丹、霞田名引、高圓爾、鶯鳴沼、物部乃、
冠辭
八十友能壯者、切木四哭之、　今本切を折に誤木を不に
誤哭を喪に誤て折不四喪と有は誤なるべしさて切木四
泣を卷十二にかりがねと訓事は委いへり鴈は秋來春歸
るものにあれば來繼比日石、此續、常丹有春者てふ言
の序に置けり鴈は來るよりならび飛もの故來繼ならび
といひて又常にあらぬもて身のいましめられ居るに譬
へり
來繼比日石、【奥人按に拾穗抄に折不四表之來繼皆石と
訓り】並爲の意鴈の秋來て春歸るにも並びし如く此繼
つゞきてありせばと下の常丹云云へつゞけたり
此續、常丹有春者、友名目而、遊物尾、馬名目而、往
益里乎、待難丹、吾爲春乎、缺卷毛、綾爾恐、言卷毛、
湯々敷有者跡、豫、兼而知者、千鳥鳴、其佐保川丹、石
二生、菅根取而、之努布草、　菅を後には祓の具に用る
事見えず集中には多よめりこゝは菅よりそのぶ草とは
つゞけり草は借字そのぶ種の意なり春日野の遊をそのぶ心をかねてそらばはらへてましをかゝる罪とならば
と云且菅は鎌もて苅拂ものなるに祓の具にさへあれば
はらへとつゞけり
解除而益乎、往水丹、潔而益乎、天皇之、御命恐、百磯
城之、　冠辭
大宮人之、玉桙之、　冠辭

道毛不出、戀比日、」
反歌、
梅柳、過良久惜、　こは霞鶯などゆ待難にする春てふに
對ておけり
佐保乃内爾、　春日高圓佐保川に對ておける句なり
遊事乎、宮動々爾、」　左の注の雷などの事にかけて右
にいひさわがれしといふなり
右神龜四年正月數王子及諸臣子等一集二於春日野一而
作二打毬之樂一其日忽天陰雨雷電此時宮中無二待從
及待衛勅行罰皆敬二禁於授刀寮一而妄不得レ
出二道路一于時悒憤卽作二斯歌一作者未詳
○五年幸二難宮時一作歌、　四首　今本難を難に誤る又標
には宮と作の間に時とあり始よりの例然べしよりて加
つ歌は相聞の譬喩歌なり三首めは相聞ならずともいふ
べし
大王之、界賜跡、山守居、守云山爾、不入者不止、」
君の守と付置給と云ほどの齋女なりともと云なり
見渡者、近物可良、石隱、加我欲布珠乎、　加我欲布は
羅なり欲はやに通ひ布と久も通へば延てなだらかにい
ふなりさて加我也久の我は解左の約にて加牙左也久を
つゞめし言なり玉鏡などに日の照あへば影ひらめきさ
わぐごとくなるもの故に物も火も日もてり合をいふ言
なり
不取不已、」　歌の意は打見わたすにかくれて見えぬ如な
れど其光のかゞやくは近き物故不取はやまじとなり妹
を玉にたとふなり前の歌と同じ人の歌なるか
韓衣、　冠辭
服柰乃里之、島待爾、　島の家又橘の小島なども既見ゆ
る如く奈良に名立る島の地をいへるなるべし【服柰里
大和添上郡きならの山同所島待は島松なり衣裡寶珠な
どのよせにて玉を付るにつけてから衣と置るにや拾穗
抄】
玉乎師付牟、好人欲得、」　客人などをまちてよめる歌か
ともいひ又松をほめたる歌ともいへり古くは人を待に
玉を敷ければ物にめでゝも玉を着まじかれど此五首の歌
皆相聞なればそをもて諸成考るに奈良の島まつは男の
おのれにたとへ玉は前のかゞよふ玉をいひて其玉を吾
によそへなん好人をねぎおもへると見んぞやすからめ
さらば同じ相聞にて旅の意もおのづからつゝみて然ら
ん卷四に舊衣美柰の山爾鳴鳥之ともよみたり

竿牡鹿之、鳴奈流山乎、越將去、日谷八君、當不相將有、」こは右の戀思へる娘子と事なりて男の奈良へかへり行をなげきてよめる歟又別人か何れ女の歌と見ゆ當はは たしてなる事既いふ

右笠朝臣金村之歌中出也と有は歌と中の間に集の落しならん前の卷の例をおもふにこは此卿のかゝれしならん式云車持朝臣云云とあるは同じ世にありし人を疑て撰者の書べき理りなし後人書添ゑるしよりてすてつ

○膳王歌、【續紀天平元年十二月癸酉令王臺其室二品吉備内親王男從四位下膳夫王无位桑田王葛木王釣取王等同亦自縊乃悉捉家内人等禁著於左右衛士兵衛府長屋王子也】

朝波、海邊爾安左里爲、暮去者、倭部越、　部は假字半濁

鴈四乏母、」

こゝに注有は論にたらざればすてつ

○太宰少貳石川朝臣足人歌、

刺竹之、　冠辭

大宮人乃、家跡住、　家とて住なり

佐保山乎者、思哉毛君、」帥の卿の家は大和の佐保にあれば故郷戀しくおぼすなりとなり卷十四に藤浪之花波盛爾成爾來平城京乎御念八君と同じ意なり旅人卿へおくれるなり

○帥大伴卿和歌、

八隅知之、　冠辭

吾大王乃、御食國者、日本毛此間毛、同登曾念、」天下は皆大王の國なればやまともこゝも同じ心ぞとなり前の卷に天平三年七月此卿薨られし時の歌あり後に聞て加へたるなり家の集なればきらひ無【前の卷に此卿五首の歌は奈良京師乎不見歟將成又故郷なり所念可聞あるは萱草吾紐に付香ぐ山の故去之里乎將志之爲などよみ給へる歌にくらべて此和歌とはうらうへ言いふ人とおもへる人もあらんか理りをいへば唐さまに似たれど太宰帥は九の國二の島をすべつかさどれるおもき任なり其下司たち皆故郷ゑのぶ心は同じからんに其帥なる人心弱き和歌よみ給はゞ人々ともに心よはくなりて府の政亂なんこゝは人心を強らす眞心よりよみ出給へるなり私の思ひをのぶるとは異なり分て見よ】

○十一月太宰官人等奉ㇾ拜二香椎廟一、　在二糟屋郡一【香椎廟は仲哀天皇の廟式神功皇后とも云筑前國風土記云到筑前國例先參詣賀襲宮】

訖退歸之、時駐二馬于香椎浦一各述懷、

帥大伴卿歌、

去來兒等、　伊射子等毛假字の集中にあれば今本の訓は誤りなり

香椎乃滷爾、白妙之、　冠辭

袖左倍所沾而、朝菜採手六、」朝菜は朝げに此潟に出たる故に朝といふ夕べならば夕菜と云べしさて他にも似たる意の歌はあれど今はゑらべのよろしさにをりからのさまおもひやられてことなり

大貳小野老朝臣歌、

時風、　潮時の風を云

應吹成奴、香椎滷、潮干納爾、玉藻苅而名、」四の句の納は浦と納と草の手の誤にて浦ならんといふもよしあれど此まゝにて久萬と訓も意通へり

豐前守宇努首男人歌、

往還、常爾我見之、香椎滷、從明日後爾波、見縁母奈思、」

○帥大伴卿遙思二芳野離宮一作歌

隼人乃、　冠辭

湍門乃磐母、年魚走、芳野之瀧爾、尙不及家里、」故郷の去ぬばるゝからは何處を見るにもまづおもはるゝなるべし

○帥大伴卿宿二次田ノ湯泉一　和名抄筑前國御笠郡に在り聞二鶴喧一作歌、

湯原爾、鳴蘆多頭者、如吾、妹爾戀哉、　禮は留米約時不定鳴、」今本の訓は誤れり時不定は常數意なればなり此卿年たけ他國の任の中に妻をうしなひ悲の情さりがたく戀思ふ心のまゝをよみ出給へり【時不定鳴　今本の訓なり】

○天平二年勅遣二擢駿馬使大伴道足宿禰一時歌、【擢　玉篇曰擢引也拔擧也よき馬を擇とる文なり】

奥山之、磐爾蘿生、　今本磐を盤に誤る

恐毛、問賜鳴、念不堪國、」かくとはるべしとはおもひあへぬにとひ給ふがかしこしとなり

右勅使大伴道足宿禰饗二于帥家一此日會集衆諸相誘驛使葛井連廣成言須作歌詞登時廣成應聲卽吟此歌、【續紀十七天平十二年二月乙丑授從五位下葛井連廣成從五位上云云】

○十一月大伴坂上郎女發二帥家一上レ道超二筑前國宗形

郡名兒山之時作歌、　此郎女の事は前の卷神祭歌下に委くいへりこの歌は神祭の歌よりも先の歌なるか既旅人卿の歌にもいへる如く後に聞てのせられたるなり

大汝、　大穴貴命を云

少彦名能、神社者、名著始雞目、名耳乎、名兒山跡負而、吾戀之、千重之一重裳、奈具佐末七國、」　此歌上にもいさゝか言の落しか徐りに不意に出たり又反歌もつたはらぬなるべし心傳などに聞給て猶も其郎女に聞て全くせられなんをまづ書て置れしまゝに傳れるならん家の集はさこそあらめ卷八に名草山、事西在來、吾戀、千重一重、名草目名國ともよめるに似たるゑらべなり

○同坂上郎女海路見二濱貝一作歌、　今本貝を具に誤一本と歌によりて改

吾背子爾、戀者苦、暇有者、　戀るいとまあらばなり

拾而將去、　今本拾を捨に誤る一本と訓に依て改む

戀忘貝、」　今本忘を戀に誤る改る事上にいふに同じさて上の歌も此歌も夫のかれ〴〵になるをなげく事既云如し

○十二月太宰帥大伴卿上京時娘子作歌、　上と同度なれど上は旅是は卿を送る歌なれば白貝を添つ

凡有者、　凡人ならばなり帥は高官なれば遊行女婦のかしこみ奉るこゝちをいひ下すとていふなり

左毛右毛將爲乎、恐跡、振痛袖乎、　袖いたくふらんとおもふなりたきはいたき略切なる時にいひそふる言なり今の俗言の度といふも同じ

忍而有香聞、」

倭道者、雲隱有、　今見る所をもて後を云

雖然、余振袖乎、無禮多母布奈、」　奈加禮の加は久阿の約にてなくあれとおもふなかしこみて袖いたくふらぬと二首にて意を終たり【一本頭書云此歌自本无假字而愚夫試暫如是讀畢云云是右大辨長忠本也】

右太宰帥大伴卿兼二任大納言一向京上道此日駐二馬于水城一　御笠郡なり

願二西海府家家一于時送レ卿府吏之中有二遊行女婦一其字曰二兒島一於是娘子傷二此易一別嘆二彼難會一拭涕自吟振袖之歌、　かく有注は自のなるべし

○大納言大伴卿和歌、

日本道乃、吉備乃兒島乎、　備前の兒島なり

過而行者、筑紫乃子島、所念香裳、」【所念の保延の約語なり其倍は波禮の約にておもはれんを約て延し言なり】

丈夫跡、念在吾哉、　卷十三に丈夫跡念流吾乎如是計三禮二見津禮片思男費とよみたり

水莖之、　紀(仲哀)に皇后別船自洞海(洞此云久岐)入なり是をもて見れば莖は借字なり

水城之上爾、　紀(天智)三年云云是歳於對馬島壹岐島筑紫國等設防與烽又筑紫大堤貯水名曰水城同十二年云云筑紫大堤貯水城

泣將拭、」　まことに雄々敷もの、ふの別を惜歌にこそあれ

諸成云吾友大藏種信は筑前國早良郡岡の者なり種信云水莖の水城と集中によめると水莖の岡とよみしは別地なり水莖の水城とは水くきのみづ〳〵しきとかけたる意歟此地は博多津より太宰府へ行道にて異國襲來の防堤なり天智紀の二年に百濟國唐新羅の兵に滅され三年に百濟の鎮將劉仁願が使朝散大夫郭務悰等太宰府に來れり其十二月に於對馬島壹岐島筑紫國等設防與烽又於筑紫築大堤貯水名曰水城と有是なり今其地を見るに博多の南二里半斗に南往還の左右東西に長く連たる堤有て林木ちげれり道の側に關門の礎殘れり堤の內今は田となりて三村有北の出口なるを下水城といへり中間に有を瓦田村といふ南の入口に在を上水城と云り上水城にも同く堤有て今の三村の地全く古への水を貯たる池中にあたれり其長さ南北十四五町東西七八町有是なり

○三年大納言大伴卿在二寧樂家一思二故郷一歌、

須臾、去而見壯鹿、　ねがふ加なり

神名火乃、淵者淺而、瀨二香成良武、」

指進乃、　冠辭

栗栖乃小野之、芽花、將咲時爾之、　今本落は咲の誤りゑるかればあらたむなり

行而手向六、」　祖の墓所か又神に手向るか此歌も既前に委くいふ如く香山の下の築坂の邑をおもひてよまれしならん

○四年藤原宇合卿遣二西海道節度使一時高橋連蟲麻呂作歌、

白雲乃、　こは冠辭考にもれたれどこも朝霜のけぬべく或は梓弓引豐國などの如くゑらくものたつとのみかゝれり

龍田山乃、露霜爾、色附時丹、打超而、客行公者、五百

隔山、伊去割見、　既云如具美の約岐にて行さきといふなり

賊守、　こも冠辭考にもれたる筑紫のさきゞ〳〵に防人をつかはし守らしむよりおのづからかく冠せしなるべし

筑紫爾至、山乃曾伎、　退の略此言は志は左伎の約曾は左呂約にて避去にて限を云【左伎の伎は加利の約にて左加利なり左呂の呂は留と同言離去てふ言を二度約しなり避去は遠き限なるをおもへ】

野之衣寸見世常、　衣寸も上と同

伴部乎、　かゝる命を蒙り出たつには物部の八十伴男をひきゐ行ば其伴を云

班遣之、山彦乃、將應極、　遠く大いなるをいふなり

谷潛乃、狹渡極、　狹く少しきをいふ

國方乎、　國の形をいふ

見之賜而、冬木成、　冠辭

春去行者、飛鳥乃、　冠辭

早御來、龍田道之、岳邊乃路爾、丹管士乃、　赤き躑躅を云なり

將薫時能、櫻花、將開時爾、山多頭能、　冠辭

迎參出六、公來益者、」

反歌、

千萬乃、　今本是を千萬としてそこばくと訓るは誤玄るしよりて字も訓もあらためたり

軍奈利友、言擧不爲、　言擧は神代紀に見ゆ一言もいはず敵をとり來べき健男といふなり

取而可來、男常曾念、」

○八月十七日、　今本此上に右於補任文とある五字は後人の書加なればすてつさてこを例によらば天平四年壬申云云とあるべしといへどそも例に違へり前の例元年と書二年と書月の順に玄たがひて次々は月と端詞のみを書例なればこゝも月日のみ書て上下の例に合

任東山　中山道とも云

山陰西海節度使　【續紀に聖武天平四年八月丁亥從四位上多治比眞人廣成爲遣唐大使云云正三位藤原朝臣房前爲東海山二道節度使從三位多治比眞人縣守爲山陰道節度使從三位藤原宇合爲西海道節度使道別醫師一人陰陽一人】

天皇賜二酒節度使卿等一御製歌、　今本御歌の間に製の字を脱せり例によりて補へり

食國、遠乃御朝庭爾、汝等之、　今本汝等之加是とよみしはあたらず句も違へり如是は下に附けべし　×

如是退去者、　今本如是を上に付こゝをいでゝしゆけばと訓しはわらふべし退はまかり去はいなばの略なり

平久、吾者將遊、手抱而、　多は添云言抱は忌抱なり伊美の約伊なれば美を略なり牟多久といふは伊を略き通すなり陀伎の陀は呂加の約にてあやうきをいはで手掻合するを云なりこまぬきとは別の言なりたづさはりを手たづさはり折を手折といふに同意なり【牟陀伎の伎は辭なり牟陀加牟牟陀久と云をおもへさて加伎の伎も加伎久計古に通ひて加伎加久といふも同じ○與人案に拾穗抄に手抱而と訓り注に拱ㇾ手と云に同じ】

我者將御在、天皇朕、　阿和同言にて皇和我とも通し云べし

宇頭乃御手以、　宇頭は伊豆とも通しいひて神代紀に伊豆竹鞆とも有又伊我玄ともいひ伊我志穗共いひいかしきは大なる事にて俗もおほき事をいかいともおほしともいかしともいふをおもへ此言の考は言ながければ荒良言てふ書にいふ大御手といふと同じと心得べきなり

掻撫曾、禰宜賜、　こは願の意にはあらで禰ぎらひ給ひてなりこも言の解は荒良言にくはしくいふなり

打撫曾、　左志須世曾同言なれば左世須世左世、世左曾とも約略通しいふにてなでさ世なり上の曾も同

禰宜賜、將還來日、相飲酒曾、此豐御酒者、」　かく大御自の事をほめもあがめものたまはすはたふとしとも尊き天皇の御句なればなる事既に云つ

反歌、

丈夫之、去跡云道曾、凡可爾、念行勿、丈夫之伴、」　正荒男の行と人も云道なるぞおほよそこゝろして行など戒敎させ給ふ大御製歌なり

右御製歌者太上天皇御製也と有は撰者のかゝれしならん御歌の間に製の字を脱す或云と有は後人の書添しならんと思へばすてつ其御代にありて奉仕る人の人言を待んや

○中納言安倍廣庭卿歌、

如是爲管、　今本管を菅に誤一本によりてあらたむ

在久乎好叙、　よしとぞのとを略て云

靈尅、冠辭

短命乎、　み玄かきと言を隔てゝ命とかゝる冠辭なり

長欲爲流、」

○五年超二草香山一　和名抄和泉國大島郡日下卷十二に忍照難波乎過而打靡草香山乎暮晩爾吾遠來者山毛世爾咲有馬酔木乃不惡君乎何時往早將見と見ゆ

時神社忌寸老麻呂作歌、

難波方、潮干乃奈凝、　既出

委曲見、　【一本には委曲見の下在の上に君とあり考るに名の誤にてこゝをよくみてなともよまんかおほくは衍字ならんとおもへどすてがたければこゝにいふ猶よき本を見たらん人あらためよ】今本にはまぐはしみとよみたりされどおちゐぬ訓なり見るこゝろうすく末の句にかけあはずとてつばらみると改

在家妹之、待將問多米、」

直超乃、　紀(雄畧)自二日下之直越道一幸二行河内一云云今のくらがり峠なり

此徑爾師豆、押照哉、　是は冠辭のていならず上よりいひ下しておしとほるといふ意のみよて上の二句も押と云のみに置りと見ゆさらばたゞいひなしのみなり

難波乃海路、名附家良思蒙、」

○山上臣憶良沉痾之時歌、

士也母、　をのこにしてやの意なり

空應有、萬代爾、語續可、名者不立之而、」

右一首山上憶良臣沉痾之時藤原朝臣八束使二河邊朝臣東人一令レ問二所疾之狀一於是憶良臣報語已畢有頃拭レ涕悲嘆口二吟此歌一　とあるは撰者のかゝれしならん

○大伴坂上郎女與二姪家持一從二佐保一還二歸西宅一歌、

吾背子我、著衣薄、佐保風者、　既飛鳥風と云に同く其所ゆ吹風をいふなり

疾莫吹、及家左右、」

○安倍朝臣蟲麻呂月歌、　續紀天平勝寶四年中務大輔從四位下安倍朝臣蟲麻呂卒と見ゆ

雨隱、　冠辭

三笠乃山乎、高御香裳、月乃不出來、夜者更降管」

○大伴坂上郎女月歌

獨高乃、　姓氏錄(右京胡蕃)雁高宿禰あり然はこれも加利多加と訓べし

高圓山乎、高彌鴨、出來月乃、遲將光、」

烏玉乃、　冠辭

夜霧立而、不清、照有月夜乃、見者悲沙、」　歌の意は月はもと清く照るを霧にてきよからぬを見るが悲きとなり此悲は愛の意ならず沙も志奈の約にてかなし、などいひ入て照ぬをうしとおもふなりけり

山葉、左左良枳壯子、　左々良枳の良枳の約禮なり扨下の左と禮を約れば世となる故左世壯子といふ下の意にかなふ【考に此月は初月を云なれば乎刀古の乎は小の意刀は都に通古は伎と同言良枳の約禮なる故左左禮小月ともなればかくは言を延るにて實は初月の山のはにいざよふを見て左世小月といふを言の通ふまゝに乎刀古といふのみ】

天原、　天津乙女天津風といふをおもへ古事記に求二鍜人天津麻羅一(岩戸條)云云と見ゆかしこき御說には紀撰定の時既誤りしかとさへの給はせし況此奈朝の歌の假字據になしがたく紀によりどころ有をや

門度光、見良久之好藻、」　二の句に左世と念て末を見るよしもととめてかなふを見よ

こゝに注有は論にたらずよて捨つ

○豐前國娘子月歌、

雲隱、去方乎無跡、吾戀月哉君之、欲見爲流、」　人の戀おもふ人を月に譬て讀かけし歌歟只に月を見ともなし

○湯原王月歌、

天爾座、月讀壯子、幣者將爲、　幣は既云如く賄賂の意なり

今夜乃長者、五百夜繼許增、　つゞきつげよとねがふなり

愛也思、不遠里乃、君來跡、大能備爾鴨、　備は倍に通て大野べにかも願海邊といふに同じければこを大延かと云說あれど長延などいふ平言の如くていかゞさらば能は奈保の約にて大直備と見んぞ玄からん好に從てとるべし【上のはしきやし下のてりたるにかけ合て考れば大直日と見んぞ玄からめ大延はあまりに平言なり與人按に乃杼の約乃にて大乃杼夫利爾なるべし續紀の乃杼爾波不死など云乃杼にてのどやかなるなり】

月之照有、」　てらせるならば例の所照と書べし

○藤原八束朝臣月歌、

待難爾、余爲月者、妹之著、　冠辭にはもれたれど妹がめを見そめ又妹が手をとろしの池などを思へば妹が着三笠も冠辭とすべし

三笠山爾、隱而有來、」　またいでこぬ月をいふなり

○市原王宴禱二父安貴王一歌、

春草者、後流落易、　次下に草木すら春はもえつゝ秋はちりつゝとあれば今も草の秋敷をのちとはいへるなり

巖成、常盤爾座、貴吾君、」

○湯原王打酒歌、

燒刀之、加度打放、丈夫之、禱豐御酒爾、吾醉爾家里、」

二の句を考に今玄のぎと云は凌の字を用うこゝの意今のゑのぎをけづると云に似たり又豆乍我利は尖なり尖をかゞゝも云べしさて建々敷歌なり此歌形勢心のさま歌もて思ひはかるべし

○紀朝臣鹿人跡見茂岡之松樹作歌、

茂岡爾、　今本是を玄げをかと訓れどとみの岡べに玄みさびたてる松なれば玄みをかとこそよむべけれ

神佐備立而、榮有、千代松樹乃、歳之不知久、」

○同鹿人至二泊瀨河邊一作歌、

石走、　冠辭

多藝千流留、泊瀨河、絶事無、亦毛來而將見、」　ありふれしすがた詞なり

○大伴坂上郎女詠二元興寺之里一歌、【續紀元正靈龜二年五二辛卯始徙建元興寺于左京六條四坊云云同紀養老二年選法興寺於新京或記曰法興寺亦曰元興寺亦曰飛鳥寺亦曰建通寺亦曰豐福寺亦曰建祖寺】

古郷之、飛鳥者雖有、　今本鳥を烏に誤則飛鳥寺なり飛鳥より奈良へうつしてそこをもあすかと云なり

青丹吉、平城之明日香乎、見樂思好裳、」　今本好を奴に誤假字によりて改つ

同坂上郎女初月歌

月立而、直三日月之、　月の眉とかゝりて序なり

眉根掻、氣長戀之、君爾有相鳴、」　初いへる如く年たけたる郎女なればかくよめるも宿奈麻呂の旅より歸るを待しか又氏族を待得し相聞の歌なるべし

○大伴宿禰家持初月歌、

振仰而、若月見者、一目見之、人之眉引、所念可聞、」

こはは つかに見し人を思相聞なり

○大伴坂上郎女宴二親族一歌、

如是爲乍、遊飲與、　是を例の乞の誤とせんも理は聞ゆれど此歌は本のまゝにて與は呼出しことはると見ても心とほれゝばあらためず

草木尚、春者生管、秋者落去、」　春もえ秋かるゝ草を生死にたとへたり

○六年海犬養宿禰岡麻呂應レ詔作、　作は例によりて補ふ歌

御民吾、生有驗在、天地之、榮時爾、相樂念者、

此歌は御遊などの節によめる歟

○三月幸二于難波宮一之時歌、【續紀天平六年三月辛未行幸難波宮云云】

住吉乃、粉濱之四時美、開藻不見、　四時美は借字蜆なりあけも見ず忍びて戀渡らんとなりさて繁見を思ひ開は飽をふくみていひかけ飽も見ずと云意歟

隱耳哉、戀度南、」　次下にをとめ等は赤裳すそひく清き濱備をともあれば同從駕に女も有を戀る歟さて此玄のびは慕ふ意と見てよみこせのまゝにてよく聞えたり又玄ぬびをかくす方にとりても聞ゆる歌なり

右一首作者未詳と有は理りなり玄ぬびたる事なればかくもあるべし

如眉、雲居爾所見、阿波乃山、懸而榜舟、泊不知毛、」

遠過たるさまを能いひうつせり

右一首船王作、

從千沼回、　紀(神武)河內國泉郡茅渟海云云紀(神武)五瀨命云云自南方廻幸之時到血沼海洗二其御手之血一故稱血沼海也從其地廻幸紀國男之水門云云續紀元正靈龜二年三月癸卯割河內國和泉日根兩郡令供珍努宮云云夏四月甲子割大鳥和泉日根三郡始置和泉監焉和名鈔國郡部云和泉國國府在和泉郡行程上二日下一日靈龜二年割大鳥日根兩郡置此國

雨曾零來、四八津之白水郎、　四八津は既出今本白水を泉の字とせるは誤なり假字によりて改つ

網手綱乾有、　今本あみてなはほせりと訓しはいまだし網は網代細引ともいへばあたづなとよまん事玄れりつなでてふ言もあれば手づなといふべし一本網を繩に作る又一本網にもつくれり

沾將堪香聞」

右一首遊二覽住吉濱一還宮之時道上守部王應詔作歌、

兒等之有者、二人將聞乎、奥渚爾、鳴成鶴乃、曉之聲、」

故郷の妹をおぼすなるべし

右一守部王歌、

丈夫者、御獵爾立之、　多他志の他は知萬の約多知萬志なり親王たち大臣等もあればあがめいふ

未通女等者、赤裳須素引、清濱備乎、」

右一首山部宿禰赤人歌、

馬之歩、押足駐余、　今本足を正に誤假字によりて改

【奥人按に拾穂抄押止駐余と有】

住吉之、岸乃黄土、爾保比而將吉、」　古へは丹摺衣もあればかくは云なり

右一首安倍朝臣豐繼歌、

○筑後守從五位下葛井連大成遥二見海人釣船一作歌、

海燃嬬、玉求良之、奥浪、恐海爾、船出爲利所見、」　玉はあはび玉を云べし五の句はかしこき海にふなでせりと切て見ゆと心得べし後にはふなでせる見ゆといふ今は古なり

○鞍作村主益人作歌

不所念、來座君乎、佐保川乃、河蝦不令聞、還都流香聞、」

集中かはづなく神奈備川とも冠せてよみたれば大和の京師後に今京のかはづの聲をめでし事と知るべし

右内匠寮大屬鞍作村主益人聊設飲饌以饗二長官佐爲王一未及日斜王既還歸於時益人怜二惜不厭之歸一仍作此歌、　【續紀神龜五年八月甲午云云是日勅始置内匠寮頭一人助一人大允一人少允二人大屬一人少屬二人史生八人使部已下雜色匠手名有數同紀天平九年八月壬寅中宮大夫兼右兵衛督正四位下橘宿兄佐爲王卒考に紀文かくあり此王等に姓を賜ひしは同年十一月と下に在前へめぐらして書共姓を書けば王とは書べからず王とかけば姓はすつべし紀他本改べし】

○八年六月幸二于芳野離宮一之時山部宿禰赤人應レ詔作歌、

八隅知之、　冠辭

我大王之、見給、芳野宮者、山高、雲曾輕引、河速彌、湍之聲曾清寸、神佐備而、見者貴久、宜名倍、見者清之、此山之、盡者耳社、此河乃、絶者耳社、百師紀能、　冠辭大宮所、止時裳有目、」　卷一人麻呂のよめるに似り

反歌、

自神代、芳野宮爾、蟻通、高知者、山河乎吉三、」　此山河をよしと見そなはして遠つ神の御代より世々の天皇いましの通はして芳野宮を高知しますと云

○市原王悲二獨子一歌、　五百井女王なり御母は贈一品能登内親王光仁天皇皇女なりと契沖云り

不言聞、木尙妹與兄、有云乎、直獨子爾、有之苦者、」

○忌部首黑麻呂恨二友一贈來一歌、　【贈字葉云奢遠也遲緩爲贈】

山之葉爾、不知世經月乃、將出香常、我待君之、夜者更

降管、」　卷八に山末爾不知夜歷月乎將出香登待乍居爾夜曾降家類同卷に山末爾不知夜歷月乎何時母吾待將座夜深去乍すこしづゝ言のたがへるのみ

○十一月左大辨葛城王等　今本臣と有は誤なり左に從三位とあれば大臣なるべきいはれなし一本によりて辨にあらたむ天平十五年五月諸兄公を左大臣に任續紀に出【續紀天平元年九月乙卯正四位下葛城王爲左大辨】賜二姓橘氏一之時御製歌、

橘花者、實左倍花左倍、其葉左倍、枝爾霜雖降、益常葉之樹、」

右十一月九日從三位葛城王從四位上佐爲王等辭二皇族之高名一賜二外家之橘姓一已訖、於時太上天皇、　元正

大皇后、　今本太上なし一本太上と有は誤なり大皇后とあらたむ

共在二于皇后宮一以爲肆宴而卽御製賀レ橘之歌并賜二御酒宿禰等一也、或云此歌一首太上天皇御歌但天皇皇后御歌各有二一首一者其歌遺落未レ得二探求一焉、今撿二案内一八年十一月九日葛城王等願二橘宿禰之姓一上表以二十七日一依表乞賜二橘宿禰一【續紀天平勝寶二年正月庚寅朔乙巳在大臣正一位橘宿禰諸兄賜朝臣姓天平寶字元年春正月庚戌朔乙卯前左大臣正一位橘朝臣薨贈從二位東隈王之孫從四位下美努王之子也】

○橘宿禰奈良麻呂應詔作歌、　此端詞を今本一字上て書しは誤なり他とかはるべき理なし作は例によりて補へり且右に引つゝけて此歌を出應詔とさへあれば同時として自圓を不加

奥山之、眞木葉凌、零雪乃、零者雖益、地爾落目八方、」

上は譬なり木にふり增共地に落じと云官位のめぐみあづかる諸兄公の子なるをたとへよめる意なるべし

○十二月十二日歌舞所諸王臣子等集二葛井連廣成家一宴歌、

比來古儛盛與、　今本與とあり

今歲漸晚理宜苦　今本共なり又一本による

盡二古情一同唱二此歌一故擬二此趣一輙獻二古曲二節一風流意氣之士儻有二此集中一爭二發念一心心和二古體一、

我屋戸之、梅咲有跡、告遣者、來云似有、散去十方吉、」

春去者、乎呼陛爾乎呼里、　此言卷一二前紀に委し花咲たはむなり

愆之、鳴吾島曾、不息通爲、」

○九年正月橘少卿并諸大夫等集二彈正尹門部王家一宴歌、

豫、公來座武跡、知麻世婆、門爾屋戸爾毛、珠敷益乎、」

今の世砂を盛砂を布て地をきよめ飾て客人をまつ意も是ならん

右一首主人門部王、　此王姓を賜し事は前に出今本こゝに注有は後人の事なり

前日毛、　訓は契冲が說による

昨日毛今日毛、雖見、明日左倍見卷、欲寸君香聞、」

右一首橘宿禰文成、　同じ時の人こゝに小注の如くかく事あらじよりて捨つ

○椒井王後追和歌、　志貴皇子の子なり

玉敷而、待益欲利者、多鷄蘇香仁、　多末左加に似たる意なり多末左加は遠間故なりこは遠く離なり言の約かくは荒良言に委いふ

來有今夜四、樂所念、」

○二月諸大夫等集二左少辨巨勢宿禰麻呂朝臣家一宴歌、

海原之、遠渡乎、遊士之、　今本士を工に誤る

遊乎將見登、莫津左比曾來之、」

右一首書二白紙一懸二著屋壁一也題云蓬萊仙媛所賚、

今本囊は賚の誤と契冲がいへるによれり

蓬萊爲二作風流秀才之士一矣、作は一本によるされど一本作を所の字の下に置けるは又誤なり文の意とほらず試にかくせり

斯凡客不所望見哉、

○四月大伴坂上郎女奉二拜賀茂神社一之時、　神名式に山城國愛宕郡賀茂別當神社賀茂御祖神社二坐○さて山城賀茂神社は天武の御時造給ふと物にいへるさもあらんこゝにも此社へ詣と見え紀聖武三年七月太上天皇不豫御祈に遣使幣帛奉石城、葛木、住吉、加茂等神社と有て加茂葛木とか、ねば高鴨にあらず然れば古へより敬はせし事なり

便超二相坂山一望二見近江海一而晚頭還來作歌、

木綿疊、　冠辭

手向乃山乎、今日越而、何野遊爾、廬將爲吾等、」　今本子等と有ていほりせんこらと訓しは誤なり一本によりて吾にあらたむ

○十年、　月を脫せり

元興寺僧自嘆歌、

白珠者、人爾不所知、不知友縱、雖不知、吾之知有者、不知友任意、」　【拾穗抄云此歌旋頭歌なり白玉を吾身に比して卞和が玉のごとく人に見えらねど我だにえればよしと自得せしなるべし與人】

右一首或云元興寺之僧獨覺多智末レ有二顯聞一衆諸狎侮因此僧作二此歌一自嘆二身才一也、

○石上乙麻呂卿配二土佐國一之時歌、　續紀天平十一年二月石上朝臣乙麻呂坐レ奸二久米連若賣一配二流土佐國一若賣配二下總國一焉、【按石上乙麻呂此時從四位下左大辨也然は卿と云べきならずかし若女は天平十二年六月遇赦て入京し乙麻呂も後に過赦正四位下に叙又從六位に叙せて右は後よりめぐらして卿と書たるなり考の如くならば此端詞にも石上云云時乙麻呂卿妻作歌と有べき事なりすべて此三首の長歌言落たるも有或は反歌前後へとなり或は反歌も落端詞も脫しと見ゆいと亂たるなるべし正本を見ん人正し給へよしは歌の下に云與人按に拾穗抄に云是乙麻呂みづから人のうへのやうによめるにや但萬葉他本に石上乙麻呂卿配土左國之時歌と有是は他人のよめるやうなり】

石上、　冠辭

振之尊者、　乙麻呂卿を指

弱女乃、惑爾緣而、馬自物、　冠辭

繩取附、肉自物、　冠辭

弓笑圍而、王、命恐、天離、　冠辭

夷部爾退、古衣、　冠辭

又打山從、　紀伊國なり

還來奴香聞、」

反歌、　按に三首め歌に反歌とあれば今本こゝに反歌の字を脫せる事えるしよりて補一本に長歌此反歌書つらねたり亂本可知なり

王、命恐見、刺並之、　此歌の解は卷十の歌に既委すさすらへと同じ事なり

國爾去座耶、　今本去を出に誤上の歌にいまさせてといふに同じ言なれば去の誤えるしよりてあらたむ

吾背乃公矣、」　こは右の歌の反歌なる事えるしさて乙麻呂卿の家の妹のよめるなるべし

槃卷裳、湯湯石恐石、住吉乃、荒大神、　今本に住吉乃荒人神とありて阿良比刀加美と訓しはいとも誤り此御神をあら人がみといふよしなし紀(神功)に神有レ誨曰和魂服二王身一而守二壽命一荒魂爲二先鋒一而導二舟船一此故にかくはよめるなり他に荒人と云事なしまして神

を人と申さんいはれなきを云れ
船舶爾、牛吐賜、　牛吐は借主張にて其神のいます所の
海山をもち云づめます御神を云事既にいひつ
付賜將、島之埼前、依賜將、　【將賜と書べきを上下して書けるは將を萬左爾といふ其爾をかりたるなり訓を假字に借るは下の言をかる例なりさて伎志知爾比美伊利井は中下にあればはぬるならはしなれば牟の假字に借たるなり卽都伎多萬左牟を萬左爾とよみて其爾をはぬるなりけりこはふと見ては上下したると見ゆればかくうたゝ云なり】
磯乃埼前、荒浪、風爾不令過、草管見、　冠辭
身疾不有、急令、變賜根、本國部爾、」　此歌は又打山より紀路に入て紀伊より土佐への船路をいへりこも乙麻呂卿の旅路をおもひやり家の妹の神に乞のみまつるなりさて次の歌の反歌とてあるは此歌の反歌なり次の歌には船路の言なしされど次の歌言の多く落うせぬと見ゆれば其落うせし中には船路の言ありもやしけんされど此長歌に島のさき〳〵磯のさき〳〵いひて次の反歌に大磯小濱といひかへ又せまき瀬戸を百船のすぐとさへいへば神のめぐみに事なくとほし給へと此長歌の意をさへうたへると見ゆれば全く此歌の反歌なり
反歌、　次の長歌と此前の長歌の間に反歌とあるべきも落歌は次の長歌の反歌と心得て校合の時かくはなせしなるべし何れの本もさま〳〵亂たり前に云如くなれば試に此反歌を引上たりさて次の長歌は乙麻呂卿の自ぬさ奉り旅路をいのれる歌なれば反歌の次に端詞ありしが夫も脫たるなるべし
大埼乃、　紀伊國なり
神之小濱者、雖小、百船純毛、　下の敏馬浦の長歌に純をかくよめり純は一の字に同じくもはらの意に借たり
過迩云莫國、」　すぐといはぬかすぐるものをといふてにをはなり此歌はまたく船路のさまなれば次の長歌の反歌ならざる事長歌によみつゞけて二首めの長歌の反歌なるを思へ
○石上乙麻呂於恐坂爲手向時歌
□□□□□□□□□□□□□、　こゝにかくも端詞ありしならんか此歌ははじめに言の多落失せしか【恐坂は紀(天武)に將軍次負云云遣紀大音令守懼坂道於是賊等退懼坂而居大音之營云云此歌後河内と倭との事多し然は倭より河内の方へ越る所の坂なり】
父公爾、吾者眞名子叙、」妣刀自爾、　【妣　玉篇曰母爲妣刀自　和名抄負俗作刀自劉向女列傳曰古語老母爲負云云奥人按】
吾者愛兒叙、　こゝの間にも言の落しか次の句へつゞかず聞ゆ
參昇、八十氏人乃、手向爲等、恐乃坂爾、幣奉、吾者叙追、遠杵土左道乎、」　吾は叙追は船にておうて遠き土佐路に行をいふ土佐日記に湊を追其大湊を追ともあなり又おもふに追は退の誤かさらばまかると訓ていと安らかなり云ばらく字も訓も今本による○さて此長歌は大和路より河内へ越る所の手向をいひてそはやがて土左に行とての意なれば土左路の船をおもひ句をとむるのみの歌なり
こゝに反歌の字も脫歌も脫落しなるべし奈良の頃に反歌なきはなし
○八月二十日宴右大臣橘家歌、　【奥人按に拾穗抄に右大臣橘家諸兄公なり葛城王是なり】
長門有、奥津借島、　則長門の地名
奥眞經面、　おくまへは末倍の約米にておくめてなりやがてふるめてなどいふに同じ
吾念君者、千歲爾母我毛、」
右一首長門守巨曾倍對馬朝臣、
奥眞經面、吾乎念流、吾背子者、千年五百歲、有巨勢奴香聞、」
右一首右大臣和歌、
百磯城乃、　冠辭
大宮人者、今日毛鳴、暇無跡、里爾不去將有、」
右一首右大臣傳云放豐島采女歌、　こは撰者が書れしならん
橘、本爾、道履、八衢爾、物乎曾念、人爾不所知、」
右一首右大辨高橋安麻呂卿語云、　こゝに故豐島采女云云以下十二字は後人のさかしらならん其世にちかきを語人も撰者もかくは誤るべからざればなり
三方沙彌戀二妻苑臣女一、　今本に是を戀二妻苑臣一と有は字も違ひ且上下せしならん已が妻となして後は妻の姓のみをもいはめどもこは娶するをりの歌なればなりよりてあらたむ
作歌也然則豐島采女、　和名抄攝津國豐島(豆志末)こより出し采女ならん
當時當所目二於此歌一、　こゝに歟とあるも始の十二字をくはへたる時に書添しならん【卷二に三方沙彌娶

苑臣生羽之女未經幾時作三首云云橘之蔭履路乃八衢爾物乎曾念妹爾不相面と有こゝは宴の興にうたへるなれば其時によろしきこと葉にうたひかへしならんさるを誤りたりと後人さかしらに注を加けんものならし】

○十一年天皇遊二獵高圓野一之時小獸迫二走堵里之中一一本迫を道とす迫にても聞ゆ歌も然なり於是適値二勇士一生而見獲即以二此獸一獻二上御在所一副歌、　こゝに獸名云云の小注は歌によりて後人書加しならんよりて捨

丈夫之、高圓山爾、迫有者、里爾下流、牟射佐奴曾此、」

此獸の事は既委く出

右一首大伴坂上郎女作之也但末奏而小獸死薨因此獸獻停レ之、

○十二年冬十月依二太宰少貳藤原朝臣廣嗣謀反一、【續紀聖武天平十二年九月丁亥廣嗣遂起兵反勅以二從四位上大野朝臣東人一爲二大將軍一從五位上紀朝臣飯麻呂爲二副將軍一軍監軍曹各四人徵二發東海東山山陰山陽南海五道軍一萬七千人一委二東人等一持節討レ之冬十月己卯勅二大將軍大野朝臣東人等一曰朕緣レ有所念今月之末暫往二關東一雖レ非二其時一事不レ能レ已將軍知レ之不レ須二驚怖一壬午行二幸伊勢國一乙酉到二伊勢國壹志郡河口頓宮一謂二之關宮一十一月戊子大將軍東人等言以二今月一日一於二肥前國松浦郡一斬二廣嗣繩手一已託廣嗣式部卿馬養之第一之子也】

發レ軍幸二于伊勢國一之時、廣嗣式部卿馬養之第一子也續紀天平十年十二月丁卯從四位下高橋朝臣安麻呂爲太宰大貳從五位下藤原朝臣廣嗣爲少貳

河口行宮内舍人大伴宿禰家持作歌、　舍人の宮内を衛を内舍人と云とねりはとのいと、云迄なり

河口之、野邊爾廬而、夜乃歴者、幾夜もふると云なり

妹之手本師、所念鴨、」

○天皇御製歌、

妹爾戀、　冠辭

吾乃松原、　今本吾を和我と訓しは誤れりこは借字吾王と訓に同じ意にて阿恭とよむべし冠辭よりは妹に戀明す意につゞけさせ給へども次の句よりは志摩國黄虎郡の松原のけしきをよませ給ふなりけり

見渡者、潮干乃潟爾、多頭鳴渡、」

右一首今案吾松原在二三重郡一相二去河口行宮一遠矣若疑御二在朝明行宮一之時所製御歌傳者誤レ之歟、　此小注は必後人の書添しなり家持卿從駕にてうけ給はりし御製歌に何ぞかゝる疑しき事のあらんやよりて此注はすつべきなり

○丹比屋主眞人歌、　續紀多治比眞人家持主と見ゆ

後爾之、人乎思久、　波久の約布にておもふなり旅立人は宿なる人をおもひて神にいのるなり

四手能埼、　卷十三に市原王、網兒山、五百重隱有、佐提埼、左手蠅之子之、夢二四所見、とよめるも同所の山をいひ左提崎をいへるを考合すれば此四手崎も次の二首も全く從駕によめる歌にて此歌も右の御製の時よめるなればかた〳〵同地なり

木綿取之泥面、　之泥は垂るなれば木綿襷など其外神事に用るさまをいひて齋面神を祈を云なり

將往跡其念、」　今本往を住に誤る住にては本の句にかけ合ずよりて往の誤の消しとして往に改めぬ

今本爰に右案此歌者不有此行宮之作乎云云の注あれど前にもいふ如く同從駕家持卿直に聞て集にいるゝにかく疑を書てんもの歟後人の注去るければすてつ

○狹殘行宮大伴宿禰家持作歌、　二首めの歌もて見れば志摩の浦を見渡るなればこも河口行宮ゆ出てかりにませし所をさし其地名を云ならん

天皇之、行幸之隨、吾妹子之、手枕不卷、月曾歴去家留、」

歴去けるを云なり

御食國、志摩乃海部有之、眞熊野之、小船爾乘而、奥部榜所見、」　志摩の海人の小船にのり行を見てかくよめるなり熊船は伊豆手船など云類にて歌のさらべに云のみ

○美濃國多藝行宮大伴宿禰東人作歌、　【續紀(元正)養老元年九月丁未云云丙辰幸當耆郡多度山美泉云云甲子車駕還宮十一月癸丑天皇臨軒詔曰朕以今年九月到美濃國不破行宮留連數日因覽當耆郡多度山美泉自盥手面皮膚如滑亦洗痛無不除癒在朕之躬其驗又就而飲之浴之者或白髮反黑或頹髮更生或闇目加明自飲痼疾皆平癒昔聞後漢光武之時醴泉出飲之者痼疾平癒符瑞書曰醴泉者美泉以養老蓋水之精也寔惟美泉卽合大瑞朕雖痛虐何遑天睨可大赦天下改靈龜三年爲養老元年云云】

從古、人之言來流、老人之、變若云水曾、　わがゆの由は也具の約にてやがて和加也具といふ水といへるなり名爾負瀧之瀨、」

○大伴宿禰家持歌、

田跡河之、　卽多度山瀧の流る河をいふ

瀧乎清美香、從古、宮作兼、　今本作を仕として美也都加倍兼と訓りこは作の誤去るしみやづかへといひては意とほらずよりて作の草の手を誤しとして改つ

多藝乃野之上爾、」

○不破行宮大伴宿禰家持作歌、

關無者、還爾谷藻、打行而、妹之手枕、卷手宿益乎、　卷十七述戀緒長歌家持、近在者加幣利爾太仁毛宇知山吉底妹我多麻久良佐之加倍底禰天蒙許萬思乎云云てふも是に同じ美緒跡あるは近郷などのほどにおもへる妹のありし故かくはよまれしならん

○十五年八月十六日內舍人大伴宿禰家持讃二久邇京一作歌、

今造、久邇乃王都者、山河之、　山と河をいふなれば河を濁るべからず

清見者、　今本伎與久美山禮婆とよみしはいまだし伎與伎乎美禮婆と訓べし

宇倍所知良之、」

○高丘河內連歌、　續紀神龜元年辛未正六位下樂浪河內賜高丘連姓

故郷者、遠毛不有、一重山、　卷十三に在久邇京思留寧樂宅妹云云歌一隔山重成物乎云云といふをおもへば山城大和の堺に在山なるべし

越我可良爾、念曾吾世思、」　越が其ま、におもへるといふをかく云なり『越我可良爾與人按に東歌惠麻須我可良爾古麻爾安布毛能乎我はことばなり可良は可禮にて故と云に同じ』

吾背子與、　友を指ていふなり

二人之居者、山高、里爾者月波、不曜十方余思、」

○安積親王宴二左少辨藤原八束朝臣家一之日內舍人大伴宿禰家持作歌、　『續紀聖武天平十六年閏正月乙丑朔乙亥天皇行幸難波宮是日安積親王緣脚病從櫻井頓宮還丁丑薨時十七云云天皇之皇子也母夫人正三位縣犬養宿禰廣刀自從五位唐之女也』

久堅乃、　冠辭

雨者零敷、念子之、屋戸爾今夜者、明而將去、」

○十六年正月五日諸卿大夫集二安倍蟲麻呂朝臣家一宴歌、　今本こゝに作者不審とある小注後人の書加へ去るし何ぞといはゞ蟲麻呂朝臣家云云とありて吾屋戸のと歌によめればあるじならで外をとはんやよりて捨つ

吾屋戸乃、君松樹爾、零雪乃、行者不去、　宴して吾あるじなれば君を迎へに行にゆかれざれば待またなんと云なり

待西將待、」　今本西を而になすは誤なり訓によりてあらたむ今本卷一に高津宮皇后の御歌とて載しは誤なりそはことはりて考には除けり古事記輕大娘皇女の君行氣長久成奴云云待者不待とありそはむかへ行なり待にはまたれずとよませるなればこゝには句の意別なり

○同月十一日登二活道岡一、　是を久米道と訓事は前卷に既くはしくす【活道岡　八雲抄には然か訓り與人】

集二一株松下一飲歌、

一松、幾代可歷流、吹風乃、聲之清者、　土佐日記に松の聲のさむきはといへり

年深香聞、」

右一首市原王作、

靈廷、　冠辭

壽者不知、松之枝、結情者、長等曾念、」

右一首大伴宿禰家持作、

○傷二惜寧樂京荒墟作歌　城跡の意もて書るなり

紅爾、深染西、情可母、寧樂乃京師爾、年之歷去倍吉、」

歌の意はたぐひなくにぎはひにごみたりし奈良のみやこは心にしみてあればにやかくあらされても猶こゝに吾世はへぬべくおもはるゝとなり紅はふかくそむてふ料におきたれど歌につけてよき冠辭なり

世間乎、常無物跡、今曾知、平城京師之、移徒見者、」

ならの都は咲花のごとくさかえ行き萬代もとおもひたのまれし都なるにかくあるゝは世のたのめがたきことをおもひつるは大かたにて今ぞふかく去るといへるなり

石綱乃、　冠辭

又變若反、　今本若を箸に誤る一本によりてあらためつ

青丹吉、　冠辭

奈良乃都乎、又將見鴨、」　又もむかしの如うつしかへさせ見んよしもあらんかとなり

○悲二寧樂故郷一作歌、　一本悲寧樂故郷作歌標も右に同じよりて京をすてつ

八隅知之、　冠辭

吾大王乃、高敷爲、日本國者、皇祖乃、神之御代自、敷座流、國爾之有者、阿禮將座、御子之嗣繼、天下、所知座跡、八百萬、千年矣兼而、定家牟、平城京師者、奈乃、

冠辭

春爾之成者、春日山、御笠之野邊爾、櫻花、木晩牟、

宇は猶籠と字書に有をもてかれる歟

貌鳥者、間無數鳴、露霜乃、　冠辭

秋去來者、射駒山、　大和なり一本射釣山今本は如レ字

也都利也萬と兩點ならんかと云說はいまだし今本によ

りてさだむべし

飛火賀嵬丹、　【奥人按に拾穗抄に飛火賀塊丹とよめり

飛火嵬の事は續紀聖武天平十三年春正月壬辰廢河内國

高安烽始置高見烽及大和國春日烽以通平城也云云奥人

按に右飛火嵬の事拾穗抄に云云は違へり續紀に依て記

べし拾穗注に云○元明天皇和銅五年月廢河内國高安烽

始置高見烽反大和國春日烽以通平城なりと有り】嵬を

今本塊なり字書に塊は土塊なり嵬崔は高峻又高不平と

云一本によるべし

芽乃枝乎、石辛見散之、狹男壯鹿者、妻呼令動、山見者、

山裳見貌石、里見者、里裳住吉、物負之、　冠辭

八十伴緒乃、打經而、里並數者、　今本里を思に誤る一

本によりて改つ

天地乃、依會限、　天地合てあらぬ限をいふ例は上にも

あり

萬世丹、榮將往跡、思煎石、大宮尙矣、特有之、名良乃京

矣、新世乃、　御代始を云新の意なり

事爾之有者、皇之、引乃眞荷眞荷、　天皇の率のまゝに

なり

春花乃、遷日易、　今本うつろひやすきとよめれどこゝ

は都のかはれるさまをかなしむなればかはりと訓下の

反歌にも不可易ともよめるによれるなり

村鳥乃、　冠辭

旦立往者、刺竹之、　冠辭

大宮人能、蹈平之、通之道者、馬裳不行、人裳往莫者、

かく莫を下に書例も多し

荒爾異類香聞、」【續紀聖武天平十三年春正月癸未朔天

皇始御恭仁宮受朝宮垣未就繞以帷帳同紀天平十五年十

二月己丑始運三平城器仗一收置於恭仁宮云云辛卯初壞平

城大極殿幷歩廊遷造於恭仁宮四年而於茲其功纔畢矣用

度賣不可勝計至是更造紫香樂宮仍停恭仁宮造作焉】

反歌、

立易、古京跡、成者、道之志婆草、長生爾異梨、」

たゞに何事もなくやすらにあれたるさまをいひうつせ

るなり

名付西、　奈禮の約轉なるを奈に通しいふ馴著意なり平

言になづくと云も是なり

奈良乃京之、荒行者、出立毎爾、嘆思益、」

○讃久遥新京歌二首、　こゝは歌數もとより有べしこゝ

に反歌にさへ始に數を去るさずさればはじめより短歌

ともにある數は後のわざなり

明津神、吾皇之、天下、八島之中爾、國者霜、多雖有、

【多雖有をおほくとよみしはたがへり其次に澤と借字

を置しにても去るし】

里者霜、澤爾雖有、山並之、宜國跡、川次之、　川次は

山並よりつゞきし言にて波の意にあらず大和の川々の

山背に至りて皆合へり卽川々のつきをいふなり川次の

立合さと、云も波のたつといふにあらず辭のみ

立合郷跡、山代乃、鹿背山際爾、宮柱太敷奉、高知爲、

布當乃宮者、　二瀧の意なり當は當麻などいふより借て

其伎を例の伊に通して布多伊の宮と云なり

河近見、湍音叙清、山近見、鳥賀鳴動、　今本こゝを伊

多牟とよめるは惡と有によれり惡といふ事清といふ對

句にいふべくもなく全誤去るかれば動と改さてこをさ

わぎとよむもあしからねど下の山裳動響にといふをお

もへばかならずこゝはとよむと訓べし

秋去者、山裳動響爾、左男鹿者、妻呼令響、春去者、岡

邊裳繁爾、巖者、花開乎呼理、痛阿怜、　こゝも今本

の訓誤れり伊止阿波禮とよむべき事ならず

布當乃原、甚貴、大宮處、諾己曾、吾大王者、君之隨、

神隨と云に同

所聞賜而、刺竹乃、　冠辭

大宮此跡、定異等霜、」

反歌、

三日原、布當乃野邊、清見社、大宮處、此跡標刺、」　今

本定異等霜と有は長歌の終の句紛しなるべし一本の方

去らべもまされゝばとれり

山高來、　今本弓高と書るは誤なり訓によりて改つ既い

ふ如く草の手の誤りなり

川乃湍清石、百世左右、神之味將往、　今本こゝを加美

乃味將往とよみしは何の言ともなしこゝは神繁のかん

といふなり去美は進と同言なり

大宮所、」

吾皇、神乃命乃、高所知、布當乃宮者、百樹成、　成は